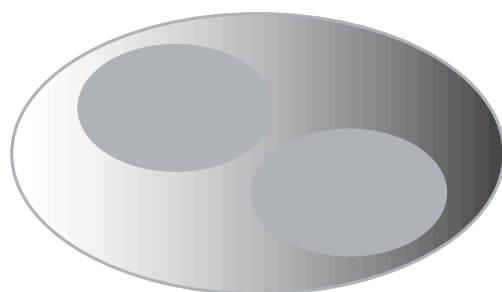


# 総合科学研究

Human Ecology, Literature and Education Research



第3号

NO.3

平成21年3月

March, 2009

名古屋女子大学 総合科学研究所

Nagoya Women's University

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

# 巻 頭 言

総合科学研究所長

柴 山 正

わが国は規制緩和の流れの中で、事前評価として設置基準を満たしていれば大学が設置できることに加え、届出による学部・学科の転換も可能となる認可制度を採用し、乱立と思われるほどの高等教育機関を増産しています。そして事後評価として認証評価（第三者評価）を実施しています。しかし大学における教育の質の向上が喫緊の課題となっている昨今、量的拡大と質的保証を両立させるのは難しい問題です。果たして大学の質の保証をどのように考えているのでしょうか。

そこで「教育振興基本計画」を閣議決定し、①キャリア教育・職業教育の推進と生涯を通じた学び直しの機会の提供と推進 ②大学等の教育力の強化と質保証 ③卓越した教育研究拠点の形成と大学等の国際化の推進 ④社会の信頼に応える学士課程教育等の実現などを明確にしました。また日本私立大学協会は「学士課程教育の構築と教育の質保証」として「誰もが大学に入学できる時代になり、単に学部教育の修了者に与えられた称号としての学士から学位として規定される学士課程教育においては、その教育の質の保証が重要になる」と述べています。

「予測されていた」とは言え、「少子化」という津波が大学を襲い、第一波はすでに定員割れの被害をもたらしています。特に私立大学の財政基盤を「左右」するのは学生納付金であり在学者数です。第二波は有力総合大学による地方入試の実施と高校生の囲い込みです。その結果、立地条件に恵まれない私立大学や地方・小規模大学との「二極化」は拡大しています。

いわゆる入学希望者と定員数が釣り合う「全入時代とは人気校はますます競争が激化し二極化が明確になること」です。大学関係者なら、このような深刻な危機を共有し足元を見つめ直して「わが大学のありよう」を原点に帰り再検討すべきです。過去の成功体験が効かない不透明な時代におけるピンチをチャンスに変える王道は「現実を正視する洞察力と行動力」に係っています。すなわち大学が持つ様々な機能・役割の中で、「わが大学はどこに重点を置くのかを明確にし、その大学の個性・特色につながり組織を見直すこと」（中教審）によって「選ばれる大学」になります。

各学究がわが国の財産である知的資源を培うために、大学とは最高の教育・学術研究の機関であることを肝に銘じて精進されることを願っています。そしてこの「総合科学研究」が本学の教育研究活動の成果の一端を公開する媒体になっていることを自負しています。

# 目次

## 機関研究論文

- 大学における効果的な授業法の研究4  
—初年次教育についての授業法の開発—（平成18年度～20年度）  
Towards More Effective Class Practices in Universities  
—The Development of Teaching Methods in First Year Education—  
石倉瑞恵・伊藤太郎・宇野民幸・下木戸隆司・白井靖敏・竹尾利夫  
遠山佳治・谷口富士夫・原田妙子・幸 順子 . . . 1

## プロジェクト研究論文

- ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援  
～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その2）～  
A Fundamental Support through LMS on the Educational Plan and Practice of the  
International Exchange Program with ICT  
—A Trial of the Program Development for High Quality Home Economics Teacher  
Trainings (No.2) —  
白井靖敏・山口厚子 . . . 45

## 機関研究中間報告

- 創立者越原春子および女子教育に関する研究（平成19年度～20年度）  
伊藤太郎・木原貴子・依岡道子・遠山佳治・羽澄直子・丸山竜平 . . . 55

## プロジェクト研究中間報告

- 家政学とICTを活用した国際交流プログラムを実践するための  
サポート体制のあり方を求めて  
～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その3）～  
山口厚子・白井靖敏・木原貴子 . . . 63

## 機関研究教育実践

- 幼児の才能開発に関する研究  
幼児の育ち合いを促す保育実践  
幼児保育研究グループ . . . 75
- 中学生の学力向上に関する研究  
新学習指導要領の本校教育への展開  
中学校学力向上研究グループ . . . 78
- 高校生の学力向上に関する研究  
高等学校学力向上研究グループ . . . 81

## 事業報告

開かれた地域貢献事業	・・・	85
平成 19 年度教育講演会 「これからの道德教育のありかた」（七條 正典氏）講演要旨	・・・	87

## 事業概要

### I. 運営

運営委員会	・・・	101
-------	-----	-----

### II. 研究助成

・・・ 103

#### 1. 機関研究

- (1) 幼児の才能開発に関する研究
- (2) 中学生の学力向上に関する研究
- (3) 高校生の学力向上に関する研究
- (4) 創立者越原春子および女子教育に関する研究
- (5) 大学における効果的な授業法の研究 4

2. プロジェクト研究	・・・	105
-------------	-----	-----

### III. 公開事業

・・・ 105

開かれた地域貢献事業

### IV. 講演会

1. 平成 20 年度講演会	・・・	106
2. 平成 20 年度教育講演会	・・・	106
「初年次教育としての『大学生生活入門』」（齋藤 誠氏）講演要旨	・・・	107

## 資料

名古屋女子大学総合科学研究所規程	・・・	117
------------------	-----	-----



研究所機関研究 (平成18年度～20年度)

## 大学における効果的な授業法の研究 4

### —初年次教育についての授業法の開発—

Towards More Effective Class Practices in Universities  
—The Development of Teaching Methods in First Year Education—

石倉瑞恵・伊藤太郎・宇野民幸・下木戸隆司・白井靖敏  
竹尾利夫・遠山佳治・谷口富士夫・原田妙子・幸 順子

Mizue ISHIKURA, Taro ITO, Tamiyuki UNO, Takashi SHIMOKIDO, Yasutoshi SHIRAI,  
Toshio TAKEO, Yoshiharu TOYAMA, Fujio TANIGUCHI, Taeko HARADA, Junko YUKI

はじめに

遠山佳治 (プロジェクトリーダー)

第1章 大学教育における初年次教育の意義と本学の状況 谷口富士夫・伊藤太郎

第1節 大学教育における初年次教育の意義

第2節 名女大の状況～現状報告

第2章 本学学生の現状把握

—アンケート調査に基づいて—

白井靖敏・宇野民幸・石倉瑞恵・下木戸隆司

第1節 第1回目の調査結果

第2節 第1回目と第2回目の比較分析

第3節 調査結果の考察

第3章 本学用初年次教育テキスト案の作成

原田妙子・幸 順子

第1節 初年次教育テキスト案作成の経緯

第2節 初年次教育テキスト案の意図

第3節 初年次教育テキスト案の内容

第4節 初年次教育テキストの活用方法

第4章 初年次教育運営上の課題と展望

遠山佳治・白井靖敏・下木戸隆司・竹尾利夫

第1節 全国的動向と本学の取り組み

第2節 家政学部における初年次教育の課題点と方向性

第3節 文学部における初年次教育の課題点と方向性

第4節 短期大学部における初年次教育の課題点と方向性

おわりに

遠山佳治

# 機関研究論文

## はじめに

本機関研究は、平成13年度から進められている総合科学研究所機関研究の授業改善プロジェクトへの支援の一環であり、情報教育・語学教育・教養教育に続いて「大学における効果的な授業法4」(平成18～20年度)に位置する。平成16～18年度の機関研究「大学における効果的な授業法3 教養教育(人文・社会・自然)についての授業法の開発」にて教育モデル案を示した。その中で、初年次教育の必要性を痛切に感じ、初年次教育科目群として設定した。つまり、前回の機関研究から本研究へ引き継がれたという経過がある。

そこで、総合科学研究所の機関研究と位置付けられた本研究では、研究所・研究所運営委員会等の方針に沿って、下記の研究課題5件が提示された。

- (1) 本学の初年次教育科目の理念、大学教育全体における位置付けを明らかにする。
- (2) 学生のニーズおよび学力を正確に把握する。
- (3) 初年次教育科目を学科・専攻の理念・目的に基づく教育課程に適切に位置付ける。
- (4) (1)～(3)の研究課題をもとに、具体的授業改善の方策を提示する。
- (5) 本学用の初年次テキスト案を作成する。

時間的制約もあり、上記5点の研究課題が充分に取り組めたかどうか、いささか心許ない。しかしながら、まず他大学や全国的動向の分析から始まり、総合科学研究所主催の講演会に初年次教育に関するテーマを3年連続で取り上げていただき、本学教職員へ初年次教育必要性の浸透を図った。

- ・平成18年度「授業改善と初年次教育の課題」、中井俊樹(名古屋大学高等教育研究センター)
- ・平成19年度「初年次教育がなぜ必要か?—初年次教育の現状と課題」、岩井洋(関西国際大学初年次教育研究開発センター長)
- ・平成20年度「初年次教育としての『大学生生活入門』」、斉藤誠(東北学院大学法学部長)

そして、平成19年度新入生アンケート調査を2回実施して、学生のニーズおよび学力を正確に把握し、学内で中間報告会を開催した。その上で、本学用の初年次テキスト案を作成し、その成果が本学(学長・理事会等)に認められて、教務委員会、各学部長、学科長、学生支援センター、法人事務局等で検討され加筆修正が行われ、全学的取り組みとして来年度(平成21年度)新入生向けに印刷・配付されることとなった。現実的には、初年次教育科目の設置や教育課程での位置付けなど課題も残っているが、それらは各学部や教務委員会など実務レベル

組織での検討課題であり、本研究会の力が及ぶところではない。ここでは研究の成果が実際の教育現場へ直接活かされたことを、素直に喜ぶたい。

本報告では、このように進めてきた本研究を体系的にまとめていきたい。

なお、本研究を進めた3年間で、初年次教育を取り巻く全国的状況がかなり変わった。一つには、平成19年12月に初年次教育学会設立趣意書が作成され、平成20年3月に設立大会が開催されたことである。問題意識を持つ教員または大学組織が意見交換をする全国的組織が設立されたのである。もう一つは平成20年3月に発表された中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)」の中に、「初年次における教育上の配慮」として、「学びの動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける。」と初年次教育の必要性が記述され、優れた実践に対して国が支援するという改革の方策を打ち出されたことである。このように、現場からの組織作りと国の方策としての取り組みがあり、本研究の推進に拍車がかかったといえよう。

## 第1章 大学教育における初年次教育の意義と本学の状況

### 第1節 大学教育における初年次教育の意義

#### 1. 「初年次教育」用語と定義

本研究では「初年次教育」という用語を用いるが、この「初年次教育」という用語と、「1年次教育」「導入教育」「接続教育」などとの関係は、論者によって様ではない。

この分野において先行的な研究を行い『初年次教育』という編著もある川島太津夫氏は、共編者である濱名篤氏の定義に加筆修正し、「初年次教育」を次のように定義する。

高校(と他大学)からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新生を対象に総合的につくられた教育プログラム(『初年次教育』p.3)

したがって川島氏の定義によれば、「初年次教育」の対象者は大学新生のみではなく、他大学や短期大学から3年次に編入学した学生なども含まれる。そのため、「1年次教育」や「導入教育」よりも、用語として有効であるとみなしている。すなわち「1年次教育」は、たとえば3年次への編入生を排除した用語となってしまう。すでに大学生活そのものには経験があるとは言っても、編入生にとって編入先大学の最初の年には多くの困難と不安があり、教育上、彼らにも特別な配慮が必要であることは言うまでもない。しかし「1年次教育」は彼らを排してしまうため、それをも包摂する用語として相応しくない。また「導入教育」は、どこへ導入するのかという点が曖昧である。1991年の大学設置基準の大綱化によって一般教育が軽視される中、専門教育への橋渡しの基礎知識・技能の教育が求められるようになると同時に、学力が下位の学生に対しては高校教育で行うべき補習教育が必要になるような状況が生まれた。そのどちらも「導入教育」と呼ばれ、その語を使用する関係者の間に曖昧さと多義性が見られる。

このように「初年次教育」を中心の概念とする立場もあれば、藤田哲也氏のように「初年次教育」を「接続教育」の一環として捉える立場もある。藤田哲也氏は初年次教育用のテキスト作成の中心にもなった人物であるが、2006年3月12日にキャンパスプラザ京都で開催されたFDフォーラム(統一テーマは「これからの大学教育」)第2分科会「全入時代における大学の課題—初年次教育・

接続教育—」の整理において次のように主張する。

(『2005年度第11回FDフォーラム報告集』)

藤田氏によれば「初年次教育」は「主に高校を卒業して大学に入学してきた学生、すなわち大学新生に対しておこなわれるものである」とし、「多様な学生たちを、速やかに大学生生活に移行させることを目的とした教育」とする。その意味では川島氏の定義と大きく異なるわけではない。

しかし、たとえば「初年次教育」と「リメディアル教育」の線引きが難しいことがあることを指摘する。すなわち、教える側からすれば補習教育という意識になっても、学生側からすれば、高校時に履修しなかった科目に関しては「補習教育」を受けているという意識を持たないかもしれないからである。また、英語や日本語教育においても、高校レベルと大学レベルの線引きが確定しにくいという問題があることも指摘する。したがって藤田氏は、初年次教育・リメディアル教育をともに、「高校から大学へと、教育を連続的に滞りなくつなぐものであるから、接続教育の一つのあり方として考えてもよいであろう」とみなす。

要するに、川島氏が「初年次教育」において大学新生よりも上の編入生をも視野に入れようとするのに対して、藤田氏は、高校時からの大学進路指導も含む入学前教育も視野に入れようとしている。つまり「初年次教育」とは「1年次教育」と同義ではなく、大学1年次以前から始まりうるし、場合によっては大学2年次以降であっても施さなければならないものでもある。

そのように「初年次教育」は広い概念たりうるので、その教育内容にせよ、実施すべき教育方法にせよ、各大学それぞれの独自の事情を考慮しつつ決定する必要があるのである。

#### 2. なぜ必要か

日本で初年次教育の必要性が叫ばれるようになった背景には、大学進学率の上昇と大学全入時代の到来がある。

大学進学率の上昇によって、自ら積極的に進学を選択したのではなく、半ば強制的に進学した不本意就学者がかなりの割合で存在するようになった。その結果、総じて、学生の学習意欲の低下や目的意識の希薄化が目立つようになってきた。そのため、従来のように学生の自主性に任せて事柄を進めるということが困難になってきた。また大学全入時代を迎え、特定の上位大学を除く多くの大学で、入試科目が減らされ、しかも、その入試そのものも一定の学力以上の受験生を選ぶという選抜機能を果たさなくなってきた。そのため、学生全体の基礎学力が低下し、入学時の学力の個人差が大きくなるという現象



が見られるようになった。

以上のような背景のもと、初年次教育の必要性の認識は年とともに広がっている。たとえば、2003年度から始まった文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」の例示として「初年次教育」があげられた。2004年度からは大学教育学会に「初年次教育・導入教育」研究委員会が設けられるようになった。2005年度に開催された第11回FDフォーラムでは、第2分科会「全入時代における大学の課題」として「初年次教育・接続教育」が取り上げられた。2007年12月には初年次教育学会が設立された。そしてついには、2008年11月6日に発表された中央教育審議会の答申案「学士課程教育の構築に向けて」において、「入学者受入れの方針について」として「初年次教育の充実や高大連携を推進」することが謳われるまでにいたった。

中央教育審議会の答申が国の教育政策に反映される可能性を考えると、今や、大学などの高等教育機関において初年次教育がなぜ必要かを論議するまでもなく、初年次教育を実施しなければならないような状況に突入しつつあるのである。

### 3. 先駆的な取り組み

BENESSE教育研究開発センターが2000年に行った「日本の初年次教育（導入教育）の現状」調査によると、新生が学習スキルを身に付けるための大学での学習活動の入門型に取り組んでいるのは、国立大学64大学130学部、公立大学24大学35学部、私立大学207大学321学部であった。その初年次教育の内容としては以下の6領域が主たるものである。

- ①文章表現（文章の作り方、論文やレポート、レジユメの作成方法）
- ②議論・ディベート（ゼミでの議論展開の方法）
- ③報告・プレゼンテーション（レジユメの作成方法）
- ④文献・資料（図書館の利用法、文献や資料の読み方・探し方）
- ⑤情報リテラシー（パソコン操作、ネットワークの利用法）
- ⑥教員とのコミュニケーション（オフィスアワー、教員とのコミュニケーションの取り方）

これらのうち特に多くの大学で取り組んでいるのは、

①文章表現（国立60.0%、公立51.4%、私立76.9%、全体70.6%）と⑤情報リテラシー（国立66.9%、公立54.3%、私立69.5%、全体67.76%）である。これらは単独の授業としても成立しやすいということによるのであろう。

それに対して、これら6領域を包括するような取り組みもある。たとえば『大学生からのスタディ・スキルズ 知へのステップ』（2008年度の文学部国際言語学科の「基礎ゼミ1・2」において共通テキストとして使用された）の初版は2002年4月に出されているが、これは関西国際大学が平成13（2001）年度から設けた導入学期のテキストが基礎となっており、平成13～14年度科学研究費（課題名：大学入学時におけるスタディ・スキルズの教材開発と運用に関する研究）の研究成果の一部である。初版は関西国際大学の特殊事情が内容に含まれていて他大学では使いにくい面もあったが、2006年には改訂版が出され、初年次教育のためのテキストとして広く一般的に用いることができるようになっている。さらに本書を授業のテキストとして採用すると、出版社から教員に『学習技術ワークシート 教授資料』が届けられるほどになっている。

また、『大学基礎講座』（やはり国際言語表現学科の2007年度の「基礎ゼミ1・2」において共通テキストとして使用された）の初版は2002年3月に出ている。本書は京都光華大学での初年次教育での教材をもとに書かれている。

先駆的な取り組みをした大学が、その成果を出版物として発表し、多くの大学がそれをテキストとして採用してそれに続く、という構図ができているようである。

## 第2節 名女大の状況～現状報告

### 1. 越原学舎研修＝オリエンテーション合宿

学園創立者の生誕地である岐阜県加茂郡東白川村越原にある越原学舎（昭和44年建設）で、新入生対象のオリエンテーション合宿が実施されている。越原学舎は食堂を兼ねた講義室や大浴場、学生用の宿泊棟（2階建2棟）や教職員用の宿泊棟（平屋建2棟）からなる宿泊研修用の学舎であるが、敷地を接して創立者越原春子先生の生家が現存している（現在の学舎は新しく建て直し中で、平成21年3月竣工の予定）。平成15年度から全学共通の必修科目（1単位）となったこの「建学のこころ」は、文科省が推奨する教育特色化の流れに棹を差す私立大学ならではの試みでもあって、創立者の生誕の地において創立者を偲び、建学の精神に触れるという意味から、正しくこれに勝るロケーションは無い。因みに、シラバスには「建学のこころ」の教育目標として「（1）本学創設者の生家に隣接する越原学舎で学ぶことにより、学園訓「親切」の意義と建学精神を理解し、本学の教育理念・目的について認識を深める（2）共同生活を通じて自己を啓発するとともに、豊かな感性と柔軟な思考力を養い、

4年間の学習の目標を立て、その計画を確かなものとする」と謳われている。

研修は学舎を取り巻く山々が新緑のコントラストで映える4月から6月にかけて、学科・専攻別に2泊3日の日程で行われる。研修プログラムには、学園長の講話をはじめ、各学科・専攻の特色を生かした様々な個別講義やハイキング、キャンプファイヤーなどが多彩に盛り込まれている。学科長や主任の講義では、創立者および学園の歴史が書かれた『もえのぼる』をテキストに建学の歴史と理念が語られ、学科・専攻の教育目標や方針、大学で何をどのように学ぶか、大学生としての在るべき姿などが説かれる。ワークショップでは、参加教員が大学での「学び」に関するさらに細分化したテーマを掲げてグループディスカッションを行ない学生の問題意識とモチベーションを高める工夫をしている。学科・専攻の特色を生かした体験学習を研修内容に盛り込む学科もある。例えば、文学部児童教育学科の児童教育学専攻と幼児保育学専攻は、それぞれ地元の小学校、保育所での見学や体験学習がそれぞれプログラムに入れられ、小学校や幼稚園の教員や保育士になる夢を抱いて入学した新入生は、入学早々に新鮮な体験学習の場を得て決意を新たにすることになる。また短期大学部生活学科生活創造デザイン専攻では、この期間中に様々な素材を使って、個人やグループで実際にデザインを描かせるという創作活動を体験させ、食生活専攻では特産物である白川茶入りのパンづくり体験を行っている。

越原合宿の中核をなす講義が学園長講話であって、創立者の生家で講義が始まったのは、現学長の越原一郎先生が学園長就任をしてからのことである。学生たちはクラス毎に昼と夜の2回に分けて、創立者の越原春子先生の生家に招かれ、続き間の和室や囲炉裏端に座って、春子先生の生い立ちや人柄、15歳で小学校の教員になった時の苦労話、自身の手で名古屋女学校（本学の前身）を創設するに至った経緯などの話を聞く。学生たちは、庄屋として古い伝統と格式を持つ越原家に残る様々な貴重な古書や骨董品を実際に手で触れながら、時には人生論や文明論にまで話が及ぶ学園長講話に聞き入って、1時間半ほどの時間が経つのも忘れてしまう。

3日目の午前中に「『建学のこころ』を終えて」というテーマで学生にレポートを書かせるが、学園長講話を聞いて一番感激し考えさせられたというコメントが実に多い。「15歳で教壇に立った春子先生の偉大さを実感した」、「志を持って社会に役立つことができると思った」、「創立者に倣って絶えず問題意識と目的意識を持つことの大切さを学んだ」、「昔の人が不便な生活の中でも知恵を働かせていたのに驚いた」、「今の自分が何と恵まれた

境遇にいるということを再認識した」、「学びの原点に立ち戻って大学生生活を有意義に過ごそうという自覚ができた」、「夜空の星の素晴らしさに感激した」、「人間は自然と共存・共生しなければいけないことを体感した」、「モノに溢れる生活の中に埋没する現代人の不幸を感じた」等々である。このレポートで見ると、このオリエンテーション合宿で、春子先生の存在感を肌で体感し、建学の理念を考えさせる試みはかなりの成功を収めていると言ってよいだろう。

個別講義以外にも、学生たちはこのオリエンテーションで様々なことを学ぶ。越原研修は教員と学生が親しく語り、人間的な触れ合いを通して相互理解を深め、信頼関係を培い、学生同士が寝食を共にして友情を育む絶好の機会となる。近年、対人関係に自信のない孤独傾向のある新入生が増えているが、この2泊3日の合宿は孤立気味の学生にとっては最初の関門になると同時に、新環境に一気に馴染む推進力を与えてくれる。胸襟を開いて語らえる友だちを多く作って心の居場所を確保することが絶対の近道であるからだ。2日目の瀬音公園へのハイキングや夜のキャンプファイヤーで楽しい時間を過ごし、目に入る自然の新緑と山間をわたる清涼な空気に都会の喧騒も忘れて、いつしか新しい友だちに囲まれている自分を発見して、2年間、或いは4年間、頑張っているという意欲と自信を感じるのである。

## 2. 入学式後の新入生オリエンテーションについて

入学者に対するオリエンテーションは必須のものであり、入学式後から授業開始前までの3日間の特別枠の日程で、学科・専攻と学生支援センターなどの事務サイドが予め役割を分担して行われている。学生支援センターからは各部署の担当者が出向する形で、オリエンテーション資料として予め配付された各種パンフレット類に基づいて行っている。

まず教務関係では、新入生にとって一番大切な履修登録の手続き方法に焦点を絞って、パソコン教室で「履修登録の手続きについて」という冊子で説明を加えながら、実際にその場で新入生に入力させてWeb登録をさせている。シラバスが電子化されたのでパソコン上で必ず確認してから選択するように注意を促し、自由選択の教養科目や第二外国語の登録方法を説明し、専門科目については時間割で確認して登録をするように指導している。

学生生活に関するオリエンテーションでは、新入生にとっての手引書でもある『翔（はばたき）』を開かせて、学生証、掲示板、通学バイクの登録、ゴミ美化などの学内マナー、貴重品の取り扱いなどの項目を中心に、短い時間の中で最小限「先ず学生に知っておいて欲しいこと」



に注意を喚起している。

保健室は、心身の健康の自己管理の必要性を説き、また同時に、オリエンテーション期間中に実施される健康診断の実施方法の説明も行って、当日の注意事項などを伝達している。

学生相談室（カウンセリング・ルーム）からは、顔見世も兼ねて心理カウンセラーがカウンセリング・ルームのPRをして、学業・対人関係の悩みを問わず、心の不調を感じる学生がいれば、遠慮なく思い切って利用するように呼びかける。入学時に学生に提出させている健康調査表から心のカウンセリングの必要と思われる該当者を抽出して6月～7月に呼び出しをかけて面談予約をさせている。近年、実際にカウンセリングが必要な、協調性に乏しく対人関係の苦手な学生が増えているので、汐路・天白両学舎ともに非常勤のカウンセラーだけでは増加する来談者への対応が不十分になり始めている。「親切」を学園訓にしている女子大学としては、心の病が原因での休学者・退学者を未然に防ぐという意味からも、心身が不調に陥った時に気軽に学生が来談できるように、例えば常勤カウンセラーを置くなどの方策を早急に講じる必要がある。

図書館からは、大学生としての読書の必要性を説き、学習のために館内の蔵書を有効活用するように呼びかける。具体的には、1時間の割り当て時間のうち前半30分はパソコン教室で図書の蔵書検索の仕方やマイライブラリーの利用方法などを説明し、残りの30分は実際に図書館に学生を連れて行って館内の利用案内をしている。

情報科学センターからは、大学のパソコンを利用する際に必要な、個別に割り当てられるアドレス（パスワード）の通知書を配布し、その使い方などを中心に説明を加えている。

禁煙教育も新入生オリエンテーションの中で重要な位置づけがなされている。本学は平成15年度に校地内完全禁煙を宣言し、平成16年度より新入生に「在学中は一切喫煙をしない」という誓約書を提出させている。オリエンテーション期間中も、禁煙キャンペーンの一環として、喫煙が回りの人々に健康上の被害を与える受動喫煙の危険性を訴えるビデオ上映を行なって、改めて禁煙の必要性を新入生に説いている。

学科・専攻が担当するオリエンテーションは、毎年予めその内容を担当者間で入念に打ち合わせて実施している。学部長・学科長の講話の後、学科・専攻の教育目標や望まれる人間像が語られ、それに続いて、冊子「履修要項」に基づいての単位制度、卒業要件、免許・資格といった具体的な履修関係の説明、科目の種別説明や履修モデルの提示などを学科の全体指導として行なっている。

クラス指導の時間に移ってからはクラス担任教員からの注意事項が云達され、学生同士の自己紹介、クラス選出委員の選出がなされる。また、学科所属の専任教員の紹介もオリエンテーション期間中に時間を割いて行なわれている。

### 3. 各学科・専攻での取り組み

就職委員会（現キャリア支援委員会）などで設置の必要性が検討されていたキャリア支援のための科目がようやく立ち上げられ、平成20年度より新入生対象の全学共通科目の「キャリア入門」として日の目を見る運びとなった。1年次から出口の就職を意識させ、大学・短大在学中に自己研鑽を積んで人間的に成長し、知識・教養もしっかりと身に付けて、社会への船出に向けて心の準備をさせるための科目である。オムニバス形式で授業展開がなされ、専任教員以外にも、講師として女性のキャリアコンサルタントや大企業で働く企業人も招いて多角的に行なわれる。授業目的は「この授業では年々変化している社会情勢や女性を取り巻く社会環境を理解することにより、来るべき就職活動や社会での仕事への心構えを学ぶとともに、自分で将来を設計し、その目標を実現させる能力をつける」と謳われている。シラバスから具体的な内容を引用すれば、最初の3回分、1. オリエンテーション、2. 学生時代の過ごし方、3. キャリアを考える、は学生支援センターから担当者が出向して導入部を受け持つことになっている。次にキャリア・ガイダンスの専門の外部講師にバトンタッチされて、4. 女性を取り巻く環境の変化、5. 自分らしい生き方の設計、6. 将来を考える、7. 自分のライフスタイルに合う働き方、8. 自己の未来設計、の5回分を受け持ち、これからの女性に相応しい人生設計の必要性を説く。その後の2回を企業講師が受け継ぎ、9. 社会が求める人材、10. 社会と仕事への心構え、と雇用する側の視点で望ましい人物像が語られる。最後の11～15回は各学科・専攻の担当となり、学部・学科・専攻の特色やカリキュラムに合わせたガイダンスや指導がなされる。例えば文学部の場合には、教職を含めたキャリア教育や国際理解の観点からの留学を取り上げているのも特色である。この「キャリア入門」はまだ開設したばかりの科目であるので、今後ますます内容を吟味・点検して、全学的な初年次教育の中核科目として質的充実を図らなければならない。

全学共通科目の「キャリア入門」の他にも、初年次教育というはっきりとした位置付けではなかったが、初年次教育の必要性が謳われる前から、各学科・専攻で個別に先行して初年次教育的な取り組みがなされていた。文学部国際言語学科には初年次教育的な内容を盛り込んだ

科目として「基礎ゼミ」(前期は「基礎ゼミ1」、後期は「基礎ゼミ2」)が新学科(前身の国際言語表現学科)開設当初から設置されていた。開設当初の「基礎ゼミ」は1・2とも1年生の必修科目で、「日本語または英語によって、自己表現・プレゼンテーション能力およびコミュニケーション能力を養うことを基本的な目的とする。また自己の考えを表現する総合学習でもあり、問題設定能力を養うことも視野に入れる」ことを授業目標として掲げていた。一方通行の講義を甘んじて聞くだけの受身の学習態度ではなく、自ら考え、調べ、議論をし、問題点を整理・総括し、そして自分の言葉で的確に意見を発表する、という一連の大学生としての基本的な「学び」の姿勢を定着させるための科目であった。この授業目的のもとに発足したゼミではあったが、教材は勿論のこと、具体的な内容や実際の演習の進め方は担当者に任されることになった。学科教員は日本語日本文化学科と英語英米文化学科から新学科に移行した英語系と国語系の混成メンバーだったために、各教員の専門性を生かすために自由裁量に任され内容が多岐に渡る結果となって、学生が選択に迷う状況も生まれ、また一部のゼミに学生が集中するという状況も看過できないようになった。その弊害をなくすために、2006年からは「基礎ゼミ1」の授業目的は初年次教育的なものに限定・集約し「大学の授業の受け方、ノートのとり方、リーディングのスキル、レポートの書き方など、大学での学習を充実したものにするための基礎的技能を学習する」ことになり、共通テキスト(学習技術研究会『知へのステップ改訂版』)を採用して少数の教員が担当している。「基礎ゼミ2」は「基礎ゼミ1」で学習した「情報収集・読み・書き」の応用実践編で、半期で2つのテーマを選び、情報収集した資料を十分に分析・考察した後、グループ討論を経て、各自レポートにまとめたものを口頭発表してプレゼンテーション能力を競わせている。

家政学部生活環境学科でも「基礎ゼミ」が通年科目として開講されているが、初年次教育科目の一つとしてカウントしている文学部国際言語学科の「基礎ゼミ」とは違って、専門基礎領域を志向するゼミであって趣向がかなり異なる。しかし、シラバスの授業目的にも「専門分野の研究の導入的役割を果たす科目である。創造的思考力を高めるための基礎的学習方法を修得する。選択するゼミにより具体的内容は異なるが、情報収集能力、情報処理能力、研究計画法、プレゼンテーション技法、論文作成能力などを高めることを目的にする」と謳われているように、そもそも本来的に、初年次教育と専門教育は境界線が重複して然るべきものである。各専攻で実施されている「基礎ゼミ」の在り方は、初年次教育との関

わりという視点も加えつつ、今後さらに再検討する必要があるかも知れない。

短期大学部は学生の在学期間が短く、早くも1年後期から徐々に就職活動が始まる現状であるので、入学者には就職を視野に入れた大学生としての意識改革を、早期に、しかも集中的に行なう必要があった。従って、ある意味で大学よりも先行して、初年次教育的な取り組みがすでに行なわれていた。短期大学部生活学科の各専攻は、既述した全学的な「キャリア入門」の他に、各々の専攻に相応しい内容の「キャリアデザイン1」(必修科目)、「キャリアデザイン2」(選択科目であるが専攻必修の位置付け)として設置して、学生としての自覚を促し、同時に就職を展望する視座を学生に持たせるべく努力をしてきた。初年度教育科目としては1年前期の「キャリアデザイン1」だけを挙げた方がいいのかも知れないが、就職対策的な内容が色濃い「キャリアデザイン2」も内容的に不可分に関連しているので一緒に言及しておきたい。

生活学科食生活専攻の「キャリアデザイン1」は、「人間形成を考える時間としておかれている科目」として規定される。「今後の人生や自分のキャリアを考えるためには、先ずその前段階として、学びの場である大学とはどんな場所であるのか、そこで自分はどのように学ぶのか、を考える。短大生としての認識を深めるとともに、自己探求の機会にする」と教育目標が謳われる。授業計画は「大学での学びとは」(3回)、「図書館の利用」(2回)、「文章の書き方」(2回)、自己分析テスト(2回)、「恩師への近況報告」(2回)などテーマを限定して丁寧に解説・指導しているが、さらに「大学の理念<親切>」、「校歌『月花の』」などを取り上げているのがこの専攻の「キャリアデザイン1」の最大の特徴である。「キャリアデザイン2」は「キャリアデザイン1」での生活学科教員による「人生観」「人生体験」「大学での学び」などの講義を受けて、キャリアアップを図るための進路指導、人生設計、自己啓発などをテーマにした講義になっている。就職支援、就職対策的な項目が並び、具体的にその内容を引用すると、1. 就職・進学などの進路についてのアドバイスと支援(エントリーシートの書き方、面接の受け方、時事問題の解説、新聞の読み方)、2. 人生設計のアドバイスと支援(結婚について、子育てについて、家庭観について)、3. 就職内定者の話、となっている。単に就職という狭い意味のキャリアではなく、女性としての望ましい人生設計にも結び付けて授業展開しているのが特徴的である。

生活学科生活創造デザイン専攻は、「キャリアデザイン1」、「キャリアデザイン2」とも授業目標は上記の同



じ生活学科の食生活専攻と共通しているが、「発表およびディスカッションを組み入れた学生参加型の授業」としてプレゼンテーション能力の養成が強調されている。具体的な授業内容も専攻の特徴を踏まえて構成されていて、「キャリアデザイン1」では、就職対策的なテーマよりも、むしろ人間観や人間形成に関わるテーマが掲げられている。具体的に引用すれば、「デザイン&アートの世界に生きる人々に学ぶ」、「生活の歴史（道具・女性）を通して新しい時代の生き方を考える」、「エレガントな食生活を考える」、「好感の持てる身だしなみ」、「すぐれた人材・求められる人材とは」、「流行とスローライフのくものづくり」について、「女性の仕事と結婚」、「価値観とスタイルを考える～美しく輝く女性になるための条件」といった項目が並ぶ。「キャリアデザイン2」は就職対策的な傾向を強め、自分を知る（自己分析）、社会を知る（職種・業界・会社）、自分と社会とのかかわりを考える、といった概括的内容の前半部分に続いて、後半は実践対策として、エントリーシートとの書き方、就職活動における筆記試験、就職活動における面接試験、就職とキャリア、卒業生との懇談といった項目が並んでいる。

生活学科生活情報専攻の場合は、「人間形成に役立つ知識・情報を提供する」と同時に、「就職に必要な知識・マナーを得ることを主体のプログラムを編成」して就職対策を前面に出している。初回3回で自己発見テストやライブラリーガイダンスなどを行った後、就職リテラシー（言葉と計算）（3回）、入門編の就職試験対策（3回）、会社や仕事を知るための講座（3回）、などで就職活動をにらんだ構成にしている。後期の「キャリアデザイン2」はさらに目前に迫る就職活動への実践対策の傾向を強めて、履歴書やエントリーシートの書き方に始まり、企業の選び方、業界・職種研究、データベースの活用法、企業見学の勧め、面接必勝法、といったハウツーの伝授、内定者や卒業生との懇親会、SPI・SHL試験対策や時事・一般常識試験問題などへの就職試験対策（実践編）といった講座を並べている（一部は学生支援センターキャリア支援オフィスの企画）。資格取得を拠り所にする他の学科・専攻と違って、生活情報専攻の場合は一般企業への就職が多いので、初年次教育の一環として予め就職へのモチベーションを高める必要性から、就職対策的なハウツーの内容が多くなるのは仕方がないかも知れない。

家政学部食物栄養学科、文学部児童教育学科、短期大学の栄養科と保育学科については、特に新生のためのガイダンス的な初年次教育科目は学科独自には開設されていない。1年次から時間割内にぎっしりと資格・免許関連の科目群が並んでいるので時間的な余裕もなかつ

たことも事実であった。新生もそれぞれに取得したい資格や免許を決め、希望職種を絞り、モチベーションを固めた上で入学してくるので、改めて就職に向けての意識改革をする必要がなかったとも言える。知性、教養、感性をバランスよく兼ね備えた社会人となるための人間的薫陶は、日頃の教員と授業時間の内外で密接に触れ合うことでなされているという自負を所属教員は持っているのだが、しかし学生の気質の変化や学力の低下が深刻化しつつある現状では、初年次教育という視座から学科カリキュラムを再検討をする必要があるのも事実である。

## 参考文献

- 1) 池田輝政「現在までの接続教育・初年次教育の俯瞰」(財)大学コンソーシアム京都『2005年度第11回FDフォーラム報告集』2006.
- 2) 学習技術研究会編『大学生からのスタディ・スキルズ 知へのステップ』くろしお出版、初版2002、改訂版2006.
- 3) 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて 答申(案)」、文部科学省ホームページ「中央教育審議会 大学分科会(第71回) 議事録・配付資料」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/001/08103112.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/001/08103112.htm))2008.
- 4) 濱名篤・川嶋天津夫編『初年次教育』丸善、2006.
- 5) 藤田哲也編『大学基礎講座 改増版』北王路書房、初版2002、改増版2006.
- 6) 藤田哲也「初年次教育・接続教育」(財)大学コンソーシアム京都『2005年度第11回FDフォーラム報告集』2006.
- 7) 山本以和子「日本の初年次教育（導入教育）の現状」、「教育改革と人材育成の方向性」よりデータ解説、BENESSE教育研究開発センター ホームページ (<http://www.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikukaikaku/2000/kaisetu>) 2000.

## 第2章 本学学生の現状把握

### －アンケート調査に基づいて－

#### 第1節 第1回目の調査結果

##### 1. 目的

前章で述べた状況を踏まえ、初年次教育用テキスト作成の基礎資料とするため、本学学生の実態を把握する必要があることから、入学生に対しアンケート調査を実施した。本節ではこの分析と考察を行う。

##### 2. 調査方法

名古屋女子大学、名古屋女子大学短期大学部の平成19年度新入生1,065名全員に調査を実施した。有効回答数は994であり、平成19年度本学に入学した新入生全体の93.3%にあたる。内訳は、家政学部287名中273名(食物栄養92/96名、生活環境111/119名、生活福祉70/72名) 文学部291名中266名(国際言語79/102名、児童教育学101/101名、幼児保育学86/88名)、短期大学部487名中455名(生活創造デザイン74/78名、食生活104/106名、生活情報102/102名、栄養88/89名、保育87/88名)であった。

調査項目は、A「基礎項目(3項目)」、B「学生生活で不安に思っていること」、C「学習に関する項目(20項目)」、D「生活に関する項目(19項目)」である。Bのみが、18項目からの複数選択回答形式であり、A群、及びC、D群は、以下の項目について3～5の選択肢から回答する形式である。

A 基礎項目：通学時間、通学方法、住居形態

B 大学生活で感じている不安

C 学習に関する項目：ノートのとり方、授業の聴き方、予習、復習、自主学習、ネットによる情報検索、図書館などでの文献検索、レポート・小論文等の作成、集中力、判断力、問題解決力、現時点における授業の空きコマ数、1週間の学習計画、パソコン、インターネット、ワープロソフト、表計算・データ分析ソフト、プレゼンテーションソフト、将来の希望職種・会社(キャリアデザイン)、将来の人生設計(ライフデザイン)

D 生活に関する項目：朝食、ダイエット、生活時間管理、健康管理、読書、テレビ・ラジオ、ボランティア、アルバイト、友人関係、異性との交際、サークル・部活動、休日など余暇の過ごし方、睡眠、家事、日記、携帯電話、電子メール(パソコン・携帯電話)、ブログ、個人情報管理・セキュリティ(パソコン・携帯電話)

実施時期は平成19年4月下旬から5月中旬であった。

##### 3. 調査結果

調査項目は、(1)学生の通学形態に関するもの、(2)大学生活で感じている不安、(3)学習面に関するもの、(4)大学生活面に関するもの、以上4部門に大別できる。以下、それぞれについて結果の概要を述べる。

###### (1) 通学形態

本学の学生は自宅通学の学生が多く、大半が1時間以内の近郊から公共交通機関を利用して通学していることが示された。

###### ① 通学時間

家政学部、文学部、短期大学部ともに、通学時間が1時間以内の学生が約半数を占めている。大部分の学生は近郊地から通学しているものの、なかには2時間以上もかけて通学している学生が僅かながら存在している点にも注意しておく必要がある。

家政学部・短期大学部と比べ、文学部の学生は通学時間が「2時間以上」と回答した学生が多かったが、これは文学部のある天白学舎が、家政学部・短期大学部のある汐路学舎よりも交通のアクセスが悪いところに立地していることによるものと思われる。

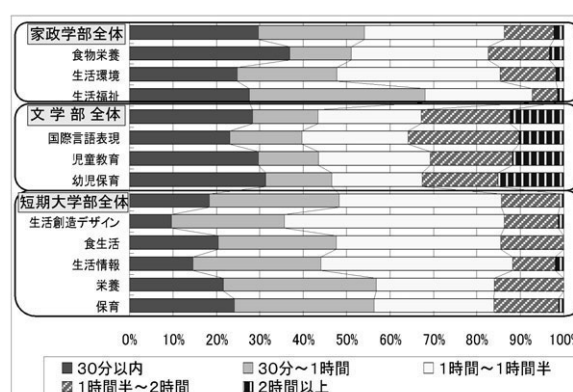


図 2-1-1 通学時間

###### ② 通学方法

電車や公共バス、スクールバスを利用している学生が6割～7割を占めている。文学部は他学部と比べ、スクールバスを利用している割合が高い。天白学舎への通学は、交通の便が良好な汐路学舎からのスクールバスを利用する学生が多いものと思われる。

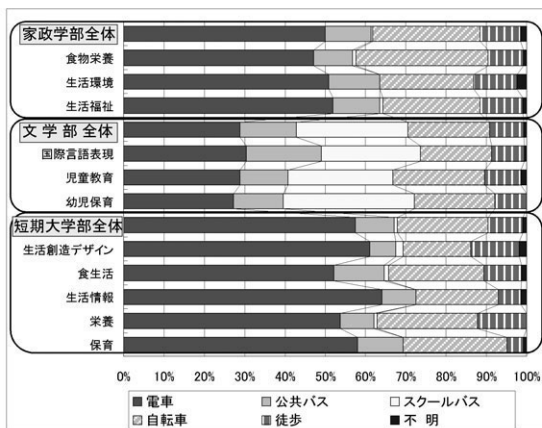


図 2-1-2 通学方法

### ③ 住居

家政学部、文学部、短期大学部とも、約6割以上の学生が自宅から通学している。通学時間が1時間以内の学生が約半数であったことから分かるように、本学の学生の多くが名古屋市および愛知・岐阜・三重県内の近郊から進学してきていることを裏付けるものであり、地元密着型の特色が現れているといえよう。

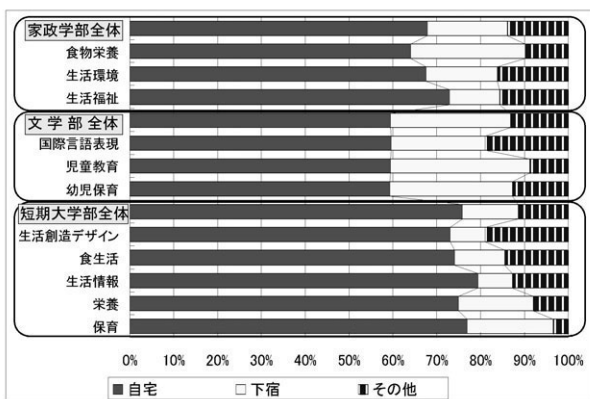


図 2-1-3 住居

### (2) 大学生生活で感じている不安

回答が多かった項目を列举すると、「大学での試験対策」、「ノートを取り方」、「予習復習の程度」など、学業面での不安をあげた学生が多かった。その一方で、「友人がいない、少ない」「悩み事の相談相手がいない」といった大学生生活面での不安をあげた学生は僅かであった。本学は入学定員が少ないこともあり、すぐに顔なじみになりやすい環境にあることから、友人関係が築きやすい条件が整っていることも影響していると思われる。

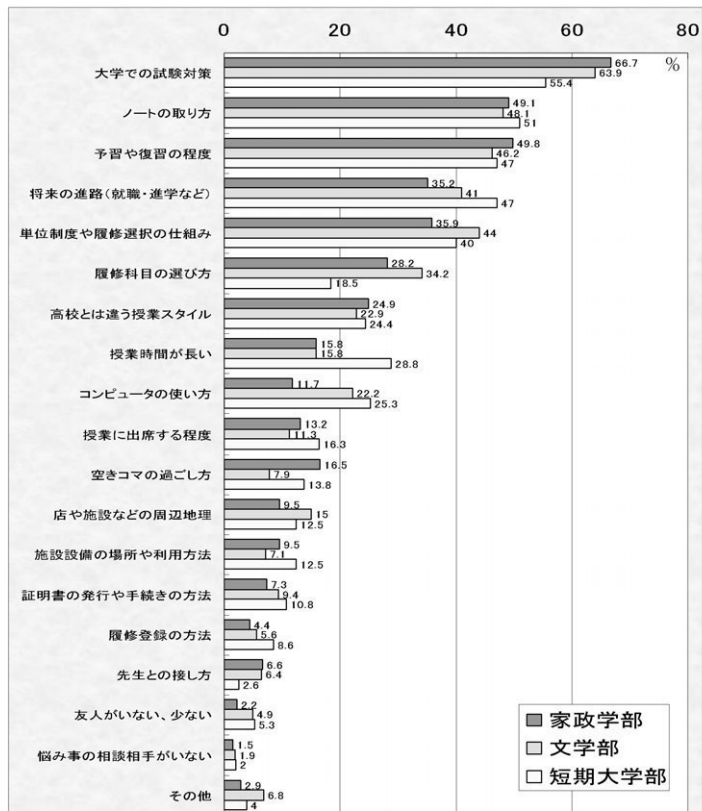


図 2-1-4 大学生生活で感じている不安

### (3) 学習面

本学の学生の多くは、「ノートを取り方」「授業の聴き方」「予習・復習・自主学習の程度」「1週間の学習計画」などの点に示されているように、学業に求められる学習態度・スキルを身につけているとはいいいがたい傾向がある。

#### ① ノートを取り方

「黒板・パワーポイント画面等と先生の話とがまとめられる」「黒板・パワーポイント等を写すだけ」「ノートを

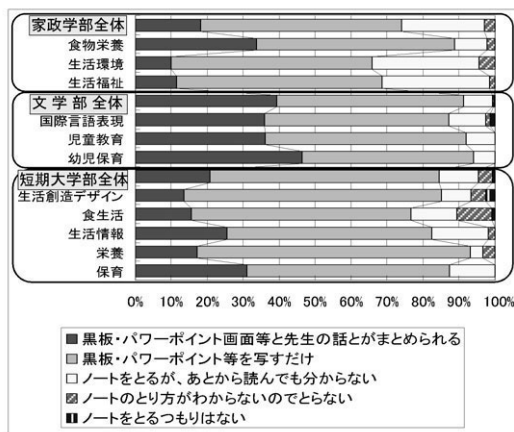


図 2-1-5 ノートを取り方



とるが、あとから読んでも分からない」と回答した学生をあわせると、9割以上の学生が授業中にノートをとっており、「ノートのとり方がわからないのでとらない」「ノートをとるつもりはない」という学生は少ないことがわかる。

しかし、きちんと内容を理解した上でノートをとれているかという点については、「黒板・パワーポイント画面等と先生の話とがまとめられる」と回答した学生は家政学部・短期大学部で2割程度、文学部で4割程度であった。口頭のみで説明されたポイントや自分が理解した内容についてのコメントまでを含めてノートに記録している学生は、それほど多くはないことが窺える。

ノートはあとで自分が見返して復習するために記録するものであるから、後で振り返ったときに重要なポイントが何なのかがわかるようになっていくことが望ましい。しかし「ノートをとるが、あとから読んでも分からない」と回答した学生が一部で見られたように、ノートを取ることの意義やその目的が十分に理解されているとは限らないという点を示唆しており、初年次教育の一環として「ノート指導」を取り入れる必要性を提起するものといえよう。

## ② 授業の聴き方

「はじめから90分間静かに聴ける」「なんとか分かろうと努力して聴く」と回答した学生は家政学部・短期大学部で約8割、文学部で約9割であった。一方で「しかたなく聴いている」「はじめから、真剣に聴かない」と回答した学生も数パーセントほどいる。また「分からなくなった時点で聴くのをあきらめる」と回答した学生が1割程度みられた。

これらの値を高いとみるか、低いとみるかは、意見の分かれるところであろうが、本調査が入学してまだそれほど経過していない時期に実施された点を考慮すると、

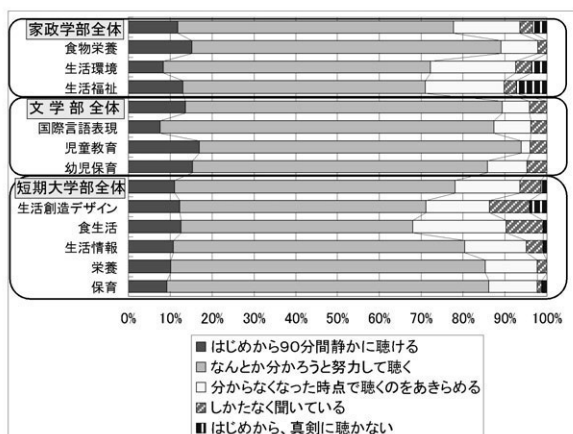


図 2-1-6 授業の聴き方

多くの学生は学びへの高い意識と意欲を持っているものの、大学の授業形式へのとまどいと授業内容の難しさから、早々に意欲を失いはじめている学生の存在を示唆していると思われる。

## ③ 予習の状況

予習を「毎日する」と回答した学生はごく僅かであり、家政学部・文学部・短期大学部全体でみても1割に充たない。これに「ときどきする」と回答した学生を合わせると、予習をすると回答した学生は家政学部で3割程度、文学部で6割程度、短期大学部で2割程度であった。ただ、この傾向は学部・学科・専攻間の違いも大きく、例えば家政学部食物栄養学科では予習を「毎日する」「ときどきする」と回答した学生は半数以上を占めたが、家政学部生活環境学科・生活福祉学科では逆に予習を「ほとんどしない」「まったくしない」と回答した学生が過半数を占めており、8割程度にまで達していた。

特筆すべきは、文学部幼児保育学専攻の「毎日する」「ときどきする」と回答した学生が他学部・他学科よりも群を抜いて多く、8割を超えていた点である。

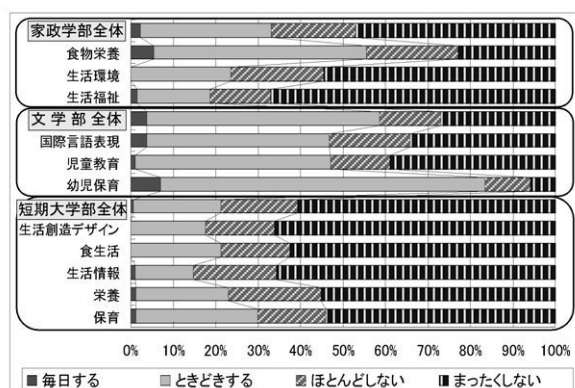


図 2-1-7 予習の状況

## ④ 復習の状況

復習を「毎日する」と回答した学生は、全体を通してみても1割にも充たなかった。これに「ときどきする」と回答した学生を加えても、家政学部・文学部で4割程度、短期大学部で3割程度であった。学部・学科・専攻間の違いは、予習の状況の結果ほどは大きくなかったものの、家政学部内の学科間の違いについては依然として大きな差が認められた。食物栄養学科では復習を「毎日する」「ときどきする」と回答した学生は6割程度だったのに対し、生活環境学科・生活福祉学科では2割程度であった。

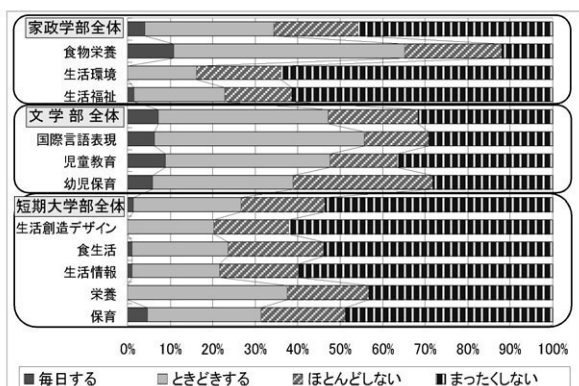


図 2-1-8 復習の状況

### ⑤ 自主学習（授業に直接関連しない学習）の状況

自主学習を「毎日する」と回答した学生はごく僅かであり、「ときどきする」という学生をあわせても2割程度であった。過半数の学生が自主的な学習をしていないと報告しており、学びへの意識・意欲の低さを示唆するものといえよう。また予習・復習と同じように、自主学習についても家政学部内の学科間の違いは大きかった。

予習を積極的に行っていると回答した学生が顕著に多かった文学部幼児保育学専攻が、自主学習の面では文学部他学科他専攻とそれほど回答の割合が変わらない点にも着目される。幼児保育学専攻では、1週間当たりの空きコマ数が少ない学生が多いこと（後述）を考慮すると、大学の正規の授業への対応におわれ、自身の関心のある事柄を調べたり、学習したりする時間があまりないということを物語っているのかもしれない。

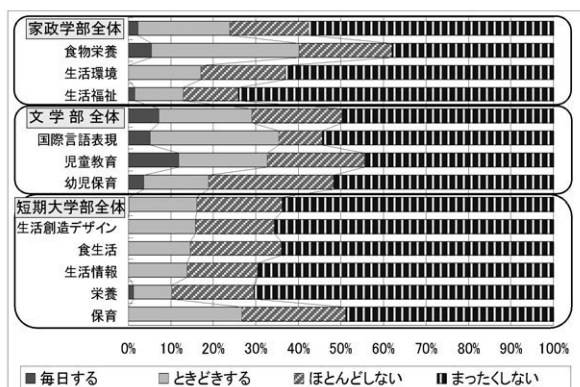


図 2-1-9 自主学習の状況

### ⑥ ネットによる情報検索

ネットによる情報検索は、新入生といえども比較的よくできているようであり、「できる」と回答した学生は家政学部・文学部・短期大学部とも4割程度を占めていた。これに「少しできる」と回答した数を加えると、実に8

割程度の学生が、これまでにインターネットを使った情報検索を経験していると報告していることになる。短期大学部生活学科生活情報専攻の学生は情報系だけに、ネットによる情報検索に慣れている学生が多く、他の学部・学科・専攻の学生よりも「できる」「少しできる」と回答した割合が高くなっていた（9割超）。

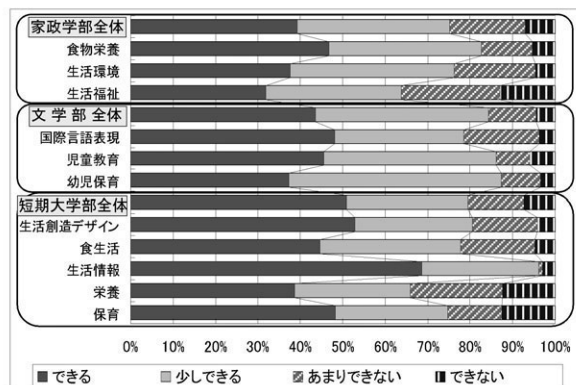


図 2-1-10 ネットによる情報検索

### ⑦ 図書館などでの文献（書籍等）検索

図書館などでの文献検索を「できる」と回答した学生は家政学部で1割程度、文学部・短期大学部で2割程度であった。これに「少しできる」と回答した数を加えると、情報収集のために図書館をある程度活用できるとこたえた学生は、家政学部・短期大学部で4割程度、文学部で5割程度であった。

ネットを使った情報検索に比べると、図書館を利用した文献検索にはあまり慣れていない学生が多いようである。パソコンや携帯電話など、普段からインターネットを活用する機会が多いのに対し、図書館を利用する機会・頻度が減っているという傾向を反映しているものと思われる。これは「最近の若者は本を買わない」「本を読まない」といった、昨今よく指摘される「読書離れ」とも関係するだけに、軽視できない点を孕んでいるともいえよう。

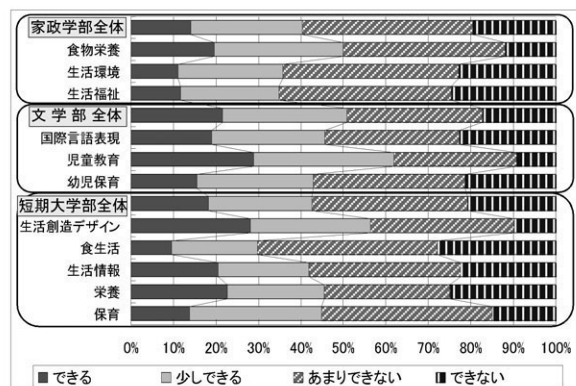


図 2-1-11 図書館などでの文献（書籍等）検索



⑧ レポート・小論文等の作成

レポート・小論文等の作成については、「これまでに学習したことがないが、自信をもって書ける」「これまでに学習したことがあり、自信をもって書ける」と回答した学生が家政学部で3割程度、文学部・短期大学部で4割程度認められた。一方で「これまでに学習したがあまり書けない」「学習したことがなく、書けない」と回答した学生が、全体を通して半数を超えており、文章を書くことに慣れていない・苦手とこたえた学生は多かった。

文章能力は読解力とならび、学業面を支える基礎能力として近年注目されているものである。レポートや小論文では、論理性や客観性などが重視され、感想文や雑文とは異なった体裁での記述が求められる。メールやブログ等で文を書くこと自体に慣れてはいても、こうした「アカデミック・ライティング」に戸惑いを感じているものと思われる。

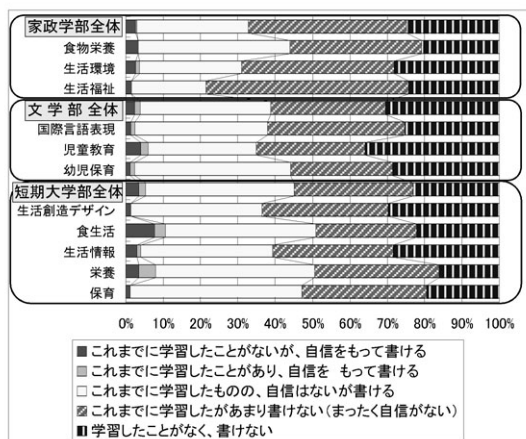


図 2-1-12 レポート・小論文等の作成

⑨ 基礎的能力

集中力・判断力・問題解決力は、学習を支える基礎的な素養ともいえるべきものである。これらの能力が「ある」と回答した学生は、全体を通して1割程度であった。こ

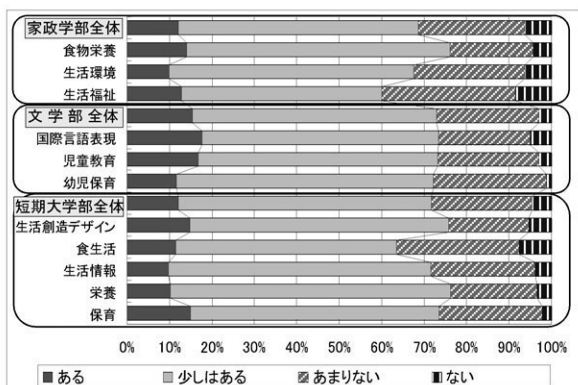


図 2-1-13 集中力

れに「少しはある」と回答した数をあわせると、全体で6割～7割程度の学生が、ある程度はこれらの能力があると答えたことを示している。比較的高い値といえようが、これは調査時期が入学当初であり、大学生活への緊張感が保たれていることも影響していると考えられる。

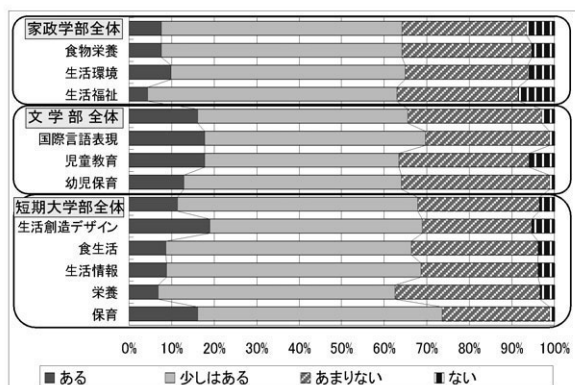


図 2-1-14 判断力

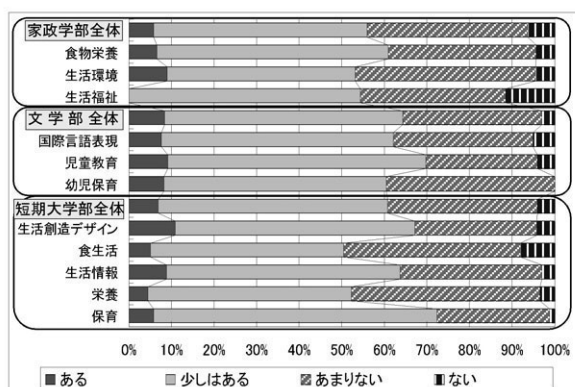


図 2-1-15 問題解決力

⑩ 情報リテラシー

8割以上の学生が、自宅でパソコンを利用できる環境にあることが窺える。家政学部で8割程度、文学部・短期大学部で7割程度の学生が、何かしらのかたちで普段からインターネットを利用していることが示された。ワープロソフトや表計算・データ分析ソフト、プレゼンテーションソフトの利用については、半数以上の学生が苦手としているようである。

学部・学科・専攻単位で見ると、短期大学部生活学科生活創造デザイン専攻は、情報リテラシー能力が他よりも高い傾向があった。

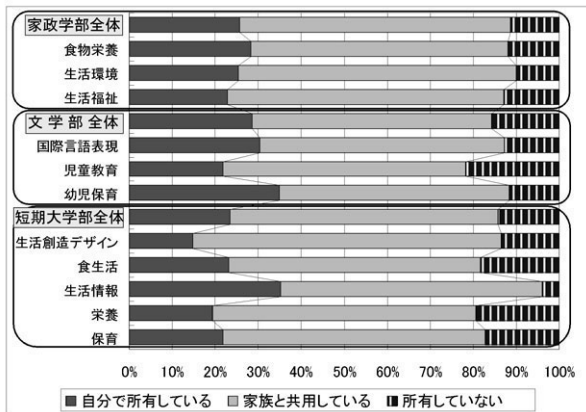


図 2-1-16 パソコンの保有状況

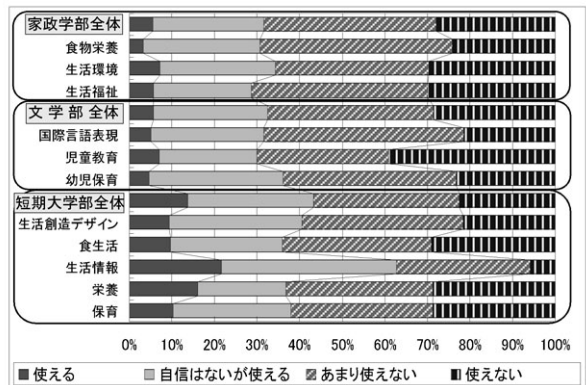


図 2-1-19 表計算・データ分析ソフト

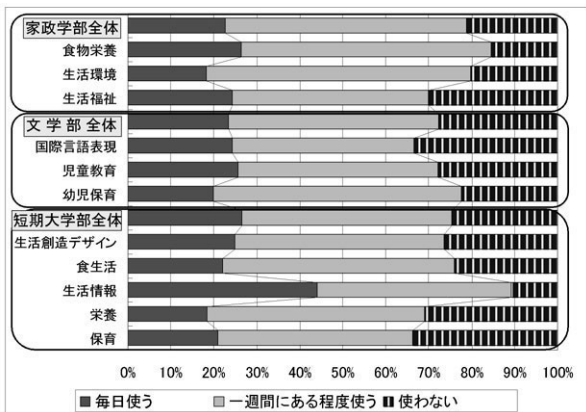


図 2-1-17 インターネット利用状況

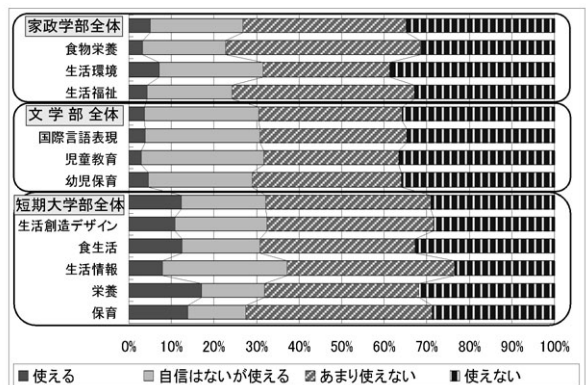


図 2-1-20 プレゼンテーションソフト

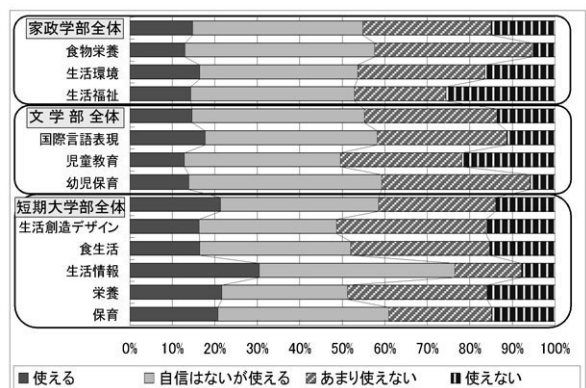


図 2-1-18 ワードプロソフト (ワードなど)

### ⑪ 1週間の学習計画

1週間の学習計画を「いつも立てる」と回答した学生はごく僅かであり、全体でも1割に充たなかった。「ときどき立てる」という学生を併せても、家政学部・短期大学部で3割程度、文学部で4割程度であった。

計画的に学習活動を行っている学生はあまり多くはなく、タイム・スケジュール面でのとまどいや、行き当たりばったりの利便的な行動パターンが垣間見られるもの

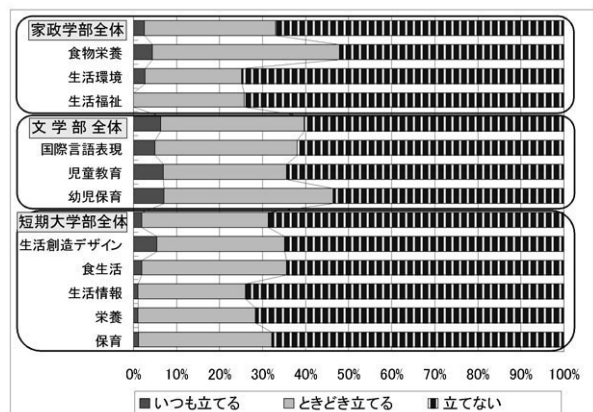


図 2-1-21 1週間の学習計画



となっている。ただこれは、入学当初の4月に調査が行われており、学生が大学生活にまだ十分には慣れていない時期であることを考慮する必要があるだろう。

⑫ 現時点における前期授業の空きコマ数

1週間あたりの授業の空きコマ数は「5コマ以下」「6～10コマ」と回答した学生が大部分を占め、全体でも8割に達していた。ほとんどの学生が1週間に15コマ以上の授業を履修しており、平均すると月曜から金曜まで毎日3コマ以上の授業を受けていることになる。その一方で空きコマ数を「11～15コマ」「16コマ以上」と回答した学生は僅かであった。

学部・学科・専攻間の違いも大きく、文学部国際言語表現学科・短期大学部生活学科食生活専攻では「11コマ以上が空いている」とこたえた学生が4割程度に達していた。文学部幼児保育学専攻ではそれが1割にも充たなかったことを踏まえると、1年次とはいえ、学科・学部ごとのカリキュラムや履修指導の違いは大きいといえよう。

大学設置基準では、「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成すること」が標準であると述べられている。授業回数は15回と定められていることから、この要件を満たすには講義科目で授業時間の倍（3～4時間）、演習科目では授業時間の半分（30分～1時間）程度の自習時間が必要なことがわかる。この計算に基づけば、1週間の時間割で10コマ程度授業を取っている学生は、1週間あたりの学修時間が40～45時間程度になり、学びのための時間としては適切な分量といえよう。その点で1週間の空きコマ数が5コマ以下という学生は、1週間に20コマ以上も授業を履修していることになり、十分な学修時間の確保という面で少し問題が残ると思われる。現在、本学が導入を進めている「キャップ制」では、授業時間以外の自習時間を念頭に

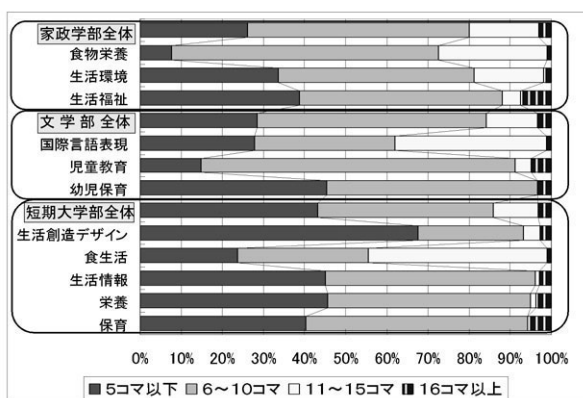


図 2-1-22 前期授業の空きコマ数

限を設定する必要があるだろう。しかしその一方で、短期大学部では所定の年限で資格取得に要する授業数を履修しなければならぬ事情もあって、全学一律にキャップ制を導入していくのは難しい問題も残されている。

⑬ 将来の希望職種・会社（キャリアデザイン）

将来のキャリアデザインについて「将来の仕事をしっかり考えている」と回答した学生は家政学部で2割程度、文学部で6割程度、短期大学部で3割程度であった。学部間だけでなく、学科間での違いも大きく、4月の入学当初の時点で自分のキャリアデザインをしっかり考えているとこたえた学生は、短期大学部生活学科食生活専攻では2割程度であったのに対し、保育学科では6割程度と大きな差異が認められた。小学校教員、幼稚園教諭、保育士といった、特定の資格取得・特定業種への就職がかなり明確な学科では、学生は入学時点から具体的なキャリアデザインを思い描いている学生が多いが、それ以外の学科では、「これからの大学生活の中で考えたい」と答えた学生が大部分を占めていたことから、大学で学びながら、将来の職業などのキャリアデザインを描いていくものと考えられる。就職への関心は決して低くはないことが覗えるので、このような学生に対しては、本学での大学生活やキャリア教育が重要であることが分かる。

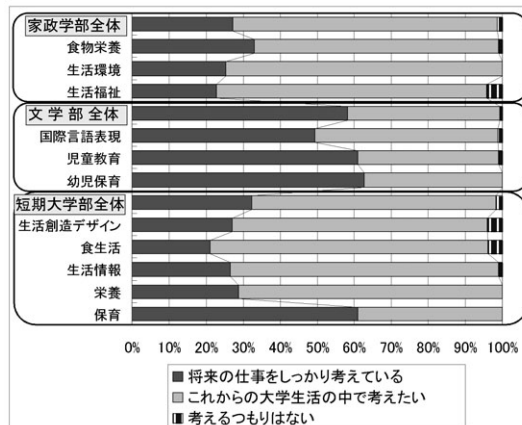


図 2-1-23 キャリアデザイン

⑭ ライフデザイン

「将来の人生設計をしっかり考えている」と回答した学生は、家政学部・短期大学部で約2割、文学部で約3割であった。「これからの大学生活の中で考えたい」と回答した学生は、家政学部・短期大学部で約8割、文学部で約7割を占めていた。ほとんどの学生が未成年であるため、この時期ではまだ自己の確立・キャリア意識の形成途上にあり、自分の将来について漠然としたイメージしか持っていないのも妥当なことと考えられる。



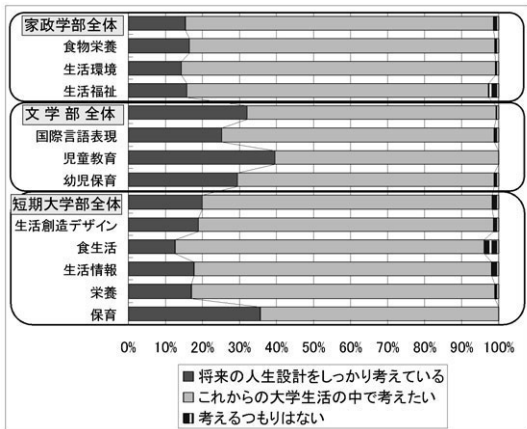


図 2-1-23 ライフデザイン

#### (4) 生活面

本学の学生は自宅通学が多いこともあって、それなりに規則正しい、充実した毎日を過ごしている学生がたくさんいるようである。友人関係も良好と見なしている学生も多く、大学生活にもうまく適応していることが窺える。

#### ① 食事（朝食）

朝食を「毎日食べる」と回答した学生が大部分であり、家政学部・文学部で9割程度、短期大学部で約8割であった。これに「ときどき食べる」という学生を加えると、ほぼすべての学生が「朝食を取ることを」重視していることが窺える。朝食は学業に必要なエネルギーを補給するだけでなく、規則正しい生活リズムを整え、維持するという働きを担っている。大学生活を活発に、実りあるものとするための基本ともいえるべきものである。本学の学生の多くは、朝食を取ることが習慣となっているようであり、自らの健康・体調管理に配慮している点で評価できる。

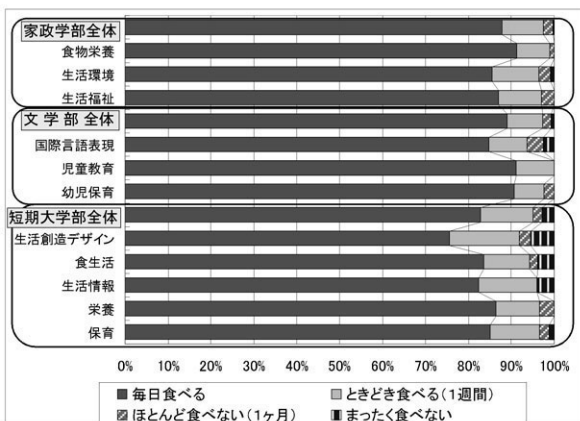


図 2-1-24 朝食

#### ② 睡眠（1日平均）

睡眠時間について、「6～8時間」「4～6時間」と回答した学生がかなりの部分を占めており、「8時間以上」「4時間未満」という学生は1割未満であった。総務省の「社会生活基本調査(2001)」によると、大学生の平均睡眠時間は7時間38分であった。この値と比較すると、本学の学生の睡眠時間はほぼ平均的か、もしくは若干短いと言えそうである。

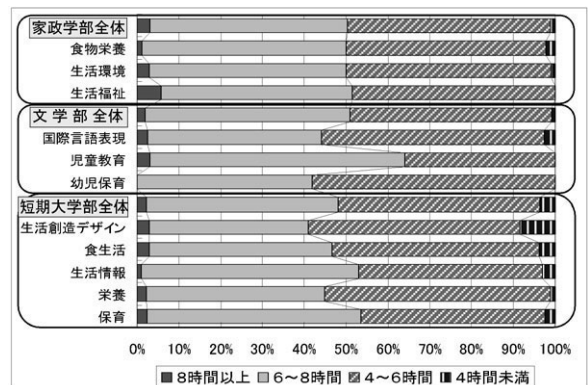


図 2-1-25 睡眠（1日平均）

#### ③ 生活時間管理

生活時間管理が「できている」と回答した学生は、全体を通して2割程度であった。「少しできている」とこたえた学生を加えると6割程度にまで達する。生活時間の管理については、多くの学生がある程度はできていると思っている一方で、そのやり方は必ずしも十分なものではないと認識しているようである。

時間管理（タイム・マネジメント）も初年次教育ではよく取り上げられる題材である。このデータを見る限り、早急に対策を要するというものではないにせよ、効果的な時間管理・スケジュール管理の仕方について教示する必要性をある程度示唆しているものと思われる。

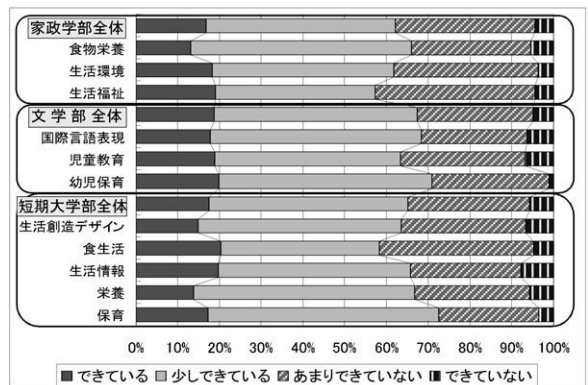


図 2-1-26 生活時間管理

④ 健康管理

自らの健康管理が「できている」と回答した学生は家政学部・短期大学部で約2割、文学部で約3割認められた。「少しできている」という学生を加えると7割以上を占めており、本学の新生の健康管理に関する意識は割に高いと思われる。

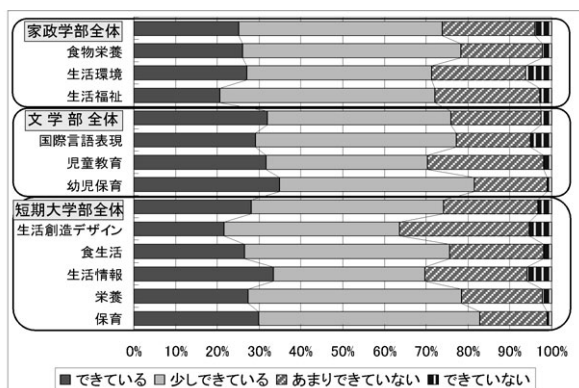


図 2-1-27 健康管理

した学生が全体でも4割以上みられ、本を読む習慣がほとんどない学生が結構な割合を占めていることが示された。先の図書館での文献検索を苦手と認識している学生が半数以上いたこととも照らし合わせると、本学の学生においても、昨今いうところの「活字離れ」「読書離れ」の傾向が認められるものであったといえよう。

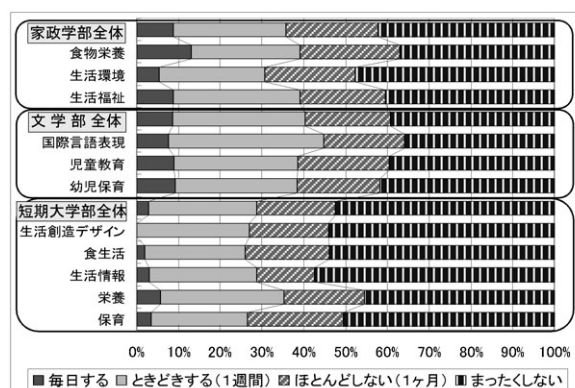


図 2-1-29 読書の頻度

⑤ ダイエット

ダイエットを「している」と回答した学生が家政学部で3割程度、文学部・短期大学部で2割程度認められた。この割合はさほど高くはないが、若い女性は「痩せ願望」が強く、ダイエット行動がエスカレートして摂食障害に陥るケースが少なくないことから、ダイエットを今も続けているという学生には注意が必要であろう。無理なダイエットがいかに危険なのか、適切な指導と早期発見が求められるところである。

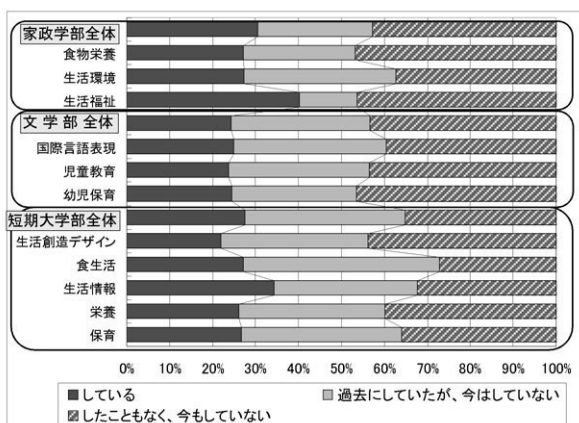


図 2-1-28 ダイエット

⑦ テレビ・ラジオの視聴頻度

テレビやラジオを「毎日見る・聴く」と回答した学生はかなり多く、全体的に約8割にまで達していた。読書を「毎日する」とこたえた学生が1割未満であったことに比べると、この違いは歴然である。

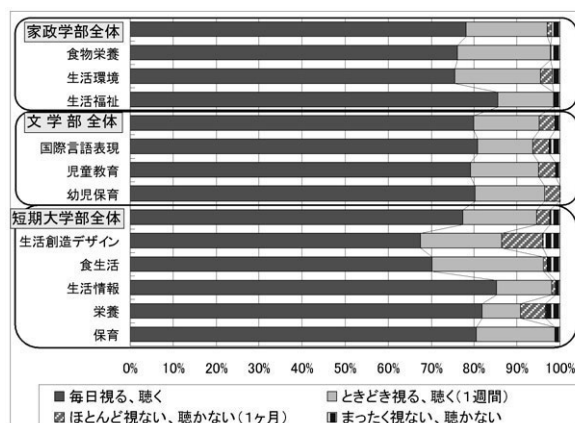


図 2-1-30 テレビ・ラジオの視聴頻度

⑥ 読書の頻度

読書を「毎日する」と回答した学生は全体を通して1割未満であった。「ときどきする(1週間)」とこたえた数を含めても3割程度である。「まったくしない」と回答

⑧ ボランティア経験

ボランティアについて「経験があり、今もしている」と回答した学生はごく僅かであり、全体でみても1割にも充たない。「経験があるが、今はしていない」という学生を加えると家政学部・短期大学部で約6割、文学部で約7割であった。一方「経験はないが、するつもりである」という学生は家政学部・文学部で約2割、短期大学部で約1割認められたことから、大部分の学生がボラン

ティアに携わったことがあるか、ボランティアに携わろうという意思のある学生ということになる。ボランティアに関心はあるが、現在積極的に「している」という学生は少ないという本学の新入生の特徴が窺える。

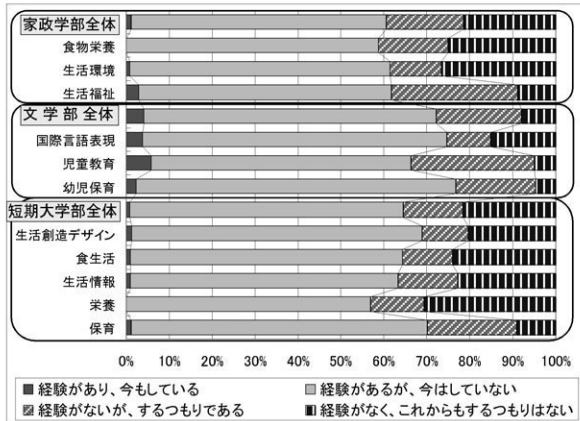


図 2-1-31 ボランティア経験

### ⑨ アルバイト経験

アルバイトについて「経験があり、今もしている」と回答した学生は多く、家政学部・短期大学部で約6割、文学部で約4割であった。学部・学科・専攻ごとにみると、家政学部生活福祉学科の割合が家政学部の2学科よりも高いことと、文学部幼児保育学専攻の割合が低いことが目立った特徴としてあげられよう。

大学生の意識調査(藤井ら 2007; 藤塚ら 2002; 東京大学学生生活委員 2006)などでは、現在アルバイトをしているという学生は全体の6~8割程度みられるという。本学の新入生についても概ねそのような傾向が認められた。単に生活費や小遣いを稼ぐだけでなく、キャリア形成・人生経験の面から、こうしたアルバイトがどのように大学生に影響していくのかについては不明である。キャリア教育との関係で、今後検討を要すべき

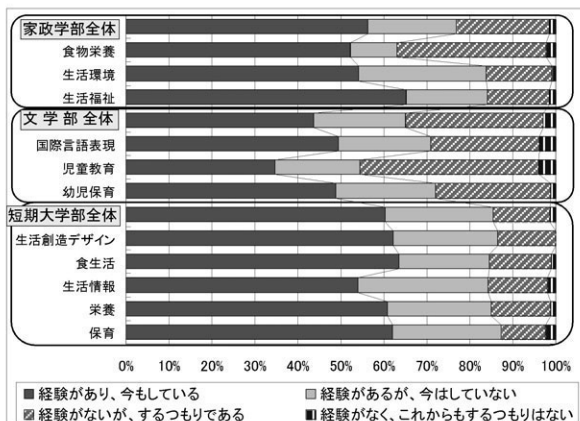


図 2-1-32 アルバイト経験

点といえよう。

### ⑩ サークル・部活動

サークル・部活動について「している」と回答した学生は家政学部で2割程度、文学部で1割程度、短期大学部では1割未満であった。「これからしたい」とこたえた学生は家政学部・文学部で約6割、短期大学部で約3割みられた。新入生を対象に4月に実施した調査だけに、まだサークル・部活動には所属していないものの、興味・関心はもっている学生がかなりいるようである。

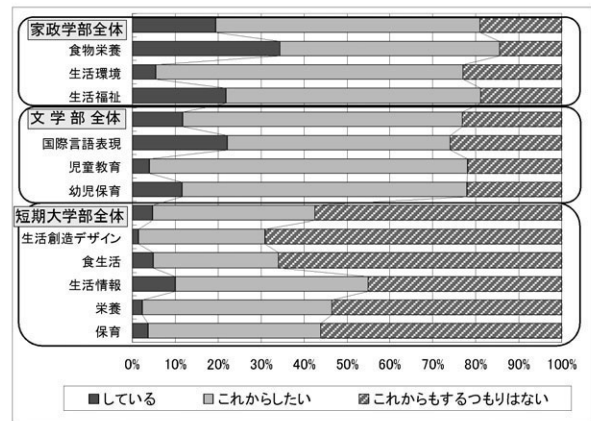


図 2-1-33 サークル・部活動

### ⑪ 友人関係 (学外も含む)

友人関係が「良好」と回答した学生は全体でも6割を超えており、「やや良好」という数を併せると9割以上を占めていた。「友人がいない」とこたえた学生はほとんどいなかった。

友人関係は大学生活への適応を支える重要な要因になる。調査結果は必ずしも本学内の友人関係を示すものではないにせよ、本学の新入生の大部分が「友人関係は概ね良好」と意識している点は評価できよう。「友人がいない」「友人とうまくいかない」という悩みや問題は、大学生活への不満や不適応に繋がり、中途退学に発展しかねない危険性も孕んでいるためである。その点において本学の学生は、少なくとも友人関係の点からは比較的うまくいっていると考えているようである。



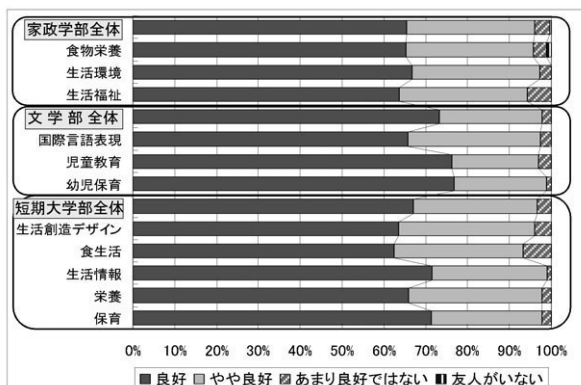


図 2-1-34 友人関係

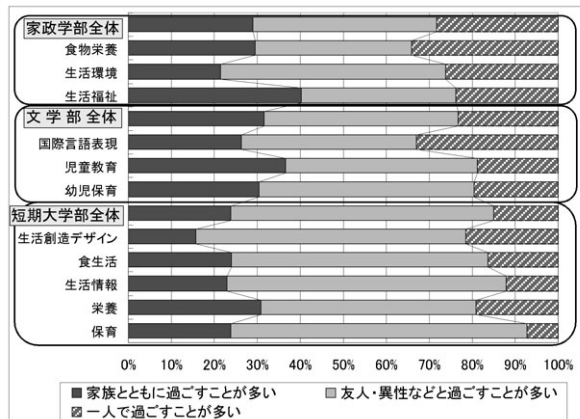


図 2-1-36 休日など余暇の過ごし方

⑫ 異性との交際

異性との交際について、「交際していない」と回答した学生は家政学部・文学部で約6割、短期大学部で約5割認められた。一方交際が「良好」「やや良好」という学生は全体でも3割程度であった。

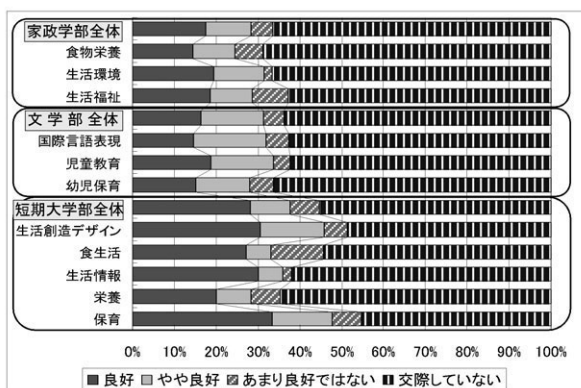


図 2-1-35 異性との交際

⑬ 家事の習慣

家事を「毎日する」と回答した学生は家政学部・短期大学部で3割程度、文学部で5割程度であった。一方、家事を「ほとんどしない」「まったくしない」とこたえた学生は全体を通して2割程度みられた。

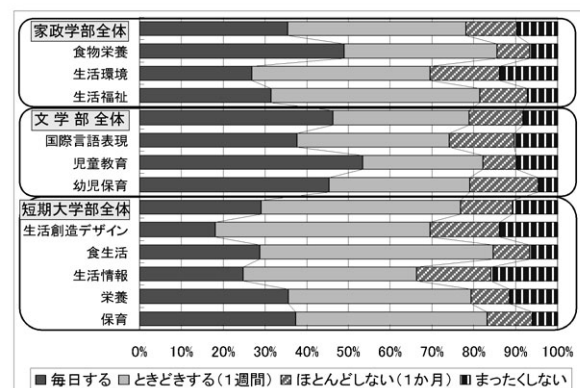


図 2-1-37 家事の習慣

⑭ 休日など余暇の過ごし方

休日を「家族とともに過ごすことが多い」と回答した学生は家政学部・文学部で3割程度、短期大学部で2割程度であった。「友人・異性などと過ごすことが多い」という学生は家政学部・文学部で4割程度、短期大学部で6割程度を占めていた。

⑮ 日記の習慣

日記を「毎日書いている」と回答した学生は全体でも2割程度であった。その一方で「まったく書かない」と

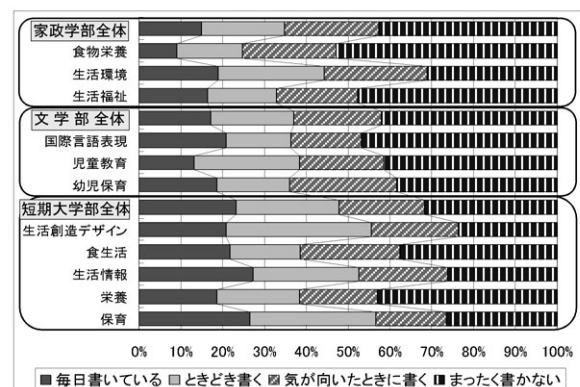


図 2-1-38 日記の習慣

いう学生は家政学部・文学部で4割程度、短期大学部で3割程度認められた。

### ⑩ 携帯電話の使用頻度

携帯電話について「毎日使う（これがないと生きていけない）」と回答した学生は多く、家政学部・文学部で約5割、短期大学部で約6割を占めていた。これに「毎日使う（なくても支障はない程度）」とこたえた学生を含めると、ほぼすべての学生が携帯電話を毎日使っていた。単に携帯電話の使用頻度が高いというだけでなく、「これがないと生きていけない」というぐらゐ依存度が高い学生が半数以上もみられた点に留意すべきかもしれない。

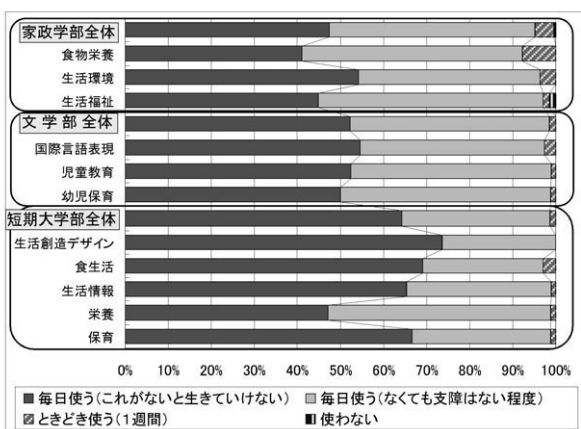


図 2-1-39 携帯電話の使用頻度

### ⑪ 電子メール（パソコン・携帯電話）の使用頻度

電子メールの使用頻度について「毎日」と回答した学生は、家政学部で約6割、文学部で約7割、短期大学部で約8割を占めていた。かなり大多数の学生が日常的に電子メールを使っていることが示された。日記をときどきでも書いている学生が半数ほどいたことから、本学の学生は何かしらの文を書くこと自体は厭わないようである。

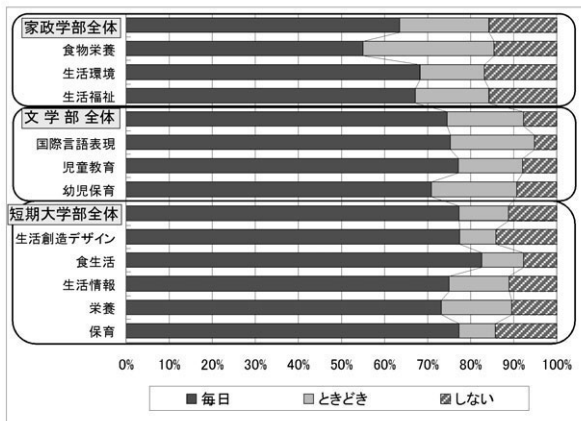


図 2-1-40 電子メールの使用頻度

ある。

### ⑫ ブログの利用状況

ブログの利用状況について、「自分で作っている」と回答した学生は家政学部・短期大学部で2割程度、文学部で1割程度であった。「友人などと共同で作っている」と回答した学生もあり、2割程度認められた。一方、ブログを作ったことがないという学生は家政学部・文学部で約7割、短期大学部で約5割を占めていた。

本学の新生の半数以上はブログを開設したことがなく、また当面のところは自分で作るつもりもないと考えている学生が多いようである。アンケートでSNS (social network service) については聞いていないが、ブログなどのネットへの参加に対して慎重な態度が窺える。ブログにうっかり記載した個人情報から、見ず知らずの他人に本人を特定され、執拗な攻撃を受ける「ブログ炎上」事件が相次いでいることも影響しているのかもしれない。また、短期大学部生活学科生活創造デザイン専攻ではブログ経験者が他の学部・学科・専攻の学生よりも多いのが特徴的であった。

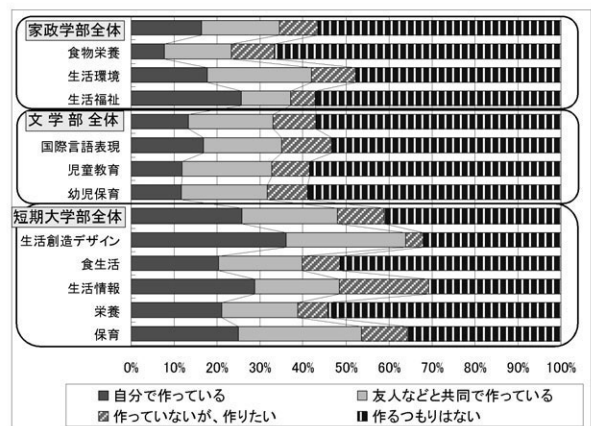


図 2-1-41 ブログの利用状況

### ⑬ 個人情報管理・セキュリティ（パソコン・携帯電話）

個人情報管理・セキュリティについて「している」と回答した学生は、全体でも2割程度であった。「少ししている」という学生を加えると約5割になるが、インターネットや電子メールをよく利用しているわりには、個人情報管理・セキュリティ対策への意識は必ずしも高いとはいえないようである。

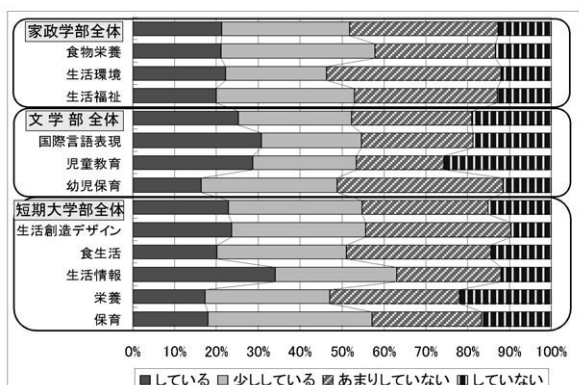


図 2-1-42 個人情報管理・セキュリティ

## 第2節 第1回目と第2回目の比較分析

### 1. 調査目的

第2回目のアンケートは第1回目のアンケートから半年以上が経過した時点で、学業面・生活面での学生の行動や意識がどの程度変化してきているのかを調査する目的で実施した。

### 2. 調査方法

名古屋女子大学・名古屋女子大学短期大学部の平成19年度新入生1,065名のうち、学科・専攻で2クラスあるところでは、任意にどちらかのクラスを選択するなど、約半数を対象とした。有効回答数は658であり、1年生全体の61.8%であった。内訳は家政学部173/287名(食物栄養55/96名、生活環境62/119名、生活福祉56/72名)、文学部168/291名(国際言語35/102名、児童教育学91/101名、幼児保育学42/88名)、短期大学部317/487名(生活創造デザイン54/78名、食生活81/106名、生活情報85/102名、栄養42/89名、保育55/88名)であった。

本調査では各学科・専攻での実情を鑑み、時間的制約および諸事情からクラス単位で調査を実施していないところもみられる。その意味において本調査は全数調査ではないが、前回調査と同じ母集団から標本を取り出しているため、標本抽出に伴う結果の偏りは小さいものと判断した。

調査項目は以下の16項目である。学習意欲を除いた15項目は、第1回目調査との比較検討のために、同調査で使用された項目と同じである。

調査項目：今不安に思っていること、ノートの取り方、授業の聴き方、予習、復習、自主学習、ネットによる情報検索、図書館などでの文献(書籍等)検索、レポート・小論文等の作成、現時点における前期授業の空コマ数、

1週間の学習計画、パソコン、インターネット、将来の希望職種・会社(キャリアデザイン)、将来の人生設計(ライフデザイン)、食事(朝食)、学習意欲。

実施時期は平成19年12月中旬であった。

## 3. 比較結果

### (1) 不安に思っていること

調査対象の人数より分かるように、1回目と2回目では回答数が異なるため、「その項目を選択した数/全回答数」として、回答率において比較を行う。調査はすべての学科・専攻において実施されており、回答数の差は主にクラス単位での「実施した・実施しなかった」の違いであるため、分散についてはほぼ同じとみなしてよいと考えられる。

結果は4月当初に比べ、「ノートの取り方」「予習や復習の程度」「高校とは違う授業スタイル」「単位制度や履修選択の仕組み」「大学での試験対策」といった授業や大学生活にまつわる不安は大幅に和らいでいることが見て取れる。このうち特に、「ノートの取り方」と「高校とは違う授業スタイル」においては、その減少は差の検定により有意差が示されている( $t$ 検定、有意水準1%、補正なし)。

その一方で、「将来の進路」「先生との接し方」「店や施設などの周辺地理」についての不安はむしろ4月時点よりも高まっていることが示された。これらは他に対する不安が取り除かれてきて、興味・関心が意識に現れてき

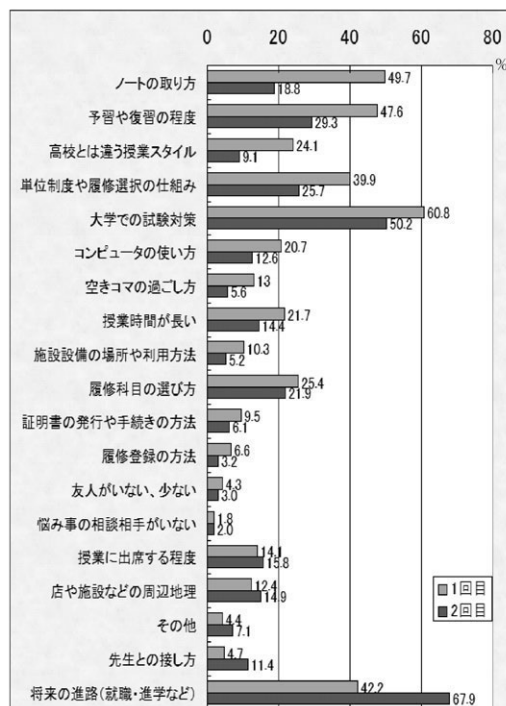


図 2-2-1 大学生生活での不安



ていると肯定的にも捉えられるが、より具体的な声を取り上げていくことで検討すべき課題も見えてくる可能性があるといえる。「大学での試験対策」「履修科目の選び方」「単位制度や履修選択の仕組み」は学部ごとに増減に違いがあり、詳しく調べると、学科・専攻ごとにも違いがでていることが分かる。これはそれぞれの学部・学科・専攻ごとの授業カリキュラムや履修モデルの相違を反映しているものと考えられる。「将来の進路」については、短期大学部の方が家政学部・文学部よりも不安に感じている学生が多かった。就学年数が短い短期大学部の学生は、就職についてより現実的なものとして捉えていることが窺える。

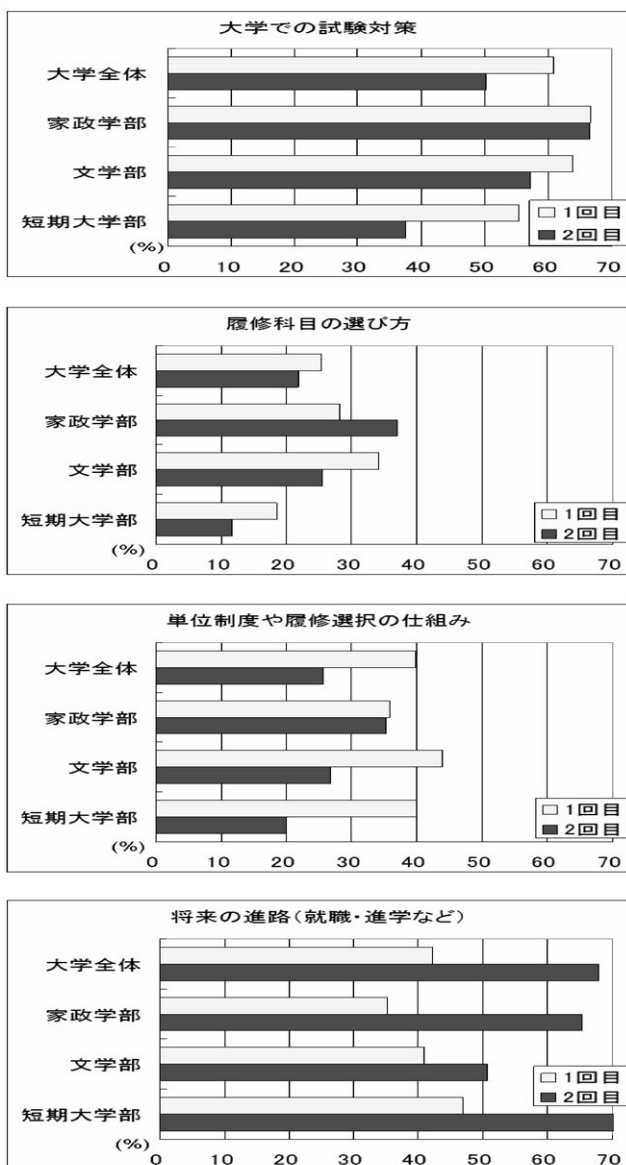


図 2-2-2 「大学での試験対策」「履修科目の選び方」「単位制度や履修選択の仕組み」「将来の進路」についての比較

## (2) 学習・生活に関すること

学習・生活に関することについて、各項目の回答の選択の割合(項目選択数/全回答数)により比較する。項目として、1回目の15項目に、「学習意欲」を新たに加えた。

### ① ノートの取り方

「黒板・パワーポイント画面等と先生の話とがまとめられる」と回答した学生の割合が4月当初に比べ、減少している傾向が認められた。その一方で、ノートをあまり取らないという学生が幾分か増えており、積極的にノートを取ろうとしない学生が少し増加しているようである。ノートを取らなくても理解できる授業科目が増えている

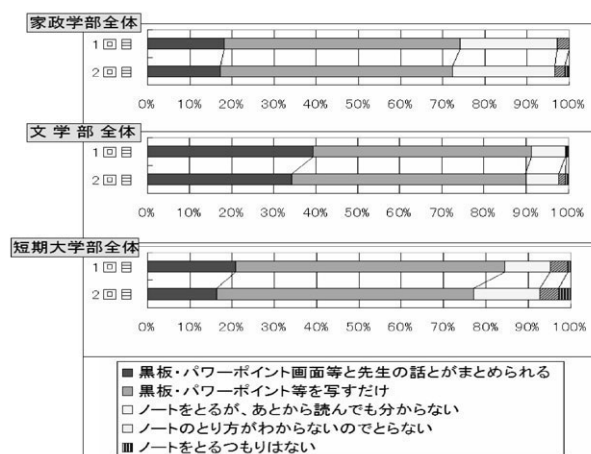


図 2-2-3 ノートの取り方

のか、それともノートを友人から借りればよいと考える学生が増えているのか、この結果だけでは分からないが、積極的に授業を聴こうとする学生の割合が減っていること自体は憂慮されるべき点といえよう。

学科・専攻ごとにみると、文学部児童教育学専攻と短期大学部生活創造デザイン専攻では、「黒板・パワーポイント画面等と先生の話とがまとめられる」という学生が増えていることが特筆される。

### ② 授業の聴き方

1回目の調査に比べ、「なんとか分かってろうとして聴く」と回答した学生が約2割減少し、その分「分からなくなった時点で聴くのをあきらめる」「しかたなく聴いている」という割合が増えていた。入学から8ヶ月が経過したことで、学習の要領がよくなったのか、単に学習意欲を失っただけなのか、現段階ではどちらとも言えない。いずれにせよ、わからないことでも、何とか食らいついて理解しようという学生が減っていることを示している。

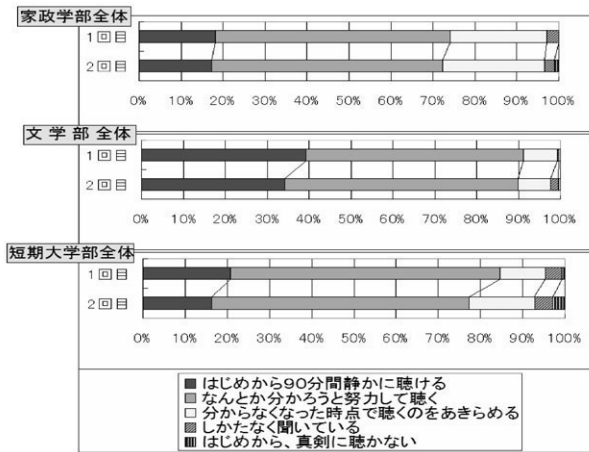


図 2-2-4 授業の聴き方

きょう。

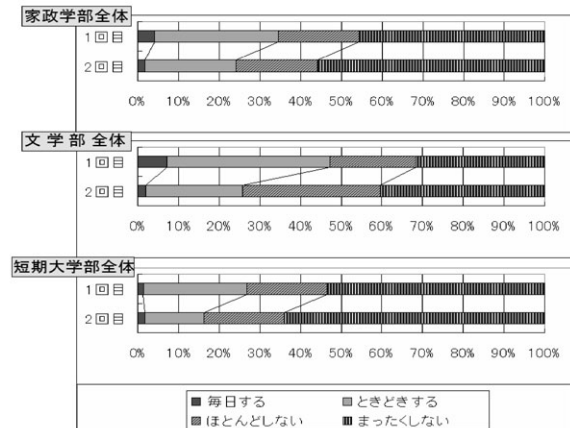


図 2-2-6 復習

③ 予習

予習を「毎日する」「ときどきする」と回答した学生の割合が1割程度減少し、そのかわりに「まったくしない」という割合の増加が認められた。

全体的に予習をしなくなってきている傾向が覗えるものの、文学部国際言語表現学科では、予習を毎日するとこたえた学生が4月よりも増えていた点は注目される。語学の授業など、予習を必要とする授業に積極的に参加する学生が増えたものと思われる。また、積極的に初年次教育に力を入れてい成果とも考えられる。

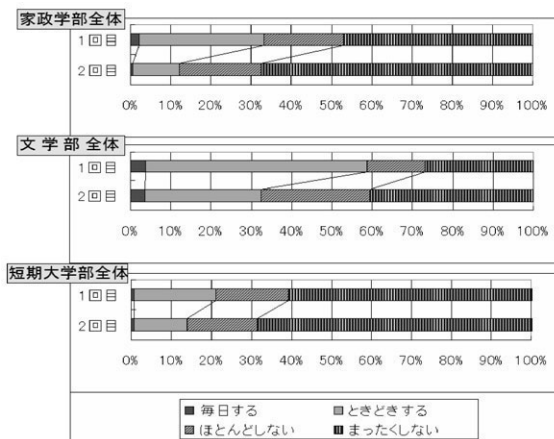


図 2-2-5 予習

⑤ 自主学習

自主学習については「まったくしない」と回答した学生の割合は、1回目の調査よりも増えていた。「毎日する」「ときどきする」とこたえた学生の割合は、家政学部では減ってはいたが、文学部では逆に増えているなど、学部ごとの違いが認められた。

特に、文学部国際言語表現学科では、自主学習を毎日するという学生が目立って増えていた点は特筆される。

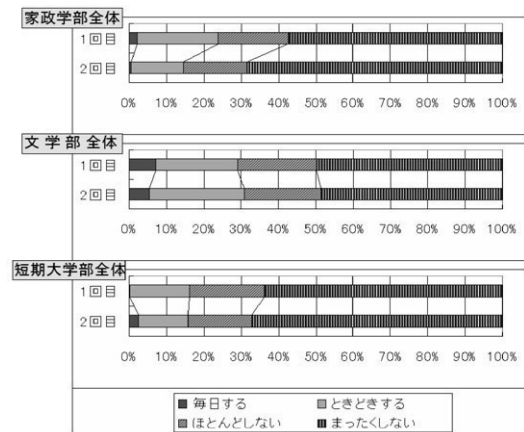


図 2-2-7 自主学習

④ 復習

予習の場合と同じく、復習を「毎日する」「ときどきする」と回答した学生の割合が1割程度減少し、「まったくしない」という割合が増加していた。全体的に復習しなくなってきている傾向が認められるなかで、家政学部食物栄養学科については「復習をする」とこたえた割合が、1回目の調査と同程度であった。入学当初の「学びの姿勢」を8ヶ月後もかわらずに持っている点は高く評価で



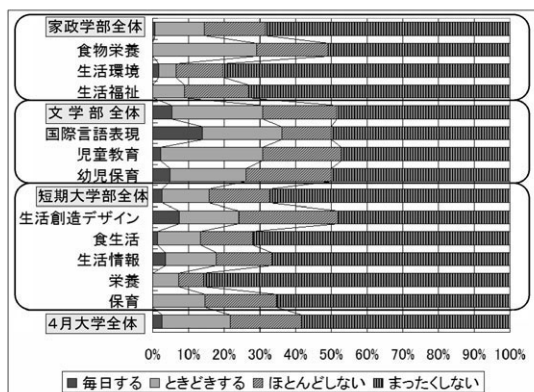


図 2-2-8 自主学習(学部ごとの比較と学科専攻別での比較)

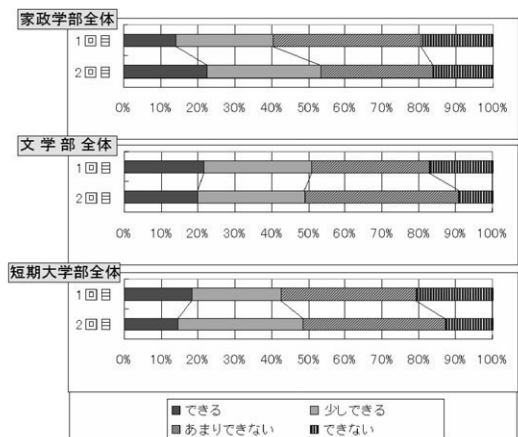


図 2-2-10 図書館などでの文献検索

### ⑥ ネットによる情報検索

ネットによる情報検索について「できる」と回答した学生が1割程度増加しており、大学の授業が、ある程度は成果をあげていることが認められた。

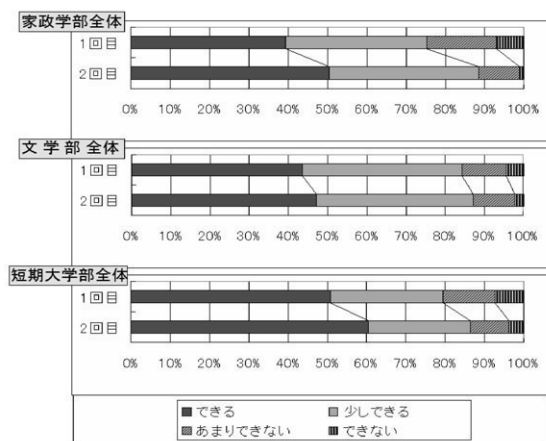


図 2-2-9 ネットによる情報検索

### ⑦ 図書館などでの文献検索

図書館などでの文献検索が「できる」「少しできる」と答えた学生は、家政学部、短期大学部では増え、文学部では若干減少していた。原因については、よくわからないが、学部ごとの授業内容に関係があるのかもわからない。

### ⑧ レポート・小論文等の作成

レポートや小論文について「自信をもって書ける」「自信はないが書ける」と回答した学生が2割程度増加しており、アカデミック・ライティングに慣れてきた学生が増えてきたことを示している。しかしその一方で「あまり書けない」「書けない」という学生が4割程度みられ、依然として不慣れな学生が結構いることも示している。

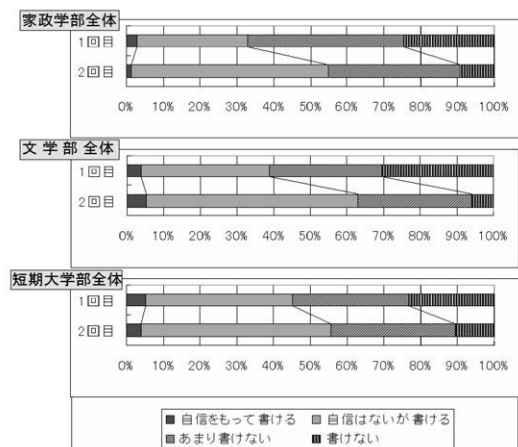


図 2-2-11 レポート・小論文等の作成

### ⑨ 授業の空きコマ数

1週間の授業の空きコマ数については4月時点とほとんど同じであり、空きコマが10コマ以下の学生が過半数(8割程度)を占めていた。

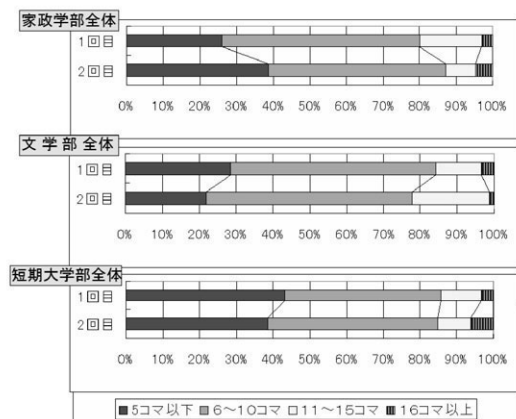


図 2-2-12 授業の空きコマ数

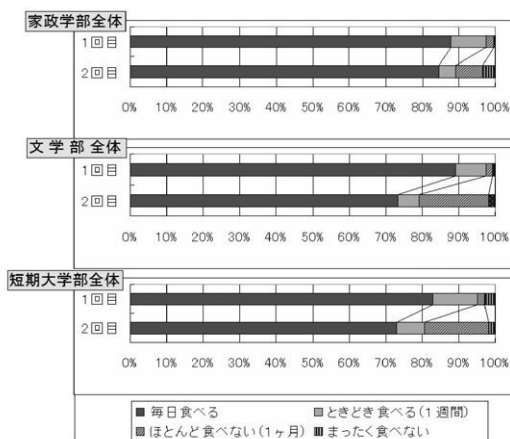


図 2-2-14 食事（朝食）

⑩ 1週間の学習計画

学習計画をある程度立てているという学生は、1回目の調査に比べ少し減少傾向がみられた。特に、家政学部はその割合が大きかった（1割程度）。予習・復習・自主学習時間の減少とともに、学ぶことへの態度や意識の低下を裏づける結果といえる。

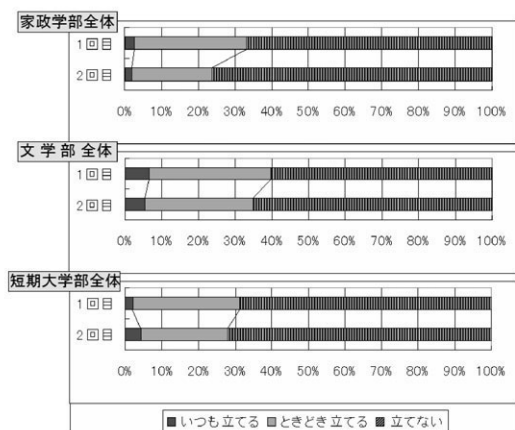


図 2-2-13 1週間の学習計画

⑫ インターネット・ワープロソフト

入学当初に比べ、インターネットを「毎日使う」「1週間にある程度使う」と回答した学生が増えており、2割程度の増加がみられた。ワープロソフトについては、

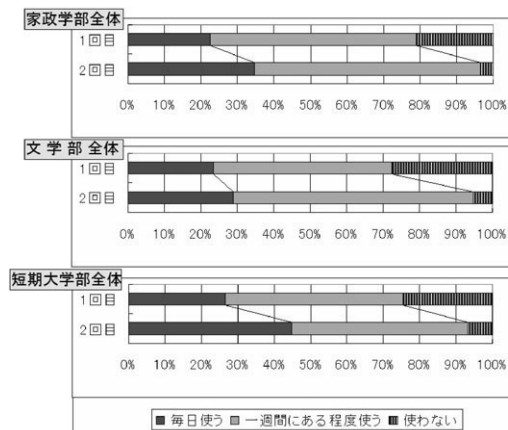


図 2-2-15 インターネット利用

⑪ 食事（朝食）

朝食を「毎日食べる」と回答した学生が減り、それに対して、「ほとんど食べない」という学生が増えていた。大学生活に慣れることで、入学当初に比べ、生活面での自己管理ができなくなっている学生が出てきているようである。

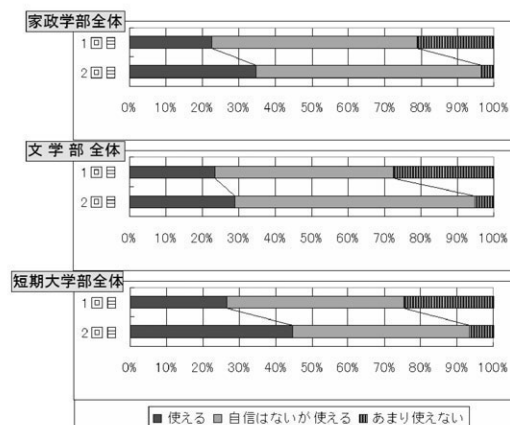


図 2-2-16 ワープロソフト

「使える」「自信はないが使える」と回答した学生が、同様に2割程度増えていた。「使えない」とする学生は、どの学部でも1割を超えていたが、半減していることも分かる。

### ⑬ キャリアデザイン

将来の希望職種・会社について考えていると答えた学生は入学当初とほとんど変わらなかった。その後8ヶ月が経過したとはいえ、まだ新入生である。とりあえず大学入試が終わって、のんびりと大学生生活を満喫したいという学生が多いのかもしれないが、「将来の仕事をしっかり考えている」という割合が少し減っていることが気になる。大学生活によって、当初自分が思い描いていた職種をあきらめ、自分にあった進路を模索しようとしている学生の存在が覗えるものといえよう。

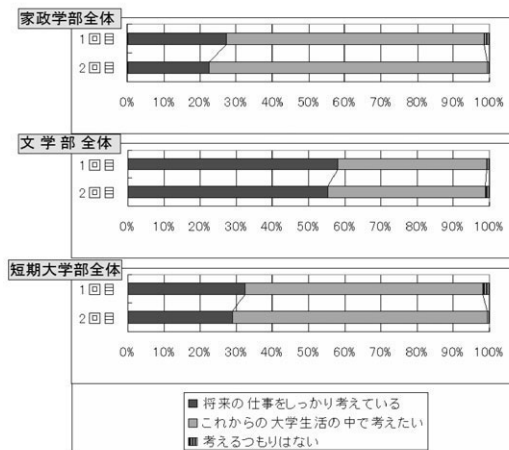


図 2-2-17 キャリアデザイン

### ⑭ ライフデザイン

将来の人生設計について、「しっかり考えている」と回答した学生が若干増えていたものの、全体的な傾向は入

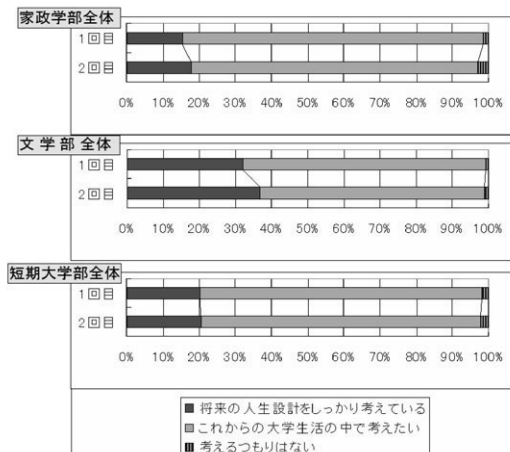


図 2-2-18 ライフデザイン

学当初と同様であった。

### ⑮ 学習意欲

この項目は前回の調査には含まれていない。全学の結果をみると、入学当初に比べ学習意欲が「かなり高まった」という学生は1割程度、「少し高まった」という学生が3割程度であった。一方で「少し低くなった」「かなり低くなった」と回答した学生が2割程度認められた。学部別でみると、学習意欲が高まったという学生は、家政学部で約3割、文学部・短期大学部では約4割であった。大学生活を通して学習意欲が減退したという学生は少数であり、学生の知的好奇心を喚起する環境が本学ではある程度整っていることを示唆している。

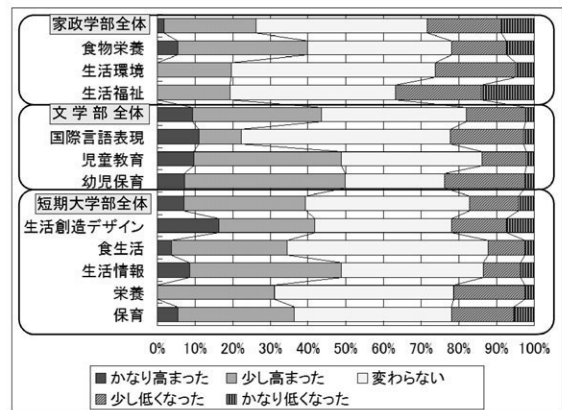


図 2-2-19 学習意欲

## 第3節 調査結果の考察

### 1. 「学習の自立」の視点から

2回にわたる調査結果は、様々な分析の観点提起しているが、高等教育、すなわち高次の教育 (higher education) の基盤となる「学習の自立」という視点から問題の所在を明らかにしてみる。

「ノートのとり方」、「授業の聞き方」、「予習の状況」、「復習の状況」、「自主学習」、「図書館などでの検索」、「1週間の学習計画」、「読書の頻度」の項目を見ると、本学学生には必ずしも学習意欲がないわけではないが、学習への積極性、自主性に乏しいことがわかる。中でも、「自主学習」の項目では、全学レベルで「まったくしない」が5割以上、「ほとんどしない」が2割程度となっており、自主学習をしない層の割合が高いことが示されている。「1週間の学習計画」の項目においても、「立てない」が6割と高い割合を占めている。

同2項目に関して、1回目と2回目の調査結果を比較すると、状況の悪化、つまり、「まったくしない」層の増



加が明らかである。学生が大学に順化するに伴い、学生の自主学習スタイルが「いつのまにか」確立されるわけではない。それどころか、もともと乏しい学生の自主的取り組みの姿勢が、大学に順化するプロセスにおいてますます乏しくなっているのである。この原因はどこにあるのか。調査結果をさらに詳細に分析すると、原因として以下の3点を指摘することができる。

### ① 学生の資質

入試方法の多様化、さらには若者文化の多様化に伴い、学生の資質が変化していることを第一の原因として考えられる。

「高校時代に行った活動」と「大学で重視している活動」との間には関連があるとして、次のように指摘されている。高校時代に受験勉強に精を出した学生は、そうでない学生に比べて、大学に入ってから勉強中心の生活を送る傾向が見られるが、高校時代に友人との交友活動に勤しんでいた学生は、大学に入っても、同性、異性を問わず、友人志向が強い。同様の連続性は、アルバイトや趣味についてもみられる。又、高校時代にアルバイト文化に浸っていた学生ほど、大学時代には、友人志向が高まり、勉強やサークルを大学生活の中心から遠ざける傾向が見られるとも指摘されている（武内 2008）。

AO入試、推薦入試等を通して入学してきた学生は、（受験）勉強中心の生活を送ってきたとは限らない。大学に入ってから、生活の中心に勉学が位置づいていないとしてもごく自然であるといえよう。本学学生の全体的傾向として、サークル・部活に参加している割合が低いことから、高校時代に受験勉強志向が弱かったであろうことを推測できる（「サークル・部活」項目で「している」は、1割程度）。

しかし、学生の「勉学」（＝努力）離れの背景には、入試形態の変化のみが関与しているわけではない。学歴神話の崩壊に伴い、社会全体の「努力」総量が減少していることも関与している（荻谷 2000）。多様な生き方への選択肢が存在し、「努力」ではなく「ハプニング」による成功が可能となった現代社会においては、かつてに比して人々の「努力」への信頼が薄らいでいるのである。

努力に価値を見出さない若者が、学力試験を課されない入試を経て大学に入ったとすれば、困難に立ち向かって努力したり、自主的な勉学へと駆り立てられることは少ないであろう。「授業の聞き方」の項目で「わからなかった時点で聞くのをあきらめる」層が、1回目の1割から2回目の2.5割へと増加していることには、このような学生の資質が反映されていると考えられる。

### ② カリキュラムの問題

学習への積極的な取り組みの姿勢に乏しいのは、学生側の原因にのみよるのではない。

調査結果を、資格取得が目標となっているような学科・専攻、すなわち、多くの必修科目を受講する必要がある学科・専攻と、それ以外とで比較してみると、特に2回目の結果において、多くの項目での差異を見出すことができる。又、空きコマの少ない短期大学と空きコマの多い大学との間にも差異を認めることができる。

例えば、「予習の状況」、「復習の状況」を家政学部と文学部で比較してみると、「まったくない」の比率が家政学部では5割近くであるのに対し、文学部では3割程度と、資格取得を目標とする家政学部のほうが大きくなっている。又、同じ幼児教育分野の場合でも、文学部の幼児保育学専攻と短期大学部の保育学科とを比較検討すると、両者間では「予習の状況」がまったく異なっている。

「まったくしない」の比率は、文学部幼児保育学専攻では0.5割にすぎないが、短期大学部保育学科では5割を超えている。これらの理由の一つとして、資格取得を目的とする学科・専攻、および短期大学では、予習への時間的なゆとりがないことをあげることができよう。

又、「サークル・部活」の項目においても「これからもするつもりがない」と答えている学生は短期大学に多く、5割を超えている。同項目に関して大学では2割程度あることから、短期大学においては、様々な活動へのゆとりが持てないことを読みとることができる。

これらの結果より、自主的学習、学習への積極的な取り組みにシフトできるようなカリキュラムや、今、注目されている「学士力」の形成に向けたカリキュラムの再編が必要であることが明らかである。

### ③ 初年次教育の必要性

高等教育がユニバーサル段階に入り、大学とは何かという明確なビジョンをもたずに入学した学生も増加している。学生は、高等学校と大学との機能的、組織的相違を把握することなく、通常の講義期間に入ることになる。①で述べたように、努力と自主学習の習慣をもたない学生が多くを占めていることをあわせて考えると、高等学校の授業と大学の講義との間には、「準備期間」が必要となるのである。すなわち、学習の自立を導く準備期間としての「初年次教育」の必要性が示されているのである。

### 2. 初年次教育への提案

大学とは、学生と教員がともに学問をする「高次の教育」(higher education)を担うところである。初年次教育の役割は、高等教育が資格取得教育に比重がおかれた単

なる「第三段階の教育」(tertiary education)に甘んじることなく、学習の自立に基づいた高次の教育となるよう導くことにある。

初年次教育を結実させ、高次の教育を保つためには、各課程において「初年次教育」、「資格取得に向けた学習」、「高次の教育」のバランスが保たれる必要がある(市川2003)。すなわち、初年次教育はカリキュラムの再構築の中でこそ真にその力を発揮すると考えるのである。

また、大学には学生がこれからの人生を考える「コミュニティ」としての機能がある(武内2008)。大学では、「勉強」、「サークル」、「交友」と幅広い活動を行うことが可能であり、学生は、様々な活動を通して見聞や経験を豊かにすることができる。この幅広い活動と経験こそが、「コミュニティ」としての大学のコアである。そこでのモラトリウム体験、試行実験は、学生のライフデザインへと結びついていく。

調査結果からは、「ライフデザイン」項目においては8割もの学生が、又「キャリアデザイン」項目においては6割もの学生が「これからの学生生活の中で考えたい」と考えていることが明らかになった。実に多くの学生がライフデザインとキャリアデザインに関して真剣にとり組みたいと望んでいるのである。

これらの学生の要望に応え、ライフデザイン、キャリアデザインを構築する手助けをするためには、大学が「コミュニティ」であるという「覚醒」の機会を学生に提供する必要がある。本学学生は、生活での自立、部活やボランティア等様々な経験への積極性に乏しいが、学習のみならずこれらの様々な活動にチャレンジしてこそモラトリウムも可能となり、ライフデザインへの糸口がつかめるのである。もちろん、様々な経験の中で学習の重要性を認識することとなり、学習への意欲を向上させることもできよう。

初年次教育は、単に高等学校から大学への接続教育としてだけではなく、学生の視野を広げ、大学生活を豊かにするための「覚醒」としての位置づけにある。すなわち、初年次教育とは、学習面での自立のみならず、生活における覚醒を含めた幅広い概念であると考えられるのである。

## 参考文献

- 1) 市川昭午「高等教育システムの変貌」日本高等教育学会編『高等教育研究第6集 高等教育改革の10年』、玉川大学出版、2003、7 - 26頁。
- 2) 小笠原正明「ユニバーサルアクセス時代の学士課程カリキュラム」日本高等教育学会編『高等教育研究第6集 高等教育改革の10年』、玉川大学出版、2003、27 - 56頁。
- 3) 荻谷剛彦「教育の拡大は何をもたらしたか」荻谷剛彦編『教育の

社会学〈常識〉の問い方、見直し方』、有斐閣アルマ、2000、234 - 246頁。

- 4) 総務省「社会生活基本調査」  
(<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/index.htm>) 2001.
- 5) 武内清「学生文化の実態と大学教育」日本高等教育学会編『高等教育研究第11集 大学生論』、玉川大学出版、2008、7 - 25頁。
- 6) 東京大学学生生活委員会「学生生活実態調査の概要」  
(<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1366/index.html>) 2006.
- 7) 藤井啓吾・栗田真樹・棚橋菊夫「大学新入生の生活意識に関する研究」流通科学大学教育高度化推進センター紀要、2007、4巻、13 - 30頁。
- 8) 藤塚千秋・藤原有子・石田博也・米谷正造・木村一彦「大学新入生の生活習慣に関する研究—入学後3ヶ月における実態調査からの検討—」川崎医療福祉学会誌、2002、12巻、321 - 330頁。

## 第3章 本学用初年次教育テキスト案の作成

### 第1節 初年次教育テキスト案作成の経緯

高等教育が「ユニバーサル化」の段階を迎え、入試形態の多様化により様々な学力レベルの学生が入学してくると共に、進学率の上昇に伴って主体的にはない形で進学し、学ぶ意欲や学ぶ動機に欠けた学生が増加してきている状況に対し、高校から大学への「移行」を如何に円滑に行えるかが大きな課題となっている。

平成13年度から、本学の総合科学研究所において、機関研究「大学における効果的な授業法の研究」が継続されており、「同研究3—教養科目（人文・社会・自然）における授業法の開発」が進む中で、本学においても、初年次教育の見直しを迫られている。

平成18年度から進められた機関研究「同研究4—初年次教育についての授業法の開発」では、各大学における初年次教育の実践例の検討を進めてきた。

その結果、本研究の成果として、初年次教育テキストの作成が必要であるとの見解に至り、試行錯誤を繰り返した後、原案を作成した。

それをもとに整備されたテキスト案が作成され、平成21年度入学の新生入生に対して、入学以前の段階で渡すことを前提に、初年次教育が本格的に導入されることとなった。

### 第2節 初年次教育テキスト案の意図

作成されたテキスト案は、名古屋女子大学に入学した学生用に作られた初年次教育用テキスト案である。入学して間がない学生たちには、大学がどのようなものであるかが、十分理解できていないのが現状である。これからの大学生活に対する思いには、期待感と不安感が混じっていることが想像できる。そこで、大学とはどういうところか、大学の授業やテストはどのように行われるのか、またどのように対応していけばよいのか、何のために大学で学んでいくのかなど、学生たちが様々な思いを巡らせている幾つかの項目を取り上げ、そのような不安感を少しでも取り除き、すぐにでも大学における快適な学習生活を送れる手助けとなるように、初年次教育テキスト案を作成した。

### 第3節 初年次教育テキスト案の内容

初年次教育テキスト案「大学で学ぶということ」は、第1章 建学の精神（担当：白井靖敏）

第2章 名古屋女子大生としての意味（担当：遠山佳治）  
 第3章 授業の種類（担当：原田妙子）  
 第4章 さまざまな先生（担当：伊藤太郎）  
 第5章 学内ネットワークの使用法（担当：白井靖敏）  
 第6章 授業の受け方（担当：宇野民幸・幸順子）  
 第7章 授業の予習と復習（担当：谷口富士夫）  
 第8章 課題への取り組み（担当：竹尾利夫）  
 第9章 試験対策と授業の成績（担当：石倉瑞恵・宇野民幸・幸順子）  
 第10章 生活と学習計画（担当：遠山佳治）

の10章で構成されている。

以下に、初年次教育テキスト案の内容を述べる。

#### 1. 建学の精神

##### (1) 建学の精神 大学の使命・目的

ここではまず創立者越原春子先生の意志を受け継ぎ、本学園の建学の精神は、学園の信条である「親切」を根幹として、個々の人格を陶冶し、かつ高い教養を身に付け、真の男女平等の実現を目指し、よき家庭人であり力強い職能人としての女性を育成することを、全学部共通の内容として取り上げている。

さらに、社会の発展に貢献できる自立した女性の育成を目的とし、高度な専門知識や技能を有する職能人を育てることを謳い、学部ごとに、それぞれの目標にあった内容にした。

##### (2) 特色ある教育・取り組み

毎年本学において、他大学にはない特色ある教育・取り組みが、全学および各学科専攻で行われている。ここでは全学共通に行われている越原（おっばら）学舎研修と禁煙・無煙宣言を取り上げた。

まず、越原学舎研修については、本学園の入学者全員を対象とし、建学の精神、教育理念や目的を学ぶ体験型導入教育であり、昭和44年以来、毎年、創立者越原春子先生の生誕の地、岐阜県加茂郡東白川村越原にある「名古屋女子大学越原学舎」において、2泊3日で実施されていることを示した。

次に、禁煙・無煙宣言については、平成15年度より、学園全体で校地内完全禁煙を目的とする「禁煙無煙宣言」に取り組んでいることを説明し、受動喫煙による健康被害などを防ぐことは当然のこと、学園の内外を問わず、絶対にタバコは吸わないよう、見かけたらお互いに注意するようにと、学生へ呼びかけている。

#### 2. 名古屋女子大学生としての意味

##### (1) 名古屋女子大学で学ぶ意味とは？



教育基本法、学校教育法に基づく女性最高の教育機関として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的道徳的及び応用的能力を養い、もって、文化の向上、社会福祉の増進に貢献し得る有為の女性を育成することを目的（学則第1章第1条より）として、名古屋女子大学は設立されていることを述べた。その上で、学生に対して、なぜ自分が4年間学ぶのか、その意味を絶えず考えていくことを促した。

明治時代末期から大正期にかけて、次第に女子高等教育の重要性が唱えられるようになってきた中で、女子高等教育機関として名古屋女学校が創設された時代の流れを説明し、名古屋女子大学および同短期大学部での学ぶことの意味を示した。

さらに、現代社会における女性の生き方を模索することも、女子大学における勉学の目的の一つであると述べている。また、共学大学では、経験できないことがたくさんある女子大学で学ぶ機会を、有効に使えるように説明している。

コラムで取り上げている本学創立者の越原春子先生の言葉「本学は、この新しい時代の先駆として、高い教養を身にまとった職能人としての女性を育成するために設立したのであります。」「私は、こうして女性自らの力の上にうちたてられる良き妻であり、やさしい母であり、そして力強い職能人である新しい日本の女性像を待望しています。」を見て、学生が何かを感じ取ってほしいと考える。

## （2）大学で、何を学べばいいのか？

大学では、専門分野の知識や技術を習得するのが一番の目的になることから、社会が大学生・短大生に求めている期待と、学びたいことについて授業を活用するという体制になっていることを述べ、平成19年に、経済産業省により「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をしていくために必要な基礎力」として出された「社会人基礎力」を、「アクション」「シンキング」「チームワーク」に分類した表を示した。

さらに、平成18年度よりキャリア支援オフィスが中心になって行われている自己発見レポートについて、説明した。

## （3）理想の自分を目指して！

大学生活が高等学校までと違うことを説明し、「自己責任の勉学姿勢」を理解させるために、自主的に予習・復習する人とそうでない人とでは、卒業時に大きな知識・技術の差が生じて来ること、そのためには専門科目だけでなく、専門科目の基礎となる科目、一般常識や

高校までの復習的な内容を含む科目など、幅広い科目を無理なく取れる時間割を作成し、自分の信念を持って、自分の目標に沿った時間割を作るように説明した。さらに、授業以外でも、大学や学科・専攻の各種行事、友人などの人間関係、サークル活動、ボランティア活動など、さまざまことから自分の成長に役立てるよう活用することなどを提案した。

さらに、現代女性に求められているマナーについて、正しいマナーが使われているかのチェック項目を示した。

## （4）学園の信条「親切」を、あなたなりに考えてみよう！

学園の信条（学園訓）「親切」について、その具現化を考えた場合、現代的発現として「自立と共生」という言葉が浮かび上がる。そこで、「自立」について、自分の信念をしっかりと持ち、それに基づいた言動を振る舞い、責任を持つことを説明した。また、仲間・家庭および地域社会などを思いやり、協調性をもって全ての人や生命としっかりと「共生」をすることが大切であることも加えた。

さらに、学生生活で、「自立と共生」を念頭に置きながら、学園の信条「親切」を、自分なりにしっかりと考えさせるために、「今の家族にとっての親切」「将来の家族にとっての親切」「今の仲間やクラスメートにとっての親切」「地域社会や日本の社会にとっての親切」「自然および地球にとっての親切」の5項目について、学生として行うべき行動を考えさせる書き込み欄を設けた。

## （5）よき家庭人と力強い職能人の意味とは？

ここでは、本学の「建学の精神」である「よき家庭人であり、力強い職能人としての女性」について、考えさせるために、「家庭人」とは、子どもをもつ母、パートナーとともに家庭生活を営む妻のみでなく、「自らの生活」に責任を持っているという意味で、「家庭人」であることを述べた上で、学生自身が目指したい「よき家庭人」「力強い職能人」を考え記入できる欄を設けた。

さらに、本学の創立者越原春子先生は、本学の経営や教育、さらには政治活動にも携わりながら、子育てや家庭を大切に生きる方を貫いたパワーあふれる女性であったことから、それを目指すためには、自分を知ることが必要と考え、「自分の強み」「自分の弱み」「強みを伸ばすための大学生活」「弱みを克服するための大学生活」を記入するようにした。

## （6）名女大生の一年を眺めてみよう？

ここでは、これまで述べてきたことを踏まえたうえで、1年間に何があって、自分が何をすべきかを考え、自

分の学習計画と、学習以外の生活計画を立てることが出来るようにした。

### 3. 授業の種類

大学に入学して、大きく変わるものの一つに授業の種類や形態・履修の方法など、カリキュラムに関することが挙げられる。そこで、カリキュラムに関することと、授業の種類や形態に関することとに分けて説明をした。

#### (1) カリキュラムの履修と登録

大学では、小学校、中学校、高等学校の勉学の仕方と大きく異なり、クラスの全員が同じ時間割を使っておらず、将来どのような道に進みたいのかによって、ひとりひとりが自分の時間割を決めることを説明し、何に対しても、これまでのように指示を待つのではなく、自分から学ぼうとする姿勢を持たねばならないことを確認させた。

次に、具体的にどういった科目を履修しなければならないのかを考えるために、どういった科目をどの順番で履修してゆくと、最も効果的にそれぞれの専門的知識や技術を身につけることが可能であるかということを示した。そこで、「専門科目」と「全学共通科目」「学科共通科目」についての説明や、「必修科目」と「選択必修科目」「選択科目」についての説明を行い、自分の学部・学科・専攻で開講されている授業を確認させている。

#### (2) 授業の種類や形態は？

授業の種類については、現在、大学で採用している2学期制について、「半期科目」と「通年科目」、「集中講義」があることを説明し、大学の授業は、通常、90分を1コマと考え、「半期科目」は15回、「通年科目」は30回行われることを確認した。

授業形態については、授業実施方法によって、①教員が学生に対し説明することを主として知識を授ける「講義」、②教員の講義とともに、学生も討議・発表等を行いつつ指導を受ける「演習」、③理論や推論が正しいかどうかを一定の条件で試してみる「実験」、④実地について学習する「実習」、⑤実際に身体を用いて行う「実技」の5形態に分類し、授業時間以外の自主学習との関係を含めて説明した。

さらに、シラバスについての説明も加えた。

#### (3) 授業を登録しよう

大学では、自分で時間割を決めて、授業を受けて単位を修得するためには、履修登録をしなければならないということが、高等学校までと大きく違うことの一つであ

る。ここでは、1時間目から最後の時間まで全授業を受ける必要はないが、1つの授業につき、たいていは授業時間の2～3倍の時間を予習や復習に当てる必要があることを理解させ、自分で責任を持って、1年間の履修登録を4月に済まさないといけないことを把握させている。

また、履修登録は期日が決められており、面倒な手続きがあること、提出期限に遅れたり、手続き方法を間違えたりしないよう十分注意することを加えた。

#### (4) 単位制って何？

大学でとられている「単位制」の意味を説明し、取得した単位の数が、学則で定められた規定数に達するとともに、規定の就業年数を在学すると、卒業が認められることや、1つでも下回ると卒業できないことを把握させた。また、科目別に取得単位数が定められ、単位が偏ってしまわないように注意している。

### 4. さまざまな先生

#### (1) 大学の先生ってどんな人たち？

大学で教えている教員は、専門家集団であり、自分の研究テーマを掲げて専門領域の研究を長年続けていることなどを説明し、学生は、教員から最先端のホットな研究成果を聞くことができることを示した。

また、大学は質の良い教員をたくさんそろえることが、直接、社会的、対外的な評価につながるため、粒揃いの質の高さが名古屋女子大学の誇るべき特徴でもあると述べている。

次に、大学の教員の仕事は、優れた研究を続けることと同時に、学生の知的関心を喚起する魅力的な授業をすることであり、教員は「良き研究者」であると同時に「良き教育者」であることを目指している。そのため、入念に授業計画をたて、様々な工夫を凝らし、学生の授業評価アンケートも参考にしながら、より魅力的で分かりやすい授業内容への改善を目指して努力をしていること、学科・専攻内では授業改善の方策をお互いに話し合うための検討会も活発に行われていることを述べた。

その他に、教員は率先して学園の信条「親切」を実践し、学生の夢実現のために、対策講座などの徹底指導でバックアップしていると述べた。また、講義で分らないことがあったら、まず教員に聞くことも重要で、大学生だから自分で調べることも大切だが、教員に質問をぶつけ、経験談や面白い話が早く聞けると結んでいる。

#### (2) 先生にもいろいろあります

教員は、本学に籍を置く専任教員と、そうでない非常



勤の教員の2種類に分類され、それぞれのスタンスを説明したが、授業に関しては専任も非常勤も関係ないことを加えた。

そこで、専任教員は授業以外には各自の研究室に、非常勤の教員の授業の前後の時間帯には講師控え室にいることを示し、授業についての質問があれば、どの教員にでも聞きに行くことを勧めている。

さらに、専任教員については、学生と同じ学科・専攻に所属している教員のグループ、同じ学部だけと学科・専攻が違う教員のグループ、他学部の教員のグループに分かれることを述べた。

また、本学はクラス担任制をとっているため、教員はクラス指導の責任を担い、相談役になったり、配付物を配ったり、連絡事項を伝えたりすることや、休学・復学の届け用紙なども先ず担任教員の印がいることなども説明している。

## 5. 学内ネットワークの使用方法

### (1) ネットワーク（インターネット）の利用

情報通信技術（ICT）は深く生活に入り、利用できないと不利益を被ることもある。そのため本学では、学内ネットワークを通して、学生の大学生活が豊かになるよう、付加価値の高い学習環境の提供に心がけていると説明している。

次に、情報の検索の仕方として、①デレクトリ型検索（yahoo Infoseek）と、②キーワード型検索（google AltaVista goo）とを紹介している。

さらに、学内のパソコンなどを通して学内のネットワークへアクセスするためには、個人認証（ユーザー名とパスワード）が必要であることを確認し、そこから得た情報の信頼性について、自分で情報が正しいかを判断することの重要性を説いている。

### (2) 学内Webサービス

ここでは、学内Webサービスとして、選択登録している授業に関する情報サービス（授業内容、配布資料、課題、練習問題、コミュニケーションなど）である「Web CT」と総合学生サービス（履修申請、休講・補講情報、教室変更、学生呼び出し、連絡、時間割、成績照会など）である「Portal System」、大学から与えられたメールアドレスによるメールの送受信サービスの「Web Mail」について、説明および注意事項などを述べている。

## 6. 授業の受け方

教員・学生共に学び探究する人であり、探究のために互いに影響力を持ち協力し合う集団である「学びの共同

体」としての大学では、「教えてもらう」という受け身の姿勢ではなく、自ら選んだ専門分野に主体的に関心を持ち、探究し、自分自身の意見や考えを持つことが求められる。さらに、大学での学問を修め、学生一人一人がそれぞれの学科・専攻の領域の「専門家」として現実社会に巣立った際求められるのは、自分自身で問題を把握し、判断し解決することである。そこにはあらかじめ用意された「正解」などはない。大学での学びは、学生自身が自分なりの「答え」を探究するプロセスであり、大学における「授業」は各自の探究のためのきっかけ作りである。

こうした大学での授業の意味について触れ、高等学校までと異なる大学の授業の特徴を示した。具体的には、大学において「時間割」は一方向的に与えられるのではなく、自分自身の興味・関心・意思を反映させ、主体的・計画的に自分で作成することや、授業のあり方も「講義」・「演習」・「実習」などの授業形態や担当教員の違いにより異なるため、各授業の目的や内容をシラバスでよく把握し、目的意識を持って授業に臨む必要があることを示した。章末に各自で活用できる卒業までの時間割作成のワークブックを添付し、主体的な学びの導入として役立てられるよう工夫した。

授業の形式的側面における留意点として、高等学校までと異なり、通常1科目1回につき90分の授業時間が当てられていることと、授業ごとに教室移動があることを補足し、学生の混乱を防ぐ配慮をした。授業時間確認のワークを付し、授業時間を自覚できるよう工夫した。教科書・参考書も教科ごとに異なる指定があるので、シラバスや授業担当者の指示をよく理解し活用すると興味関心の視野が広がり、より深い知的探究の手がかりとなることを示した。その他、授業の出席と欠席について、大学においては取得する資格により半期15回の授業の全出席が義務づけられている場合があることを取り上げ、欠席する際の注意について説明した。また、学生から質問の多い「休講と補講」、「公欠はないこと」についてコラムに説明を補足した。

授業の受け方・聴き方に関しては、目的意識を持った主体的な授業参加が大切であり、自分のノートを作り、学ぶ中で生じた疑問や意見を教員と対話し友人と議論することが学びを豊かにするコツであることを示した。特に学生から質問の多いノートの取り方については、黒板に書かれたことだけを受動的に書き写すのではなく、自ら能動的に教員の話のポイントを聞き取り、疑問やコメントを書き込んで自分自身のノートを作成することに意味があることを説明した。また、「ノートの取り方」、「パワーポイントによる授業のノート」についてはコラムで説明を補足し、章末に学生のノートの実際例を添付して、

より具体的に理解できるよう工夫した。

年々問題とされる授業マナーについては、「映画館」や「コンサート会場」でのマナーを例に挙げ、大勢で一つのことを共有しようとする際の社会的ルールとして、周囲を配慮しない自己中心的な行為や他の参加者の参加する権利を奪うような迷惑行為は慎むべきであることを具体的に示した。「授業中の発言や質問」、授業中の「私語」について、コラムで学生の注意を喚起するコメントを付した。

## 7. 授業の予習と復習

### (1) なぜ予習と復習が必要なのか

大学では高等学校までとは異なる高度な専門領域の学習をし、その単位はシラバスに書かれた授業の目標に到達しなければ修得できない。従って予習・復習・発展学習などの自習は単位修得のために不可欠である。

1コマ90分の1単位科目と2単位科目を例に挙げ、授業時間が同じであっても修得できる単位の異なる科目は、求められる自習時間が異なることを具体的に示した。各自が自分自身の時間割に基づき、必要な自習時間を計算し確認するワークを付した。

### (2) 簡単な予習と復習の仕方

復習の仕方としては、ノートをきちんと取り、授業終了直後に一通り目を通すだけで簡単な復習になることを示した。自分自身のノートを振り返り、見直ただけで授業を思い出せるような、復習に役立つノートの取り方ができているかどうかをチェックした上で、思い出せなかった科目については、ノートの取り方のどこに問題があったのかを自己分析できるワークを付した。

復習に適した時期としては、記憶の新しい授業直後や翌週の授業前が効果的であり、適切な時期に復習することで理解が一段と深まることを説明した。また、スキル（技術系）科目は、実践を繰り返すことではじめて技術が身につくため、短時間でも毎日その技術を使ってみることが重要であることを示した。

予習については、テキストが指定されていれば、授業前にあらかじめテキストを読んでおくか、「見出し」だけでも確認をしておく、その日の授業が「何について」であるかを予習でき、その後の授業理解も深まることを説明した。また、テキストが指定されていない授業の場合は、テキストをあらかじめ読むことが出来ない、前回までの復習をしっかり済ませておくことや、授業中紹介された参考文献などを入手して読んでおくことが、一種の予習につながることを示した。

## 8. 課題への取り組み

### (1) 課題への取り組み

大学での学習は、ただ単に授業に出席して教員の話聞き、ノートをとれば良いわけではない。授業の種類に関わりなく宿題やレポートなどの課題が出され、特に「演習」や「実習」などの授業では、課題提出や研究発表が求められる。しかし、教科書やノートを振り返るだけではそうした課題に対処できない。求められている課題に対する問題意識を持って取り組む姿勢が必要となる。そうした「課題への取り組み」について、提出期限を守ることの重要性和、図書館などを利用した情報検索・収集の方法、資料を整理・要約する際のコツ、レポート執筆、プレゼンテーションという流れを追って説明した。

まず、レポートの書式、分量、提出先、提出期限などの提出条件は必ず守ることが大切であり、特に卒業論文では、このことが厳しく問われることを示した。複数枚数のレポート用紙は綴じるなど、提出上のマナーについても述べた。

大学図書館・学術情報センターは大学の知的活動の中核であり学生の勉学をサポートする場である。レポートや卒業研究の情報収集には文献検索は欠かせない。「名古屋女子大学学術情報センター・利用の手引き」を紹介し情報検索の方法について説明した。まず、所蔵検索システムについて、インターネット経由で蔵書検索できるオンライン目録の「OPAC」による検索方法と、古い図書を探す場合の「カード目録」を用いた検索方法を具体的に紹介した。また、図書・雑誌などの紙媒体以外の電子化された資料の利便性についても触れた。さらに、本学図書館に目的の資料が無い場合の学外図書館の所蔵を検索する方法について説明した。

資料を要約し整理する目的とその際のコツについて示した。収集した資料を要約する際は段落の要旨を端的に述べているキーワードを手がかりにし、段落間の関係をつかんで段落ごとに要約すると良いことを示した。

レポート作成上の注意としては、「主観的な」感想である作文と、「客観的な」事実「自分の意見（考察）」を加えた論文との違いについて説明し、大学の授業で求められるレポートは資料や実際のデータをもとに自分の考えを報告（report）するものであることを示した。

留意すべきこととして、レポートを作成する際は「事実」と「意見」を区別し、「意見」を主張するためには根拠としての「事実」を前提とする必要があることを示した。また、自分が述べる「意見」の根拠として「事実」を取り上げる際は、「引用・参考文献」として引用・参考箇所や出典を明記する必要があることや、完成した原稿は提



出前に推敲し見直す必要があることや、提出するレポートにはページを記し、タイトル、学科、番号、氏名を明記し、綴じるなど体裁を整える必要があることを説明した。

さらに、自分の意見の発表・説明の機会としてのプレゼンテーションの意義と工夫について説明した。

## (2) 日本語力のチェック

レポートや論文をより良く評価してもらうためには誤字や間違った言葉遣いを無くし日常的に文章力を養う必要があることを説明し、章末に「間違いやすい漢字チェック」のワークを付した。

## 9. 試験対策と授業の成績

### (1) 試験と成績

大学では試験時期や方法、成績評価方法は授業ごとに異なることを示し、高等学校までとの違いを説明した。成績評価の方法は、必ずしも試験によるとは限らず、レポート・作品提出や実技発表による場合もあることや、日常的な宿題や課題の提出状況、出席状況、授業への取り組みの様子を総合して成績がつけられることが多いことを示した。また、個々の試験の内容は、各担当教員から直接示されるため、分からないことがあれば個々の授業シラバスの「成績評価方法」を確認したり、担当教員に尋ねる必要があることを記した。

試験の時期は、開講期の終わりであることや試験休みはないこと、半期完結科目が多いため、試験やレポートは返却されない場合も多いことなど、学生が疑問を抱き易い問題について触れた。

### (2) 試験対策

多くの学生が不安を抱く「試験対策」について具体的に示した。授業出席、授業への取り組み、課題提出は試験の前提条件であり、それだけでは試験対策にはならない。大学の試験の目的は、単なる個別の知識の習得ではなく全体的な内容の理解を確認することであり、試験方法もそれに応じた形式であることを示した。つまり、高等学校までのパターン化した試験対策の方法が通用しないこと、中学校、高等学校とは試験の目的も方法も違うため試験勉強の仕方を変える必要があることを説明した。

中学校、高等学校における試験の目的は主として各単元の知識群や技能を習得しているかどうかを確認することにあり、それに応じて試験勉強も語句や文を覚えたり暗記する方法で対処できたかもしれない。これに対し、大学での試験の目的は当該「科目」の「内容」が「理解された」かどうかということを確認することにあるため、

試験方法も細かい知識を問うよりも、修得した科目の体系や内容、あるいはそれに対する考察を文章化することを求めるようなものである場合が多い。こうした試験には語句を単に暗記する学習方法では対処できず、断片的な知識ではない科目内容の「意味」を理解することが求められることを説明した。また、学習のためには自分自身のノートを活用し、授業の流れを振り返り意味を掴む手がかりとするとよいことや、分からないことは教員に質問し、ノートをもとに友人同士話し合い、協力して学習を深める方法があることを例示した。

試験の対策としては、自分自身の中で理解できたというだけでは不十分であり、最終的に「理解している」ことが試験で教員に伝わるように文章化できなければならない。そのためには試験に臨んで実際に予想問題を立てて記述し、他者（友人や教員）に読んでもらうことが効果的であることや、また、文章化することにより他者に的確に伝わらないことが明らかになった場合は、繰り返し文章化することが必要であることも示した。さらに、最初は困難を感じた文章の記述も、回を重ねるごとに慣れるものであり、そうした努力もまた自ずと文章の中に表れ、試験の結果に結びつくであろうことや、また、このように他者と語り合い議論する大学での学習方法は、これまでの学習より楽しいものと感じられるであろうことを示した。

### (3) 試験以前について

試験以前の問題として、授業欠席が受験資格喪失につながることを説明し、授業欠席と失格の関係確認のためのワークを付した。また、試験当日は、学生証必携であり、15分を超える遅刻や不正行為は失格というルールと、本学での評価表記法を示した。さらに、試験のためだけでない、試験を超えたのびのびとした学びへの期待をコラムでコメントした。



## 10. 生活と学習計画

### (1) 自分のタイムマネジメントを行ってみよう！

学習や生活を効率良くおこなうための「タイムマネジメントの重要性」について、学生の生活実情に沿って説明した。授業に出席するだけで単位を取得することは不可能であり、課題や試験対策などの予習・復習の自習時間が必要である。大学の図書館やパソコンを活用して、科目の空き時間を自習に当てると効率的であることや、健康管理のため、休み時間がない程ハードスケジュールにしないこと、授業欠席・遅刻の連続が原因で失格・不合格にならないよう、夜遅くまでのアルバイト活動を避け、睡眠時間をしっかり確保することが求められることを示した。学生生活を振り返るために週間スケジュールを組むワークを挿入した。

### (2) 授業以外の大学生活

豊かな学生生活を送るために、様々な課外活動への積極的な取り組みが望まれることを示した。各学科・専攻の各種行事やオープンキャンパスでの係、先輩として新入生をリードする学生サポーター、学部を超えた仲間と大学祭全体を企画・運営する大学祭実行委員会、運動部・文化部・同好会・研究会などのサークル活動、学内外でのボランティア活動など、授業外の活動の意義や内容について触れた。また、本学図書館の有効活用を促し、読書への関心を喚起するためのワークを設けた。

### (3) 大学生活と資格取得を考えてみよう！

目標を実現するために資格取得は重要な関門である。しかしながら大学の教育の目的は単に資格取得のために必要な知識や技能を身につけることだけにあるのではない。社会人としてふさわしい人間力を養うことも大学での大切な学びの一つである。そうした理解に立って資格取得に励む必要があることを説明した。

大学で取得できる資格には様々な種類があり、種類別に取得できる資格を示した。

まず、国の機関が発行する資格またはその受験資格に関しては、医師免許や教員免許を代表例として挙げ、多くは、資格を取得している人でなければその職に就くことができない仕組みになっていることを説明した。本学で取得できる国家資格またはその受験資格としては、教員免許（幼稚園教諭・小学校教諭・中学校教諭・高等学校教諭）、栄養士、保育士、社会福祉士、介護福祉士などがあることを示した。

次に、民間の団体・組織が発行する資格として、本学で取得できるものは、フードスペシャリスト・テキストアドバイザーなどがあることを示した。これらはそ

れぞれの分野で活躍するためには取得しておいた方が良いが、必ずしもその資格を取得していないと関連の職に就くことができないわけではないことを示した。

最後に、民間の団体・組織が行なう検定について説明した。学生個人の能力を客観的に測定し、その実力に合わせて級を与える検定があることを示した。カラーコーディネーター検定、日本語ワープロ検定、日本語文章能力検定などがあり、カリキュラムの科目で支援する検定もあることを示した。

各学科・専攻ごとに、カリキュラムの単位取得によって取得できる資格および受験資格を一覧表にし、視覚的に分かり易く示した。その他、大学の授業やオープンカレッジの講座で支援する資格が多くあることや、TOEICなどのようにどの学部の学生でも独学でチャレンジできる検定もあることを示した。資格・免許の意義や取得方法について説明し、学習の動機づけを図った。また、学生の意識を高めるためのワークを設けた。

## 第4節 初年次教育テキストの活用方法

### 1. 教員の活用方法

大学での学びについて不安を抱く新入生に「大学で学ぶということ」についての理解を図り、主体的な学びを促すためのテキストであるので、活用時期としては入学後の比較的早い時期に活用するのが望ましい。内容的には、特に第3章「授業の種類」は、履修登録期間中か、授業が始まって間もない時期に取り上げられるのが効果的であろうが、それ以外、授業を進める中で、学生が実際に疑問を抱くようになってから取り上げられる方が具体的なイメージを抱きやすく理解しやすいように思われる。

テキストの導入の仕方としては、新入生オリエンテーションや越原研修の機会を利用して活用することも可能だろう。またカリキュラムの中に初年次教育をきちんと位置づけ、その中で丁寧に活用することができれば、より教育効果も上がると思われる。その場合、短時間で多くの情報を伝えようとするならば、講義形式での扱いとなるだろう。しかしながら、ゼミ形式で体験学習や学生同士のディスカッションも交えながら活用できれば、より効果的であろう。

カリキュラムの中に位置づけて活用する際、既存科目との関連性を考え、内容の調整を図る必要がある。既に初年次教育に当たる科目をカリキュラムに位置づけている場合はその中にテキストを導入して扱えるとよい。初年次教育にあたるような科目のない場合は、可能ならば新たな科目を設け、その中で扱うか、あるいは関連する

既存科目の中で扱うことになるだろう。

教員の担当の仕方に関しては、一人の教員が一貫して担当する場合と、何人かの教員が分担して担当する場合が考えられる。それぞれにメリット、デメリットがあるので、各学部・学科・専攻の実情に沿って担当方法を考慮する必要があるだろう。

今回作成したテキストは、大学・短大のどの学部・学科・専攻にも共通する最少限の内容である。テキストの装丁を「バインダー方式」にして、これを基本に、各学部・学科・専攻ごとに工夫を凝らし、その時々に必要な内容をつけ加えていくことができれば、より学生のニーズにあったテキストになるだろう。

## 2. 学生の活用方法

高等学校までとは異なる大学での学習について不安を解消し、主体的な学習生活を送るための手助けとして利用してもらえるとよい。入学前から目を通して理解しておくことで大学での学習への移行もよりスムーズに行えるであろう。入学後は、授業、課題、試験など、学習面におけるそれぞれのシーンでつまずいたらテキストを開き、問題解決の糸口を見つけるために活用できる。それでも分からないことがあったら教員に質問し、教員とのコミュニケーションのきっかけにもしてもらいたい。また、テキストをもとに「大学における学び」について学生同士で話し合い、協力し合うことができれば、お互いに学びの共同体のメンバーであるという意識も培われるだろう。

テキストは読み物としてだけでなくワークブックとして活用できるようにも作られているので、各自で書き込み「自分自身」のテキストにしていくとよい。

## 第4章 初年次教育運営上の課題と展望

### 第1節 全国的動向と本学の取り組み

#### 1. 全国的動向

高等教育局大学振興課大学改革推進室「大学における教育内容等の改革状況について」(文部科学省『大学資料』179号)によると、平成18(2006)年度の統計で、初年次教育の取組状況が「初年次教育を実施する大学は、平成18年度現在、501大学(約71%)となっている」と記述されている。このデータには短期大学や通信制大学は含まれておらず、全国731大学を対象としている。確かに、初年次教育を行なっている大学の割合は高いものの、教育課程の中に明確に位置付けされているかどうかは、このデータでは不明である。

また、第30回大学教育学会大会のラウンドテーブル「初年次教育の『今』を考える－2001年調査と2007年調査の比較を手がかりに－」では、2007年の国立教育政策研究所と私学高等教育研究所導入教育研究グループの共同調査(1067学部回答、回収率53.9%)の結果を紹介している。そこでは、初年次教育を実施している大学は95.6%であり、「キャリアデザインの実施している学部は全体の69.7%、学生生活における時間管理や学習習慣の組織化を意味するチューデント・スキル系は63.4%」とある。また、「正規授業として開講している場合は、スタディ・スキル、専門教育への導入、学び全般への導入、情報リテラシーの領域が約7～8割、チューデント・スキル、自校教育、キャリアデザインは約3～5割」とある。

杉谷祐美子の論考では、2001年調査をもとに、初年次教育を授業として実施している割合は84.3%で、その内訳を下記のようにしている。

- a. 補習教育型(講義形式)
- b. スキル・方法論型(主に演習形式、約6割が必修)
- c. 情報リテラシー型(約7割が必修)
- d. ゼミナール型(演習形式、約30人の少人数、約7割が必修)
- e. オリエンテーション型(主にオムニバスの講義形式、約7割が必修)
- f. 基礎・概論型(主に講義形式)

そして、ゼミナール型、情報リテラシー型、基礎・概論型が主流であるという。

以上の諸研究成果より、全国的な動向としてまとめると、初年次教育のうち、情報リテラシーに関する正規授業は一般化しつつあり、アカデミック・スキルを中心とした初年次教育の科目を、少人数のゼミナール形式で行

なうか、専門科目への導入を意識して講義形式主体として行なうか、2者に分かれて導入されているといえよう。さらに、先進的な学校では、課外活動・寮生活・友人関係・教職員との関係・ボランティア活動・地域社会での活動など、初年次のさまざまな経験からの学び(ジェネリックスキルズ育成)を包括的に対象としている初年次教育プログラムを展開しているところもある。

#### 2. 本学の取り組み

第1章第2節で紹介したように、本学においては、全学的には新入生オリエンテーション、「建学のこころ(越原研修)」とともに情報の基礎科目があり、さらに文学部・短期大学部の一部の学科では、情報リテラシー系ではなく、アカデミックスキルやキャリアデザインを主とした科目として設定し、初年次教育を展開しているところもある。

平成21年度新入生からは、本研究会原案のテキストが使用されることとなり、アカデミックスキルやキャリアデザインを念頭に置いた初年次教育を全学として展開することとなった。しかしながら、全学的に初年次教育科目を設置するという形ではなく、主として新入生オリエンテーションや越原研修の中で展開をすることとなった。

そこで、平成20年度の学生委員会・オリエンテーション委員会等で審議され、従来の新入生オリエンテーションの見直しが図られている。従来の内訳を示すと、学部全体の講話および各事務部署からの説明が半日。全学としての健康診断や警察書による交通安全指導などで半日。各学科専攻に分かれた形態で、担当教員が主体運営する部分が1日半、各事務部署担当が半日となっていた。見直しの要旨は、入学式翌日から3日間という期間の長さには変わりはないが、全体での説明を最小限に止め、健康診断を別日程に移すなどの配慮をし、各学科専攻単位の主導できる運営時間をなるべく多く取る方向で進んでいる。そして、入学式前に新入生に初年次教育テキストを送付し、事前学習を義務付けるとともに、新入生オリエンテーションにて、各学科専攻の特徴を活かした方法で初年次教育の一部分を展開できるよう検討が行なわれている。

### 第2節 家政学部における初年次教育の課題と方向性

家政学部は、名古屋女子大学創立以来、最も歴史のある学部として、建学の精神・大学の基本理念(真の男女平等の実現を目指し、よき家庭人であり力強い職能人としての女性を育成する)にある職能教育を柱に教育を行ってきている。入学生もアドミッションポリシーを良



く理解しており、特に、女性としての職能を目指し、資格取得に意欲的に取り組んでいる。

しかし、推薦選抜（指定校推薦、公募制推薦）、AO選抜、学力検査選抜（一般入学試験、センター利用、センタープラス）、特別選抜（社会人、帰国生、外国人留学生）と多様な方式で入学者を受け入れており、こうした入学選抜方式の多様さは、志願者へ多くの機会を与え、ペーパーテストでは測れない学力や能力を見いだすことができているので、好ましいことであるが、基礎学力や大学で学ぶ態度に大きな差を生じさせている（平成20（2008）年度適性検査・自己発見レポート：ベネッセコーポレーション）。

一方、全国的な傾向である少子化による18歳人口の減少は、本学部においても例外ではなく、志願者数の減少傾向にある。平成20（2008）年度現在、これまで志願者数が多く高受験倍率となっている食物栄養学科でさえ、近隣の大学に同様の学科が新設されたことから、志願者獲得の競争の渦に巻き込まれ漸減傾向にある。また、とりわけ志願者数の減少の大きい家政学部生活福祉学科は平成21（2009）年度から家政経済学科へ改組し、教育内容の充実を図っている。こうした状況から、経常的に質の高い入学生を集めることは難しくなっている。

初年次教育として家政学部では、第2章の「現状報告と課題」の中でのべられているオリエンテーション合宿である「越原学舎研修」（科目名としては「建学のこころ」1単位）、そして、入学時に3日間かけて行われる「新生オリエンテーション」が位置づけられよう。しかしながら、第1章で定義されているところの「初年次教育」と言う意味では、大学で学ぶ、あるいは学び方の本質的な教育としては十分とは言えず、学生の多様化への対応は、教員個々に任されている。

本研究で実施したアンケート調査結果とベネッセの平成20（2008）年度適性検査・自己発見レポートを総合的に分析すると、学科による、あるいは入学選抜方式の違いによる学力の差は大きいものの、全体的に「学び」に対する基本的な態度、たとえば、予習や復習、自主学习など、大学生として自律した学びへの準備が十分ではない。そして、入学当初は、「大学での試験対策」、「ノートのとり方」、「予習・復習の程度」について半数以上の学生が不安を抱えていることが、第2章の結果分析から読みとれる。さらには、入学後半年を経過した段階での調査で、予習や復習をしている学生は入学当初より減っていることが全体的な傾向でもある。このことは、高等学校と違う大学での授業スタイルになじまず、たとえば、先生からの指示（宿題など）がないと予習や、特に、復習はしなくなるようである。「学び」の本当の意味が分

かっていないと考えられる。家政学部の何人かの学生に聞いてみると、「受身にどっぷり浸かっている」とのことのようである。

生活環境学科では、平成20（2008）年の越原学舎研修において、試作版の初年次教育用テキスト「大学で学ぶということ」を利用して、部分的にワークショップ形式を取り入れた2時間程度の授業を行った。短時間ではあったので、「理解できた」とした学生は26%と少ないが、「やや理解できた」とした学生を含めると約90%になる。しっかりと時間をかけ「大学で学ぶということ」、つまり、基本的な大学での授業スタイルと学び方の教育が必要なが示唆された。

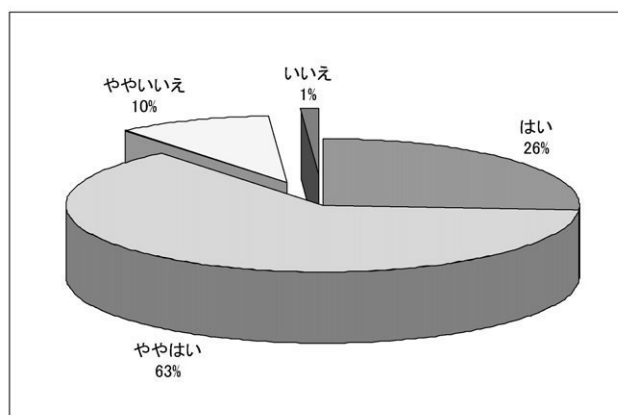


図4-2-1 大学で学ぶ目的や意味が理解できたか

いま、学士課程教育の再構築が注目を集めている。中央教育審議会のまとめからも分かることであるが、いわゆる学士課程における教育の質保障が前提となっているのである。また、学士課程を卒業したときに授与されるこの「学士号」の価値について様々な考え方があるものの、世界に通用する水準でなければならないことは言うまでもない。大学を卒業さえすれば、だれでもが「〇〇学士」となるのでは、極端なことをいうと、字が読めなくても、計算ができなくても、学士さんとなっている現実を表している。昔から「日本の大学は、入るのは難しいが卒業は簡単」と言われるほど、大学の単位認定や成績評価は「あまい」ことが普通であるかのようなのである。学生は、評価のあまい先生の科目を選択し、きつい先生は敬遠する傾向は依然変わらない。

初年次教育をきちんと行えば、大学生としての「学び」を獲得させることができると言うのは幻想かも知れないが、4年間の教育のなかで、学部・学科の責任として、たとえば、家政学士としての質を保証していくための厳格な単位認定を、どの教員も行っていないといけなことは明白であろう。

しかし、現状の学部学生をみるにつけ、単位認定を厳格化すれば、多くの学生が単位を取得できず、4年では卒業できなくなる学生が増えることが予想される。私立大学としては、多くの学生を大学に留め置くことは利益を生まないため、トレードオフの関係にあると言える。初年次教育を行わなければ、解決の糸口さえ見えないことは、今後、ますますユニバーサル化が進む現実から判断すると明らかであるのだが。

今後、日本の大学が歩む方向は、「世界的な教育研究拠点大学」、「高度専門職能人養成大学」、「総合的な教養教育大学」、「幅広い職能人養成大学」、「地域の生涯学習拠点大学」の5つのカテゴリーに分かれていく（中央教育審議会 大学制度部会）。先にも述べたが、本学の建学の精神が最も根付いている家政学部は資格取得教育を推進してきており、この5つのカテゴリーでみると、これまでの伝統を受け継ぎ「幅広い職能人養成大学」としての位置づけとして発展していくことになる。

家政学部は、生活福祉学科から新しく家政経済学科へ改組した経緯から、3学科の特徴を鑑みると、食物栄養学科と、生活環境学科および家政経済学科をひとまとまりとして考えた大きな学科とに分けられるので、この観点で初年次教育を考える。今後、生活環境学科と家政経済学科に対しそれぞれ特色化を進め、差別化を図るか、両学科の統合を行うかは、中央教育審議会がとりまとめている学士課程教育全体の枠組みのなかで検討すべきことがらである。

### （1）食物栄養学科

食物栄養学科は管理栄養士の資格取得を最大の特徴としていることから、1年生の初期の段階から4年間で、管理栄養士取得のためのカリキュラムが、がっちり組まれ、国家試験対策に力を入れている。そのため、化学や生物などの専門科目を学習するための基礎学力を一定水準に保つためのリメディアル教育（ドリル形式の演習等）を行っている。現状では、初年次教育用のテキストを授業科目の中で組み入れての教育は難しい。今後の大学教育の柱として位置づけられる「学士力」の育成と資格取得支援教育、さらには高度専門職能教育を考えるとすれば、修士課程を含む6年制一貫教育も視野にいれなければ、本当の意味での初年次教育は十分達成できないかも知れない。特に、「大学で学ぶということ」に始まる、大学での学び方や姿勢だけでなく、例えば、研究の仕方や論文等の作成など、自立した専門家育成には、さらに進んだナビゲーションが必要となるだろう。

### （2）生活環境学科・家政経済学科

平成20(2008)年度より、生活福祉学科から家政経済学科へ改組したが、家政学の領域は衣食住のほか、生活に関わる複合領域をも含むため、領域が多岐に渡る。生活環境学科は、住環境・衣環境・食環境を重点として、家政経済学科は経済経営、情報に重点をおいた形にはなっているものの、入学生にとっては、はっきりとした特徴が見えにくいことや、少子化の進むなか、現実には、生活環境学科と家政経済学科は、定員の確保のため、低学力の生徒も入学させざるをえない。初年次教育の前段階としてリメディアル教育、そして、学科独自の専門教育への導入教育も必要である。それは、管理栄養士の資格取得を明確にしている食物栄養学科とは異なることや、ここで行われている理数系の基礎教育とは別の意味をもつ。

では、生活環境学科と家政経済学科では、具体的にどのような初年次教育が考えられるか。新聞がきちんと読めない、簡単な分数や割合の計算ができないなどのレベルの学生もいるので、基礎基本からのリメディアル教育を視野に入れた選択科目として設置するとよいと考える。まず、大学での学び方や姿勢については新入生オリエンテーションや越原学舎研修で取り上げ、基礎からのリメディアル教育を含む初年次教育については、学部共通科目として1・2年に配当されている「キャリア入門」を学科の特徴を活かした形にするとともに、3年生で行っている「キャリアデザイン演習」や基礎ゼミの中で取りあげるのが、現状のカリキュラムを大きく変更することなく実現できる方法である。一方で、「学士力」育成に向けては、現状のカリキュラムではやや困難と考えられるため、キャップ制の導入やGPAなどの成績評価の方法の整備と並行して改善をしていく必要があると思う。

3学科には、それぞれの特徴と条件が異なるが、これまで実施してきた「建学のこころ」、「新入生オリエンテーション」と融合した新しい初年次教育を構築していくことの必要性は、共通認識として持たなければならぬと考える。

## 第3節 文学部における初年次教育の課題と方向性

文学部は平成20(2008)年度現在、児童教育学科・国際言語表現学科・国際言語学科の3学科から構成されている。もっとも国際言語学科は、平成20年4月に国際言語表現学科が再編されたもので、平成21年度からは、さらに国際英語学科へと改組する。したがって、現時点では児童教育学科と国際言語学科とに大きく2つに分けられると考えてよい。

さて、日本の各大学に初年次教育の必要性が認識され、



その導入が始まってここ数年、今や初年次教育は普遍化しているといっても過言ではない。しかしながら、これまで文学部では、多様化した学生に対応したスチューデント・スキルや、スタディ・スキル、キャリアデザイン系の初年次教育が、学科ごとに展開されてはきたものの、明確に「初年次教育」と位置付けられる教育は部分的にしか行われて来なかった。それが現状である。

本機関研究が「初年次教育についての授業法の開発」を検討し、本学独自の初年次教育のテキスト作成を目指してきたのも、もとはと言えば、こうした初年次教育の改善にある。

そこで以下、中央教育審議会大学分科会が平成20年4月に取りまとめた「学士課程教育の構築」に結びつけ、文学部の初年次教育の現状と課題を学科ごとに述べてみたい。

### (1) 児童教育学科

児童教育学科は平成13(2001)年度に専攻分離を行い、児童教育学専攻と幼児保育学専攻の2専攻からなる。共に、子どもに関わる社会的・教育的背景を広く学び、高い教養と専門性をもって社会に貢献できる職能人としての教育者(小学校教諭・幼稚園教諭・保育士)の育成を行っている。このため両専攻とも教員免許及び資格取得のための授業科目が多く、キャップ制導入による教育課程編成の中で、修得単位数の上から見ても、新たな初年次教育科目の開設が難しい現状にある。

これまで本学科・専攻独自の初年次教育としては、アドミッションポリシーの理解と促進を図るために、児童教育学専攻では入学前に課題提出やピアノの習熟を促し、幼児保育学専攻では保育に関する課題図書感想文の提出などを求めてきた経緯がある。

また、初年次教育の観点から、全学共通科目「建学のこころ(越原研修)」(1年前期・必修)では、大学の理念・目的を学ぶ体験型導入教育が行われている。たとえば、児童教育学専攻では毎年、現地越原の東白川小学校へ赴き、児童との交換会を実施。一方、幼児保育学専攻では、みつば保育所の見学という体験学習を通して、大学で学ぶことの意義を学生たちに自覚させている。これらは教育・保育者といった具体的な将来の目標を見据えた、児童教育学科へ入学した学生にふさわしい学びの動機付けと評価できよう。

その他、文学部で開設されている教養科目群のうち、「言語と情報」の領域では、「日本語運用1・2」「情報処理演習1・2」等が初年次教育科目に相当する。これらはレポート・論文の書き方などの文章作法、情報処理能力を身につけることを教科の目標としており、基礎ス

キル習得を配慮した授業展開が行われている。しかしながら、後述する国際言語学科や短期大学部などに見られるような、キャリア関連の科目群がほとんどないのが実情である。卒業に際して、児童教育学科の全ての学生が教育、保育職に就くわけではない現状を考えると、一般職への就職希望者に配慮したキャリア関連の科目の設置が望まれる。

平成19(2007)年4月に実施した「初年次教育に関する新入生へのアンケート調査」(第2章参照)では、アンケートの分析結果を通じて、児童教育学科の学生に必要な学習面の内容が明らかとなった。

調査項目のうち、「ノートの取り方」「授業の予習・復習の状況」では、きちんと授業内容を把握してノートにまとめ、予習や復習をしている学生が他学科に比して多いにもかかわらず、コンピュータを用いた情報処理能力の項目では、やや低い数値を示している。具体的に言えば、幼児保育学専攻の学生の場合、授業の予習を「毎日する」「ときどきする」と回答した学生が8割を超えるものの、インターネットを毎日使うという者が20%弱と少ない。そうしたこともあって、「ネットによる情報検索」や「図書館などの文献検索」が出来ると回答した者が他学部・他学科よりも少ない状況にある。また、児童教育学専攻では、パソコンを所有していないと答えた学生が、本学で一番高い数値を示しており、2割強の学生が自宅でパソコンを利用できる環境にないことがわかった。これなども気になるところであろう。

国際的な情報社会を迎えた今日、わが国の大学では、初年次教育において「レポート・論文などの文章技法」「プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表の技法」等に加えて、「コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術」、「図書館の利用・文献検索の方法」などが重視される傾向にある。大学で学ぶことの目標や意義、高い学習能力と強い意欲を持った学生の多い児童教育学科ではあるが、今後は学士課程教育に向け、学科の教育目標や特性に合わせた適切な初年次教育が求められよう。児童教育学科の初年次教育の課題として、以上のことを指摘しておきたい。

### (2) 国際言語学科

国際言語学科は既述のように、平成20年に国際言語表現学科を名称変更して再編した学科である。「日本語・日本文化の深い理解を基礎としたグローバルな視点をも身につけ、世界に通用する英語コミュニケーション能力を有する専門職能人の育成」を教育目標としていたが、名称変更に伴い、専門科目の一部を整理・結合した。そして日本語の豊かな知識に支えられた、優れた英語力を持ち、



国際社会で活躍できる人材の育成を目指すカリキュラム内容の学科となった。

こうしたこともあって、新学科では、英語スキル科目群に重点を置く。そして英語の「聞く、話す、読む、書く」という4技能の力を養い、英語のコミュニケーション能力を身につけるための配慮がされている。これらは専門科目ではあるものの、いわば英語の基礎スキルにふさわしい科目群である。

また、国際言語学科では初年次教育的な内容を包括した必修科目として「基礎ゼミ1・2」「思考の方法1・2」の計4科目を開設している。当該科目では、資料の読み方・まとめ方、論理的思考力・問題発見能力・解決能力の養成に主眼が置かれており、学科を支える初年次教育科目として少人数単位のゼミ形式で実施されている。与えられた課題に対して、自らの力で調べて考え、そして討議を経る中で問題点を整理し、自分の意見を発表するゼミ方式は、大学での「学び」の方法を身につける良策と言えよう。

「基礎ゼミ」は教員個々の能力と努力に負うところが大きい。けれども、学士課程教育を構築するための導入部に位置する重要な科目である。学問へ誘う目的意識の開発や、学年進行に伴う専門的な知識・技能を習得するための基礎科目であることも否めない。わが国における大学全入時代といった大学教育の量的拡大の中で、そこで学ぶことの目的意識が希薄化している学生が増えたことは事実である。そうした傾向に大学がある今日、本学においても全学的な「基礎ゼミ」開設が望まれる。

なお、国際言語学科ではキャリア意識の醸成といった観点から、「女性のためのライフプランニング」「就職対策演習」など、自らの将来を展望した職業意識を育てる科目群を開設している。平成20年度から始まった全学共通科目「キャリア入門」と、こうした学科の科目群とを、どのようにリンクさせて学習効果を上げていくか、それが今後の課題になろう。

#### 第4節 短期大学部における初年次教育の課題と方向性

短期大学部は3学科（生活学科・栄養科・保育学科）で構成されているが、初年次教育科目（ここでは情報リテラシー系科目を除く）を明確に教育課程に位置付けているのは、生活学科3専攻（生活創造デザイン専攻・食生活専攻・生活情報専攻）である。そこで、位置付けをしている生活学科と、そうでない栄養科・保育学科に分けて課題点を探ってみたい。

#### (1) 生活学科

生活学科では、第1章第2節で紹介したように、生活学科共通科目「キャリアデザイン1」（講義・必修）を、クラス指導教員・専攻教員が主になったオムニバス形式として1年生前期に設定している。もちろん、科目名のように授業内容は初年次教育のみに留まらず、キャリア教育などにも及んでいる。初年次教育の観点でいえば、新入生オリエンテーションや全学共通科目「建学のこころ（越原研修）」（1年前期・必修）とも連携を取り、進めている。このように、時間的に充分確保され、問題はないように見える。但し、3専攻によって具体的授業の進め方はまちまちであり、主となるクラス指導教員の意識・姿勢に大きく左右されるところが課題であった。平成21年度新入生からは、本研究会が原案（第3章参照）を作成した初年次教育テキスト『大学でまなぶということ』が使用されるため、ある程度の統一が図られることになろうが、それでも講義方式重視の先生とワークショップ方式重視の先生とでは学生の受け止め方が大きく異なる。このように各教員または専攻により授業展開の手法には差がある。なお、具体的な改善点については、例年年度末に学生全員対象にアンケート調査を行なっているため、その結果を見ながら随時改善をしていけばよいのではあるが、クラス担任教員は一般に学年の持ち上がりとなり、主として指導する教員つまり一年のクラス担任教員を連続して行うことが少なく、改善の連続性・継続性がどこまで実用的に図られるのか、いささか疑問な点は残る。

生活学科の学生の多くは一般企業に就職するため、1年後期から就職活動の準備段階に入り、春休みには就職活動が本格化する。そのため、第2回目のアンケート調査結果（第2章参照）でわかるように、将来の進路への不安が他学部 비해圧倒的に多い。よって、初年次教育とキャリア教育をどのように結び付けていくのが、大きな課題といえよう。とくに、初年次教育では、学生たちに具体的な支援をするためのルールをひく感じを持つが、就職活動では自分の意見を主張するなど自律の育成が要求される。その連続性と切り替えを上手く教員側が仕掛けていかななくてはならないだろう。そして、教育者・研究者としては認められているものの一般に社会経験の乏しいといわれる大学教員にどこまで、キャリア教育への移行ができるものか疑問な点もある。そこで、今後はより一層教職協働の実現を進めなくてはならないであろう。教員もキャリア系職員に任せきりではなく、教育課程の重要な一過程として、初年次教育からキャリア教育をテーマとした授業作りを職員とともに構築していく必要がある。その前に、そのような授業作りを積極的に行なう意識を、教職員ともに持ってもらうことが大

きな課題といえよう。

## (2) 栄養科・保育学科

栄養科と保育学科の場合であるが、両学部ともに国家資格である栄養士・保育士・幼稚園教諭の養成課程であり、授業科目について、栄養士・保育士では厚生労働省、幼稚園教諭では文部科学省の規制があり、現在文部科学省で推進しているキャップ制の導入もままならない状況である。とくに、保育学科は保育士・幼稚園教諭の2つの国家資格に絡む規制と学科の設置条件等により、専門科目内での新しい科目設置は不可能に近い。4年制大学であれば問題ないと思われるが、短期大学での国家資格養成にはかなり諸矛盾を孕んでいるのが現状である。

このような両学科で初年次教育が授業科目として展開できる方法を探ると、一つには全学共通科目の枠に設置することであり、もう一つは専門科目の中に内容を織り込んでいくことであろう。しかし、前者の場合は、全人教育ともいべき教養教育の時間数を減少させて初年次教育を展開することになり、後者の場合は実習指導などの専門科目に初年次教育を織り込むことになり、どちらも現実としては厳しい状況である。そこで、専門科目の導入と初年次教育を合体させた、少人数ゼミ形式の科目（「生活ゼミ」など）を設置させることが一番望ましいのではないかと提案したい。

最後に、第2回目のアンケート調査結果（第2章参照）をみると、短期大学部の学生は、予習・復習・自主学習の時間が、他学部学生に比べ低い。現状においても、ある程度は初年次教育を進めているにも関わらず、このような結果が出ていることは憂慮すべき点である。つまり、初年次教育ばかり進めても、そればかりでは教育効果は上がらず、専門教育や学科専攻の学生指導全体との連携が必要であることを物語っていよう。また、短期大学部のみ問題に留まらないが、初年次教育を実際に展開する場合の手法としてアクティブラーニングが全国的には一般的な考えになりつつあるが、本学各教員の手法に関する知識や取り組みの姿勢に温度差があり、運用面で難しい状況が孕んでいると思われる。また、これも一般論ではあるが、初年次教育の評価測定や教育効果測定の基準が定まっていないことにより、今後どのように評価を定めていくのかという、難しい課題が残っていると いえよう。

## 参考文献

- 1) 『大学資料』179、文部科学省、文教協会、2008。
- 2) 山田礼子、川島啓二、杉谷祐美子、笹金光徳「初年次教育の『今

を考えるー2001年調査と2007年調査の比較を手がかりにー」、『第30回大学教育学会体大会、発表要旨集録』、2008。

3) 山田礼子「大学機関調査からみた日本における初年次教育の可能性と課題」、『大学教育学会誌』29-1、2007。

4) 杉谷祐美子「学部別に見た特性と課題」、『一年次教育の意義と課題』、日本私立大学協会私学高等教育研究所シリーズ28、2007。

## おわりに

本研究は、当初2年間の機関研究として、河村瑞江前研究所長の折に、開始されたプロジェクトであった。しかし、「大学における効果的な授業法3 教養教育（人文・社会・自然）についての授業法の開発」と同様に、アンケート調査の分析等に時間がかかり、柴山正現研究所長のご好意にて1年延期することができた。

今回、初年次教育テキストの印刷・配付という形で、教育現場へ還元されることとなったが、初年次教育の運用面については、アクティブラーニングやワークショップなどの形態、各学部学科間の初年次教育取り組みの温度差とカリキュラム上の制約、成績評価など種々の課題が残されているといえよう。そして本報告が、今後の本学における初年次教育の運用面での一資料になれば幸いである。

さらに、次年度から開始される新しい機関研究「大学における効果的な授業法の研究5」では、中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」という「カリキュラムポリシー」の「成績評価の厳格化」がテーマとなる予定であるが、教育課程の検討という範疇の中で、うまく研究課題が継承・発展されていくことを望みたい。

最後に、本研究の3年間にわたり、総合科学研究所の所長・主任をはじめ、事務局の教職員の方がたには大変お世話になりました。また、2回のアンケート調査にご協力いただきました教員と学生、アンケート調査報告にご出席いただき、貴重なご意見をいただきました教職員の皆様に、また初年次教育テキストの印刷・配付等でご支援いただきました教職員の皆様に、感謝の意を申し上げます。





# プロジェクト研究論文

# ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援 ～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その2)～

A fundamental support through LMS on the educational plan and practice of the international exchange program with ICT

—A trial of the program development for high quality home economics teacher trainings (No.2)—

白井靖敏、山口厚子

Yasutoshi SHIRAI, Atsuko YAMAGUCHI

## 1. 目的

2006年の経済協力開発機構(OECD)の学習到達度調査(PISA)によると、日本は参加57カ国・地域の中で、高校1年生の科学的応用力は2003年の調査の2位から6位に、数学的応用力は6位から10位に、読解力は14位から15位にと、いずれも後退した。さらには、学ぶ楽しさを感じ、日々の生活のなかで科学に触れている生徒の割合は参加国中で最低レベルでもあった<sup>1-4)</sup>。現在の学習指導要領において、PISAで求められている「自ら学び、考える力」など、総合的な「生きる力」の育成を中心理念におき、「総合的な学習の時間」などを通して、子どもの興味や関心を生かした指導を重視してきたが、期待通りの結果には至らなかった<sup>5-6)</sup>。多くの学校では客観主義的な考えのもと、一斉授業型が多く、構成主義(または社会的構成主義)的な考え方になじめないことから、世界の教育の流れから取り残されようとしている。こうした状況の改善のひとつとして、本報告では、質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試みとして、先に述べたPISAの調査からも言える日本の生徒に大きく欠けている「考える力」や「議論する力」および「応用する力」など、社会的構成主義の考え方をベースにした教育実践力を身に付け、将来、中学校・高等学校等の家庭科教員として、生徒に対し実践的な指導ができる方法と技術を体験的に学べるようすることを目的に、社会的構成主義の教育理論に基づいて開発されたLMS(learning management system)を用いた国際交流プログラムの企画・実践に関する基礎的支援についてまとめる。

## 2. LMSの役割

まず、eラーニングについて、“e”は、electronicの意味であり、インターネットなどの情報ネットワークや情報機器、たとえば、パソコン、CD、DVD、デジタルテレビ、携帯端末(携帯電話、ポータブルゲーム機器、PDA

等を利用した学習システムのことである<sup>7)</sup>。

実際的には、インターネットなどの情報ネットワークを通じて、ハイパーテキスト(Webページなど)、電子メール、電子掲示板、電子会議、ビデオ配信などの技術が活用されている。なお、教科書、ノート、問題集などのアナログデータをコンピュータ上のファイルとしてデジタル化しただけのものも含まれることは言うまでもない。

もともと、コンピュータを用いた教育や学習は、1990年代から次第に増え、CAI(computer-assisted instruction)またはcomputer-aided instruction)などをはじめとする各種の形態が開発されてきた。その後、CBT(computer-based training)やWBT(web-based training)などの発展とともに、2000年代にはeラーニングを管理する総合システムとしてのLMSやCMS(coarse management system)が開発された。その結果、現代におけるeラーニングは、教師対学習者や学習者相互間などのコミュニケーションが可能で、学習者の自学自習が無理なく進むように適切な進度が保てること、教師が弾力的に教育活動を行うための学習者に関する各種情報を記録することなどに配慮されている。大学での授業方法の組織的

表1 LMSの利点と欠点

利点	
学習者側	同時間、同一場所にこだわらず自由な時間場所で学習できる
	自分のペースや達成度に応じて学習を進めることができる
教師側	成績管理などの自動化が図れる
	実時間に、教師は必ずしも必要はない
欠点	
学習者側	学習意欲の持続が難しい
	質疑などその場での問題解決ができない
教師側	教材・学習材の作成に時間がかかる
	学習内容は、実技を必要とするような科目に向かない



革新を求めるFD（ファカルティ・ディベロプメント）においても、eラーニングは重要な役割を占めるようになってきていることは、本学も例外ではない。

LMSとして、本学では全学的にWebCTが導入されていることから分かるように、教師などによる教材・学習資料の保管・蓄積、学習者への教材・学習資料の適切な配信、学習者の学習履歴や小テスト・ドリル・試験問題の成績などを統合的に管理するシステムであり、対面授業の補完として、あるいは、自主学習の支援としての利用が中心である。学習者にとってのポータルサイトとしての役割も持っており、LMSからログインして、学習や試験といった一連の操作を行うこともできる。また、学習者相互間、教師对学习者などのコミュニケーションシステムなども1つの機能として設けられている。

### 3. 学習理論としての社会的構成主義

高等学校での学習の多くは「客観主義」を前提とした一斉授業型が主である。たとえ一斉授業の形態をとらず、自主的な学習の時間を設定しても、それは、「構成主義（constructivism）」という前提があり、必ずしも、生徒間での相互作用に重点を置いていない。それに対し、グループ学習のような協働的な学習形態では、特定の理論を意識して行われているのではなく、社会的実践として自然に行われる。このような生徒（主体）の社会的実践を意味する理論として、「社会的構成主義(social constructivism)」がある<sup>8)</sup>。もともとは、ピアジェ的構成主義への批判から現れたものであるが、「構成主義」であるかぎり、「ピアジェ的構成主義」と共通した理論的基盤もっている。それは、「生徒が自分自身の知識を構成し、自分自身の世界の意味を理解する」ところから、個人は能動的な意味生成の主体であり、ヴィゴツキーは学習に

影響を与える社会的要因に焦点を当て、「文化的環境の中に個人を位置付け、個人と文化的環境の弁証法的関係を研究対象とする人間発達論」を提起している<sup>8)</sup>。

知識は単に個々の学習者によって構成されるというよりも、社会的相互作用を通して構成される。その場合、年長者、教師は周縁的な役割ではなく、年少者、生徒・学生と相互作用し、語り合うことにより、彼らを新たな概念的理解の水準へと導く中心的役割を果たすこととしている。

### 4. moodle

moodleは社会的構成主義の教育理論に基づき、オーストラリアのカーティン工科大学のMartin Dougiamas氏によって開発されたLMSである<sup>10)</sup>。開発のコンセプトは、商用のBlackboard（後にWebCTを買収）と同じく、講義資料の配信、学習者同士および授業者とのコミュニケーション、理解度テスト、予習・復習、出欠確認、学習成果の蓄積や共有など、従来から行われている対面教育の補完的な役割をICTによって実現することにある。現在、商用のシステムは1社の独占状態にあり、価格が高騰したことや、安定的に利用できるものの、認証の連携などのカスタマイズ上の制約が多いこと、サポート対応が必ずしも各大学の利用目的に合わせた細かさがないことなどの欠点がある。それに対し、moodleはオープンソースソフトウェアであり、なおかつ無料である。そして、LAMP環境（Linux+Apache+MySQL+PHP）で動作するため、高度なWeb技術を要しない点が、導入しやすくしている。moodleは一般的にグループワーク型研修での利用にも優れた機能を持っている。オープンソースであることと、開発コンセプトである社会的構成主義の教育理念は、本研究の目的に合致したシステムとして、状況の変化に柔軟に対応できる点が支持できる。また、学習者が個人でブログを作成する機能やコミュニティを形成するeポートフォリオシステムも有し、これまで情報の受け手であったユーザが情報の発信者へとシフトし、ネット社会におけるユーザ参加型の利用形態であるWeb 2.0の技術が利用できる点でも優れている。

#### (1) moodleインストールと設定

moodleは、オープンソースの無料ソフトであるので、入手することは容易である。代表的なダウンロードページは、<http://download.moodle.org/>である。そこには2種類の圧縮パッケージが用意されていて、moodle関連のファイルのみのスタンダードディストリビューションパッケージと、Web環境で動作させるために必要なプログラムも含んだコンプリートインストールパッケージが

表2 構成主義と社会的構成主義<sup>9)</sup>

年代	構成主義による学習環境 ～90年	社会的構成主義による学習環境 90年～
提唱者	ピアジェ (1896～1980) スイスの児童心理学者で、ジュネーブ大学、ソルボンヌ大学でも活躍し、人間の知的発達の研究で大きな成果を残した人	ヴィゴツキー 1896～1934) ロシアの心理学者で、知識獲得の過程における言語の役割を明確にし、子供の発達が社会性にあると考え、コミュニケーションの大切を強調した人
キーワード	シエマ (Scheme) 同化 (assimilation) 調節 (accommodation) 均衡化 自己中心性 発生的認識論 認知発達理論 個人的構成主義	社会的相互作用 最近接発達領域 (zone of proximal development) 外言 内言 知的行為の多段階形成理論 社会的構成主義
共通点	二つの学習理論の共通する部分は名前のとおり構成主義であるという部分です。知的発達の過程は下位の構造を積み重ねていき、次第に高い水準まで引き上げられていくという部分では共通しているものと考えられているようです。しかしピアジェが生得的に発達していくという立場をとるのに対してヴィゴツキーは「発達最近接領域」の理論による教育の重要性を説き、名前のとおり社会的な要素に主眼を置いている部分に大きな違いがあるようです。	
学習活動	刺激-反応を基にしたドリル 個人が能動的な活動を通して知識を構成していく学習感	グループ活動 協同学習 社会的相互作用による学習感
コンピュータ	スタンドアロン型 ローカルネットワーク ドリル・シミュレーション型CAI	マルチメディア型 インターネット ネットワークを利用したグループ研究

ある。ともに圧縮パッケージなので、ダウンロード後に書庫を解凍する必要がある。本プロジェクトで利用しているサーバ環境は商用のもので、<http://gets.sakura.ne.jp/moodle/>に筆者が契約している。まず、ディレクトリmoodleに、解凍したすべてのフォルダをコピーする(図1)。コピーには一般的にFTPを利用する。



図1 moodleのディレクトリ構成

ただし、このディレクトリはWebを通して外部からアクセスできない場所に作成しなければ、蓄積されたデータ(教材や学生の課題など)が不正にダウンロードされたりするので、注意する。次に、config.phpを作成するためインストールスクリプトを実行する(install.php)。この操作ののち、config.phpが正常に作成されたら、管理画面に移動して、利用目的に従って詳細項目を設定する。図2に示す設定画面により、デフォルト言語やSMTPホスト等を、インターフェイス、セキュリティ、オペレーティングシステム、メンテナンス、メール、ユーザ、パーミッションなどのカテゴリー別に登録するが、運用過程での変更も可能である。最後に、管理ページにアクセスするためのトップレベル管理者を決め、必

要事項を書き込む。管理者は、コースの作成と削除、ユーザアカウントの作成と編集、教師アカウントの管理、

config.php (基本設定)、install.php (config.phpを作成ための実行スクリプト)、version.php (現バージョン定義)、index.php (サイト表示)、admin/ (管理コード)、auth/ (ユーザ認証)などが生成される。次に、moodleを動作させるためのPHP設定を有効にするが、PHPのバージョンが古いとうまく動かない。

次に、データディレクトリ(moodledata)を作成し、読み書き実行可能な状態に設定する。これは、コースドキュメントやユーザが作成した課題等、アップロードしたファイルを保存するためのディレクトリを意味する。

要事項を書き込む。管理者は、コースの作成と削除、ユーザアカウントの作成と編集、教師アカウントの管理、

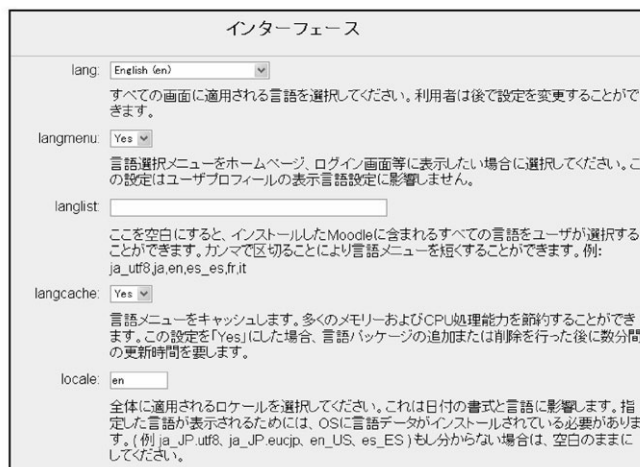


図2 管理画面による設定例

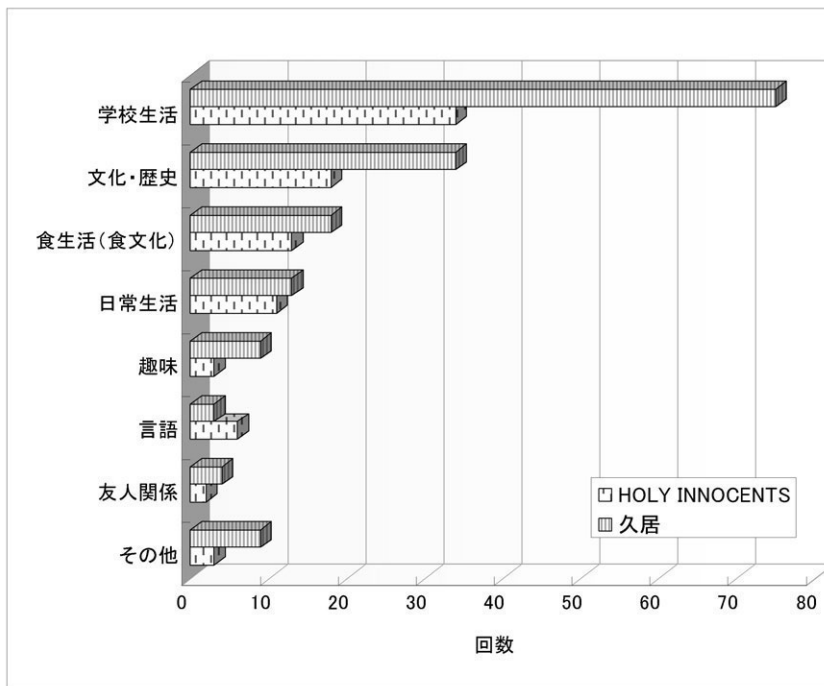


図3 国別(学校別)・内容別メール送信回数<sup>11)</sup>

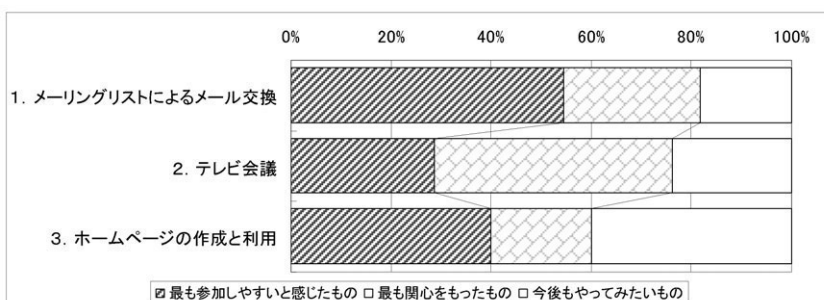


図4 国際交流におけるICT活用についての関心など(三重県立久居高等学校)<sup>11)</sup>



テーマ等のサイト全体に関わる設定の変更ができる権限を有する。

## (2) Moodle設定のための資料

本研究では、moodle設定の基礎資料として、すでに実践済みの三重県立久居高等学校とHOLY INNOCENTS' HIGH SCHOOL間でのメール内容分析結果<sup>11)</sup>を利用した。実践には、メーリングサービスを用いたもので、久居高等学校(14名、内男子3名、女子11名)とHOLY INNOCENTS' HIGH SCHOOL(7名、内男子6名、女子1名)、そして、双方の指導教員および本学の研究者等が参加した。2006年6月6日から2007年2月末までの間に交換された253通のメールの概要として、学校生活に関するものが最も多く、ついで、それぞれの国の文化や歴史、さらに、食生活(食文化を含む)、日常生活に関することと続く。趣味や言語(英語や日本語)、友人関係(ボーイフレンド、ガールフレンド)は、予想より少なかった(図3)。また、期間中にスカイプを用いたテレビ会議(2007年10月5日と11月24日)によって、双方の学校の生徒同士が直接話せる機会を設けた。ICTの活用については、生徒はテレビ会議よりも参加しやすいものとして「メーリングリストによるメール交換」や「ホームページの作成」をあげており、また、今後やってみたいものとしてホームページの作成による情報交換をあげている(図4)。こうしたコミュニケーションが抵抗感なく行えるプラットフォーム(LMS)設計への方向を示した。

## (3) moodleの構築

前述の結果などを参考に、ICTを用いた国際交流授業のための目的別コンテンツ、特にコミュニケーションシステムを中心としたmoodle設定を行った。

## ①ユーザ管理とセキュリティ設定

外部からの不正アクセスなどの被害が少なくなるよう、本研究に関わる学生および教員等にはユーザ認証の設定を行った。moodleのユーザ登録には、管理者(system administrator)が登録する場合と、ユーザが登録して管理者が承認する方法の2種類があり、ともに有効にした。したがって、新規に登録したい学生または教員は、図5に示す初期画面から「新しいアカウントを作成する」をクリックし、個人情報を入力する。個人情報はオープンソースのデータベース(MySQL)によって管理されている。管理者は、ユーザに権限を移譲することができ、本研究の場合は、「学生」、「教師」、「コース作成者」、「管理者」の4つの権限で運用した。「学生」は教育を受ける、または学習を進める人、「教師」はmoodle上で「学生」を指導する立場にある人となる。たとえば、授業にたと

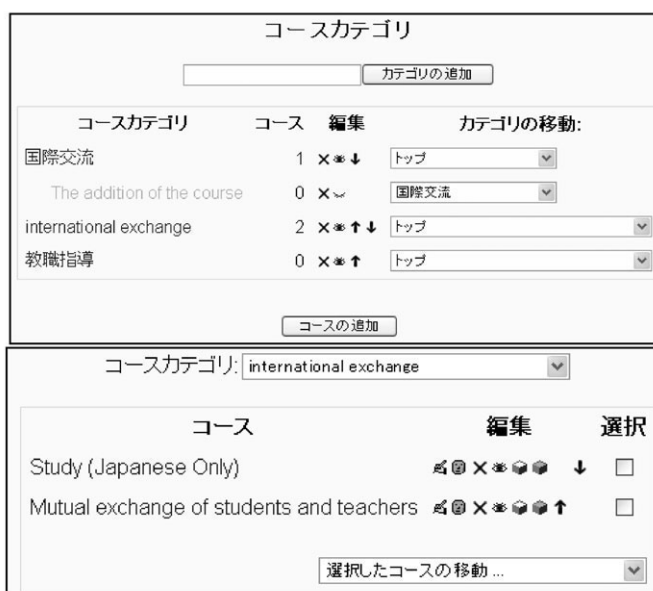


図6 コースカテゴリー作成・設定画面例

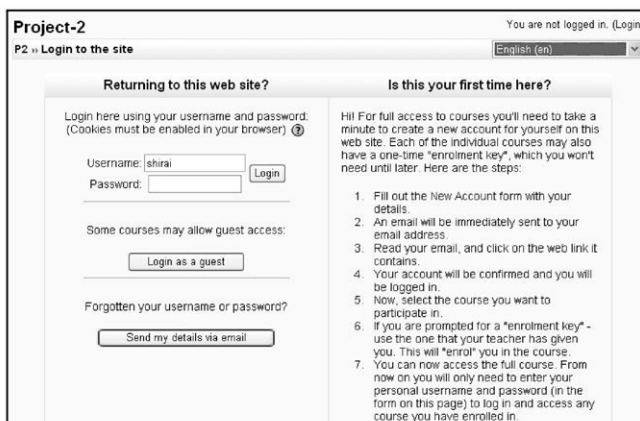


図5 Moodleのログイン画面と、新規アカウント登録画面の例(日本語モード切替可能)



えるなら、「学生」は受講者(コース参加者)であり、「教師」は教員やTA、技術職員などの教育に携わる人にあたる。また、「コース作成者」は、学習コースまたはプロジェクト(ここで言う協働学



習)を作成する権限を持ち、コースごとに「学生」と「教師」の集団を構成することができる。「管理者」はmoodleサーバを系統的に管理する権限を持つものであり、本研究では、白井、山口、そして、実践者のシンガポール南洋女子中学校のOng Chiew Inn先生、三重県立久居高等学校の平山欣孝先生の4名を「管理者」、「コース作成者」、「教師」とした。参加学生および生徒は「学生」の権限で登録した。なお、学会等の関係で閲覧を希望される先生についてはゲスト参加を一定期間認めた。

②国際交流のためのコース作成

moodleには、コース作成者の権限を持つ教師または教材提供者、あるいは協働学習のためのコーディネータなどが目的に応じてコースカテゴリおよびコースを作成することができる。管理者は、いくつかのコースカテゴリを予め作成しておき、コース作成者が選択する形式にしてもよい。本研究では、「international exchange」と

図7 コースの作成・設定画面例

「国際交流」のカテゴリを作成し、「international exchange」には、「Study(Japanese Only)」と「Mutual exchange of students and teachers」の2つ、「国際交

図8 本研究で設計したMoodleのメイン画面

流」には、「国際交流プログラム推進支援」のコースを作成した。研究実践の進展によって、コースを増やすこともできる。

moodleでは、学習者や交流グループが参加しやすい、分かりやすいカテゴリーおよびコースの設定が重要である。各コースでは、次に示す6つのフォームから1つを利用することができる。

<ウィークリーフォーム>

コースは、開始日と終了日が明確な週ごとに整理され、学習活動や協働学習などに適したフォームである。

<トピックフォーム>

ウィークリーのように時間に制限されない、リソースや学習活動のテーマごとに参加が選べるフォームである。本プロジェクトでは、このトピックフォームを採用した(図7)。

<ソーシャルフォーム>

1つのメインフォーラムを中心としたフォームで、グループ活動、案内告知・掲示板などの利用が便利なフォームである。

コースレベルのグループモードを定義することができ、コース内すべての活動のデフォルトとすることができるが、本研究では、特に定義は行っていない。ただし、登録キーを設定して、コース利用に際し、部外者の利用を制限した。前項で述べたように新規アカウントを作成して、具体的にコースを利用するためには、教師などのコース作成者から登録キーを知らせてもらう必要がある。(登録キーを設定しない場合は、moodleアカウントをもつ者は誰でもコースに参加することができる。)

#### (4) Moodleの活用

コース「Mutual exchange of students and teachers」では、10のトピックを作成した。それぞれのトピックには、教師の権限で、目的に応じて「リソースの追加」と「活動の追加」が行える。リソースには、Webページ、テキスト、資料ファイルやサイトへのリンクなど、活動には、Wiki、チャット、フォーラム、ワークショップ、レッスン、アンケートなど

がある(図9)。  
①リソースの追加  
<テキストページの作成>

シンプルなテキストによる情報を提供し、コース参加者で情報を共有する。簡

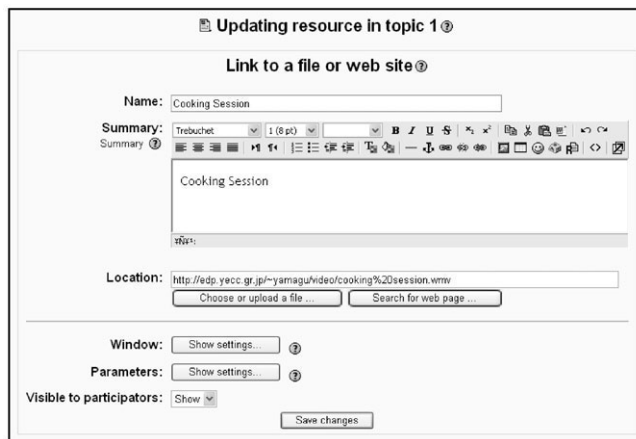
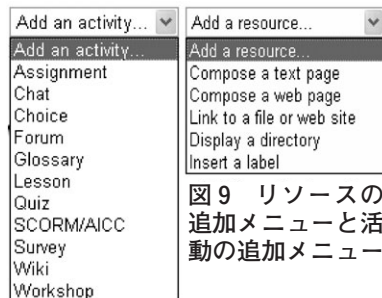


図10 ファイル・サイトにリンク設定画面例

単なHTMLタグによるレイアウトは可能である。

<Webページの作成>

moodleに埋め込まれたHTMLブラウザエディタを用いたWebページが作成できる。文字のレイアウトがワープロ感覚で編集できるため、効果的な資料の作成が可能である。

<ファイル・サイトにリンク>

ワープロ文書、エクセルデータ、パワーポイント資料や、写真や映像など様々なファイルがアップロードできるため、協働学習で作成した様々な形式の課題などが参加者間で共有可能となる。アップロード最大サイズは、先に述べた「設定」により指定できるが、本研究では最大値の2メガバイトとした。これを越えるファイルサイズをもつ映像などは、別のファイルサーバにアップロードして、サイトロケーションへのリンク機能を用いた。

<ディレクトリ(フォルダ)の表示>

ディレクトリリソースは、コースのディレクトリ全体(サブディレクトリを含む)を表示することができる。

名称	サイズ	更新日時
Curved_Cucumber.ppt	199KB	2008年09月16日, 14:48
IFHE2008poster_Yamaguchi_8.pdf	503.8KB	2008年09月17日, 22:40
IMG_7403.JPG	818.5KB	2008年12月13日, 10:13
Japan_teamA.ppt	141.5KB	2008年09月16日, 16:06
Japanese_clothing_and_culture_Final_NWU_students_2007.pdf	1MB	2008年07月22日, 15:10
Japanese_food_and_culture	0バイト	2008年07月22日, 14:55
Japanese_food_and_culture_Final_NWU_students.pdf	1.6MB	2008年07月22日, 14:55
Japanese_housing_and_culture_final_NWU_students.pdf	908.5KB	2008年07月22日, 15:05
Power_point_Team_A.ppt	405KB	2008年09月16日, 14:42
Power_point_Team_B.ppt	40KB	2008年09月16日, 14:42
SANY0585.JPG	1.4MB	2008年12月13日, 10:22
SANY0587.JPG	1.4MB	2008年12月13日, 10:26
backupdata	5.7MB	2008年09月3日, 10:06
children_and_nuclear_family.ppt	1.1MB	2008年09月2日, 09:31
children_eating_alone_and_family.ppt	246.5KB	2008年09月2日, 09:32
children_eating_alone_problem.ppt	417KB	2008年09月2日, 09:32
comfortable_living_-_safety_and_health_housing.ppt	184KB	2008年09月2日, 09:32
food_price_increasing.ppt	661KB	2008年09月2日, 09:33
garbage_problem.ppt	673KB	2008年09月2日, 09:34
want_clothing_like_this.pdf	603.8KB	2008年09月3日, 08:43

図11 2008年12月現在、アップロードされているファイルの一部

多くのリソースがアップロードされている場合の閲覧に便利である。現在、アップロードされているファイルなどの例を図11に示す。

#### <ラベルの挿入>

説明や資料の補足などの文字列をセッションモジュールに表示する。HTMLによる編集や絵文字などの利用も可能である。

#### ②活動の追加

##### <SCORM/AICC>

学習モジュールのSCORMまたはAICC標準仕様に基ついたWebコンテンツで、Webページ、グラフィック、Javaスクリプト、フラッシュ、その他ブラウザで動作するファイルを含めることができる。SCORM/AICCは、SCORM (Sharable Content Object Reference Model: 米国国防長官監督人事・準備局) とAICC (Aviation Industry Computer Based Testing Committee: 航空産業CBT委員会) との2つのWBT (Web Based Training) の標準規格に準拠した学習パッケージを示している。本研究では利用していない。

##### <Wiki>

WikiはWebブラウザを利用して、だれでも自由に書き込むことができるWebページである。「Wiki wiki」はハワイの言葉で「凄く速い」ことを意味し、wikiテクノロジーにおけるページの作成・更新スピードの速さを表現しているとされている。(Wikipediaは、世界中の誰でもが書き込めるオンライン百科事典として有名である)。

moodleのWikiモジュールでは、参加者に限定されていて、Webページを通してコンテンツの追加、拡張、修正を素早く行うことができる点で便利である。たとえば、共同で使う黒板のように、参加者がみんなですこずつ書き込み、振り返りや議論のための資料にすることができる。本研究では、まだ、このモジュールは利用していない。

##### <チャット>

チャットモジュールでは、参加者がWebを通してリアルタイムにディスカッションを行うことができる。これは、お互いの異なる理解を得ること、およびトピックを議論することに役立つ。チャットルームの利用は、リアルタイムと言う意味で、非同期のフォーラムとは異なる。遠隔地を含め、複数のサイトにいる参加者があたかも同席しているかのように、グループ学習ができるのである。

##### <フォーラム>

フォーラムは、一般にいうBBS (Bulletin Board System) と呼ばれる電子掲示板と同じである。コース参加者に限定され、テーマごと、あるいは、週ごとに設定することができる。特徴として、それぞれの投稿に対して、教師だけではなく、参加者同士で相互評価を行う

ことができる点があげられる。言い換えれば、moodleの設計理念である「社会的構成主義」の考え方が強く反映された機能である。投稿は様々なフォーマットで閲覧することができ、ファイルの添付を行うことも可能である。開発者のマニュアルには、分離認識と関連認識の理論に従っていると書かれている<sup>10)</sup>。分離認識とは、「自分が他者と違った意見を持ち、客観的事実にこだわったり、自分の意見を固持したがる傾向」を指し、関連認識は、その反対に、「他人の立場に立つてものを見ようとし、対立を避け、他人と協調する傾向」を指す。協力的かつ効果的なグループ学習では、全員がこれら両方の認識方法を使うことが最良とされている。フォーラムにおける評価は、投稿内容の善し悪し(成績)などを決めるのではなく、コミュニケーション能力と学習を向上させるためにあるともされている。また、フォーラムにメール通知設定を行うことで、参加者が新しく投稿したことをメールで自動的に通知されるように設定することもできる。

##### <レッスン>

レッスンは学習内容を楽しく柔軟な方法で提供し、複数のページで構成される。一般に、それぞれのページは、質問と複数の考えられる答えで終了し、参加者が選択した答えにより、次のページに進むか前に戻るか決定される仕組みである。本研究では、このモジュールは利用していない。

##### <ワークショップ>

ワークショップは、専門家の助言を受けながら参加者が協働で研究や創作を行う参加型の活動である。Peer review 機能を持ち、相互評価活動が行える点が特徴である。教師や学生など参加者は全員が評価者でもあると言う見識をもつ開かれた学習環境を構築することができる。大きな価値を生むと言える。本研究では、このモジュールの利用にまでは至っていない。

##### <課題>

教師が参加者(学生など)にデジタルコンテンツ(ワープロ文書、エクセルデータ、パワーポイント資料など、あらゆる種類)の作成を求め、ここに、それらを提出させることができる。提出期限の設定や評価機能もある。本研究では、このモジュールは利用していない。

##### <小テスト>

このモジュールでは、教師が多肢選択問題、○/×問題、記述問題からなる小テストをデザインおよび設定することができる。これらの問題はカテゴリー分けされたデータベースに保存され、コース内およびコース間で再利用することもできる。解答は自動的に採点され、教師にはフィードバックを与える。本研究では、このモ



ジュールは利用していない。

<調査>

調査モジュールは、オンライン学習環境における評価および刺激に関して有益である多くの調査手段を提供している。自身の授業に関して学ぶことや、指導に反映させる手助けとするため、教師は学生からデータを収集する目的で利用できる。現在のところ、このモジュールは利用していない。

<投票>

投票はシンプルな活動で、教師が質問および質問に対する複数の選択肢を定義し、コースの方向付けや、リサーチ・コンセントを集める場合に便利である。現在のところ、このモジュールは利用していない。

次に、本研究のために設定した10のトピックを紹介する。

①トピック1：The place to exchange internationally  
参加者全員が参加できる (for all) と、日本とシンガポールの協働学習のためのチームAとチームBのフォーラムを設置した (図12)。おもな議論 (ヘッドライン) を図13に示す。チャットルームは目的別に3つを設置してあるが、現在のところ活動はしていない。

1 The place to exchange internationally

**2008 Singapore-Japan international exchange program**

for all

- A team
- B team

Chat room 1

Chat room 2

Chat room 3

Power Point Slides students made

- Singapore Team A
- Singapore Team B
- Japan Team A
- Japan Team B

Photo and Video

【Singapore side activities】

- Cooking Session

【Japanese side activities】

2008 2nd May

TV conferencing: Nagoya women's University students and Nanyang Girls' High School. University subject: instructional method for H.E. education, High School subject: Home Economics

- 2nd May 2008 TV conferencing
- 2008 2nd Sep
- explanation the task
- 2008 11th Sep
- 11 Sep 2008 class by ALT teacher in Japan
- 2008 16th Sep
- NWU students supported for Hisai High school students to make ppt file.
- 2008 23rd Sep

TV conferencing: Nanyang High School students and Hisai High School students at Hisai High School. Nagoya women's University students supported them.

- Hisai High School students and NWU students who attended TV conferencing

図12 The place to exchange internationally

Team A	Team B
ディスカッション	ディスカッション
♪23th Sep. Tue. It's sunny ♪	Thank you!!
badminton	完成
Disney Talk Special ♪	PowerPoint slides Team B
Halo	B teamの途中経過
Introduce myself	spices used in Japan?
teamA	The place to discuss on the task in Japanese for Japanese High School and University students.
サプリメント 年齢層	FoOd In \$uMmEr!
Team A Supplement age	hello!
The price of the supplement	Hello!
suppliment demerit and merit	The place to discuss on the task in English for Singapore and Japanese students.
PowerPoint slides Team A	How are you??
中間発表2	hey hey
The place to discuss on the task in Japanese for Japanese high school and university students.	Hi (^▽^)/

図13 フォーラム上のおもな議論 (ヘッドライン)

Singapore Team A

Singapore Team B

Common food choices

- Rice- It is a staple food for many Asian countries, like Singapore, Thailand and Japan.
- Potato- It is best known for its high carbohydrate content. Therefore, it fills people's hunger easily.
- Flour-made products- It is a popular food in Western and most other societies. It includes bread, pizza and pastries.
- Growing of all the above needs huge amounts of land.
- Seafood- Catch from sea/reared in farms, so need land and water
- Poultry-reared in farms, so need land/hunt from wild

Obesity

- Caused by excessive amount of starch and sugar, which will be stored in the body as extra lipids (general term for fats and oil). Too much of fats will be accumulated, which will then lead to someone being obese.
- Problems lead from Obesity; heart attack, death, physical and mental conditions, osteoarthritis, obstructive sleep apnea, social stigmatization, etc.

Japan Team A

The price of the supplement

☆The present conditions ☆

① Prices are different for each company.  
② As a student, the range that I can purchase is small.  
- Even a cheap supplement costs nearly 1,000 yen.  
- If you keep taking lots of supplements there will be a big economic burden on yourself.

Why??

Because the cost price of Vitamins and minerals are high!

Japan Team B

Have you ever seen a curved cucumber?

No....I haven't

REASON

- looks ugly
- Bad impression
- looks like it doesn't taste very good
- Don't want to buy

図14 パワーポイント資料の例

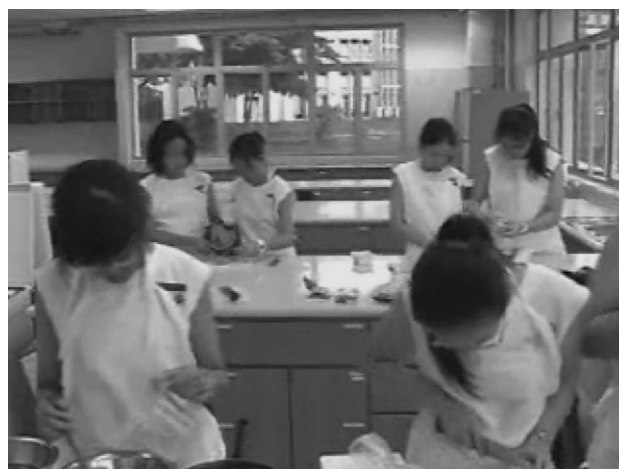


図15 Singapore side activities-Cooking Session



図16 Japanese side activities-11 Sep 2008 class by ALT teacher in Japan

本コースで設定されている協働学習のためのTaskに従って、日本（久居高等学校）とシンガポール（南洋女子中学校）とが、それぞれのチーム（AB）で作成したパワーポイント資料がアップされている（図14）。活動の詳細については、別報「～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その3）～」で述べられている。

また、日本およびシンガポール双方の学習活動、特にイベント記録が映像と写真資料としてアップされ、情報の共有がはかられている（図15, 16）。

②トピック2：Objectives of this programme

図17に示す本研究の目的を示している。現在のところ、リソースなどの追加はなされていない。

2 Objectives of this programme: □

- 1) To utilise diverse strategies in the teaching and learning of Home Economics at all levels. And through the use of ICT at the international level.
- 2) To contribute to the understanding of Home Economics.
- 3) To explore a diverse range of training strategies for future Home Economist at international level.
- 4) To promote Home Economics through cultural diversity.
- 5) To create oppotunities for international collaborative learning and research through Home Economics.
- 6) To establish a network to raise the standard in the teaching and learning of Home Economics.
- 7) To encourage, inspire, and enjoy the learning process together.

\*\*\*\*\*

Our vision for this programme:

- To serve as a multifunctional user-friendly platform that can be utilise by any individual from all cultural background in the educational perspective.
- To work in line with IFHE's initiative on 'Education for Sustainable Development'.

図17 Objectives of this programme

③トピック3：What is home economics?

home economicsに関する情報が、提供される予定である。

3 What is home economics? □

IFHE position statement 2008

図18 What is home economics ?

④トピック4：International network of Home Economics

国際学会などを含む国際的なネットワークに関する情報や活動が提供される予定である。

4 International network of Home Economics □

Home Economics in the world  
IFHE: International federation for Home Economics  
YPN: Young Professional Network

図19 International network of Home Economics

⑤トピック5：The condition of International Collaboration in learning, ICT education, language education, and Home Economics education in the world

国際交流、ICTを活用した教育、言語教育、家庭科教育に関する現状などの情報交換の場として提供される予定である。

5 The condition of international collaboration in learning, ICT education, language education, and Home Economics education in the world □

Education system  
International collaboration  
ICT education  
language education  
Home Economics education

図20 The condition of international collaboration in learning, ICT education, language education, and Home Economics education in the world

⑥トピック6：The case observation of international learning made use of Home Economics and ICT

ICTを利用した学習や、学会発表などの調査研究に関する情報の共有を目的としている。現在3つのコンテンツがアップされている。

6 The case observation of international learning made use of Home Economics and ICT □

2006 Singapore-Japan International exchange program  
 ARAHE 2007 oral presentation  
 web site 2006 Singapore high school students made  
 2008 Singapore-Japan International exchange program  
 IFHE 2008 poster

図21 The case observation of international collaboration in learning through Home Economics and ICT

⑦トピック7：Materials and Resources No.1：Basic data of country

それぞれの国の教育に関する基礎データ、たとえば、OECDの学力調査データなどのリンクを予定している。



図22 Materials and Resources No.1: Basic data of country

⑧トピック8：Materials and Resources No.2: Problems and challenges faced by the country

それぞれの国が抱えている食や生活に関わる課題などの学習資料などが提供されている。



図23 Materials and Resources No.2: Problems and challenges faced by the country

⑨トピック9：Materials and Resources No.3: Life and Culture of country

それぞれの国の生活や文化に関する学習資料などが提供されている。

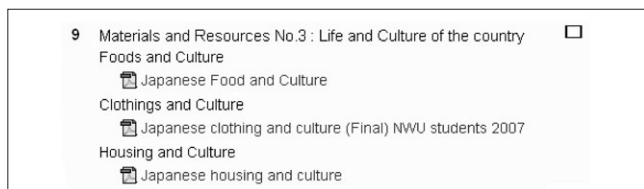


図24 Materials and Resources No.3: Life and Culture the country

⑩トピック10: Offer from people who want to participate in international collaboration in Education or Research

本プロジェクトに関わる国際協同の教育研究への参加申し込み



図25 Japanese Food and Culture の例

参考文献

- 1) 国立教育政策研究所、PISA 2003年調査「評価の枠組み」、OECD生徒の学習到達度調査、ぎょうせい、(2003)
- 2) 国立教育政策研究所、PISA 2006年調査「評価の枠組み」、OECD生徒の学習到達度調査、ぎょうせい、(2007)
- 3) 国立教育政策研究所、生きるための知識と技能、OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) 2006年調査国際結果報告書、ぎょうせい、(2007)
- 4) OECD、図表でみる教育OECDインディケータ (2007年版)、明石書店、(2007)
- 5) 下村勉、白井靖敏、鷺尾敦、他19名「総合的な学習の時間」の成果と課題についての検証と分析 三重県高等教育機関連絡協議会研究報告書 (2004)
- 6) 下村勉、白井靖敏、鷺尾敦、他17名「総合的な学習の時間」の実践検証と充実・発展への提案 三重県高等教育機関連絡協議会研究報告書 (2005)
- 7) Paula M.C. Swatman, e-Learning Readiness of Hong Kong Teachers, University of South Australia 2006 Working Papers (2006.02.05)
- 8) 中村恵子、構成主義における学びの理論—心理学的構成主義と社会的構成主義を比較して—、新潟青陵大学紀要第7号 P 167-176 (2007)
- 9) <http://www.eonet.ne.jp/~yasoo/page030.html>
- 10) <http://moodle.org/>
- 11) 白井靖敏、山口厚子、平山欣孝、Chiew Inn ONG、ICTを用いた国際交流授業におけるメーリングリストの内容分析と課題、名古屋女子大学紀要第54号 人文・社会編P 169-176 (2008)
- 12) Yamaguchi Atsuko, Ong Chiew Inn, Hirayama Yoshitaka, and Shirai Yasutoshi, Case observation of the Singapore-Japan international exchange program based on home economics at the secondary education level through Information and Communication Technology, The 14th Biennial International Conference of Asian Regional Association for Home Economics: Congress Proceedings, CD-ROM, (2007)
- 13) 山口厚子・白井靖敏、質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み (その1) —国際交流プログラム企画・ホームページ作成—、総合科学研究、第1号、pp.91-93、(2007)
- 14) 白井靖敏、山口厚子、ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援—質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み (その2) —、総合科学研究、第2号 P 99-102 (2008)



# 機関研究中間報告

研究所機関研究（平成19年度～20年度）

## 創立者越原春子および女子教育に関する研究

丸山竜平・伊藤太郎・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子・依岡道子

### 1. 目的

本研究は表題に窺い得るように、今現在私たちが抱える女子大学の諸課題とこの大学の将来あるべきところの未来像を、学究的に問いかけようとするものである。

このため、その思索の原点とも言うべき創立者である越原春子とその人となりを、さらにはその創立者を生み出した時代的背景を、歴史的にかつグローバルに把握することによって、はじめて女子教育の原点ともいえるべき教育の理念を再認識し、未来につなげていくことが可能であると考えるものである。

意気込むところの私たちの課題は、建学にもえた創立者に迫るために相応しくも、その至る道は茫漠と遙かに高く広く、それがために個々の研究課題はあまりにも大きく時には小さく見えるかもしれない。しかし、創立者と女子教育に関する研究を確実に進めるには一つ一つの論考の積み上げ以外に近道はないと考える。

### 2. 個々の課題

最初にメンバーの個々の研究課題とアプローチの具体的な方法を紹介しておきたい。

1) 伊藤太郎「なぜいま女性原理なのか—西洋的「近代化」のプロセスを辿って—第2報」

第1期（17～18年度）には「日本の女子大学の『建学の精神・教育理念』の比較検討—女性原理の発揚の視点から—」をまとめた（『総合科学研究 第2号』参照、以下ことわらない限り、第1期の成果は上掲書の第2号をさす）。

今期の前半期には「なぜいま女性原理なのか—英国の『近代化』プロセスを辿って—」を表題として「イギリスの近代をとおして女子教育を問い直そうとするもの」であった。

そして今期の後半は、上掲で紹介したテーマで、本誌に詳述したところである。内容的には第1期および今期前半部からの作業を継続・発展させたもので、「女性原理の復権という視点を女子大学のみならず政治のリーダーも持つ必要がある」（本誌57ページ）とした。

発達する資本主義社会における落とし子としての女子教育の視点で見ると我が国もまた軍国主義と資本主義発達の発展期にあったわけである。

2) 羽澄直子「女子高等教育と社会運動」

第1期のテーマは「近代国家建設期の女子教育—日本とアメリカの初期女子教育事情—」である。「アメリカの女子教育の目的と歴史的背景」を考察しつつ「本学創立時前後（主に明治、大正時代）の日本の女子教育の現状と当時の女学生に求められていた女性像を検証することを目的」としたものであった。

今期は前年度に「女子教育がもたらす新たな職業の可能性」をテーマに、「従来の実務的な職能人」とは異なる新しい職業、特に「女性の教育者と作家に焦点を当て」、「新しい女子教育を論じ」た。

そして今年度は、「女子高等教育と社会活動」をテーマとし、「高等教育を受けた女性」、「ニュー・ウーマン」をとおしての「社会活動」の視角から当時の教育の理念や目標がどのあたりにあったのか、本学の建学相当期と重なる19世紀末から20世紀にかけてのアメリカの女子教育、それも高等教育の社会的位相がどの辺りにあったのか、その一端が窺えるとともに、我が国の女子教育を考察する上で切り離せない。

3) 木原貴子・依岡道子「19世紀のイギリスにおける女子教育—少女雑誌『ガールズ・オウン・ペーパー』に見られる初期の教育観—」

第1期は「明治・大正期の新聞、雑誌に見られる女性の職業教育について」をテーマにした研究である。主に「大正期における女性の職業教育観を考察」した。まさしく本学の創設期に相当する時代のことである。

そして、今期の前半には「19世紀のイギリスにおける女子教育—少女雑誌及び、女性雑誌を中心に—」として、「家庭と教育、職業教育などの視点で」少女・女性雑誌の分析を行なった。

また今期の後半には上掲のテーマで、やはり本学の創設と同時代となるヴィクトリア時代におけるイギリスの出版雑誌を対象に「当時の女子教育」とりわけ「高等教育観」を考察した。そこには羽澄の研究と重ね合わせて時代を読み取ることが可能となろう。

4) 遠山佳治「名古屋女学校・名古屋高等女学校時期における建学の精神および教育理念の一考察(2)—「女学

講義」について—]

第1期は「名古屋女学校・名古屋高等女学校時期における建学の精神および教育の理念の一考察(1)—名古屋女学校創設期の状況を中心に—」と題したものである。

分析は、日本女子大学を開講した成瀬仁蔵とのかかわりや尾崎行雄との思想的な関わりを予測したものである。

今期前半には第1期を継承し同一テーマのもと、尾崎行雄との関係を具体化した。また、後半期では、上掲のテーマをもとに、創立者の教育目標や教育理念の思想的な基盤が通信教育講座「女学講義」にあったとして発行元となる大日本女学会をも含めての両者の検討があった。

### 5) 丸山竜平「創立者越原春子と越原の歴史」

第1期は「越原—歴史と風土から見た近世以前—」と題したものである。ともかくも創立者の生誕の地を歴史的に概観することに努めたものである。とりわけ山尾根で四周が完全に閉じられた類稀な地形環境にある。実はそれだけ孤立していたのではなく、その分だけ外への関心が高く、広域の経済的解放が実態として存在したことに注目した論考である。

教育とはかけ離れた人文的考察に思われがちであるが、創立者の思想の根底を問うためにも歴史的、風土的なこの種の研究は不可欠となるのではないか。

今期の前半は「創立者生誕期の時代性—幕末維新期の越原—」である。研究の核心部分である。江戸から明治の時代の激動は越原家にどのような影響を及ぼしたのか。江戸幕府の崩壊はもとより庄屋制度の廃止、新しい時代、明治時代の到来である。すべてが一一新したばかりか、当の越原では廃仏毀釈が最も深刻にかつ徹底的になされた全国的にも稀な地域となる。なぜなのか、どのように風土との関わりが予測しうるのか、課題は多い。

今期後半の研究報告は上掲のテーマでおこなった。越原家の草創期と江戸時代の庄屋越原家の越原村における位置づけである。

草創期については越原家の元祖は「安江氏であり、戦国時代には山城を構え遠山氏に対抗した在地の有力な地侍」であった。1610年、慶長15年に初代庄屋となり、幕末まで代々庄屋であった。このような歴史的な重みと越原の住民からの篤い信任はそのまま創立者越原春子の子供ながらの胸に重たく押し掛かっていたのではなかろうか、と推察する。このようは越原の歴史と風土が創立者の意識をいやがうえにも高めることになったと考える。

### 3. まとめ

記述してきたように、いずれも限られたスペースのな

かでの概要であって意を尽くすまでには至らなかったようである。しかし、最終報告時においては十分な成果と意見が開陳されることになるであろう。

さて、伊藤は、舞台は我が国ではなく「英国」であるが、それがゆえにまた、発達する資本主義社会での男女の位相を高度な視点から探求したものであり、将来の我が国を予測させるものであったわけである。

まさしく創立者が建学の精神を培った時代は、日本の近代化の曙光期であった。それがどのような性格のものかは岐阜県下でも各地に生産の拠点として作られつつあった養蚕と紡織の女工を目の当たりにしたことで十分であったろうが、同じ美濃にあって多くのことを耳目にしたに違いない。

創立者の建学の理念や女子教育の目標の中に、当時の我が国と欧米の働く女性から、その地位のあるべき姿を学び取ったものがあるに違いない。

羽澄の研究も伊藤のそれと無縁ではない。むしろ表裏一体のものであった。社会の格差は女子教育に平等な勉学の機会を奪うものであった。

同様に木原・依岡の研究もまた、地域こそイギリスであって羽澄とは異なるが、やはり求める点は、近代化のなかの両翼としての米英であり、本学の創設期を考える場合避けられない研究といえる。

伊藤、羽澄、木原・依岡の三本の研究がいずれも欧米を対象にした明治期相当の資本主義社会発達期における女性の社会的な動向を対象化しての女子教育の問題に対しての考察である。これに比して遠山は創立者越原春子の本学創設の思想的な背景と基盤を探るものといえよう。

また、丸山のそれは、遠山のそれが大正期とそれ以降を対象化してのものであったに比して、創立者の幼少期における「家の歴史」と「越原の風土」からする「思想」の形成に焦点があった。あるいは創立者が体現する歴史的に蓄積された越原家のもつ重みを考えようとするものであったといいかえてもよいかもしれない。

こういった意味で5本の研究を見比べて見ると、全く個別の関心から発したそれぞれの研究課題であったが、一つの視点から大きく括ることが可能である。

つまり、いずれもが本学の創設時期および創立者を意識しつつ、かつ本学創設の思想的基盤、背景についてきわめてグローバルに、論及しようとするものであったといえよう。



# なぜいま女性原理なのか

## ～西洋的「近代化」のプロセスを辿って～第2報

伊藤太郎

### 1. 目的・方法

平成17～18年度の「創業者越原春子および女子教育に関する研究」を受け、昨年度は原点に立ち戻り、今なぜ女性原理の復権が求められるのかを検証するために、英国の「近代化」のプロセスがいかに男性原理の「負」のキーワードに彩られたものであるかを考察した。今年度もその作業を継続・発展させ、いくつかの歴史的トピックに焦点を当てて女性差別の実態と構造を解き明かす試みを進める。今切実に求められている女性原理の発揚・復権の意味をさらに深めて考察しながら、男性原理、女性原理のそれぞれのキーワードを手がかりに21世紀の在るべき方向性を模索する。

### 2. 結果・考察

男性原理的なものとされた理性や合理精神がいかに脆く危ういものであるかを証明したのが、キリスト教世界の歴史的恥部とも言うべき魔女裁判だった。冷酷非道な人間狩りが中世暗黒時代ではなく、近代の扉を開いたルネサンス期以降も長く行われた事実が衝撃である。キリスト教が否定した女性像は、豊かな自然の摂理を学び民衆の知恵を受け継ぎ、自然治癒力や靈感に長じた薬草摘み・産婆・占い師といった賢者たる女性たちで、彼女たちは誇りと生活基盤を破壊され、次第に弾圧・駆逐された。産業化社会の進展と共にコインの表裏として成立した家父長制社会の要請によって、女性イメージは淫乱な誘惑者と良妻賢母の家庭内天使としての聖母の2つに集約されることとなった。

魔女裁判の嵐が吹き荒れた時代は、新発見が相次いだ目覚ましい科学革命の時代であり、進歩を約束する理性の時代だった。「自然＝女性」という伝統の下、自然を探求し征服するのが男性科学者の役目であり、男性による女性支配と、男性による自然支配は同根であった。王立協会のインテリたちは女性を無力化し締め出し、実験哲学による自然支配に自信を深めていった。

女性蔑視の考え方は科学的客観性をモットーとすべき医学書でも、精神錯乱が女性に多く「狂気は女の病気」という風説がまことしやかに記述され、女性は容易に理性を失う存在で人殺し・放火・盗みといった犯罪衝動に走ると書かれた。博物学や解剖学といった新しい学問領域でも、「女性の脳重量の平均値は男性よりも少なく女性の知的能力は著しく劣っている」とされ、大きな骨盤と豊かな乳房こそが女性の主要装備であり、「女性が結婚して子どもを産み育てることこそが自然の理に叶うこ

と」と実しやかに記述された。

キリスト教信仰の基盤となる種の創造における神の摂理は、進化を自然選択の偶然性の産物とするダーウィンの進化論で否定されることになった。しかし、進化論がキリスト教聖職者から攻撃をされた本当の理由は、最終的には雌の好みに合致した雄が子孫を残すことができるという雌の（進化の主導権を握る）優位性だった。ダーウィニズムは正しく進化を女性原理で説明しようとした。キリスト教原理主義者の男尊女卑の伝統は根深く、神から与えられた生命が女性側の恣意的選択で人工中絶されることを長らく許さなかった。

21世紀の現代社会を見るとき、国内的には先の見えない閉塞状況の中、モノに執着する欲望消費社会が続いて家族関係までもが崩壊の危機に瀕している。利潤追求に走る産業化社会はいまだ成熟の兆しを見せず、自由競争の市場原理経済が優先されて貧富の格差を増大させ、負け組は挽回の仕切り直し許されない硬直状況に陥っている。品格・節制のない自己チューの大人が増え、若者は自信喪失で引きこもるか、或いは攻撃性を露にして恨みの反社会的犯罪に走る。衝動的で直ぐにキレる子どもがいじめや学級崩壊を引き起こす反面、大人社会や家庭の不幸な犠牲者となって命を落とす子どもも多い。

女性原理の復権・高揚が叫ばれて久しい。様々な領域で、「情愛・融和・共生・生命創造・豊穰・母性・優しさ・感性」といった女性的視点からの発言・施策が必要とされる。いま復権が希求される女性原理とは、他人を気遣う優しさやいたわりの心であり、弧絶する心を繋ぐ慈愛と連帯の精神。異質なものを受容し、共存・共生に向かえるのも、女性原理が本来持っている生命を育む創造・再生の機能である。中西進氏は富国強兵や経済大国から現在の科学技術創造立国と続く明治期以降の政策はすべて攻撃型の男性原理の政策だったとする。女性原理の文化とは「しなやか」「たおやか」という言葉に象徴されるように曲がる方がいいという考え方で、実は曲がるほど跳ね返す力があるとして「攻撃」だけが価値を持つような現代の時代状況に対し、「抑止や受動が大切だ」と強調した。女性原理の復権という視点を女子大学のみならず政治のリーダーも持つ必要がある。

### 参考文献

- 小川真理子『フェミニズムと科学/技術』（岩波書店、2001）  
山本雅男『ヨーロッパの「近代」』（講談社現代新書、1992）  
水上洋子・葉月純『女神の時代』（星と森、1998）他

# 19世紀のイギリスにおける女子教育

## ～少女雑誌『ガールズ・オウン・ペーパー』に見られる初期の教育観～

木原貴子 依岡道子

### 1. 研究の目的

第1期の機関研究では、創立者越原春子が教育者として学校の創立を目指した時代背景に注目し、「大正期の新聞・雑誌に見られる女性の職業教育について」というテーマで『婦女新聞』から大正期における女性の職業教育観を考察した。今期は、ほぼ同じ時期であるヴィクトリア時代にイギリスで出版された雑誌『ガールズ・オウン・ペーパー』(The Girl's Own Paper, 1880-1956)から、同国における当時の女子教育を考察した。前年度は同誌における職業教育に注目し、年齢的にも、また、階級的(下層中流階級から上層中流階級まで)にも、幅広い女性を対象にした職業教育に関する記事が掲載されていることを報告した。本年度は、特に、当時のイギリスにおける女子の高等教育観を考察した。

### 2. ヴィクトリア時代の中流階級における女子教育観

この時代の中流階級の少女は、家庭で女性家庭教師に学ぶか、同じ階級の女性が経営する小規模な私営の学校で教育を受けていた。というのは、当時の教育に関する考え方として、子どもたちは「将来就くべき人生上の地位にふさわしい」教育を受けるべきだと考えられていたからである。そのため、性別によって教育の目的や方法も明確に区別されていた。少年は、将来「統治や指揮」をするため、大勢の人と交わり、様々な経験をする「学校」が適していると考えられた。一方、少女は、「他人との接触をなるべく控え、静かな家庭の中で過ごすこと」が「家庭の天使」として望ましい将来図と考えられ、「ひっそりと目立たぬよう周囲に気を配り、おとなしく控えめである」ことが求められた。それゆえ、「大規模の学校での、慌ただしく動き回る、まるで工場の車輪のような生活は、彼女たちの将来の生活とかかわりがなく、何の役にも立たないものです。このことひとつをとってみても、少女を大勢の人間の中に入れて教育することが誤りだとすぐに納得がいくはずです」(Elizabeth Missing Sewell)という意見に代表されるように、「学校教育」自体に対する否定的な考え方も見ることができ

### 3. 女性の高等教育に対する相反する姿勢

『ガールズ・オウン・ペーパー』は、読者である少女や女性の「相談相手、遊び友達、守護者、教師、仲間、友達になること」、そして、「少女たちに女性の責任と天国のような家庭を持つ心構えをさせながら、道徳と家庭の徳を身につける手助けをすること」を目的としている。その意味で、当時の理想である「良妻賢母」のための女子教育を体現する雑誌と見なされてきた。例えば、1881年に掲載された「高等教育の弊害」(“The Disadvantages of Higher Education,” 333)という記事では、「女性は男性の内助者であり、男性に匹敵する者でもライバルでもない」と述べ、女性に対する高等教育を明確に否定している。

しかし、同時に、この雑誌にはより高度な教育を求める女性の要望に応えるような記事も見いだすことができるのである。同じ1881年に掲載された「家庭学習の支援」(“Help for Study at Home,” 599)は、キリスト教女性教育同盟(the Christian Women's Education Union)が主催する通信教育を紹介する記事である。これは、先に述べた「女性のための学校」を卒業した後もさらに勉強を続けたい女性や、高等教育機関に在学している女子学生を対象としている。ここでは、必修科目の聖書講読に始まり、必要に応じて、英語、英文学、ギリシャ語、ラテン語、フランス語、ドイツ語、歴史、自然地理学、数学などが選択できる。すなわち、家庭の事情などで進学できない女性が、男性同様にギリシャ語やラテン語を学ぶ機会が与えられるというものである。

『ガールズ・オウン・ペーパー』という雑誌は、良妻賢母を提唱する一方で、より高度な教育を求める女性の希望にも応じるという矛盾した姿勢を見せている。しかし、(前号で言及したように)この雑誌が当時絶大な人気を得ていたという事実は、ヴィクトリア朝という時代そのものに、教育観を含め、女性に対して矛盾した姿勢を取らざるを得なかった社会事情があったことを反映しているのではないだろうか。

# 名古屋女学校・名古屋高等女学校時期における 建学の精神および教育理念の一考察（2）

## －「女学講義」について－

遠山佳治

### 1. 目的

本研究（2）では、越原春子を取り巻く名古屋における状況を再現することで、春子の思想形成における社会的背景を明確にし、春子の思想および名古屋女学校・名古屋高等女学校時期における教育目標および教育理念の考察を進めるものとした。そして、昨年度の中間報告では、名古屋の状況を中心として、尾崎行雄（罌堂）支援活動を明確にすることで、春子の思想形成への影響力をある程度具体的に解明した。

しかし、今年度は婦人問題研究会など春子の交流関係に関する新たな資料調査が進展できず、研究の方向転換を迫られた。そこで、若き春子の勉学テキストとなった通信教育講座「女学講義」および発行元の大日本女学会の検討を行った。

### 2. 方法

国会図書館所蔵本の調査にさきがけ、本学で所蔵されている「女学講義」の内容検討を行った。その上で、国会図書館の調査を進めている。

### 3. 結果および考察

#### （1）大日本女学会の創業者について

大日本女学会は、総裁に小松宮彰仁（あきひと）親王妃頼子、副総裁に鍋島栄子（ながこ）のもと、明治28年（1895）に創立された。

総裁の頼子は嘉永5年（1852）に久留米藩主有馬頼成の長女として生まれ、伏見宮邦家親王第八王子彰仁親王と明治2年（1869）に結婚して王妃となる。夫の親王は、ヨーロッパの君主国の例にならって、皇族が率先して軍務につくことを奨励し、自らも率先垂範した。明治23年（1890）陸軍大将に昇進し、近衛師団長、参謀総長を歴任し、日清戦争では征清大総督に任じられ旅順に出征した。明治31年（1898）に元帥の称号を賜る。社会事業では、日本赤十字社・大日本水産会・大日本山林会・大日本武徳会など各種団体の総裁を務め、皇族の公務の原型を作る一翼を担った。頼子は明治36年（1903）に

夫に先立たれ、大正3年（1914）に62歳で死去した。

副総裁の栄子は安政2年（1855）、大納言広橋胤保の五女として京都に生まれた。明治14年（1881）に当時イタリア公使を務めていた佐賀藩最後の藩主で侯爵鍋島直大（なおひろ）の妻となった。明治15年に帰国し、「鹿鳴館の華」と呼ばれ、また明治20年以來日本赤十字社篤志看護婦人会長として活躍した。さらに、東洋婦人会・大日本婦人教育会など数々の婦人団体を主宰した。昭和16年（1941）、87歳で死去した。この代表者2人の考えが、大日本女学会の運営に色濃く影響している。

#### （2）女学講義について

「女学講義」の刊行は、第1回1巻として明治28年11月に始まる。本学所蔵本は春子が使用した（明治37年日誌「美濃少女」の1月9日、1月23日、1月27日、3月8日、7月10日に「女学講義」1・2・3・14号の記載がある）ものではなく、第2回1巻（明治30年11月）から第3回前期12巻（明治33年10月）である。第2回講習会員の推移をみると、明治30年12月では1783人、明治31年3月では3145人、明治32年2月では4944人と急増している。明治32年2月現在の都道府県別会員数は、東京845人、長野232人、岡山220人、兵庫214人、北海道201人と続き、東海地方は愛知114人、静岡85人、三重84人、岐阜51人である。第3回講習会員（明治33年4月）は総数3408人とやや減少に転じており、東海地方にても愛知81人、静岡66人、三重38人と減少しているが、岐阜だけは112人と倍増している。第2回の内容は、修身、国文、漢文、日本地理、外国地理・歴史、日本歴史、文法、作文、憲法講義、礼法、家庭教育、家事衛生、家事整理、家事経済、小児衛生、児童心理、音楽理論、地文大要、理化学、民法大意・民法講義、博物、裁縫、割烹、作歌・作歌批評、活花、点茶、習字、付属（史伝・小説）で構成されている。詳細な内容分析を進めることが、今後の課題である。



# 女子高等教育と社会活動

羽澄直子

## 1. 目的

平成17～18年度および19～20年度の機関研究「創立者越原春子および女性教育に関する研究」において、筆者は名古屋女子大学創立時前後（明治、大正）の日本の女子教育の現状と、新国家建設期という点で日本の女子教育の先駆となった18～19世紀のアメリカの女子教育について考察し、新しい時代の新しい女子教育が女性たちに与えた影響についての検証をおこなってきた。昨年19年度の研究では、執筆活動を職業とする19世紀アメリカ女性に焦点を当てたが、本年20年度は高等教育を受けた女性の社会活動について考察する。

## 2. 方法

19世紀末から20世紀にかけてのアメリカで社会改革運動に取り組んだ女性たちに関する資料、文献を分析し検証する。

## 3. 結果および考察

女性が高等教育を受ける機会の増えた19世紀末のアメリカに、新しい生き方を模索する「ニュー・ウーマン」と呼ばれる女性たちが出現する。教育を通じて家庭以外の場での人生の可能性を知った彼女たちは、自立心旺盛でアカデミックな知識や経験を社会に還元したいという義務感を強く持っていた。進学率の上昇とともに女性の職場進出は進み、1880年からの20年間で、家庭外で働く女性の数は2倍になった。

しかしながら、ニュー・ウーマンが自分たちの価値観を押し通すには困難もつきまとった。良妻賢母を美徳とする従来の女性観は容易にくつがえるものではなく、家庭こそが女性の最良の居場所であるという「家庭の天使」信奉は根強かった。一旦家庭に留め置かれてしまえば、自立どころか夫や父への従属を余儀なくされる。初期の大学卒業女子の半数近くは、仕事や社会活動との両立は難しいと考え、結婚をしなかったという。

また女性が就業できる職種の門戸が広がったとはいえ、現実には高等教育を受けた中産階級の女性に見合った仕事があるとはいえない状況であった。むしろ学歴のない労働者階級の女性の方が仕事は簡単に見つかった。工業化が急速に進む社会では、教養や技能の不要な工場での単純労働者はいくらでも必要だったからだ。知識を

生かして社会に貢献したいという思いはかなわず、だからといって自己を抑圧するような結婚はしたくない。高等教育を受けた女性の多くは比較的裕福な家庭出身で、生計を立てるための就職は特に必要ではなかったため、結局は親元に戻り、無為に社交生活を送る卒業生も珍しくなかった。

仕事があれば自分たちで作ればよい。大学卒業後、10年近く実家で鬱々と過ごしていたジェーン・アダムズ（Jane Addams）は、1889年にシカゴにセツルメントの拠点「ハル・ハウス」を設立する。セツルメントとは都市の貧困地区に住み込んで福祉活動をおこなう運動で、富裕者の気まぐれな慈善とは違い、働く母親の支援や職業訓練、移民への語学教育など、自立手段の確立をめざして援助するものであった。女性たちが連帯し、安全に暮らせる場でもあった。運動の主な担い手は大学出の女性たちで、ニュー・ウーマンの経験と知識が存分に活用された。アダムズの社会活動は高く評価され、1931年にはアメリカ女性初のノーベル平和賞を受賞した。

結婚した女性が家事と育児に明け暮れて、学校で身につけた知識や専門性を無駄にする現状を憂えたのは、アダムズと親交のあったシャーロット・パーキンズ・ギルマン（Charlotte Perkins Gilman）である。彼女は美術学校を出てデザインの仕事をしていたが結婚で一度キャリアを捨て、出産後に精神を病み離婚した。この苦い経験から、女性が結婚と出産で家庭に閉じ込められることで経済活動から疎外され、夫に依存する無力な存在に陥る理不尽さを実感した彼女は、家庭の外で仕事を持ち、経済的に自立することの重要性を説く。ギルマンが提案したのは、女性の無償労働だった家事と育児の社会化である。これらを訓練された専門家に委託し、女性は職業を選んで社会へ出る。経済力を持つことで女性（妻）は男性（夫）と対等な関係を築くことができる。さらに家庭の奉仕者ではなく社会の奉仕者として社会性を身につけた女性は、子どもにとって優れた母になれる。これがニュー・ウーマンの時代にふさわしい「ニュー・マザー」であるとギルマンは考えたのである。

# 創立者越原春子と越原の歴史

丸山竜平

## 1. 目的

創立者越原春子の教育者への強い意志を育てたものはどのような少女期の体験であったのだろうか。ここでは直接的な動機ではなく、間接的ながらも、それがゆえに創立者の生涯にわたって、持続し、かつ潜在的なものとして存在したであろうその意欲の背景にあるものを探求しておきたい。

すでに先の研究では創立者の誕生の地・越原の歴史的な風土を前近代の前半部を中心として考察してきた。ここでは明治以来培われてきた、地域を見る閉鎖的で偏見的な目が、文字通り「目から鱗が落ち」た状態で、越原の地の開明性が推測できた。

今回の最終的な研究目標は創立者の生誕前史から少女期にかけてのいわば激動の時代・明治維新时期を挟んでの越原の地と越原家をめぐる歴史的解明である。しかし、ここでその橋渡しとなる、さらに遡っての中世から近世期における越原の地と越原家の歴史にスポットをあてた。

## 2. 調査と研究

### 越原家前史

史料の少ない江戸期以前の越原家の歴史である。しかし、江戸期の安定したそして村の信望ある要となった越原家とはまた違った形でその前史は創立者を刺激したに違いない。

ここでは通史風の解説は割愛し論点だけを指摘すれば、

(1) 1610年・慶長15年、江戸幕府が開設(1603年)されて7年後、越原弥吉が初代庄屋となる。越原家の実的な元祖といえるが、もとは安江氏であり、越原の地に開墾に入り定着して越原家の三代目である。

その先はといえば、安江時代には白川町野原に山城を構え遠山氏に対抗した在地の有力な武将であった。しかもその先は伊勢の進藤氏の流れをくむ武将の血筋であるとの伝承を持つ。

創立者もこのような我が家の武士としての家筋など、伝承時代の、勇ましいそれでいて地域の指導者的位置に立つ先祖の、賢明なそして地域の住民と一体となった生き方などに、具体的な分別はななくとも、幼いながらにして肌で感じながら育ってきたに違いない。

(2) 江戸期を通じて越原家は代々の庄屋であった。ここでも庄屋の一般的な論述は紙数の関係で割愛したい。

第二の論点は、越原村は既述のように山間部にあり地形的には完全に封鎖された土地柄である。庄屋以外は大変な零細農民(平均田畠2反以下、同6人家族)であった。村の運営こそ庄屋に課せられた責務であった。

その運営手腕は、山の資源の有効活用であり、田畠の零細を根拠にしての多様な労働による貨幣収入、さらには、共同体的な地域的特性を保持しての藩対策などに発揮された。その大きな辛苦以上に大過なく江戸の200数十年間を信任されてきたこと、このことに裏うちされた村民の眼差しは明治時代においてもなお幼い創立者の意識をいやがうえにも高めたに違いない。

(3) 確かに江戸時代は一般論的には百姓層の自立の歴史であった。信長・秀吉の求めた施策の原点であった。しかし、越原の環境は広大な水田が開けた土地柄ではなく、厳しいものがあつた。そのようななかで、越原は、脇家が本家と呼ばれ不十分ながらも自立を遂げるが、宝永3年・1706年に51軒であったものが、正徳3年・1713年には65軒、享保18年・1733年には80軒となり、文久年間(1861～1864年)には102軒と当初の二倍に膨らんでいる。一般的に自立農民の限界は5反歩、5人家族とされるが、この間、越原の平均田畠は慶長15年・1610年に8反9畝歩であったものが、享保20年1735年には3反4畝歩と減少している。その背景には小さい格差を共有しながら自立化のための山間部の開墾開発を通じて零細ながら自立化を遂げたこと、他方で多角的な収入源を確保してきたことのあらわれであろう。

また、このような家族の自立化を率先したのが庄屋越原家であった。元禄9年・1696年、奉公人が6人いたが、享保4年・1719年には1人となっている。庄屋の分家でも下女が宝永3年・1706年に納税者になっている。人手が人一倍欲しい庄屋において下人層が自立し零細ながらも家族を形成し続けている。

## 3. まとめ

庄屋時代や戦国期に自らの祖先が地域で果たした役割、それら伝承や逸話は創立者の双肩に重圧となつてのしかかたに違いない。しかし、その背後には越原の人々の期待として寄せられたものがあることを創立者は汲み取っていたのではなからうか。





# プロジェクト研究中間報告

# 家政学とICTを活用した国際交流プログラムを実践するための サポート体制のあり方を求めて ～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その3）～

Building Support System to Practice International Exchange Program Utilizing Home Economics  
and ICT

A Study to Develop Programme to Encourage and Promote Home Economics Teachers and Their Ability III

山口厚子・白井靖敏・木原貴子

Atsuko YAMAGUCHI・Yasutoshi SHIRAI・Takako KIHARA

## 1. はじめに

本論文で報告するプロジェクト研究は、平成18年度からスタートした「質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発」研究における第3弾目の継続研究にあたる。本論文では、主として平成20年度に実施した継続研究の報告を行うが、その位置づけを明確にするために、まずは、現在までの本プロジェクト研究全体（平成18-20年度）の目的および特徴をふりかえる。その上で、平成20年度に行ったプロジェクト研究の目的、成果と課題について報告する。

## 2. 本プロジェクト研究全体（H18-20年度）の目的と特徴

本プロジェクト研究では、表1に示す要件を満たす教員を「質の高い家庭科教員」と捉え、そのような人材を育成するために効果的なプログラムとは何かを追求することを目的に始まった。

表1 本プロジェクト研究がめざす家庭科教員像

- |  |
|--|
| A. 社会が必要とする家政学と家庭科を理解している。   |
| B. 今や国内だけでは語りつくせない生活に関わる課題について国内外の同分野の関係者や他分野の専門家と意見交換し、学び、協力して課題解決にあたることができる。 |
| C. 国内に限らず国外へ向けても自ら情報発信し、将来的に国内外の家政学・家庭科教育関連分野のリーダーとして社会に貢献できる。                 |

さらに、こうした家庭科教員像に求められる具体的な資質を表2のように整理し、プログラムに参加した学生がこれらの資質を兼ね備えた人材となることを意識した。

表2 プログラムで育成したい学生の資質

- |                             |
|-----------------------------|
| ① 家政学の本質や実態を理解できる。          |
| ② 国内外における生活に関わる課題について関心をもつ。 |
| ③ 国際的な視野をもつ。                |
| ④ 課題解決力をもつ。                 |
| ⑤ 情報発信力をもつ。                 |
| ⑥ コミュニケーション能力がある。           |
| ⑦ リーダーシップをもつ。               |
| ⑧ ICTスキルを身につけている。           |
| ⑨ 英語力がある。                   |
| ⑩ 国際的な協同作業を実践・コーディネートできる。   |
| ⑪ 社会貢献意識をもつ。                |
| ⑫ チームプレーができる。               |

以上をふまえ、今まで各年度に取り組んだテーマは、表3に示すとおりである。

表3 平成18年度以降の本プロジェクト研究のあゆみ

- |  |
|--|
| ①平成18－19年度<br>質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その1）<br>－国際交流プログラム企画・ホームページ作成－                   |
| ②平成19－20年度<br>質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その2）<br>－ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援－   |
| ③平成20－21年度<br>質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その3）<br>－家政学とICTを活用した国際交流プログラムを実践するためのサポート体制の確立－ |

3年間の実践内容は表4のように示すことができる。

表4. 平成18～20年度の本プロジェクト研究の実践内容一覧

【平成18年度】

- ① 家庭科のコンテンツを用いた高校レベルでの国際交流授業の実施（対象者：日本とシンガポールの高校生）  
家庭科（食生活、生活文化など）およびICT（メール交換、テレビ会議、webページ作成）を効果的に利用した国際交流授業を実施。
- ② 質の高い家庭科教員養成のための大学レベルでのプログラムの実施（対象者：本学の家庭科教員養成課程の学生）
  - a) 国際交流授業の企画・実践へ学生をコーディネーターとして関わらせた。
  - b) 複数の科目において、本プロジェクト研究で提示した資質育成をめざした授業を実施。
    - ・「卒業研究」：「ICTを用いた国際交流授業の実践例についての調査」「日本とシンガポールの教育制度および家庭科教育の比較検討」
    - ・「総合演習」：「高校家庭科における国際交流プログラムの企画」を課題にグループ学習を実施（相手国の基礎的データ、教育制度、家庭科教育、および実践事例の収集、発表、議論）

【平成19年度】

- ① 世界への情報発信、国際交流プログラムを広く実施するための世界的ネットワークの作成  
平成18年度の成果を国際的に発表（アジア家政学会、2007年8月、於：マレーシア）した結果、他国の家政学者が関心を示した。
- ② 国際交流プログラムを支援するプラットフォーム（LMS：Learning Management System）の開設  
国際交流時に学生・教員・研究者の交流とその支援、および教育・研究成果の蓄積の場となる教育実践的なプラットフォーム（LMS：Learning Management System）としてMoodleを利用したコース「International Exchange Course」を立ち上げた（<http://gets.sakura.ne.jp/moodle/>）（現在進行中）。
- ③ 質の高い家庭科教員養成のための大学レベルでのプログラムの実施（対象者：本学の家政学部の学生）  
複数の科目において、本プロジェクト研究で提示した資質育成をめざした授業を実施。
  - ・「卒業研究」：「シンガポールの食文化」「家庭科における国際交流授業の可能性と課題」
  - ・「総合演習」：以下の2つの課題についてグループ学習を実施。
    - さらに、国際家政学会の若手研究者を招き、家政学領域の国際的なネットワークについての特別講義を実施（英語にて。教員が通訳）。
      - (A)「日本における生活課題の実態、および、その課題解決のために自分たち（個人、消費者、市民、教員、専門職としての）にできること」
      - (B)「効果的な学習者参加型の国際交流授業のあり方」（国際交流授業の意義と方法、課題解決力育成のための学習支援の方法について）
  - ・「基礎ゼミ」：日本の「食文化」「衣文化」「住文化」についてグループ学習を実施。

【平成20年度】

- ① 国際交流プログラムを支援するプラットフォーム（LMS：Learning Management System）の開発：コンテンツを充実。学生が作成した資料を、LMS上に掲載した。
- ② 家政学とICTを活用した中高大レベルでの国際交流プログラムの実施1（対象者：シンガポールの中学生と日本の高校生、サポーター：本学の家庭科教員養成過程の学生）：両国の生徒は、以下の課題について取り組んだ。
  - ・シンガポールの生徒：日本の食文化について調べ、それをもとに日本食を調理。
  - ・日本とシンガポールの生徒：「消費者の食の選択が環境にどのような影響を及ぼしているか、持続可能な環境を維持するために私たちは食の資源をどのようにマネジメントすればよいか」という課題についてグループ学習、成果（パワーポイント資料作成）を発表、意見交換。
 ICTの活用方法：①LMSの活用（情報収集と資料作成のための掲示板の利用、グループ学習成果の発表、調理実習のビデオ掲載等）、②テレビ会議
- ③ 家政学とICTを活用した中高大レベルでの国際交流プログラムの実施2（対象者：シンガポールの中学生・家庭科教諭と本学の家庭科教員養成課程の学生）：シンガポールの中学校における「家庭科」授業時に、シンガポールの中学生と家庭科教諭、本学の家庭科教員養成課程の学生（「家庭科教育法3」を受講している学生）と教員がテレビ会議を行い、シンガポールと日本の食文化や生活課題、および家庭科授業の内容について、自由に意見交換。
- ④ 世界への情報発信、国際交流プログラムを広く実施するための世界的ネットワークの作成  
平成18～20年度の成果を国際的に発表（国際家政学会、2008年7月、於：スイス）した結果、諸外国の特に若手の家政学者が関心を示した。
- ⑤ 質の高い家庭科教員養成のための大学レベルでのプログラムの実施（対象者：本学の家庭科教員養成課程の学生）
  - a) 中高生の国際交流プログラムへ、中高生（特に日本の高校生）のサポーター兼メンター（相談へのアドバイス、課題の説明資料作成、パワーポイント作成の手伝い、テレビ会議時の手伝い等）として参加させた。
  - b) 複数の科目において本プロジェクト研究で提示した資質育成をめざした授業を実施。
    - ・「家政学原論」：特に世界的な家政学の動向についての内容を追加。
    - ・「卒業研究」：「米国家政系学部におけるエクステンション」「北欧の消費者教育」等、諸外国における家政学や家庭科教育の社会貢献に関するテーマ。
    - ・「総合演習」：国際比較データから日本の生活課題や生活の特徴について考察する課題についてのグループ学習（協同学習）を実施。



こうした実践内容をふまえ、本プロジェクト研究の特徴をあげるとすると次のようにいうことができるだろう。

まず、「質の高い家庭科教員」を養成するためのプログラムには、さまざまなものが考えられるが、本プロジェクト研究では、特に国際的に発展する家政学の動向や家政学のもつ国際的なネットワークとICTを活用した「国際交流」プログラムを開発することに焦点をあてたことである。結果として、そのようなプログラムの実践は3事例（表4中、平成18年度①、平成20年度②③）行ったことになる。

その際、特にシンガポールを相手国とし<sup>注1</sup>、本学の学生の参加方法としては、本学学生が国際交流の主体者となる（表4中、平成20年度③）だけでなく、中高校生の国際交流授業を本学学生がサポートするという方法を試みた（表4中、平成18年度①、平成20年度②）。これは、将来、教員となる本学学生が、現在、学校教育に求められている学力を育成する教育の実践者として、学習支援技術を身につけることを意図したためである<sup>注2</sup>。

その他、本プロジェクト研究では、国際交流プログラムの実践だけでなく、それを効果的に実現するためのさまざまな試み（サポート体制の検討）を総合的に進めてきたことも一つの特徴といえよう。それは、表4に示す次のような試みである。国際交流プログラムを支援するプラットフォームとしてのLMSの構築（平成19年度②、平成20年度①）、交流相手を広げるための世界的ネットワークの構築（平成19年度②、平成20年度④）、そして、国際交流プログラムへ参加する際の知識や技術を身につけることを視野にいれた授業の開発（平成18年度②、平成19年度③、平成20年度⑤）である。

本プロジェクト研究における各年度（平成18－19年度）のそれぞれのテーマ研究の具体的な成果と課題については、白井、山口らによる報告<sup>注3</sup>を参照されたい。

<sup>注1</sup> シンガポールに特定した理由は、筆者の友人であるシンガポールの家庭科教員がこのプロジェクトに賛同し、このプロジェクトへ参加することで自身の担当する家庭科教育を発展させることを強く望んでいること、さらに、シンガポールが現在、ICTや学術分野を先導する国としてICT活用教育を実践しやすい環境にあることなどがあげられる。

<sup>注2</sup> この点については、白井による別報「質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その2）」を参照されたい。本プロジェクトは、OECDの示す学力観や社会的構成主義的教育理論に対応した教育実践力を身につけた家庭科教員の養成をめざしている。

### 3. H20年度プロジェクト研究の目的

過去2年間の実践を通じて、われわれは、国際的な家政学とICTを効果的に利用することで、参加者すべてが相互に学ぶ魅力的な国際交流プログラム実践ができると確信した。一方で、国際交流プログラムを実際に進めるにあたっては、それが円滑にかつ効果的に行われるようサポートする体制を確立することが重要であることがわかった。

そこで、平成20年度は、過去2年間の研究成果を反映した国際交流プログラムを実践するとともに、その実践が円滑にかつ効果的に行われるようサポートする体制とはどのようなものかを考究することを目的に、研究をすすめることにした。

### 4. サポート体制のあり方をどう捉えるか

とはいえ、ひとことで本プロジェクトがめざすプログラム開発に必要な「サポート体制」といっても、実際にやってみると、多様なレベルの広範囲でのサポート体制の確立が必要であることがわかってきた。

例えば、過去2年間の実践活動を通じて必要性を痛感したのは、学校・大学レベル双方におけるICT活用環境の整備の必要性（設備、テクニカルサポーターなどの面）、プログラムをデザインするにあたって必要な知識や技術へのサポートの必要性、プロジェクトを準備するための時間の確保の必要性、それらを実現するためにも組織やカリキュラム上へプロジェクトを効果的に位置づけていくことの必要性などがあげられる。こうした必要性を満たしていくことで、サポート体制が確立していくように思われる。

また、国際交流をする際の学生たちの語学力不足が明白であったことから、語学力向上へのサポートも必要であるといえる。語学力のみならず、学生たちがプログラムへ参加して一定の活動をやり遂げるにはICTスキルの他さまざまな資質が必要である（表2参考）。プログラムと連携したそれらの資質向上を補完するような授業の開発も、広い意味でのサポート体制の一部といえるだろう。

今回は、本学の学生が国際交流授業を実践する高校の現場へ何度か足を運び、Web上からも高校生を支援するという手法を試みた。こうした手法をとる場合、現場の国際交流授業を円滑に進めるためのサポートとともに、

<sup>注3</sup> これまでの研究結果は、平成18年度、平成20年度に、アジア家政学会、国際家政学会にて発表を行った。詳しくは拙稿（2007a,<sup>1</sup> 2007b,<sup>2</sup> 2008a<sup>3</sup>）および白井（2008a,<sup>4</sup> 2008b,<sup>5</sup>）および本号掲載論文）を参照されたい。

学生たちがいかに実践的に高校生をサポートするかについての知識や技術をサポートする仕組みづくりも必要となる。このような実践が全体として円滑に進むためにも何らかの体制づくりが必要となることも痛感した。

さらに、こうしたプロジェクト推進は新たな試みの連続であるがゆえに予期せぬ状況に直面することが多い。プロジェクトに関わるスタッフが常に希望をもって積極的に前進していくためには、様々な形でスタッフがモチベーションを維持するための励ましあいや学びあいの機会をつくっていくこともまた、重要なサポート体制の一つであるといえるのではないだろうか。

そして、過去の国際交流授業の実践経験から、ICTを活用して実際に国際交流プログラムの参加者が遠距離間でコミュニケーションを図り、共有できる知の蓄積とその活用を進めるには、Web上での国際交流をうながす効果的なプラットフォーム（LMSの活用）の存在が強力なサポートとなることもわかった。

そこで、H20年度のプロジェクト研究では、上述した多様なレベルで広範囲に必要な「サポート」の中でも、特に家政学とICTを活用した国際交流プログラムを支援する「LMSを活用したプラットフォームの開発と活用（LMS：Learning Management System）」に重点をあてて、サポート体制のあり方へアプローチすることとした。

以下、開発したプラットフォームの概要を示す。

## 5. 国際交流プログラムを支援するLMSを活用したプラットフォームの開発

本プロジェクトでは、LMSとしてmoodleを用いた。LMSが教育や学習に果たす役割およびmoodleの特徴やメリットについては、別報「質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その2）」で述べられているため、参照されたい。

プラットフォームを作成するにあたっては、**家政学の本質、家政学の国際的に発展する家政学の動向や家政学のもつ国際的なネットワークを活かし、参加者すべて（教育者、研究者、学生、生徒等）がこのプラットフォームを活用することでメリットを得るプラットフォーム**を作成することを最も重視した。

プラットフォームの主な内容構成は表5に示す10の基本的なコンテンツからなる。英語表記による実際のWeb上の詳しい画面構成等については、別報を参照されたい。以下、それぞれの項目を作成した意図、内容について簡単に紹介しよう。

表5. プラットホームの内容構成

---

冒頭：あいさつ。
国際交流プログラム課題、および手順、スケジュールの説明。
1. 国際交流実践のひろば
：掲示板、チャットルーム、作品・実践記録等の提示
2. このコースのねらい
3. 家政学とは何か
4. 家政学の国際的なネットワーク
5. 各国の教育制度、ICT教育、言語教育、家政学および家庭科教育の現状
6. 家政学とICTを活用した国際的な国際交流プログラムの先行実践事例の報告
7. 教材・資源No.1：それぞれの国の基本的なデータ
8. 教材・資源No.2：各国の生活に関わる課題
9. 教材・資源No.3：各国の生活文化
10. 協同学習や研究希望者のひろば

---

\*実際には、上記内容を英語にて表記している。  
(<http://www.gets.sakura.ne.jp/moodle/>)

本報告で後述する国際交流授業実践は、主として、「冒頭」および「1. 国際交流実践のひろば」にて行われた。「冒頭」では、このプログラムに参加している中高生へのメッセージ、および、いつまでに、何を、どのように遂行してほしいのか、課題と手順、スケジュールを提示した。さらに、「1. 国際交流実践のひろば」には、課題遂行にあたって、生徒間や生徒がスタッフ（大学生、大学教員、中高教員）との間でコミュニケーションをとる場としてのチャットルームや掲示板を設定した。また、課題遂行過程で撮った写真やビデオ、作品をここに載せていくよう設定した。

プラットフォームのねらいとビジョンについては、「2. このコースのねらい」にまとめた。その内容は、表6に示すとおりである。本プロジェクトでは、「家庭科教員養成」に焦点をあてているが、実際に作成したプラットフォームでは、さらに広い視点から、家政学を国際的に多様なレベルでの教育・研究に活用することや、それらの活動を通じて家政学を国際的に発展させていくことをねらいとしているのが特徴である<sup>注4</sup>。

<ビジョン>では、このプラットフォームがもつビジョンを二つ示した。それは、多様な文化や教育背景をもつ個人のレベルでもアクセスしやすいこと、国連が提唱する「持続可能な開発のための教育（ESD）」推進へ貢献していくことである。ICTを活用することで組織や世代、文化、専門領域をこえて志のある個人がつながり、従来とは異なる新たな教育が創造されること、家政学がESDへ貢献可能であることを示していくこと<sup>注5</sup>を意図



表6. プラットホームのねらいとビジョン

<ねらい>
1) ICTを活用した国際的なあらゆるスタイルの学習に家政学を効果的に用いること。
2) 家政学とは何かを知る機会を提供する。
3) 国際的なレベルで未来の家政学者を育成する多様な養成方法を探求する。
4) 文化の多様性を通して家政学を発展させる。
5) 家政学を通じた国際的な共同研究や教育の機会をつくる。
6) 家政学の教育や学習の標準をあげるためにネットワークをつくる。
7) とともに励まし、高めあい、学ぶプロセスを楽しむ。
<ビジョン>
—多様な文化や教育背景をもつ個人でもアクセスしやすい機能をもつプラットフォームを提供する。
—「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development:ESD) を先導する国際家政学会と歩調をあわせた活動をする。

した。

「3. 家政学とは何か」「4. 家政学の国際的なネットワーク」では、国際的に共通理解されている家政学についての知見について、例えば、国際家政学会が2008年に提示した文書声明「Position Statement」の掲載や、主要な文献からの引用文などを提示していく予定である。家政学の国際的なネットワークとしては、国際家政学会や諸外国の家政学会のwebページへリンクをはるなどしていきたい。また、国際家政学会や、その中で若手研究者や学生によって作られたネットワーク組織、YPN (Young Professional Network) についての紹介をする予定である。

「5. 各国の教育制度、ICT教育、言語教育、家政学および家庭科教育の現状」では、新たに国際的な国際交流

注4 こうしたねらいは、本プロジェクト研究の一部が、筆者の科研における若手研究 (B) (H18 - 20年度) 「世界の家政学領域における『人材育成』・『社会への発信』方法に関する研究」と連動して進められたことによる。

注5 あまり知られていないことであるが、国際家政学会は国連の諮問機関の一つである。現在、国連が提唱する「持続可能な開発のための教育 (ESD)」は、まさに従来家政学が関心をもってきた教育・研究と関わりがあることから、国際家政学会は、家政学がESDへ大きな貢献をすることを前提にさまざまなプロジェクトを立ち上げはじめている (例えば、ESDへの貢献を意図したe-bookを発行するなど)。ESDは確実に家政学発展の追い風となっている。

プログラムをデザインするときに参考となる基礎的データ、すなわち、相手国の教育制度やICT教育・言語教育・家政学および家庭科教育の現状についての情報を掲載する予定である。こうした情報は、交流相手の国を決めるときや、各国の特徴をいかしたプログラムを計画・運営する際に有効な情報となる。

「6. 家政学とICTを活用した国際的な国際交流プログラムの先行実践事例の報告」では、すでに行われたプログラムの報告をのせる。先行実践事例を、新たなプログラム作成時に参考にするのがねらいである。

続く「7. 8. 9. 教材・資源」では、国際交流プログラムを実行する際に有効な教材や資源を蓄積する場所として設定した。「7. 各国の基本的データ」では、例えば、OECDが示す健康・社会・環境等に関わるデータベースからのデータや、人口、面積、民族などの基礎的データを載せたい。8・9では、各国の生活に関わる課題や文化について、授業やプログラムの中で大学・中等教育レベルで学生たちが作成したパワーポイントファイルや、教育・研究者が作成したファイルを掲載していきたい (現在、本学学生が作成したファイルはすでにアップロードされている)。これらのデータやファイルは、新たな国際交流プログラムを行う際の教材となる一方で、学校・大学の教員にとっても授業づくりにも有効な教材となる。研究の際にも参考資料となりうる。

最後の「10. 協同学習や研究希望者のひろば」では、今後、国際交流プログラムへの参加や、共同研究を希望する意志を伝えあう場として設定した。

以上、プラットフォームはまだ開発途中であるが、今後はさらに内容を充実させるとともに、Web 2.0の特徴を活かし、参加者それぞれが内容を補完しあって効果的なプラットフォームとなることを願っている。

次に、H20年度に行った本学学生が参加した国際交流プログラム、二つの事例について報告する。

## 6. 実践事例 1

H20年度に行った国際交流プログラム実践の一例目は、本学学生とシンガポールの中学2年生によるテレビ会議である。目的・方法・結果は以下のとおりである。

### (1) 目的

共通：異文化や異なる世代にふれることでお互いに学びあう。

日本の学生：①他国の家庭科への関心と理解を深める。②国際的な視野、コミュニケーション能力、英語力の重要性に気づく。③ICT活用教育を体験する。④他国の生活や文化へ関心をもつ。⑤家庭科や家政学を活用した授業実践の可能性を理解する。



## (2) 方法

- ①実施日時：平成20年5月2日 午後3時－4時（シンガポールでは、午後2時－3時）。
- ②対象者：シンガポールの中学2年生（Nanyang Girls' High School、16名）、名古屋女子大学の4年生11名。
- ③対象教科：シンガポール側は「家庭科（Home Economics）」、日本側は「家庭科教育法3」（受講者のうち、希望した学生が参加）。
- ④国際交流手段： Skypeを用いたテレビ会議
- ⑤主要なトピックス：双方の生徒には、あらかじめ、テーマとして、①生活と文化：生活スタイルや生活習慣、衣食住生活、消費者行動、家族と子どもの発達、福祉、②家政学や家庭科教育、③その他、について、相手に聞きたいことを考えてくるよう指示をしていた。

## (3) 結果

テレビ会議の様子は写真①に示すとおりである。当初60分を予定していたが、シンガポールの生徒たちの授業終了後は、シンガポールの家庭科教員と本学学生の間で意見交換がなされ、結果的に90分ほどの時間を要した。授業内容は、双方が一人ずつ自己紹介をした後、それぞれに関心のある質問を行った。シンガポールの生徒からは、日本食についての質問などがみられた。本学の学生からは、シンガポールの食生活や習慣（家族で食事をとるか、など）についての質問の他、学んでいる家庭科の内容についての質問などもみられた。シンガポール側の教室が調理室であったために、調理室の様子をカメラで見るなどの場面も見られた。シンガポールの家庭科教員との話の中では、シンガポールの家族の実態（核家族が多いのか、など）や社会福祉の実態についての質問が本学学生からなされた。

質問のやりとりの際には、シンガポール側の質問については学生がわからないところは教員が簡単な訳をして学生に伝えた。本学学生からは、英語で口頭質問を試みるか、もしくは、用意したホワイトボードに英語で質問を書いて見せるなどの様子が見られた。伝わらない場合は、教員がサポートをした。全体として、本学学生は積極的に関わろうとしていた。

テレビ会議の後、本学学生に自由記述で感想を書いてもらったところ、すべての学生が「おもしろかった」「楽しんだ」「貴重な体験をした」など肯定的な感想を述べていた。また、すべての学生が英語についてふれており、自分の知識を深め、相手とよい関係性を築くために「もっと英語力をつけたい」「英語は大切だ」「言葉の壁がなくなれば、もっとスムーズに交流できる」など英語の重要性に気づく発言をしていた。その他、「シンガポールに関心をもった」、「他国の文化を知り、自国の文



写真①：テレビ会議の様子（本学と Nanyang Girls' High School の生徒と教員）。  
2008年5月2日

化を伝えることはお互いの発展につながる」「もっと普段の授業に取り入れると楽しい」「実際に、シンガポールの授業や施設を見に行きたい」「また会いたい」といった意見がみられた。また、参加学生は皆、1年前に「家庭科教育法1」において諸外国の家庭科教育について学習をしていることもあり、それを受けて、「実際に他国の家庭科教育にふれて勉強になった」という意見もあった。

改善点については、「事前に授業の内容をよく知って、質問を英語で考えておくとよかった」「もう少し、カメラに近づいた方がよかった」「テーマを決めて、発表しあうとよいのでは」「あらかじめグループワークをして、質問内容を考え、日本を紹介する工夫（資料作成等）の準備をもう少しすると良い」「ホワイトボードを準備していたことはよかった」といった意見が、複数みられた。

## (4) 考察

今回の企画は、急遽決まったことであったが、本学学生たちは、この機会に積極的に取り組み、楽しむ様子が見られた。当初、世代差を心配していたが、外国の中学生の様子、また、家庭科教員との対面、家庭科の様子を見ることは、参加学生にとって大きな刺激となったようである。こちらが設定していた目的は、ほぼ達成されたように思う。学生全員が語学の壁を感じながらも、このような反応を示したことは、こちらの予想以上のものがあった。今後は、学生の改善意見にあったように、テレビ会議を普段の授業にもりこむことや、その際にはこちらからの情報発信ができるような計画をたてていきたい。しかし、そうになると、語学のサポートが必要になると思われる。

また、今回、急遽テレビ会議の実施が決まったにも関わらず、成功をおさめることができたのは、情報センターのスタッフが迅速に対応、サポートをしてくださったおかげである。改めて、ICT環境整備のサポートが重

要であると感じる実践事例でもあった。

## 7. 実践事例 2 ～LMSを活用した実践事例～

次に行った実践は、LMSを活用した実践である。この実践例の目的、方法、結果は以下のとおりである。

### (1) 目的

- ① LMSを用いた国際交流授業の実践を試み、その成果と課題を探る。
- ② 本学学生：日本の高校生の国際交流授業実践の援助活動を通じ、将来の教員としての資質をのばす。
- ③ 日本側の生徒：家政学とICTを活用した国際交流授業実践への参加を通じ、異文化や食と環境に関わる生活課題について学ぶとともに、コミュニケーションスキルや英語力を身につける。
- ④ シンガポール側の生徒：家政学とICTを活用した国際交流授業実践への参加を通じ、A)日本の食文化を学ぶとともに、B)食と環境に関わる生活課題について学び、コミュニケーションスキルを身につける。

### (2) 方法

- ① 実施時期：平成20年6月末～平成20年9月末
- ② 対象者：〔国際交流授業の主体者〕シンガポールの中学1年生（Nanyang Girls' High School, 女子生徒9名）、日本の高校生（三重県立久居高等学校2年生、女子生徒7名、男子生徒1名、計8名）、〔中高生のメンター兼プログラムのサポーター〕名古屋女子大学4年生6名
- ③ 対象教科：Nanyang Girls' High Schoolでは「家庭科（Home Economics）」、三重県立久居高等学校では「異文化理解（英語）」、本学学生は「家政学原論ゼミナール」。
- ④ 国際交流手段：1) LMSを用いたプラットフォームの活用 2) Skypeを用いたテレビ会議
- ⑤ 具体的な手順：1) 各国の中高生は、それぞれ2チーム（A, B）にわけられ、各自、プラットフォームへ登録した後、各チームに設定された掲示板にて交流を開始。2) シンガポールの生徒には、家庭科のコースワーク（課題研究）として、「日本食について調べ、それを調理すること」が提示される。それを受けて、シンガポールの生徒は、プラットフォームの掲示板を通して日本の生徒から情報収集を開始する。3) 両国の生徒に対し、家政学に関連する課題を提示し、各国の各グループでグループ活動を行い、パワーポイントファイルを作成するよう、プラットフォームで指示。課題の内容は、「Investigate how consumers' food choices influence our physical and social environment. Give suggestions on how best we can manage our

food resources to ensure sustainability of these environment（消費者の食の選択がどのように私たちの自然・社会的環境へ影響を及ぼすのか調べなさい。さらに、持続可能な社会にするために私たちはどのように食の資源を管理するとよいか提案しなさい）」である。4) シンガポールの生徒は、日本食の調理を実践、その様子を撮影したビデオをプラットフォームへアップロードする。5) テレビ会議を実施（Nanyang Girls' High SchoolではBroadcasting studio, 三重県立久居高校ではLL教室にて実施）。それまでに作成した各国のパワーポイントプレゼンテーションやビデオについての意見交換、このプログラムから学んだことを共有する。

### (3) 結果

ここでは、日本側の高校生および本学学生の活動結果について報告する。日本側の参加生徒および学生には、6月末にこのプログラムへの参加を呼びかけた。しかし、時期的には夏休みをはさんだ活動となり（シンガポール側はこの間、通常授業）、さらに、課題の提示が8月になったため、実質的に高校生が授業の中で課題に取り組んだのは、9月に入ってからのことであった。授業外では、各自、掲示板を利用したコミュニケーションを促した。高校では夏休み中、可能な範囲で補習を行った。

9月以降は、次のようなスケジュールで高校生の活動およびそのサポートが行われた。

- ① 9月2日：本学教員が久居高校を訪問、授業中にこのプログラムの目的、課題の説明、今後の予定、およびグループワークの方法について説明を行った（写真②）。その際、本学学生が作った資料（課題の解説、見本となるパワーポイントファイルのプリント（日本語・英語両方））を配布した。生徒はグループの課題遂行のためのテーマを決定。Aチームは「サプリメント（supplement）」、Bチームは「曲がったきゅうり（curved cucumber）」となった。
- ② 9月11日：9月2日の生徒の様子から、課題の意味についての理解が不十分であると教師側が判断し、ALTの先生による課題の説明が授業中に行われた。本学教員が授業を見学、その進捗状況を確認し、生徒たちの活動をサポートした。





写真②：本学教員が高校の授業でプログラムと課題について説明。2008年9月2日

- ③ 9月16日：本学教員と本学学生が高校の授業へ参加。この日がパワーポイント資料提出日であるため、特に本学学生が主となり、高校の英語教諭およびALTの先生とともにパワーポイントの作成をサポートし、パワーポイント資料を完成させた(写真③)。その日のうちに、作成したパワーポイントファイルをプラットフォームへアップロード。生徒たちへは、次回のテレビ会議当日までに、シンガポールの生徒が作ったファイルとビデオを見て、当日、意見を交換しあえるよう準備することを呼びかけた。



写真③：本学学生が主体となり、高校生のパワーポイント作成をサポート。2008年9月16日

- ④ 9月23日：祝日であったが、シンガポールの授業時に時間をあわせることができることから、テレビ会議を実施(11時15分-12時15分(日本時間)、60分)。しかしながら、高校生の参加は3人とどまった。本学学生は6人全員が参加。開始後、日本側のオーディオの調子が悪く、シンガポールの生徒たちの声が聞こえず、途中から相手のテレビ画像とチャットを併用しながらの展開となった(写真④、⑤)。当初、テレビ会議の内容について、シンガポール教員との打ち合わせでは、「自己紹介(10分)、それぞれのチームが作成したパワーポイントからわかったことを発表、このプログラムで学んだことを発表、ディスカッショ

ンをする(30分)、自由な質問(10分)」を予定していたが、ほとんど予定どおりにいかなかった。シンガポールの生徒の音声が聞こえないことへの対応が響き、高校生は発言する感想を英語教員の指導で事前に用意していたものの、ディスカッションというほどまでの活発な意見交換へは至らなかった。自己紹介と、準備した文章を読み上げること、それぞれが関心のあること(日本のアニメやダイエット、食事のことなど)を質問、両国の生徒の中で6月から比較的積極的に掲示板上でやりとりをしていた生徒同士があいさつをかわすなどがなされた。両国の生徒とも笑顔がよく見られ、楽しんでいる様子であった。チャットの英語入力は、シンガポール側は各生徒が行ったが、日本側は高校生が日本語で話した内容を高校教員が入力した。本学学生は、ビデオ撮影とカメラ撮影を担当した。



写真④：テレビ会議が始まった直後の様子。2008年9月23日

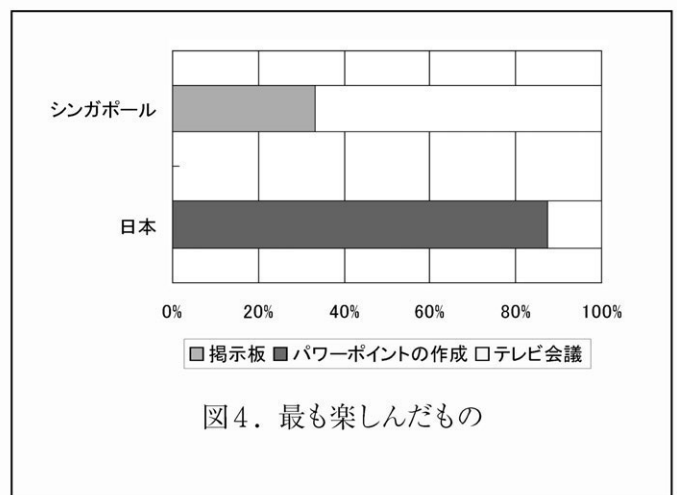
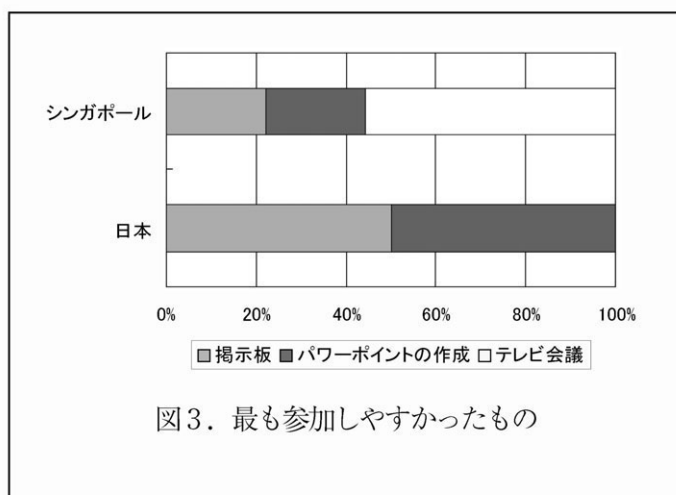
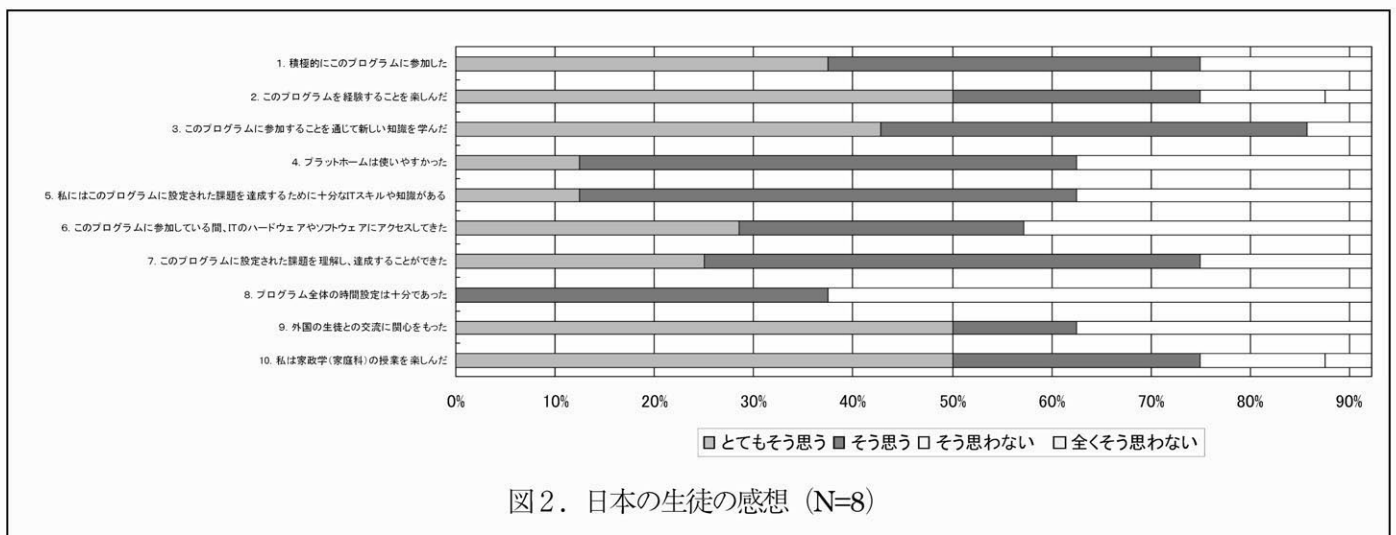
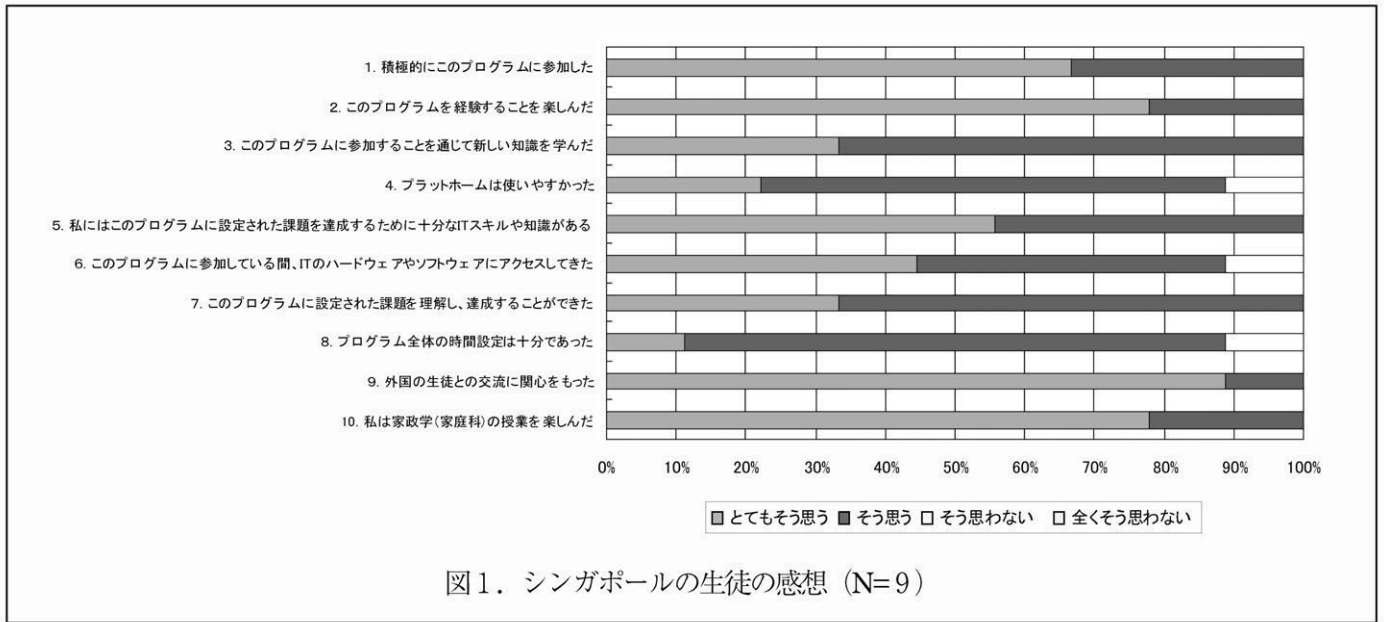


写真⑤：テレビ画像とチャットを併用している様子。2008年9月23日

以上の国際交流プログラムの後、両国の中高生にはアンケート、本学学生には自由記述のレポートを提出してもらった。

両国の中高生へ対し、このプログラムに関する感想や





評価について10項目の質問をし、「とてもそう思う、そう思う、そう思わない、全くそう思わない」の4件法で回答を求めたところ、図1、図2のような結果を得た。

シンガポールの生徒の方が、全体として肯定的な回答をした生徒の割合が高いことがわかる。日本、シンガポールともに、「1. 積極的に楽しんだ」「2. 楽しんだ」「3. 新しい知識を学んだ」生徒の割合は高いが、特に日本の生徒では、「4. プラットホームの使いやすさ」や「5. ITスキルがある」「6. アクセスした」「7. プログラムの時間設定が十分である」「8. 外国の生徒との交流に関心をもった」について、「そう思わない」と答えた生徒の割合が高かった。

また両国の生徒に、このプログラムの活動(掲示板、パワーポイントの作成、テレビ会議)について「最も参加しやすかったもの」(図3)と「最も楽しんだもの」(図4)について聞いたところ、両国に顕著な差がみられた。シンガポールの生徒が「最も参加しやすかったもの」「最も楽しんだもの」にテレビ会議を選び、「最も楽しんだもの」でパワーポイントの作成をあげた生徒がいなかったのに対し、日本の生徒では、「最も楽しんだもの」としてパワーポイントの作成があがっていた。

さらに、両国の生徒へ自由記述にて、掲示板、パワーポイント作成、テレビ会議の良い点・よくなかった点・改善点を聞いたところ、掲示板については、アクセスしやすい一方で、接続のしにくさ、返事の遅さがあること、もっと課題にあわせたトピックスに焦点をあてたりりをする必要性などが両国の生徒からあげられた。パワーポイント作成については、新たな知識が得られたことや活動を通じて仲間との絆が深まったこと、日本の生徒からは大学生に助けてもらったことなどが良い点としてあげられる一方で、作るのに時間がかかるためにもっと時間がほしいこと、詳しい課題の説明を求める声が両国の生徒からあげられた。テレビ会議については、シンガポールの生徒からは、とても楽しく興味深かったという意見が多かったが、両国の生徒ともに、オーディオや画面の整備を求める声が多かった。日本の生徒からは休日ではなく平日にやってほしいという意見があった。どの活動についても、両国の生徒ともに「言葉の壁」を指摘する声が多かった。

最後に、両国の生徒へ、「このプログラムに参加して何を学んだか」きいたところ、シンガポールの生徒からは、日本の食文化と答えた生徒が最も多くあげられ、食の消費が環境へ与える影響に気づいたことなどがあげられた。日本の生徒からは、外国の生徒との交流によって差別がなくなると思う、という意見や、英語力や外国への関心が高まったという意見が見られた。

本学の学生へは、パワーポイント作成のサポート、およびテレビ会議のサポート終了後に、自由記述での感想、および改善点についてのレポートを提出してもらった。

パワーポイント作成のサポートについては、当初、高校生とどのようにコミュニケーションをとればよいかわからなかったけれど、次第に打ち解け、最終的にパワーポイント完成へもっていかれたことや役にたてたことへの充実感、英語の勉強になったことなどの意見がみられた。一方で、このプログラムが効果的に進むための提案が、生徒の状況とプログラムの目的や課題の理解という視点からの的確に記述されており、大学生が、指導者の目で生徒の活動やこのプログラムの進行のサポートへ取り組んでいたことがよくわかった。

テレビ会議のサポートについては、視野を広げるいい機会になった、改めて家庭科でも積極的にICTを使って国際交流をとりいれることのおもしろさと可能性に気づいた、こうした経験が生徒の価値観を変えるよい機会であることに気づいた、語学力の必要性を感じた、という意見がみられた。また、今回はビデオやカメラのサポートをしたが、自分たちも例えば大学生同士などの交流があれば参加したいなどの意見もみられた。その他、レポートの大半は、先述同様、テレビ会議の観察からの授業分析や、今後の国際交流プログラムの課題について、生徒の自主性の育成や時間配分、プラン作成の視点、どのようにすれば自分たちのサポートがうまくいったかという視点から、指導者の目で客観的積極的に述べられていた。

#### (4) 考察

以上の結果から、本実践事例の課題と展望について、目的に沿って考察を試みたい。

##### ① LMSの成果と課題

今回、LMS上のプラットフォームでは主として、課題やスケジュールの提示、コミュニケーションの場としての掲示板の活用、作成した作品やビデオの提示などを通してグループ活動を支援した。その結果、こうしたプラットフォームの使用方法が、協同学習を伴う国際交流授業実践の機動力となり、プログラムの進行をサポートすることが明白となった。しかしながら、生徒たちのアンケートや学生の自由記述にみられるように、いかに国際交流プログラムが成功するかは、「いかに、生徒や学生が興味をもって参加(アクセス)しやすいプログラム(授業内容)をデザインすることができるか」が、キーになることがわかった。それは、グループ活動の際に提示する課題の内容、時間配分などが大きく影響する。今回は、課題内容や進め方についての方針を決定した時期が遅かったため、特にグループ活

動に慣れていない上に、利用可能な授業時間数の少ない(夏休みや行事のため)日本の生徒たちにとっては時間的に厳しい状況となった。今後は、課題内容をよりわかりやすいものにして、早い時期に生徒たちへプログラムの目的を知らせること、早い時期から大学生のサポートを開始できるような仕組みをつくること、また、コミュニケーションを円滑に進めるために、早い段階でテレビ会議などを導入してモチベーションを高めた上で掲示板でのコミュニケーションを活発にすることなどの工夫が必要となるだろう。

- ② 本学学生：日本の高校生の国際交流授業実践の援助活動を通じ、将来の教員としての資質をのばす。

学生の提出したレポート内容から、短い期間のサポートへの参加であったものの、指導者としての視点から、自分たちの専門(家政学・家庭科)とICTを活用した開かれた学びについての体験と学習や考察がなされていたように思う。今後は、さらに、学生が参加しやすく、その能力を発揮する機会をもつプログラム内容を工夫していくことが課題となるだろう。

- ③ 日本側の生徒：家政学とICTを活用した国際交流授業実践への参加を通じ、異文化や食と環境に関わる生活課題について学ぶとともに、コミュニケーションスキルや英語力を身につける。

生徒のアンケート結果を見ると、少なくとも異文化を学び、グループ活動(特に、日本の場合はパワーポイントファイルの作成)をとおして仲間とコミュニケーションをとり、英語の重要性を認識していたように思われる。今回の実践のみで英語力が身についたかどうかを判断することは難しいが、その後の高校からの報告によれば、参加した学生の中には、今回のグループ活動で取り組んだ課題をテーマに地域のスピーチコンテストへ出場をして入賞した学生がいたという。また、この国際交流プログラム修了後も、そこで得たテーマや関心事項をトピックスとした英語授業が展開したという。このことから、今回の国際交流プログラムは、確実に、生徒たちの英語の学び方へ影響を及ぼしていたようである。しかしながら、「食と環境に関わる生活課題」については、グループ活動の課題として提示したものの、生徒たちにうまく理解させることができなかった。課題内容の不明確さもその要因の一つであると考えられるが、一方で、「英語」の授業の中では、どうしても英語そのものを習得することに焦点があたってしまうため、例えば今回のように家政学や家庭科などの専門知識を取り扱うには、その専門知識について理解をするための教材準備とそれらを学ぶ十分な時間が必要であることを痛感した。

- ④ シンガポール側の生徒：家政学とICTを活用した国際交流授業実践への参加を通じ、A)日本の食文化を学ぶとともに、B)食と環境に関わる生活課題について学び、コミュニケーションスキルを身につける。

生徒のアンケート結果から、シンガポールの生徒は、目的をほぼ達成していたように思われる。それは、シンガポールの対象科目が「家庭科」であり、今回の国際交流プログラムでシンガポールの生徒に提示された課題2つがともに家庭科の日々の学習内容に重なっていたことや、日本の生徒に比べて授業時間が確保されていたためだと考えられる。また、シンガポールの教員の話によれば、シンガポールの生徒は、課題解決学習やグループ活動、パワーポイントプレゼンテーションをとまなう生徒参加型学習に慣れているということであった。そのため、そうした学習に必要な基本的なスキルを生徒たちがもっていたために、目的がほぼ達成されたことも考えられる。コミュニケーションについては、パワーポイントファイルの作成時には仲間とのつながりを深める一方で、多くの生徒は、語学の壁のある相手(日本の生徒)とのコミュニケーションの難しさも感じたようである。英語を母国語とする生徒たちにとっては、そうした体験もまた、言葉以外のコミュニケーションの大切さや異文化とのコミュニケーションを考える貴重な体験になったかもしれない。

## 8. おわりに

以上、平成20年度は、家政学とICTを活用した国際交流プログラムが円滑にかつ効果的に行われるようサポートする体制について、特に「LMSを活用したプラットフォームの開発と活用」に焦点をあてて研究を進めてきた。そこで明らかになったことはすでに述べたとおりであるが、効果的な国際交流プログラムを展開するには、プラットフォームのさらなる開発はもちろん、プラットフォームをうまく活用したプログラムをいかにデザインするかがキーとなることがわかった。そして、何よりも、国際交流プログラムを実践するには、参加者や企画者(生徒、学生、学校・大学レベルの教員等)の「英語」力が必要となるだけでなく、現在、世界規模でも求められている学力に対応した教育実践として国際交流プログラムを展開する場合(課題解決型、生徒参加型学習の導入)、参加者には従来とは異なる多様なスキルが必要とされることも確認した。

今後は、本研究で明らかになった知見を反映させたプログラムの開発と実践をさらに進めるとともに、そうしたプログラムの開発と実践をサポートする体制のあり方(大学における英語教育、e-learning教育、教員を志望



する学生の学習支援能力開発教育等も含む) についても、引き続き検討をしていきたい。

なお、本稿では、平成20年度に行った実践報告をまとめることが主となったために、実践の背景となる理論については深く触れることができなかった。今後は、プログラム開発とその実践を支える理論体系の構築も図っていきたい。

## 引用文献

- 1) 山口厚子・白井靖敏、質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その1)－国際交流プログラム企画・ホームページ作成(中間報告)－、総合科学研究、第1号、pp.91-93、(2007)
- 2) Yamaguchi Atsuko, Ong Chiew Inn, Hirayama Yoshitaka, and Shirai Yasutoshi, Case observation of the Singapore-Japan international exchange program based on home economics at the secondary education level through Information and Communication Technology, The 14th Biennial International Conference of Asian Regional Association for Home Economics : Congress Proceedings, CD-ROM, (2007)
- 3) 山口厚子・白井靖敏、質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その1)－国際交流プログラム企画・ホームページ作成－、総合科学研究、第2号、pp.1-7、(2008)
- 4) 白井靖敏、山口厚子、平山欣孝、Chiew Inn ONG、ICTを用いた国際交流授業におけるメーリングリストの内容分析と課題、名古屋女子大学紀要第54号 人文・社会編、pp.169-176 (2008)
- 5) 白井靖敏、山口厚子、ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その2)～、総合科学研究、第2号、pp.99-102 (2008)

# 機関研究教育実践

## 幼児の育ち合いを促す保育実践

伊藤規子・井上智賀・川口真希・白木律子・皆川奈津美

森岡とき子・森部洋子・湯淺智子・渡邊和代

(幼児保育研究グループ)

### I. 3歳児「幼児の育ち合いを促す保育実践」 ～年長児との関わりを通して～

#### 1. ねらい

今年度は幼児の異年齢交流・仲間・自然・実体験等をキーワードとして、その育ち合いを促すための保育実践を見直しながら、教育課程の再編成を進めていくことをねらいとする。その中で特に集団生活が初めての経験である3歳児ということをもまえ、年長児との交流を多く持ち、年長児の遊びや生活の仕方を見て学び、憧れを持って意欲的に活動し安定した生活を送ることを目的とする。

#### 2. 研究内容

1年間を通して以下のことを計画的にカリキュラムの中に取り入れていくことにする。

- 4月 バスコース毎に、年少・年長のペアを決め、年長児が降園前に年少児の保育室へ迎えに行き、一緒に靴をかえて旗に並ぶ。降園の仕方や靴箱の位置を覚え、安心して過ごせるようにする。(1年間継続して行っていく。)
- 5月 給食：給食開始にあたり、年長児が行う準備や配膳の仕方を見ることによって、給食の流れを知り、楽しい雰囲気の中で食べられるようにする。  
園外保育(島田黒石第2公園)：年少・年長のペアで手をつなぎ、道路の歩き方を知りながら公園まで歩いていき、一緒に遊んでさらに交流を深める。
- 10月 園外保育(山根公園)：公園までの道のりを先頭と後方に年長の2クラス、真ん中に年少3クラスが並んで歩く。自分のやりたい遊びをする他、年長児と交流して遊ぶ。

11月 手作りのゲームで遊ぶ。：年長児がグループ毎に作ったゲームの説明を聞き、一緒に遊ぶ(魚釣り、玉入れ、パズル、すごろくなど)。

3月 お別れ会：バスコース毎に分かれ、ペアの子を中心に年中児も一緒にゲームをしたり、弁当を食べたりする。またプレゼント交換をして、今までの感謝の気持ちを表す。

#### 3. まとめと今後の課題

今年度、1年間を通して計画的に“年長児との関わり”を持つ活動を取り入れることで、憧れを持って意欲的に活動し、安定した生活を送ることを目的とした。この取り組みの中で、3歳児にとって初めての活動(登降園の仕方、給食、園外保育など)に対しての不安や緊張がやわらぎ、スムーズに取り組んでいける姿を見ることができた。また、ペアになった年長児に対して自分の本当の兄弟のような親しみを持ち、頼れる安心感を持つことができたように感じられた。この実践により、普段の遊びの中でも自然に他学年の遊びにとけこんでいたり、良い刺激を受けたりして、それを自分たちの遊びの中に取り入れていく様子も見られた。

しかし、中には子ども同士の相性が合わずトラブルになったり、年長児の強引さに“怖い”と感じてしまったりするケースもあった。また、反対に年長児がやってくれることに対して、自分でできることも甘えてしまうという姿も見られたため、その都度対応をしてきたが、不十分な面もあった。

今後は教師として子どもたちの様子をよく把握し、足りない言葉を補ったり、相手の気持ちを理解できるよう援助したりすることに気を配っていきたい。そして、来年度も今年度のことをふまえ、計画的に関わりを深める活動を取り入れ、子どもたちの育ち合いを促すことができるよう研究を進めていきたい。



## Ⅱ. 4歳児「幼児の育ち合いを促す保育実践」 ～リズム、運動あそび園外保育での 身体活動を通して～

### 1. ねらい

学年集会という形で年間を通してリズムあそびを取り入れ、豊かな感性や表現力を育むこと、又運動あそびを行う中で、自分の身体を意識して動かすことを実践する。その中で友だちを認めたり、応援する気持ちが育っていくように配慮して進めていく。そしてこの活動から育つ心身の向上を活動の中で展開していく方法として園外保育を取り上げ、その取り組みにおける子どもの育ちをおっていく。園外保育ではできるだけ自然の多い場所を選び設定する。

### 2. 研究内容

#### (1) 学年集会と運動あそび

2クラス合同で音やリズムに合わせて体を動かしたり、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わえるような活動を年間継続して行う（基礎リズム、聴音、音の聴き取り、表現あそび、体のいろいろな部分を意識した遊び）。その他にお話あそび、巧技台、平均台、マット、フープ、トランポリン等を用いての運動あそびを取り入れていく。

#### (2) 研究保育

日頃行っている保育内容について検討し、細かい実施案を作成し、他の教員と協議、反省を加えることでよりよい表現力の育成や、運動あそびの方法について考える。今年度はホールで2クラス行うのではなくクラスの部屋（すみれ組のみ）で行ってみた。

#### 〈ねらい〉

ホールでの実施とは異なる身体の動きを取り入れてみることで、どこに気をつけていくのか自分で意識して運動あそびに挑戦する。

クラスの友だちを応援する気持ちを持ち、喜びを共有する楽しさを知る。

#### ・なわとび（へびとび）

なわとびの基本となる遊びで、連続して跳ぶ動きにつなげていけるように行っていく。

#### ・マット（たてひざ歩き）

ひざをついてバランスをとりながら歩く。2人ずつ行うことで少し競争の要素も取り入れてみる。

#### ・平均台（はいつき歩き）

平均台の上におなかをつけて、手と足を使って前進する。

#### ・平均台（足かけわたり）

平均台に足をかけ、下にひいたマットの上を手をつけて横にバランスをとって進む。

\*やり終わった子は周りで応援する。

### (3) 園外保育

山の登り降りを経験するとともに、十分に身体を使って歩くことを意識できる自然の多い場所を選んで計画する。

5月23日一天白公園

7月10日一黒石第1公園

10月8日一黒石第1公園

10月20日一天白公園

10月21日一東山動物園

11月10日一オアシスの森

3月2日一オアシスの森

3月9日一ツ山第1公園

### 3. まとめと今後の課題

5月より学年集会で週1回のペースでリズムあそびを主とした学年集会を行った。初回より裸足で行うことで足先の感覚を大切にするとともに、リズムに合わせて動く中で心身を開放して心に思ったことを身体で表現していけるように進めていった。また自分の体を意識して動かせるようにするために、運動あそびも同じ時間に行っていた。しかし、リズムと運動を一回の時間内に行うことは、集中力が散漫になる傾向が見られたため、10月よりリズムと運動あそびを交互に進めていくこととした。その結果、リズムの日は最後に行うお話あそびにもじつくりと集中できて楽しんで表現する様子が見られた。運動あそびの日は基礎リズムのみ、後は運動のみにしたところ、各自意欲をもって活発かつ慎重に参加することができていた。また頑張っている友だちを応援したり自分も友だちを目標にして頑張ろうとする姿が見られてきた。こうした中で育った身体への動きや意識が園外保育での山歩きの体験において友だちと互いに支え合う行動に生かされていると考える。今後もリズム、運動あそびの細かな計画を立てるとともに、実際の体験の中で子どもたちの体と心がよりたくましく育っていくことを願い計画と実践を続けていきたいと考える。

### Ⅲ. 5歳児「幼児の育ち合いを促す保育実践」 ～年少児との交流を通して思いやりの気持ちを育む～

#### 1. ねらい

年長児として、自分より年下の年少児との関わりを通して、人を思いやる気持ちを持つことができるようになったり、年下の子に対してだけでなく、人に対してどのように接したらよいかのかかわり方を考える機会をもち、その中で子どもの育ちを捉えていく。さらに教師としての援助のあり方について検討する。

#### 2. 研究内容

一年間を通し以下のことを計画的にカリキュラムの中に取り入れていくことにする。

5月 年少児のお迎え：降園時、コースごとに決められたペアの子を、各保育室まで迎えに行く。年少児への接し方や声のかけ方を考えるきっかけづくりのはじまりとなる。

年少児の給食準備の手伝い：年少児がはじめて給食を行うため、進め方や気をつけること等を年長児の姿を通して伝える。

外保育（島田黒石第2公園）：年少児とペアになり手をつないで公園に出掛ける。年少児を優先させたり、遊具の遊び方を教えたりと相手を気にかける姿が見られた。

6月 年少児との交流：年少、年長の5クラスに2学年の子どもが半分ずつになるように分かれ、それぞれの保育室でゲームをしたり、給食を食べたり、室内あそびを楽しむ。年少児に分かりやすくゲームのルールを教えたり、給食の手伝いを通して、年少児の気持ちを考えながら交流することができた。

10月 園外保育（山根公園）：先頭と後方に年長の2クラス、真ん中に年少3クラスが並んで公園まで移動する。自分のあそびを楽しみながらも、年少児を気にかけて、自然にかかわる姿が見られた。

11月 年少児にプレゼントするおもちゃ作り：グループで年少児が使いやすく、興味が持てるようなおもちゃを話し合い、廃材を利用して作る。  
手作りのゲームであそぶ：年少児にプレゼントするおもちゃをホールに設定し、各グループごとに

あそび方の説明をする。あそびに来てくれた年少児には、それぞれが役割分担をしながら教える姿が見られた。

3月 お別れ会：バスコース別に分かれて、保育室でゲームをしたり歌を歌ったりしてあそぶ。また、外に出て年少児や年中児と一緒に弁当を食べる楽しむ。

#### 3. まとめと今後の課題

今年度一年間を通して「年少児との交流」を活動の中に取り入れた。子どもたちは「年長」になった喜びから年少児の手伝いをするに意欲を高めており、その気持ちを受け止め、大切にしながらも負担にならないよう進めてきた。年少児と交流をするにあたり、クラスではじめての園生活を不安に思う年少児に、どのように接したらよいかなどを子どもたちに話を聞いたり、優しく接することができた子を皆で認め合ったりしながら子どもたちと考えてきた。降園時に、年少児の部屋まで迎えに行き、一緒に手をつないで旗に並ぶことは例年行ってきたことだが、今年度はそれに加え給食当番の手伝いや、一緒に手をつないでの園外保育などを行ってきた。縦割り保育で年少児と一緒に歌をうたったり、給食を食べたりして一日過ごす、という活動は今年度初めて取り入れた。こうした交流を重ねていくうちに、子どもたちの姿が少しずつ変わり、同じ年の子に対する接し方と違い、準備ができるのを待っていたり、優しい言葉で話しかけたり、公園では手をつなぐ子の姿が見えなくなって一生懸命探す姿が見られたり、様々な活動を通して子どもたちなりに相手を思いやりながら接することができるようになった。しかしその反面、年少児が2学期あたりから園生活にも慣れ、自分で動けるようになってきたことで自分の思い通りに動いてくれないことに対して手を出してしまったりするなどのトラブルも出てきた。年長児の気持ちを聞き、今まで頑張ったことを十分認めたうえで、手を出してしまうことは良くないことを伝えていった。教師の援助としては十分な受け止めができていなかった表れだと感じた。

今年度、交流を重ねていくことで、様々な場面で相手の気持ちを考える、相手を思いやって行動することに気づくことができたように思う。今後は、年長児の気持ちの変化、負担をかけすぎているかなども十分考慮して援助しながら進めていきたい。

## 新学習指導要領の本校教育への展開

(中学校学力向上研究グループ)

### 1. 目的

- (1) 平成20年3月28日に公示された「新しい学習指導要領」(以下、新要領)の内容をよく理解した上で、新要領の趣旨を生かした授業づくりを研究し、その成果を授業実践に生かして学力向上へと結びつける。
- (2) 昨年度の研究活動において全体計画の概要作成まで進めた「道徳」に関して、これを更に推し進め、新要領の内容を反映させた全体計画の素案として提示する。

### 2. 方法

上記の目的を達成するために、以下の2点に重点を置き研究と実践を進めていく。

#### (1) 公開授業

新要領の趣旨を生かした授業づくりを研究し、マイクロティーチングを含めた内容検討を経て授業実践へとつなげ、今後の更なる授業改善の可能性を探る。

#### (2) 道徳授業の研究

各学年での実践記録を元に、新要領の趣旨を踏まえた道徳授業の全体計画について、素案を提示し、日頃の道徳教育のあり方や他教科との連携のあり方を探る。

### 3. 実施

#### (1) 研究会 (第137～140回)

4月30日(水)、6月24日(火)、10月28日(火)、11月25日(火)

#### (2) 公開授業

- ① 6月24日(火) 第6限  
中等部3年C組 (Mクラス) 数学  
学習内容「関数 $y=ax^2$ の値の変化」  
テーマ「『式』『表』『グラフ』の関係を実感する授業づくりのくふう」  
授業者 村瀬 慎一 教諭

関数の学習について、単なる計算に留まらず、図やグラフを描画したり活用したりする数学的活動を通して、

数学的見方や考え方のよさを実感させる授業づくりを目指して、表の有用性を再認識させ、式と表とグラフが有機的に結びついてくるような生徒の実感を引き出すくふうに焦点を絞って研究を進めた。

- ② 10月28日(火) 第6限  
中等部2年C組 理科  
学習内容「生命の進化」  
テーマ「『生物の変遷と進化』を中学2年生でどう扱うか」  
授業者 中野 容子 教諭

事物、事象を「調べる」学習から「探求する」レベルに高める授業づくりを目指して、

- ・学習材としてカメを扱うこと
  - ・立体的な模型を用いること
  - ・写真や動画などの視覚教材を使うこと
  - ・生徒が見たり考えたりする時間の確保
- の4点について工夫してみた。

- ③ 11月25日(火) 第6限  
中等部1年B組 社会  
学習内容「中世の文化」  
テーマ「新学習指導要領の論旨の展開をはかるために ～学習者が文化と時代を関連づけて理解できる授業の工夫～」  
授業者 山本 暁太 教諭

鎌倉時代の仏教が生まれた背景を、時代の成り立ちや当時の世相と関連づけて理解できるような授業の工夫をすることで、学習者が時代背景や社会の様子と文化との必然的な結びつきを感じ、そこから更に深く掘り下げて探求していくことができるような授業づくりを目指した。

#### (3) 第26回研究発表会

- ① 日時  
2月19日(木)  
午前2時～午後4時50分



## ② 研究授業 第4限

中等部2年A組 国語

学習内容「漢詩の世界」

テーマ「古典作品から文章構成を学ぶ授業」

授業者 奥村 彰敏 教諭

新学習指導要領（国語）において新たに設定された「伝統的言語文化に関する事項」について、古典を味わいながら、文章構成や表現技巧についても知識や理解を深めていく授業づくりを目指した。漢詩を学ぶ中から、「起」「承」「転」「結」という構成法が、自分たちの身近に見られることに気づくような工夫を試みた。

## ③ 研究発表

## ① 「新学習指導要領の本校教育への展開 ～古典作品から文章構成を学ぶ授業～」

発表者 奥村 彰敏 教諭

## ② 今年度の研究について

- ・新学習指導要領の本校教育への展開
- ・本校の道徳における全体計画の素案

発表者 福田 誠 教諭

## 〔4〕夏期研究合宿

## ① 日程

8月5日(火)～8月7日(木)

## ② 訪問地 三重県桑名市

## ③ 研究協議

新学習指導要領の本校教育への展開についての検討と討議

## 4. 成果と課題

## (1) 新学習指導要領の本校教育への展開について

3度の公開授業と研究授業を通じ、新要領の本校教育への展開についてさまざまな角度からのアプローチを模索することができた。

それぞれの授業に向けた研究を進める上では、新要領の趣旨をできるだけ早く理解し、自分自身の授業づくりに生かしていこうとする先生方の意気込みに溢れた夏期研究合宿での長時間に亘る研究協議や、マイクロティーチングを活用した模擬授業の繰り返しによる授業者の改善努力がずいぶん実を結んだように感じる。

今般の改訂は教育基本法、学校教育法の改正に基づくものであり、その改正の根幹をじゅうぶん意識しながら

授業づくりを進めていくことが大切であるという認識を教員間で共有することができた。

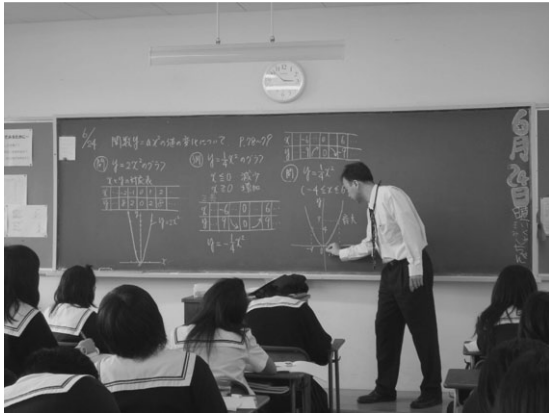
## (2) 本校の道徳における全体計画の素案について

昨年度来続けてきた、各学年における道徳実践の記録を基にして、本校道徳教育の全体計画に関して素案を提示することができた。

今後は3学年の発達段階に応じた系統性を更に明確にし、道徳の授業で活用することのできる具体的な資料（読み物資料、学習材等）をできるだけ豊富に盛り込んだ計画として進化させていく必要があると感じている。

## (中学校学力向上研究グループ)

鈴木 文 悟	堀 出 稔
大 西 裕 人	澤 村 信次郎
鬼 頭 和 代	福 田 誠
岡 田 有希子	高 山 嬉 加
奥 村 彰 敏	山 本 暁 太
中 野 容 子	村 瀬 慎 一
神 谷 弘 子	鵜 飼 良 治
野 中 知 里	細 井 孝 徳
近 藤 裕 次	荒 井 あゆみ
サルバジョン 有 紀	



公開授業（村瀬教諭）



第 137 回研究会



公開授業（中野教諭）



公開授業（中野教諭）



公開授業（山本教諭）



研究授業（奥村教諭）

# 高校生の学力向上に関する研究

水谷禎憲・江本幸司・長谷川聡・安藤友一・坂井健悟

手島恭子・平川理基・加太良枝・片岡彌生

(高校生学力向上研究グループ)

## 1 目的

総合科学研究所と連携した高等学校の研究活動も2年目を迎えた。昨年度に引き続き掲げた「高校生の学力向上に関する研究」は大きな幅のあるテーマである。「学力とは何か」と問えば、いくつもの見解があり、議論はつきない。今回われわれが取り組むことにしたのは、大学入試でも通用できる確かな「学力」の向上である。現在高等学校ではⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類の3つのコースに分けられ、それぞれ特色のある教育を展開している。中でもⅠ類は国公立大学・難関私立大学への進学を目指した授業を展開している。さて大学が求めている学力とは何か。このことを明らかにして、生徒の主体的な学びや表現力、問題解決能力や課題設定力などを培い、指導に役立てようと考えた。そして、その学力は大学での研究活動はもとより自己の人生を切り開く生きる力に通じると考えた。

学力向上を進めている県外の学校の研究会を視察したり、講演を伺ったりして研究を深めると同時に、研究授業を実施することとした。

## 2 方法

今年度の取り組みをより確実なものとするために、以下のことに重点を置き具体的な検討を進めていく。

### (1)他校研究会参加

県外の学校の研究会を視察し、どのような実践を通して学力向上を図っているか研究する。

### (2)研究授業

国立大学の二次試験問題の検討を踏まえ、大学が求めている学力の考察を行い、生徒の学力を伸ばす授業実践を行う。今年度はメンバー全員が授業発表を行うように計画する。

### (3)講演・学習会

学力向上・授業改善などの分野で功績を挙げた研究者を招き、自分自身の指導の中に生かせるよう検討・学習する。

## 3 結果

### (1)他校研究会参加

#### ①・日時：11月14日(金)から11月15日(土)

・名称：第10回京都市立堀川高等学校研究大会

・派遣者：安藤友一・手島恭子・江本幸司

・主な内容：全体会・公開授業・研究授業・分科会  
探求科目説明会・探求科目発表会  
特別講演（講師辰野裕一東京大学理事）

特別講演において以下の話があった。

大学の4つの役割は「教育」「研究」「社会貢献」「人材育成」である。そのために、教育の焦点をどこに合わせるか。東京大学では、リベラルアーツ（教養）教育に非常に力を入れている。大学側から見て、今の教育において気をつけておいてほしいことは3つある。それらは「教育のパラドックス」、「新しいものに注意」、「タイムラグ」の3つである。「教育のパラドックス」とは、つまり、教育は理念どおりの成果がでるとは限らないということである。教育は人を対象にしているため、必ずしも思惑通りにいかないのである。大学の法人化も、それによって個性を追求していったはずが、逆に画一化されたような結果になってしまった。学習指導要領の改訂についても、生徒の個性を尊重した教育を目指したはずが、自分で考えることのできない生徒を生み出してしまったような感が否めない。また、現在たくさんの学校が改革を掲げているが、成功する改革の3原則を挙げる。1つ目は、内発的な改革。人を動かすのではなく、動かす気にさせることが大事であり、堀川高校においては「自分の子供を入れたい高校をつくる」ということをコンセプトに全職員が内発的に動いたので、奇跡の学校と呼ばれたのである。2つ目は、連続的な改革である。過去を全部否定するのではなく、現在あるものをどう活用するかを考えたほうが良い。自分の手持ちの札から、要らないものを捨て、ある札で考えていったほうが成功する確率が高い。最後に、持続的な改革である。続けることができないほど、複雑なものは意味をなさない。大切なのは原点回帰であり、学校は教育の場、教師は教える仕事、それを忘れてはならない。

#### ②・日時：11月21日(金)から11月22日(土)

・名称：筑波大学付属駒場中高第35回教育研究会



- ・派遣者：坂井健悟・長谷川聡・加太良枝
- ・主な内容：公開授業2コマ各科目・研究協議会講演会・体験講座

筑波大学付属駒場中・高等学校は現在SSHの新たな5ヵ年計画の過程にあり、サイエンス・コミュニケーション能力の育成や各種科学五輪を視野に入れた国際化対応を目標としており、また、筑波大学が行う教員免許更新講習会への参加という新たな課題を担うこととなった。そこで、2008年度教育研究会では、「新たな中高6ヵ年教育の創造をめざして」をテーマとすることで、教員による指導、生徒による学び合い・教えあい、教員以外の専門家の参加など、さまざまな知の組み合わせを通じた新たな教育開発への可能性を示しながら、併せて教員免許更新制などへの対応を模索していった。研究会では1日目に、国語・社会（地歴・公民）・数学・理科・保健体育・芸術（工芸）英語の公開授業と研究協議会を行い、2日目に、筑波大学教授・小林汎氏による講演会「教員免許更新制度－筑波大学が開講する講習会－」と来校者も参加できる特別企画「生徒と教員がつくる体験講座－新たな学びの標を求めて－」が実施された。

③・日時：12月6日(土)

- ・名称：第58回筑波大学附属高等学校研究大会
- ・派遣者：平川理基・片岡彌生
- ・主な内容：講演会・公開授業・教科分科会

大学受験への準備は生徒たちが予備校や自学自習などで対応している。生徒たちが学校に求めていることは受験対策よりも、考える力を養うことである。毎年1回秋季又は冬季に全国の関係学校、教育研究所、筑波大学などから多数の参加者を得て、公開授業および教育課程・教材指導・特別教育活動その他の教育問題について研究を発表し、いくつかの部門について、参加者との協議・研究を行っている。

(2)研究授業

- ・日時：12月16日(火)9時50分から16時10分
- ・研究協議：1月31日(土)

①第2限 3年選択あ 公民科「現代社会演習」

テーマ 「生徒自ら課題を追究する授業づくり」

授業者 長谷川 聡教諭

高校における調べ学習は、どのような形で授業に活かすべきだろうか。高等学校学習指導要領では、「主体的に課題を追究させるよう工夫すること」とある。この学習指導要領と軌を一にする動きとして、入試問題も変わりつつある。特に顕著なのがセンター試験における傾向の変化である。近年のセンター試験では「レポート作成

上の注意事項に関する記述」や「レポート執筆にいたる流れ」に関する問題(2007年)、「レポートをまとめていく方法」に関する問題(2008年)といった、指導要領の新しい変化に則った問題が登場してきている。こうした現状を認識した上で、授業もそれに対応したものとなっていくべきであろう。このような視点から、今回はグループに分かれて調べた内容をもとに、その内容を掘り下げながら、一人ひとりが最終的にはレポートを作成する、ということを目指して授業を組み立てる授業実践を行った。

②第3限 2年9組 英語科

テーマ 「グループ発表を通して発信の力を養う授業づくり」

授業者 加太 良枝教諭

英語は意思疎通の道具である。従って理解と伝達、双方の力が必要である。例えば、ここ最近の大学入試問題を見てみると、東京大学などでこの双方の力を問うような出題が見られる。即ち、与えられた題材に関して、その問題点を指摘し、より良い改善案を英語で提示するといった形式の問題である。このような、課題を提示して解決策を提案するような学習は、むしろ大学で行われることが多いのだが、その前段階の入試問題についても見受けられるようになってきた。こうした問題では、英語を伝達手段としつつも、与えられた題材に対して、自己の知識や経験を元にしながらより良い解決策を示すための表現力が求められる。そのためには、普段の授業の中で教科書内容を正確に把握するような学習にとどまらず、与えられた題材に対して、学習者自身が広がりを持たせるような情報収集をしたり、集めた情報から更に理解を深めたりしながら、最終的にはその学びの成果を分かりやすく発表するためのトレーニングが必要であると思われる。そこで本研究では、二学期後半に教科書で扱ったLesson5「言語の消滅は心配すべきことですか」を学習材として、グループ発表という形態をとりつつ、題材に沿った情報を収集し、そこから理解を深め、発信するという授業形態を試みた。

③第5限 2年4組 英語科

テーマ 「生徒の英文読解力を向上させる授業づくり」

授業者 手島 恭子教諭

高等学校学習指導要領の外国語(英語)で求められる力には、聞く、話す、読む、書くの4つがあるが、大学入学試験の筆記問題においては、とりわけ読解力が求められていることは論を待たない。特に、初見の英文の大

意を把握し、読み取り、正答を導き出すことは、入試において重要である。昨年度の大学入試センター試験では、前年度までの会話文を題材とした出題に変わり、第5問のように図を見てその説明文を結びつける問題が出題されたり、第6問のように段落ごとの内容について出題されたりするなど、短時間で英文の要旨を理解する力を要求する問題が出題されるようになった。また、国公立大学や私立大学の2次試験においても、いわゆる長文問題により多く配点される場合が多い。本研究においては大意を把握する力をつける授業づくりを目指した。特に、力点を置いたのは、長文を読む際に登場人物や場面、時間の経過などに着目して読み進め、要約してみることで、内容把握を確実にしていくという活動である。このような学習活動を繰り返し行うことによって短い時間の中で全体の要旨を把握し、それが英文読解力の向上につながっていくという生徒の姿に期待して今回の授業実践を行った。

#### ④第6限 3年4組 地理歴史科「日本史B」

テーマ 「史料から歴史を読み解く力を育てる授業づくり」

授業者 江本 幸司教諭

「大学が求める学力」とは何か、日本史Bの入学試験問題を精査すると、そこには与えられた材料から発展して考える力が必要であると考えられる。ただ単なる歴史的事項の記憶の羅列ではなく、記憶した（勉強した）ものを材料と組み合わせて、生き活きとした歴史として立体的にとらえる力こそ本当の力であろう。その力は、受験生が大学入学後に、主体的に研究を行っていく力へと繋がるものであろう。よって、高等学校の日本史Bの授業においても、歴史事項の羅列的な授業だけではなく、学習した歴史的事実を基礎にして、史料をもとに生き生きとした歴史に組み立てる授業も必要である。今回の授業に当たって、古地図をもとに、そこから得られる情報から歴史を考察することを試みる授業実践を行った。

#### ⑤第7限 2年4組 国語科「現代文」

テーマ 「文章の構造的理解を深める授業づくり」

授業者 片岡 彌生教諭

高校の第2学年で扱う「現代文」では、指導要領に「論理的な文章について、論理の展開や要旨を的確にとらえること。」とあり、文章読解の「論理性」を重んずる点において、第1学年の「国語総合」との指導内容の違いを見せている。一方、昨今の高校生の読書体験は、インターネットなどのメディアを通じて、同世代の若者が

彼らに共通した感覚を思い思いに描いた文章によるものも多い。広く親しまれてはいるものの、抽象的概念や難解な語句、表現を駆使し、論理的に書かれた文章に触れる機会は少なく、読むこと自体慣れない傾向も見受けられる。そのため、日常の授業で、評論的文章を扱う際、語句の意味や表現を解説しながら、段落のはじめから順に少しずつ「精読」をはかって読解していく方法を取りがちである。しかし模擬試験やその他、国公立大学の2次試験では、限られた時間内に、まとまった文章を読み、筆者の主張をその展開をふまえて大まかに捉える力こそ、高校生の文章読解能力として当然身につけておくべき学力とされていることがわかる。そこで、本研究では、「文章の構造的理解を深める授業づくり」と題し、文章全体の展開を意識しながら理解し、話題に対する筆者の意見を的確に捉えて主旨をつかむ力を養う授業実践を行った。

#### (3)講演会

- ・日時 1月31日(土)午前10時30分から12時
- ・演題テーマ 「学力向上を目指す授業改善のあり方」
- ・講師 工藤 文三 (国立教育政策研究所)

講演会では、「学力の向上を目指す授業改善の在り方」というテーマでお話を伺った。学習指導要領の改訂に伴う今後の学力観について、また学力と評価の関係、授業改善の視点や方法など具体的で豊富な事例をもとにお話をしていただいた。特に、学習の評価については今後の研究活動でも参考にしていくべき内容であった。また、授業改善に向けた校内体制と校内研修の話はわれわれの行っている研究活動においても大変参考となる内容であった。教科・学年を超えての授業に共通のものを明確にし、授業に対する視点や枠組みを作ることの大切さを改めて感じた。また、中高一貫教育の在り方について、一貫教育の特性や取り組み方において参考となるお話を伺うことができた。





公開授業（長谷川教諭）



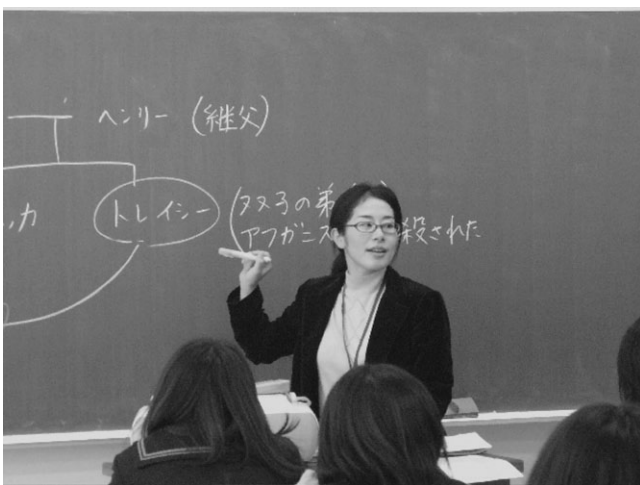
公開授業（江本教諭）



公開授業（加太教諭）



公開授業（片岡教諭）



公開授業（手島教諭）



教育講演会（工藤文三先生）



# 事業報告

- ・平成 20 年度開かれた地域貢献事業
- ・平成 19 年度教育講演会

## 開かれた地域貢献事業（平成20年度）

## 「みんなで遊ぼう！一子どもから高齢者まで」（中間報告）

遠山佳治・渋谷寿

## 1. はじめに

総合科学研究所では、本学が地域社会と関わりを持って社会的活動を推進する目的で、一昨年度より「開かれた地域貢献事業」を始めました。初年度は、同窓会キャリアネットワークもえぎ塾と当時の所長河村先生が主となり、瑞穂通三丁目市場を中心に展示・バザーなどを開催しました。昨年度は、「春待ち小町」と題して、短期大学部生活学科が中心となり、地域住民のご協力も待ってミニ文化祭を開催し、2月の冬夜に本学中庭にて桜のイルミネーションを咲かせました。

今年度の「開かれた地域貢献事業」は、本学文学部児童教育学科と短期大学部保育学科の教員が中心となって、再び本学から外に飛び出して、幼児を対象とした子育て支援活動（地域の子どもたちに対する遊び力育成のワークショップ「キッズチャレンジ」）を推進したいという主旨で企画を起こしました。この企画を中心的に推進したのが、総合科学研究所主任の渋谷と、総合科学運営委員会委員長の遠山です。総合科学研究所が支援する行事のため、企画の中心人物に総合科学研究所に関連した教員が望ましいという考えの下で進められました。

## 2. 目的

当初、名古屋市瑞穂児童館との共催で、企画を練り始めましたが、その協議の折に、平成21年3月26日(木)に名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館新館が、名古屋女子大学中学校・高等学校および学生寮の近くに開館されることを耳にしました。そこで、保育系・家政系・福祉系をもつ高等教育機関である本学として、今年度の「開かれた地域貢献事業」は開館記念イベントとして、名古屋市社会福祉協議会、児童館・福祉会館とともに主催する形で、『地域の子育て支援&福祉活動』を行うこととなりました。その開館イベントに協力することにより、地域における子育て・福祉支援とそのネットワークづくり（地域社会全体で子育て・福祉を支援する仕組み）に参加する第一歩と考えています。

## 3. 経過

## (1) 総合科学研究所運営委員会

第2回運営委員会（6月26日）で方針を決定した後、名古屋女子大学同窓会「春光会」のご協力も得ること

ができ、「総合科学研究所だより」7号（9月発行）に予告という形で企画の概略を掲載しました。そして、第3回運営委員会（10月10日）で具体案を提示しました。第4回運営委員会（12月12日）および第5回運営委員会（2月13日）では、経過報告を行っています。

## (2) 名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館との協議（於名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館旧館）

## \*第1回協議／9月11日(木)10:00～12:00

児童館の方と、大まかな方向性について審議検討した。参加者／児童館館長長谷川氏・担当職員林氏、本学（渋谷・遠山・鈴木）

## \*第2回協議／10月22日(水)10:00～12:00

はじめて社会福祉協議会および福祉会館の方と協議し、対象を子どもだけに留めず、高齢者まで視野に入れた支援活動を展開して欲しいとの要請を受けた。参加者／名古屋市社会福祉協議会施設福祉部次長田端氏、福祉会館館長梶氏、児童館長谷川氏・林氏、本学（渋谷・遠山）

## \*第3回協議／12月17日(水)10:00～12:00

児童館・福祉会館側と大学側との行事・イベントの具体的内容・進行案の説明を行い、細部にわたる調整を図る。

参加者／名古屋市社会福祉協議会田端氏、福祉会館梶氏、児童館長谷川氏、大学（渋谷・遠山・浅井）

## \*第4回協議／1月21日(水)10:00～12:00

チラシの内容・配付方法および当日や準備における具体的な打ち合わせを行う。

参加者／名古屋市社会福祉協議会田端氏・小野氏、福祉会館梶氏、児童館長谷川氏・林氏、大学（渋谷・遠山・浅井）

## \*第5回協議／2月25日(水)10:00～12:00

チラシの受け渡し、および事前調整を行う。

## (3) 学内関係教員と春光会による会議

## \*第1回会議

1月7日(水)10:00～12:00／汐路学舎

## \*第2回会議

2月3日(火)12:30～13:30／汐路学舎

## 4. 内容（予定）

(1) 全体の行程案

記念式典終了後より、各種イベントをブースごとに開始する。そして、午前の部、午後の部に分けて、それぞれの最後に全体としてホールにて人形劇・紙芝居と福引き(原則各ブースのスタンプラリー完了者対象)を行う。

11:00～12:30 各ブースでのイベント

12:30～13:00

全体催事/人形劇・大型紙芝居と福引き会

13:00～15:00 各ブースでのイベント

15:00～15:30

全体催事/大型紙芝居・人形劇と福引き会

(2) 各ブースの内容

- \* 「キッズゲームコーナー！」(瑞穂児童館職員など)
- \* 「紙でワン・ツー・スリー！」(文学部児童教育学科宇野民幸先生/算数はてなゼミ学生)
- \* 「いっしょに遊ぼう！」(文学部児童教育学科鈴木方子先生/保育内容の研究ゼミ学生)
- \* 「音を楽しもう！」(文学部児童教育学科小林田鶴子先生/音楽第1ゼミ学生)
- \* 「ヒノキを使っておもちゃをつくらう！」(文学部児童教育学科渋谷寿先生/造形ゼミ学生)
- \* リサイクルおもちゃづくり「エコワンダーランド」！(短期大学部保育学科 遠山佳治先生・平井孔仁子先生・幸順子先生・清水一巳先生/保育学科学生)
- \* なつかしい思い出に花を咲かせましょう～子どもの頃の遊びの思い出で回想法「懐かしい遊びをしてみましょう」(家政学部生活福祉学科梅本充子先生/高齢者介護予防ゼミ学生)
- \* 乳幼児の食育相談・高齢者の栄養相談(名古屋女子大学同窓会「春光会」管理栄養士小原玲子氏・衣川美智子氏・構美千代氏、河村瑞江顧問)

5. おわりに

残念ながら、このイベントの実施は、3月26日のため、本原稿入稿後に行われる予定です。そのため、実際には内容等で一部変更が生じる可能性もあります。実施の総括は次号にて簡単に触れさせていただきます。

**みんなで遊ぼう!**  
子どもから高齢者まで  
参加無料

名古屋瑞穂児童館・瑞穂福祉会館、名古屋社会福祉協議会および名古屋女子大学総合科学研究所の主催により、瑞穂児童館・瑞穂福祉会館新館オープン記念イベント(平成20年度名古屋女子大学総合科学研究所の地域貢献事業)を行います。

子どもから高齢者まで、皆でおもちゃをつくって遊んだり、音あてクイズをしたり、人形劇・紙芝居を見たり楽しみましょう。乳幼児の食育相談、高齢者の栄養相談、試食コーナーもあります。ブースを回ったスタンプラリー参加者は、福引きにも参加できます。小さなお子さんは保護者同伴でご参加ください。参加費無料ですが、各ブースで材料が無くなった場合は終了します。

開館記念祝賀会  
児童館・福祉会館/両館

キッズゲームコーナー!  
瑞穂児童館職員など

リサイクルおもちゃづくり「エコワンダーランド」!  
名古屋女子大学短期大学部保育学科 遠山佳治 平井孔仁子 幸 順子 清水一巳 保育学科学生

いっしょに遊ぼう!  
名古屋女子大学文学部児童教育学科 鈴木方子 / 保育内容の研究ゼミ学生

音を楽しもう!  
名古屋女子大学文学部児童教育学科 小林田鶴子 / 音楽第1ゼミ学生

ヒノキを使っておもちゃをつくらう!  
名古屋女子大学文学部児童教育学科 渋谷寿 / 造形ゼミ学生

紙でワン・ツー・スリー!  
名古屋女子大学文学部児童教育学科 宇野民幸 / 算数はてなゼミ学生

なつかしい思い出に花を咲かせましょう  
遊子の思い出を  
名古屋女子大学家政学部生活福祉学科 梅本充子 / 高齢者介護予防ゼミ学生

健康チェック  
乳幼児の食育相談  
高齢者の栄養相談  
名古屋女子大学同窓会「春光会」河村瑞江 管理栄養士 小原玲子 衣川美智子 構美千代

開館記念特別展  
「学園の歴史——春子先生・和先生から今日の学園へ」  
一般公開・入場無料、休館日(土・日・祝日、学園休業日)  
開館時間 午前10時—午後5時  
名古屋女子大学 汐路学舎(名古屋瑞穂区汐路町3-40)  
地下鉄「瑞穂区役所駅」下車1階出口東300m ☎052-852-1111

「みんなで遊ぼう！」ちらし(表面)

**みんなで遊ぼう!**  
子どもから高齢者まで

プログラム

児童館

- 11:00-12:30 各ブースでのイベント
- 12:30-13:00 大型紙芝居と人形劇(ホール)
- 13:00-15:00 各ブースでのイベント
- 15:00-15:30 大型紙芝居と人形劇(ホール)

福祉会館 集客室

- 13:30-14:30 開館記念祝賀会  
コース、民謡、詩吟、大正琴、尺八、カワウ、日本舞踊、相撲甚句

名古屋瑞穂児童館・瑞穂福祉会館 〒467-0011 瑞穂区秋山町1丁目22番地

交通案内

地下鉄 ● 名鉄線「瑞穂区役所」より徒歩約15分

市バス ● 「大観町」より徒歩約5分  
系統: 栄20(瑞穂運動場)、金山14、瑞穂巡回

● 「大観町4丁目」より徒歩約5分  
系統: 栄20(瑞穂運動場)、金山14、16、瑞穂巡回

● 「瑞穂区役所」より徒歩約5分  
系統: 栄20(瑞穂運動場)、金山16、瑞穂巡回

当日は、駐車場の使用はできませんので公共交通でお越し下さい。

主催

名古屋社会福祉協議会・名古屋瑞穂児童館・名古屋瑞穂福祉会館/学校法人 越原学園 名古屋女子大学総合科学研究所

お問い合わせ  
名古屋瑞穂児童館 ☎052-852-2229 ☎052-841-1348  
名古屋瑞穂福祉会館 ☎052-841-3113 ☎052-841-1348  
名古屋女子大学総合科学研究所 ☎052-852-1934 ☎052-852-7470

企画・運営責任者  
名古屋瑞穂児童館 長谷川麻子  
名古屋瑞穂福祉会館 梶 正昭  
名古屋女子大学 遠山佳治 / 渋谷 寿

学校法人 越原学園  
越原記念館 開館  
平成21年3月27日(土) 午前11時30分～午後3時  
28日(日) 午前10時30分～午後3時

「みんなで遊ぼう！」ちらし(裏面)



平成19年度 教育講演会

## これからの道徳教育のありかた

香川大学教育学部 教育総合実践センター

七條 正典 氏

日 時：平成20年2月19日(火)15:00～16:30  
 場 所：名古屋女子大学中学校・高等学校  
 参加者：62名（中学校・高等学校教員49名、大学・短期大学部教職員13名）

### ■学習指導要領の改訂に関して

少し高いところからでございますが、よろしくお願ひいたします。ピンチヒッターということで、最初は名古屋ということをやったときに講演のことよりも、「明日のお昼は何を食べようか」ということで、しばらくひつまぶしを食べることができなかったのも、今日は電車に乗ったときから、ひつまぶしを食べることをずっと考えて、口の中と頭の中すべてがひつまぶしになっていました。地下街にある店に入ったのですが、小と大があって、どちらを選ぶかすごく悩みました。周りを見たら、みんな小を食べているので、「ああ、あれぐらいにしておかないと駄目かな」と思い、ちょうど3,000円お決まりどおりのかたちで食べさせていただいて、本当に幸せな気分はこちらにまいりました。

谷田先生には感謝しないといけないと思っています。今ごろ、谷田先生は、おそらくインフルエンザで熱が出ているのだらうと思います。ピンチヒッターというのは普通ピンチを打開していく役割ですから、何らかのかたちで谷田先生の役割に代えられないわけですが、私も頑張るフルスイングで行こうと思っています。ただ空振り三振だけしないように頑張ろうと思いますので、何とぞ最後までよろしくお願ひいたします。

最初に拍手があることはまずないので、だんだんと引かれていって、最後は皆さんが寝てしまって静かななかで終わるということが多いです。あとは会場を去るときに、多少なりとも思いやりを込めて、今日は道徳の話ですから、どのような結果であろうとも少し温かい笑顔で送り出していただけましたら、帰りに落ち込まずにすみますので、何とぞ最後までよろしくお願ひいたします。

それでは、今日お話する内容については谷田先生からうかがっています。学習指導要領が少し変わったということで、そのあたりのことを情報として提供できたということでした。先生方にとりまして1年間、道徳教育

で勉強したことを検証され、さらに今日も授業があったということでした。その授業を拝見できたならよかったのですが、少しでも情報としてお役に立てたらと思っています。

### ■子供の変化の根元とは

今朝（19日）の読売新聞ですが、「学び方から教える時代」と書いてありますが、これから学校が変わる中で、このあたりに出ているのが学級崩壊等に関する話題です。

「モノと情報があふれる時代に生きる今の子どもは10年前、20年前と大きく違う。社会や家庭が変わるなか、子どもの実情を踏まえた指導法を考えることが大切ではないか」と書かれています。そのとおりだと思いますが、ただ10年前、20年前と比べて子どもが大きく変わったかどうかということは、自分の中では1つの課題としてとらえる部分があります。

それは何かというと、今から10年は経ちませんが、平成9年に神戸のA少年の事件とか、平成12年には「17歳の心の闇」と言われたことがありました。この愛知県でも豊川市で私立の高等学校3年生の少年が数学の課題を提出し終えて、学校を出たあとに老婦を刺殺するという事件がありました。学校のほうとしては、それに関して、まったく変化の様子に気がつかなかった。先生から出された課題をきちんと出して帰っていたというのです。

ところが、その少年の幼少期からをずっとたどっていくと、彼はいろいろな課題を背負いながら高等学校3年生まで進んでいることがわかります。その内面の心の変化をなかなかとらえられなかったということが実情ではないかと思います。しかし、小学校時代の先生、あるいは中学校、高等学校の先生に聞いていく中で、どうもその少年がずっと幼少期からいろいろと家庭のことも含めて悩みを抱えつつ小学校時代を過ごしたこと、小学校の先生の移り変わる中で、彼自身がいろいろな問題が起きてきたり、あるいはそれに対して家庭でも悩んでいたということがありました。

そのようなことから考えると、今、子どもを取り巻く状況や保護者、家庭が変化していく中で、その子ども自

身が影響を受けていろいろと問題が出てきたのではないかと考えます。

子ども自身が変わったというよりも、われわれ大人社会の変化が、子どもに影響を及ぼして変わっているのではないのでしょうか。私たち自身の今のありようとか、その影響を受けて変わっているとすると子どもたちにどのように対応するのか。これから、われわれが考えていかなければならないのではないかとということが1つの課題です。

### ■心の教育の必要性

「心の教育の必要性」が叫ばれています。心の中に悩みや課題を抱えた子どもたちに対応するときに、子どもの心の声にもっと耳を傾けること、そして、その子どもの心に届くような教育をどのように進めていくかということが大変に大事ではないかと考える次第です。

今回の学習指導要領が新たに変わった中身について少し紹介させていただいて、あとにつなげたいと思います。

新学習指導要領の改訂の内容については、既に先生方はご存じかもしれません。昨年11月に、学習指導要領の改訂にかかわる中央教育審議会が答申を出しています。その前の11月7日に中間報告のまとめが公開されました。冒頭の解説の中に、「生きる力」の「理念」は変わらないと書かれています。

現行の学習指導要領のキーワードは、「生きる力をはぐくむ」ということでした。「生きる力」の「理念」は変わらないということが書かれています。その点で、「生きる力」を、子どもたちが「知・徳・体」ということで、自ら学び・自ら考える力、そして豊かな心の育成、たくましく生きるための健康と体力という3つのことが「生きる力」の要素として出されていました。

この3つのなかの「豊かな心」について、平成10年6月30日に「幼児期からの心の教育のあり方を考える」という答申が出されました。その冒頭では、豊かな心を「生きる力の核」ととらえて書かれています。

### ■豊かな心が「生きる力の核」

私は「生きる力」のことを考えるときによく三輪車に例えます。三輪車には車輪が3つあります。一番前の前輪が「心」、「徳」の問題です。そして後輪の2つを「知」「体」と考えます。優先順位があるというわけではないのですが、子どもたちがどれほど素晴らしい体力をつけても、どれほど素晴らしい知識や技能を身につけても、それをどのような方向性で使っていくかというところに、心の問題は大変大きいと考えています。

自ら自分でこがないと三輪車は前へ進みません。その

方向は自分自身の意思で右へ切ったり左へ切ったりします。その点で「徳」の部分で、どのように自らの力を生かしていくのか、あるいは体を生かすかというところが大きなポイントになるのではないかと思います。

平成7年でしたでしょうか、オウム真理教の「地下鉄サリン」事件が起きました。素晴らしい知識・技能を持ち、優秀といわれる大学を卒業している彼らには、地下鉄の中でサリンの入った袋を傘の先でつつけばどのような状態になるかがわかっていたはずですが、当然、そのあと起こる惨劇も予想できるだけの知識や理解力を持っているはずなのです。しかし、ためらいつつも林被告は、傘の先で穴を開けて多くの人たちの人生を変えてしまいました。多くの人を命を損ない、そしてまた自らの人生をも損なってしまいました。どのようにして、そこを判断していくのか、その点が考え方として大事ではないかと思っています。

今、「心の教育のあり方」が問われていますが、私は「生きる力の核」となる道徳教育、心の教育の部分に視点をあてて、そこがしっかりすることによって学んだ知識、技能、そして体力が、自らのよりよい方向の生き方につながっていく人生を歩んでいけるのではないかと考えています。

### ■教育基本法の改正と学習指導要領

学習指導要領の資料について少しだけ紹介しますと、「教育基本法」の「目標」に新しくいくつかの項目がたちました。例えば、「教育基本法」第1章第2条（教育の目標）の中に、「幅広い知識と教養、豊かな情操と道徳心、健やかな身体」と書かれています。このあとに、「生きる力」を支える「確かな学力」「豊かな心」、そして「健やかな体」。このバランス、調和的な発展を促すことが大事であるということが出てきます。

その次の道徳教育について出てくるところでは、「目標に伝統や文化の継承・発展」や「公共の精神などを規定する」という項目が出てきます。そしてあと、「魅力的な教材の開発・活用」であるとか、「道徳教育推進教師」ということで、これまで小学校・中学校での道徳の指導について、道徳主任というかたちで推進役の先生はいますが、実際には道徳の時間は各学級担任がおこなうわけです。場合によると、チームティーチングでおこなったり、副担任がやったり一緒に協力することも当然入っているわけですが、主としては学級担任がおこなうということです。道徳主任という制度がありますが、もう一歩進めて道徳教育を推進していく教師を中心に指導体制の充実を図るということがあえて出ています。

最近、規範意識が低下しているという中で、公共の精

神や社会の形成に参画する態度、社会参画の視点がよくいわれています。今回の道徳改訂の中での規範意識や人間関係を築く力、ボランティアなどの社会参画、それから集団の宿泊活動やボランティアなどの体験活動を重視することも位置づけられています。

あとは、さまざまな事件が報道されるたびに出てきていますが、生命の尊重、環境の保全です。そのようなことを含めた生命の尊重などが内容として取り上げられています。このほかに伝統と文化も強調されています。

「教育基本法」の改正に対応して、学習指導要領がどのように変わってきているかということについて少し説明をしました。そのことで、学習指導要領が具体的に改正されたところがありますので、その部分だけを紹介したいと思います。学習指導要領の総則のところを紹介します。

### ■道徳における改訂のポイント

中学の場合は道徳の時間があります。小学校ですと、要としての道徳の時間を中心としておこなわれます。高等学校の場合には、ホームルームや公民の時間を中心としておこなわれます。加えて、総合的な学習の時間でも人間としてのあり方、生き方が問題になっていますから、当然、高等学校においても総合的な学習の時間で、道徳の内容にかかわることが、さらに中心におこなわれることも可能ではないかということです。

またあとで一部紹介させていただきますが、既に茨城県では、副読本を作成して高等学校1年次に、総合的な学習の時間に道徳の時間とよく似たかたちの指導がおこなわれています。それから、新潟県の私立の開志学園高等学校では、人物学習というか、鑑を創るという創鑑学習のかたちで授業の中で王選手や『ドラえもん』の作者の藤子・F・不二雄さんなどにスポットをあてて、その人の生き方を中心に学習を展開するというおこなっています。

香川県にある志度高校では、生徒たちが遮二無二に学ぶというのがなかなか難しいと、そして教師自身の学習のあり方をもう一度変えないと、本当に彼らにとっての学習にならないのではないかと授業研究を3、4年しています。昨年11月には、「県内の先生方どうぞみてください」ということで自主的に授業を公開しました。公開されたティームティーチングによる授業の1つに、国語、生物、倫理の3人の先生による「いのち」という問題をテーマにしたものがありました。

倫理の先生から「死」をどのように考えるかと。生徒たちは当然、「殺すということはいけない」と言うのですが、「では、みんなは、日々たくさん命を奪っているで

はないか」と言われると、「ものを食べないと生きていけないからだ」と言います。生物の先生が、「みんなは億に近い単位の生きものを殺している」という話をしました。「手についている細菌を洗って、そのたびに多くの命が失われている」。すると一人の女子学生が、「そんな殺しているといっても、実感が」とつぶやいていたりする場面があったりしました。

そのような揺さぶりをかけながら、さまざまな専門的な視点から、先生方が3人で教材を研究して、子どもたちに「いのち」について考えさせる授業をしていました。

「ドラえもんは生きてるか」というテーマです。子どもたちの中で「ドラえもんは生きていて欲しい、自分の心の中で生きているのだ」と、「ドラえもんは私が小さいころからのあこがれだった」というテーマをもった生徒たちがいて、彼らにとって生きているということとはどのようなことか、いろいろと話をした授業もありました。

いずれにしても、これは中学校の学習指導要領ですが、道徳の時間を要として学校教育全体を通じて道徳教育がおこなわれることは大きく変わっていませんが、少なくとも道徳の時間についての意識が、「総則」の中にかなりはつきりと記されています。

それから先ほど少し言いました「伝統と文化の継承」や「公共の精神」という言葉も「総則」全体の中にも書き加えられたものです。

もっといえば、先ほどの職場体験活動、ボランティア活動、自然体験活動という豊かな体験の重視という視点もその中に加わっています。生命の尊重であるとか、規律ある生活や主体的に社会の形成に参画することなどの力点が置かれた内容について書き加えられました。

### ■道徳の学習の内容について

「教育基本法」で改正されたことを受けて「総則」の中でさらに書き加えられて、そして、それを受けて道徳の学習の内容が示されています。

目標区分については大きくは変わっていませんが、これまで各教科、特別活動および総合的な学習の時間という順番が、今回は各教科、総合的な学習の時間および特別活動という順番に変わっています。

これは、先にくるから大事だという考え方ではなくて、時間数的にはっきりしている部分を先に並べていったようです。総合的な学習の時間が先に出てきて、前は「総則」の中にあつたものを、新たに「第4章」として中身を示しているところが少し変わったところではあります。

高等学校以上ですと、あまり見る機会はないと思いますが、道徳の時間の内容としてだけではなくて道徳教育として取り扱うものとして、現在は小学校の低学年が15、



それから中学年が18、高学年が22、そして中学校が23の内容が挙げられています。その中で大きな4つのくりに分けています。

主として自分自身に関すること、基本的な生活習慣や夢、目標を持つこと、それから個性伸長であるとか、自分自身に関するものが1つ。2つ目は他の人とかかわりに関すること。例えば礼儀や思いやり、友情。そのようなものが2つ目の柱にきます。そして3つ目の柱には、生命尊重、自然や動植物愛護という内容、自然に関するようなことがきます。4つ目は、集団や社会に関することです。集団の一員としての自覚や決まり、法の問題、それから公德心、あるいは勤労の問題、家族愛、きょうだい愛、そのような集団や社会に関する内容が並んでいます。

中学校の場合に、それほど大きくは変わってはいませんが、2つ目の柱の最後に「他への感謝」という内容が加わりました。いろいろしてもらったときの感謝の心、感謝について考えるものが出てきます。

それから、3の内容そのものは変わっていませんが、これまでは1番目が2番目にあったのを順序を変えて、生命尊重に関して、小学校から中学校まで一貫して3の(1)に生命尊重、自然や動植物を愛護するというものがきています。

そして、4つ目の柱の1番目にあった集団の一員としての自覚が4番目にきまして、規範意識の問題や決まりの問題がでていたことから、(1)に「法や決まりの意義を理解し」ということがきています。続いて、法・決まりにつながるものとして公德心がきています。そして、正義・公正・公平。それから差別の問題を3番目、そして4番目に集団の一員としての自覚と順番が少し変わったということです。1番目の柱は、基本的な生活習慣については以前から非常に重要視されているので1番目にきています。

## ■内容の取り扱いについて

内容をどのように取り扱うかという点では、指導計画の作成と内容の取り扱いの規定が、校長の方針のもとに道徳教育の推進を主に担当する教師、これを「道徳教育推進教師」というネーミングになっています。学習指導要領上、そのようなネーミングになっていますが、全教師が協力して道徳教育を展開する道徳教育推進の指導体制の充実を図るため、改めて中心となって取り扱う教師を位置づけようということです。

だからといって、すべて道徳の指導はこの先生がやればいいというわけではなく、あくまでこの先生はコーディネーター役、全体の企画立案、そして先生方がそれ

ぞれのクラスの中で、日々の教育がうまく子どもたちの中に具体化していくために後押しする推進役です。ですから、この先生に全部をまかせてしまえばいいということではありません。

あとの内容については、先ほど示したものと重なりませんが、指導内容については生命尊重や法、決まりの理解がうたわれています。

「教育基本法」の改正の中で、あるいは先ほど冒頭で紹介した子どもたちの置かれている状況、あるいは人間関係がうまく築けないなど、これは「中央地方教育審議会」の答申の冒頭にも「豊かな心」の育成として書かれています。自分に自信が持てないという点について、いかに子どもたちの力を育てるかということが表現されています。

今、申し上げたことを少しまとめたものが、お手元のA4のプリントです。「道徳教育の充実」と書いてあります。その中に答申等を少し概括的にまとめたもので整理して終わりたいと思います。

## ■コミュニケーション能力の問題

膨らんだ写真が載っていますが、好きで膨れていったわけではないのですが、なぜか私は転勤するたびに、不思議なことに2キロずつきちんと増えていきまして、今ちょうど現状維持が八十数キロです。身長わりにちょっと膨らんで、皆さんから「恰幅がありますな」と。何も褒められたわけではなく、太っていることを、そういう表現もあるのだなど。ただそれを言われるたびにうれしくはないですね。要するにもっと痩せたら、ということに裏に感じてしまう悲しさがありますが、今日は、これが終わったころには1キロぐらい痩せられるかなと思います。

この中で2つほど課題の指摘があります。1つは、自分に自信が持てず他者との人間関係の形成に困難を感じていること。これは非常によく指摘されることですし、最近いろいろと問題が起こっている中でもよく出てきます。

平成12年に、「17歳の心の闇」の問題が言われたあとに出された報告書の中でも、人間関係がうまく築けない、コミュニケーションがとれないという問題が指摘されていました。今でも大きな課題として出てきています。

自分に自信が持てないことに関しては、言葉を換えれば「自尊感情」という問題がよく言われます。このことがあって、なお他者とかかわりやコミュニケーションの力をはぐくむことの重要性が課題として出ています。

平成16年に、長崎の小学校6年生の女子が同級生を刺した事件がありました。ネットで交わしたやりとりの中

で、どんどん相手に対する猜疑（さいぎ）心が膨らんでいき、最終的には相手を刺してしまうのです。死に至らしたという非常に不幸な傷害事件でありました。彼女自身が抱えている悩みや課題も当然あったわけですが、それをキャッチできなかった学校、あるいは教師という問題もずいぶんといろいろ指摘もされました。それ以上に、ネットでのやりとりの中で相手との距離感や相手に対する疑いがどんどん深まっていき、最終的には予想もできないような行動に出てしまう。そのあたりからコミュニケーションの問題が非常に大きく取り上げられて、問題行動に対して、それを解決するプログラムをどのように立てていくかということが出てきました。その中で出たのがコミュニケーション能力の問題です。

### ■基本的な生活習慣と規範意識の問題

2つ目として、基本的な生活習慣の確立と規範意識の問題です。これが大きく取り上げられ、人間としての尊厳や自他の生命の尊重などをしっかりと育てる必要性とともに、最終的には、知識として学ぶだけでなく、どのように自分の生き方に生かしていくのかということ。それも誰かに「これは大事だ、こうしなければ」と言われるのではなく、自分自身がよりよい方向に進んでいこうとする主体性の問題として考えなければいけません。

ただ、これも学年の発達段階がありますから、小学校の低学年の段階から「主体性」といっても、基盤ができていないところでは難しいかもわかりませんが、発達段階において育てつつ中・高等学校あたりになると、もっと自分でどのようにこれから生きていきたいのか、あるいはどのようなことを、これからの方向性として選んでいくのか、行動をどのように選択していくのか、そのよりどころをどのように自分の中でつくっていくかが求められます。ですから、主体的に判断し適切に行動できる人間の育成ということが出ていると思います。

### ■道徳教育充実に関して

そして、道徳教育充実に関して3つ挙げられています。「第1は」と書いてあるのは、「人格の完成をめざし」、これは目標で掲げていることですが、いわゆる豊かな心の育成が重要な課題になっています。これは先ほどから何度も言っているとおりです。

次に、道徳教育における重点的な指導内容をしっかりと押さえて、特に子どもたちがそのことについてしっかりと考えておくことが必要であろうということから、その重点的な指導内容を計画の中にどのように位置づけて指導していくかが大事になってくると書かれています。

2つ目が、小・中学校では、要としての道徳の時間が

ありました。高等学校の場合は公民科やホームルーム活動を中心におこなうわけですが、いずれにしても、その時間だけでよしとするのではなく、その時間で深められること、あるいは他の教育活動でおこなわれたこと、体験したこと、各教科等で学んだこと、それらが一人一人の子どもたちの中でどのように統合されていくのか。体験的には学んでも、学び方はさまざまですから、それらがしっかりと深められていく、あるいはそこだけでは十分に学び得なかったことを補っていくという意味でよく「補充、深化、統合」といいます。道徳の時間は、各教科等でおこなわれた道徳教育を「補充、深化、統合」という言い方がされます。

つまり、学校教育全体で道徳教育はさまざまなかたちでおこなわれていますが、それらを補充する。学んだことを深める。それから、あちらこちらで学んだことをまとめていく統合する。それらの働きを持つ時間があってはじめて一人一人の中で、それらをしっかりと自分の力として学ぶことができると。「補充、深化、統合」ということがよく言われます。

それから第3の視点が、家庭や地域との連携・協力です。それから体験活動の重要性、体験活動重視が大きく出ています。

このようなことを通して、道徳の時間の指導は、子どもたちにとっての本当に学びになっているのかどうかということです。形式的に先生が長々とお説教をして、これが大事なのだという指導もあるかもしれません。あるいは、子どもたちがいろいろと自分の問題として話し合うような学習もあると思います。いずれにしても、子どもたちにとって、そこで学んだことが自らの生き方に反映してつながっていくような学習をどのように工夫するのか。そのことが最初に言いました「子どもの心に届く学習、教育をどうするか」ということです。

子どもの心に届くためには、先ほど教材の問題に触れました。子どもの心に響く、あるいは刺激を受け様々な考え方ができる教材を提示して、その中で自らの見方を深められるような工夫も必要になってくるかと思っています。

### ■重点の明確化と効果的な指導

道徳教育の改善・充実の方向として、重点の明確化と効果的な指導です。このあとには指導内容の重点化。つまり、どのような内容について重点化を図って指導するかということです。普通、各学校では教育目標を立てたりしますから、おそらくそれがその学校での重点目標になると思います。

ですから、何に重点を置くかによって、その学校の重点が違ってくると思います。その部分を中心にしてよ



り効果的にするために、例えば中学校で道徳の時間は35時間ありますが、網羅的にやっていたのではなかなか効果は上がらないかもしれません。いずれにしても35時間の道徳の時間の中で、何に重点を置くかによって、他の教育活動との関連を図ったり、保護者との連携を図ったり、体験の活動を生かすなどさまざまに工夫ができるかと思えます。

そしてもう1つは、内容の重点化とともに効果的な指導への対応ということで、指導の重点化と書いてあります。私はいつも内容の重点化と指導の重点化を挙げます。内容の重点化は、力点を置く内容は何かということです。網羅的に指導するよりも、力点を置いて重点をかけて指導すること、つまり、道徳の時間を中心に、他の教育活動との関連を図った指導を工夫するなど指導の重点化を図る、これが重点の明確化と効果的な指導です。

2番目に挙げてあるのが教材の工夫です。重点を踏まえた教材の工夫です。子どもたちにとって学びがいのある魅力的な教材を、しっかりと開発・活用することも大事ではないかということです。

3番、4番、1つは体験活動の推進。それから4番目は、家庭・地域社会と一体になった取り組み。5番目は、教科化の問題が出ています。これについてはこたえられません。道徳教育の充実という視点から、道徳教育推進教師を中心に指導体制の充実を図ることが新たに加わったところです。

このような点が、今回の学習指導要領の改訂に出ている問題を指摘させていただきました。

### ■子どものレベルで具体化が大切

今日、先生方にお話をしたいと思っていることは、理念ばかり唱えても、それが子どものレベルで具体化されなければいけないということです。

その考えは、レジュメの1番に矢印のところの「生きる」ことにつながる「学び」となるために、ということです。結局、大事なことをいくら知識として学んでも、それが自分のこととつながって学べなければ何もならない。あるいは、学んだことをどのように具体化していけるのかにつながらないと、なかなか実現できません。

高等学校では公民の倫理には、「生きる主体としての自己の確立」という言葉が入っています。それは現行の学習指導要領で新しく入った言葉です。その趣旨は、一人が、考えや思想を知識として学ぶだけではなくて、自分の生き方からいくと、どのようなことなのか、自分とつながって1つの課題とつながって学べるような工夫が必要ではないか。そのときに、はじめて自分の生き方につながっていくという学習を工夫できないだろうか、という

ことが大きな課題意識でした。

ですから、内容のところでは「豊かな自己形成に向けて」、あるいは「生徒自身の課題とかがかわらせて」という言葉が入ってきます。つまり、生きる主体として自己の確立を促す学習ですから、常に自分自身の課題とつながって考えられるような工夫が求められるのではないかと。道徳の時間でも同じです。道徳の時間という、つい常にある一定の価値を何か子どもに教えようと思します。私は教える側面は当然必要だと思しますが、最終的には、子ども自身がそれを内面化していかないと自分の生き方につながっていきません。ある一定の価値をお札のように張り付けるだけでは自らの生き方にはつながっていかないと。どのように生きることにつながる学びとしていくのか、その工夫を、2番以下で書いてありますので紹介したいと思います。

### ■子どもの心に響く魅力ある道徳教育

2番。「子どもの心に響く魅力ある道徳教育」。子どもの心に届くということを行いました。子どもの心に迫っていくような道徳の授業を考えていく必要があります。

(1) 魅力ある道徳の時間、指導の充実。これはごく当たり前の表現をしているだけですが、要素として3つあります。これ以外にも指導する教師の個性の問題、あるいは教材の魅力などを打ち出すことによって、子どもにとって魅力ある授業が成立すると思します。

いわゆる、子どもにとって学びとして、しっかりと魅力あるものになっていくために、あるいは生きることにつながる学びとなるために3つ書いてあります。

1つ目は主体的・意欲的な学習の成立があるかどうかです。自らのこととつながって考える学習を工夫しているか。その学習の出発において、ある日突然、先生から何か資料を渡されて、はっとしてみるだけではなくて、その学習に至るまでに、例えば自分の個性について考える時間であれば、日ごろの自分の状況を考えおくことが布石として必要かもしれません。そこではじめて主体的に、その問題について考えていこうとする学習の成立につながるのではないかと。ということです。

2つ目は「深まりのある学習の成立」と書いてあります。子どもたちにとってその時間の学習が、自分の今までのものの見方や考え方を深めたり、あるいは広げたり、場合によると持っていなかった視点を獲得するという新しい発見も含めて、学ぶ喜びや学ぶ楽しさ、発見があるような、あるいは深まりのある授業が求められるのではないかと。思します。

今まで自分がこうだと思っていたことを、まったく



違った視点から見ると。例えばよく長所・短所で道徳の授業をします。長所はプラス、短所はマイナスという見方がよくありますが、本当にそうでしょうか。

大山のお代さん（『ドラエもん』の前声優）は、生まれたときからあのどら声で、お母さんは育てていく中で非常に心配されたそうです。何とか治そうといろいろとお医者さん通いをされたようです。でも、大山のお代さん自身は、別に小さいころから何とも思わずに、元気に先生から尋ねられたら「はい」と、あのどら声で手を挙げて答えていました。

幼稚園の先生も、小学校の先生も温かく大山のお代さんの持っているものを生かして対応したおかげで、彼女は明るく元気に学習をしていったわけです。しかし、中学校に入って自我が目覚めるころになったときに、はじめて自分が声を出したことによって周りが変な顔をするのに気がきました。放送部に入った大山のお代さんの声を聞いて、ある生徒から「あんな声を聞くと給食がまずくなる」と言われて、彼女は相当ショックを受けました。

でもそのときに、お母さんは彼女がもっと声を生かしていけるようにと劇団に入ることを勧めたり、周りからの支えで彼女はまた自分の声をどんどん出していく機会に恵まれました。最終的に彼女は『ドラえもん』の声優として活躍します。そして、子どもたちに夢を与える役をします。一見、短所と見えることが見方を変えると長所にもなるということです。

### ■見方、育て方で短所を長所に

私もそうなのですが、しゃべっても疲れないうし、声も枯れることはありません。これは親に感謝しないといけないうのでしようが、小さいころから母親には「おしゃべり、男は黙って」とよく言われました。その当時は、男女共同参画社会とはあまり言われてない時代ですから、母親から「しー、おしゃべり」とすごく叱られました。

あるときバスに乗って、始発から終点までずっと運転手さんに話しかけていました。私は大変楽しかったのですが、運転手さんは迷惑だったろうと思います。「運転手には話しかけないでください」と前に書いてありますが、小さいころは関係ありませんから、運転手さんはいいお話し相手ですと終点まで退屈せずに行った思い出があります。「おしゃべりは短所だ」と親に言われましたし、自分の短所を「おしゃべり」と書いていました。でも今は、それで生活をしていますし、無口だったらじっと黙って笑顔であつたりならみも効かせても何の意味もないことです。

小学生の中でも非常に世話好きな子がいます。しかし、

これはひとつ間違えれば、おせっかいになってしまいます。そして、みんなから嫌われます。みんながしたいと思っているのに、全部、その子が持って行ってしまふので、その子に対する見方が非常にマイナスの方向にいきます。非常におせっかいだということになってしまいます。

ところが、その子が周りの状況やみんなの気持ちを考えながら動くことができると、優しい子、思いやりのある子、親切な子、あの人に来たら本当に私のことを考えて動いてくれる、助けてくれる。プラスの方向になります。世話好きということは、どのようにそれをうまく発揮できるかということが大切で、「思いやりの心が大切だ」というだけでは、本当にプラスの視点でなかなか出ていけません。

その子のよさの種を発見し引き出すか、伸ばすか。そこに、もしかすると個性伸長の問題もあるかもしれません。今まで、子どもたちは、周りから短所を言われ続けていて、自らの自信を失っている子どももいるかもしれません。

例えば、先生方でも自分はこれが短所だ、マイナスはこれだと思って言っているかもしれません。それは裏を返せば、生かし方によっては変わってくるかもしれないことです。

ですから、目の前の子どもたちをマイナスの目線で見れば短所になり、それは直さなければいけないことになってきますが、直さないといけないう種なのか、それとも伸ばし方を工夫したり、発揮する仕方を変えていけば、周りから見て素晴らしい友達になるのか、その点ひとつで、見方、育て方、かかわり方ですいぶんと伸び方が変わってくるのではないかと思います。

そのような点で、先ほど「深まりのある学習」と言いましたが、例えば『ドラえもん』の声という教材を子どもたちに提示して、日ごろの自分たちの抱えている課題は何なのか。自分がプラスと思っていることを伸ばし、マイナスと思っているのを直すということなのか。それとも、持っている短所と言われるものをどのように生かせばプラスになるのか。見方を変えれば、もしかしたら今まで駄目だと見ていた自分のもう1つの展開の仕方を学習のなかから発見することがあるかもしれません。

そうすると、自己肯定感はその高まっていくと思います。その点で「深まりのある学習の成立」ということが2つ目です。

### ■生かされていることが実感できる学習を

3つ目に「自己存在感や充実感を味わえる学習の成立」と書いてあります。これはやはり、一人一人の子どもが

学習の中でどのように生かされているか。自らが生かされていることが実感できるような学習、あるいは自分の思いを伝えることができる。あるいは自分の思い、他者の思いを受け止めることができる学習の場が成立することが大変大事ではないでしょうか。

京都の先斗町の近くに弥栄（やさか）中学校というところがあります。各学年に二十数名の一学級しかないのですが、平成12年からさかのぼること5年前、平成7、8年ごろには非常に生徒が荒れていました。ちょうど今ごろ、先生方の異動希望が出て、次に動く時期ですが、異動希望をとると100パーセントという、先生方がいたくない学校なのです。その学校に子どもがいたいわけがありません。先生方が日々授業をしてもなかなか授業が成立しない。その中で考えたのは「もっと子どもたちにとっていい学習をしようではないか。そのためには子どもたちの心の声にしっかりと耳を傾けないといけない。そのために心の教育をやろうではないか」と。生徒指導も大変苦勞する学校でした。「道徳の授業どころではない。常日ごろの教科の授業すらできない」と。その成り立たないところで、日々問題行動が起こるたびに警察へ夜中12時でももらいうけに行くわけです。先生方はもう疲労困憊（こんぱい）で授業の準備どころではなかった学校です。その学校で先生方は「彼らの課題や抱えている悩みの声をもっと受け止めようではないか」ということで始まったのが道徳教育の試みでした。

教師が子どもたちに問いかけて、子どもたちが自らの思いを発表できるような、あるいは表現できるような学習を始めました。ただし、最初はいくらやっても子どもは発表しません。話しません。どうしてもうまくいきません。

徳島県の板野中学校に森口健司さんという先生がいます。今は北島中学校の教師になっていますが、その森口健司さんが、子どもたちと学年全体の授業を試みて、彼らのいろいろな思いを引き出す学習をやっていました。

その学習を見た当時の弥栄中学校の先生が「この授業だ。これこそ彼らのいろいろな心にある思いを伝える学習だ」ということで、自分の学校へ帰って、それをまねてやりましたが、それでもやはりうまくいきませんでした。

困った末に、森口先生を招いて弥栄中学校で授業をしてもらいました。森口先生が子どもたちに問いかけると、彼らはぼつりぼつりと自分の悩みや思いを話し出したのです。彼らは、この先生ならば自分の思いをわかってくれるという、何か持っているものがあるのだと思います。

その過程を通してながら、森口先生は自分のクラスをその学校に連れて行きました。そして、子どもたちの前で

授業をしました。普通は授業参観、授業研究というと授業をしている様子を周りで先生方が参観して勉強するものですが、その周りにはさらに生徒たちが見ています。先生方が授業参観するのと同時に、同じ中学生が自分を語り、そして、互いの友達や自分の述べたことについてしっかりと受け止めて、そのことについて討議します。なぜ、そのようなことができるのか。

それに触発された弥栄中学校の生徒らは学習のあり方、自分の生き方についていかに自らを表現し、また友達の表現を受け止めて、お互いが学びあうか、心を交流していくか。そのような授業ができ始めて、平成12年に道徳教育の全国大会を開催しました。そのときには、既に彼らの中には友達の声を受け止めること、あるいは自らの思いを伝えることがごく自然にできていました。

### ■すぐれた実践に学ぶ

私は、平成12年11月におこなわれた研究発表の1年から3年までの授業を見ました。その中で、最後に10分だけ見た3年生の授業がいまだにずっと残っています。わずか10分の間で、子どもたちは自らの進路を目指して悩んでいた課題を語ります。

「自分は周りから駄目だと言われ、みんなに迷惑ばかりかけている。先生にも申し訳ない。何とか親にも迷惑をかけないように、これから頑張ろうと思う」と取り組んでいる姿を発表していました。

そして、先生が「彼はこんなふうに発表したけれどもどう思うか」と後ろに座っていた生徒を指名すると、「彼は、いろいろと家庭のことで悩みがあって、いろいろ問題も起こしたけれど、彼は今、進学に向けて一生懸命に勉強をしているから、きっと希望のところへ行くことができると思う」と、彼を支える話をしました。

そのあと、一番後ろの右から2番目の子が手を挙げて立ち上がりました。そして、「みんな頑張れと言う。先生も、親も頑張れと言う。でも、もう僕はこれ以上頑張れない」と話し出しました。

その学級には、そのようなそういう課題を抱えた子がいます。その話を涙しながら聞いている子がたくさんいます。つまり、彼らは彼ら自身の問題だけではなく、家庭の問題を抱えているのです。さまざまな状況でクラスの中において、自分の置かれている状況をまだ話すことができている子もいます。

一人の女の子は、最後の授業で自分の置かれていた状況、施設から通っていることをはじめみんなの前で話したのだと思います。

そのような状況の中で、その男の子は「みんなが頑張れ、頑張れと言う。でも、もう僕は頑張れない」と言っ



たあと、「今、彼が言っていたのを聞きながら、もう1回やってみようと思った」ということを話しました。そして、みんながいろいろと自分の考えを返していく中で、その子はもう1回チャレンジしようということになったのだと思います。

このように、子どもたちがいちずに生かされている、一人一人が存在することの意味のある授業は、工夫することによってできていると思っています。そのような3つの要素を、授業の中でどのように工夫するのかという具体的な話はできませんが、その趣旨で考えていくことが大切です。そして、体験を生かした多様な指導の工夫があります。

先ほど体験活動の充実は非常に大きな課題として出ていました。ただ「体験を生かした多様な指導の工夫」と書いてありますが、道徳の時間の中で体験活動そのものをおこなうのではありません。つまり、体験をしたことを、どのように子どもたちが学習の中で生かし深めていくのかということです。

### ■「新ちゃんの流しびな」

その1つの例は、オバマさんで有名になった小浜市で実践した授業ですが、加福先生という方が「死」を扱った授業をしました。今でこそ、命の問題について「死」を扱った授業がありますが、この先生は、まだ若い先生でしたが、産院で実現した「生と死」を考える授業ということで、「死」について彼は考えさせようと思いました。その発端になったのは、彼のクラスにいた中学1年生の女の子です。小学校3年生のときにお母さんを亡くしました。学校生活の中でも、普段の生活の中でも、ずっとそのことを引きずっています。その彼女のことを頭の中におきながらやった「新ちゃんの流しびな」という資料を使って授業をしました。

これは8カ月で生まれた赤ちゃん。8カ月ですと未熟児です。私の二男もちょうど8カ月で生まれたのでよくわかるのですが、レントゲンを撮ると肺のラインが見えません。つまり肺が十分に形成されていないので自呼吸がしにくい状態です。その状態で、私の息子も生まれたのですが、この新ちゃんも8カ月で生まれて自呼吸ができない状態でした。私の息子の場合には、大きな病院でしかも近代的な医療設備のあった時代でしたから、1カ月ほど集中治療室に入りましたけれども助かりました。今は体重が私よりも越えまして、一時は100キロのラインを越えた時期がありました。この前、血液検査で引っかかって、「僕は肝臓がもう駄目だよ」と悩んで一日だけ食べるものを食べませんでした。そのあと「大丈夫です」と言われた瞬間に、反動で一生懸命に夜中に食べていま

した。

私の息子は今みたいに元気なのですが、この新ちゃんは16時間この世の空気を吸って亡くなりました。そして、お父さんは亡くなった新ちゃんを抱えて帰ります。まだ産後間がないのでショックを与えてはいけませんから、奥さんには告げずに簡単な野辺の送りをするために家に帰ります。新ちゃんをおくるみに包んでわからないようにしてタクシーに乗ります。

そのタクシーの運転手さんは、近くで起きた交通事故で人が亡くなった話をします。死んだ赤ちゃんを抱えているとは知らずに、その運転手さんは、「人間は死んでしまえばおしまいですよ」と主人公に言うのです。主人公は、それを聞いてどきどきします。「それにしてもおとなしい赤ちゃんですね」と運転手に言われて、主人公はあやすふりをします。

家へ帰り簡単な野辺の送りを済ませたあと、山陰（鳥取）のほうへ行き、自分のつらさや悲しみを紛らわすために一人で鳥取砂丘でたずずんでいました。その様子を見ていた茶店のおばあさんが心配して声をかけてきます。そして、話を聞いたおばあさんは、主人公に山陰に伝わる「流しびな」を手渡します。それが亡くなったわが子のようにかわいく思え、それを受け取って主人公は帰っていきます。そのとき、おばあさんは、「きっと新ちゃんは心の中で生きていますよ」という言葉をかけます。

### ■道徳の授業に人材の活用を

この資料をもとに「死」という問題について、子どもたちに考えさせようと思いました。おそらくこの資料は中学校1年生に見せたら、「お父さんはきっとつらかったろうな。しんどかったろうな」ということは頭ではわかります。しかし、本当にわが子を亡くした父の悲しみや死の問題は、そう簡単に受け止めきれものではありません。これをどのように子どもたちに学ばせることができるだろうと、加福先生は考え悩みました。

加福先生は、小浜市にある玉井病院の院長と相談をしました。この病院に来ているお母さん方に、母親としての心や気をつけることなどを載せた『ふれあい通信』を出しています。これはお母さんが赤ちゃんの前で歌っているところを写真に撮っているのですが、ここで赤ちゃんを抱かせてもらって体験をします。2階の新生児室で、お母さんと看護師とそして生まれたばかりの赤ちゃん、そこに中学生がいます。赤ちゃんに何かあったらいけませんから、きちんと横に看護師が一人ついて抱かせてもらいます。

赤ちゃんを抱いていると顔がいろいろと違います。ある男の子はかちんかちんの状態で、顔が真っ赤になって、



何もしていないのに汗がぼわっと出ています。さすがに女の子は温かいよと抱いている子もいます。そのような体験をしたあと、お母さん方にインタビューをします。そのお母さん方は笑顔なのです。

そのようなやりとりをしたあと、彼らは手に赤ちゃんのぬくもり、鼓動を感じて、1階の会議室に降ります。そして、そこで「新ちゃんの流しびな」の資料を先生から渡されます。その瞬間、彼らのそれまでにこにこしていた顔がいっぺんに変わったということを加藤先生は書いています。

つまり、2階では「生」、そして「喜び」「温かさ」です。1階の会議室に降りてきたら、そこで渡された資料は「死」「悲しみ」「冷たさ」です。その落差の中で彼らは資料を重く受け止め、いろいろと議論をします。

資料の中にある、運転手が言った「人間は死んでしまえばおしまい」という視点と、「死んでも必ず心の中で生きている」という視点について、彼らはいろいろと議論をするわけです。

結論としては何も出てきませんでした。彼らはいろいろな自分の思いを交流させたのですが、授業が終わりの5分に、先生が「実は今日、この会場に『新ちゃんの流しびな』をつくった加藤先生が来られているので最後にお話を聞きましょう」と言って交代します。

加藤先生は後ろから来られて前に立ち、子どもたちに向かって話をしました。そのときに、加藤先生がお話されたことは、ちょうど上で赤ちゃんを抱いたときに非常にとても温かい表情をした女の子に、「さっき2階で赤ちゃんを抱いたときどうだった」と聞きます。その子はにこりと笑って「とっても温かかった」と言います。

すると加藤先生は「そう。実は、僕は新ちゃんのお父さんなんです。僕が新ちゃんを抱いたときはもう冷たかったんだよ」と話します。すると、その女の子の表情が一変します。授業のあとの感想文に、「その瞬間、涙が出そうになった」と書いている男の子もいます。

つまり、授業をただ資料としてやっただけでは、おそらくそこまでいかなかったかもしれません。その提示、資料をいかに子どもたちがしっかりと自分の心で受け止められるように工夫をして使うか。そしてまた、人材をうまく活用して、さまざまな視点で子どもに語りかけられる人に参加してもらおう。それによって授業の幅が広がってくるのではないかと思います。授業の最後には、子どもたちは赤ちゃんやお母さんの前で練習していた歌を歌います。

それは合唱コンクールを目指して、彼らが一生懸命に音楽の時間に勉強していた「ほくらの世界に」という歌です。その歌詞の最後に「ほくらは、一生懸命生きてい

る。ほくら精いっぱい生きている、生きていく」という詩が出てきます。彼らはきっと音楽の時間の中で一生懸命に勉強していたと思いますが、「死」「生きる」ということについて勉強したあとに、彼らはこの歌を赤ちゃんの前で歌います。

そのときに、彼らはただ歌うだけではなくて、そこに心がこもっているのです。彼らは合唱コンクールで優秀賞をもらいます。おそらく音楽の時間だけでは十分できないことかもしれませんが、このような道徳の時間や体験をつなげていく中で、まさに心を込めて歌を歌うことも含めて、自分の中にしっかりと留めることができるのではないのでしょうか。

そして、日ごろ学校で受けた授業を自宅へ帰って語ることは少ないですが、この日は、多くの子もたちが家で話をしています。赤ちゃんを抱いたこと、「新ちゃんの流しびな」の授業を受けたこと、そして加藤先生の話聞いたこと。合唱コンクールで優秀賞をもらったことなどを話します。

一人の女の子はお母さんに、「私が生まれたときはどうだったの」と聞いています。そして、お母さんは、その子が生まれたときのことを話しています。そのようにして自分の命は、いかに大事に思われて生まれてきたのかということ、個々に改めて受け止めるのでした。

## ■子どもたちと教材との出会いを演出する

この授業の中で、多くの子が父親の死の悲しみ、亡くなった新ちゃんの問題について考えたのですが、一人だけ違った視点でとらえていた子がいます。

それは先ほどの女の子です。お父さんは自分、そして亡くなった新ちゃんはお母さん、それでずっと授業をたどっていったのです。その子が最後に、加藤先生の5分間の話を聞いたあとに書いた感想です。

「小学校3年生のとき母を交通事故で亡くしてしまったという、とても悲しい出来事がありました。私と妹もそのとき車の中において、私と妹だけが奇跡的に助かって、今こうして生きています。4年前のことを思い出すと涙がこぼれてきます。でも私の心の中に母は生きつづけていると私は思います」。

これが最後の彼女の感想です。それまでは運動会や遠足で、友達がお弁当をつくってもらって持ってきている中で、何か前向きになれない自分というものをもっていました。先生は、それが非常に気がかりでした。

この授業を考えたときに、資料だけで学習するということもあるし、当然、そういう学習は多いわけです。ただ、この教材はそれまであまり使われませんでした。扱いにくい教材の1つだったのですが、今はあちこちで実

現されています。

つまり、どのように子どもたちと教材を向き合わせる  
ことができるのか。どのように出会わせるのか、そこに  
教師の仕事があります。そのことによって、彼らが教材  
から学び取ることができるのではないか。そしてそのた  
めには、ただ単に教材と向き合うだけではなかなか課題  
を見つけにくいので、体験活動をする。そして、体験し  
たことから感じ、考えたことを授業の中で生かしていく。  
あるいは、そのことをさらに発展させていき日常生活に  
返します。

この「命」の問題を重点の内容でとらえたときに、その  
「命」の問題は1時間の道徳の時間で掘り下げられる  
ほど簡単なものではないと思います。もっと深くて難し  
い問題だと思います。それらを本当に子どもたちが自ら  
の課題として深く考えて生きるようになるには、単に1  
時間の資料をもとに考えるだけではなくて、ただでさえ  
体験が希薄と言われる中で、いろいろな体験を使って学  
ぶわけです。そのようなことが大事ではないかというこ  
とです。

### ■子どもたちの心の引き出しに蓄えを

あと「道徳教育改善に向けての課題」として「伝え合  
う力」「役割取得能力」と書いてありますが、そこで言い  
たかったことは、道徳は中学校で23の内容（平成19年  
の段階）がありますが、これは子どもたちが、それを学  
んでおくことを通して、心の引き出しの中に蓄えをする  
ことだと私は思っています。

そして、何事もないときには使うことはないのですが、  
何かの壁にぶつかり、困難を乗り越えないといけなかつ  
たり、あるいは人生の選択を迫られたり、岐路、別れる  
地点の選択を迫られたときに、どのようにして自分をそ  
こで判断し、次に向けていくか。そのところで引き出  
しを開けてみたら、友達のことでもいろいろと困難にぶつ  
かった。それを乗り越えるためにいろいろ考えたことが  
なかったと。引き出しを開けたとき何もないと。ところ  
が、いろいろ友だちのことを多面的、多角的に考える学  
習をしていたら、だんだんと引き出しが増えてきた。や  
はり、こういう学びをたくさん経験させると、心の中の  
引き出しの中味が、ずいぶん充実すると思います。

道徳の時間は35時間です。小学校1年生は34時間で  
すが、小学校2年生から中学校3年生までが各35時間  
です。それほどたくさんの時間ではありません。少なくと  
もその時間は、子どもたちが心の引き出しに、自分がこ  
れから生きていくための手がかりとなるものをしっかりと  
蓄えていくことのできる時間なので、それをいかに貴重  
な時間として大事に使うか。しかし、それだけで十分

な掘り下げをすることは難しい内容です。

「いのち」のこと。「働く」ということ。さまざまな問  
題はただ頭で考えるだけではわからないこともあります  
から、重点を置いた内容については、単にその時間だけ  
ではなくて、他の教育活動との関連をしっかりと図るか、  
あるいは先ほど人材活用と言いました。地域の人や保護  
者にも協力してもらって、より幅のある深みのある学習  
ができるように工夫することがこれから求められるだろ  
うと思います。これがお話したかった1点目です。

2点目は、3番のところで「道徳教育に向けての課題」  
として「道徳教育の資質・能力の育成」や「役割取得能  
力」と書いてあります。それは内容を学ぶだけではなくて、  
いくら思いやりは大切だと学んでも、相手の視点に  
立って考える力、役割取得能力がなければ、自分が思い  
やりからしたことでも、相手にとってそうになっているか  
どうかわかりません。

つまり、「思いやりは大切」を具体的にしていくな  
きは、本当に相手の視点に立って考える力を持っていない  
といけません。またそれを資質能力として育てないとい  
けません。あるいは特別活動ならば人間関係の中で育て  
ていかないと、本当に相手の視点に立った思いやり行動  
にはならないと考えています。その点で、私は「役割取  
得能力、共感性」を育てることが大事ではないかと思  
います。

### ■「夢・希望・目標」を持てるように

伝え合う力、コミュニケーションで自分の思いを相手  
に伝え、相手の思いを受け止めること。日ごろの学校の  
授業の中で、先生がずっと一方的に話をする学習は、確  
かに伝えるという面、あるいは教えるという面では大事  
かもしれません。先ほど弥栄中学校の例を話しました。  
最初は弥栄中学校では教師が主導型で授業を進めていま  
した。私は教師主導型の授業がいけないと言っているの  
ではありません。本当に子どもがお互いを学び合う学習、  
相互に触れ合う学習をしようとすると、やはり互いが発  
表する、発言する、それをいかに工夫するかということ  
も大事かと思えます。そのような点での授業の場を道徳  
の時間の中でやることも必要だと思います。

ロールプレイを道徳の時間によく活用しますが、これ  
は相手の立場に立って考える力を養うことに非常に役に  
立ちます。今まではロールプレイはねらいを深めるため  
の手段としてやっていましたが、私は、目的的に相手の  
立場に立って考える資質、能力をしっかりと育てつつ、  
そして内容とつなげていくと自分の生き方の中に生かせ  
る学習ができるのではないかと思います。

「未来を切り拓く心を育てるために」は、今日、お話が

できませんでしたB4サイズの裏表に、その考え方について書いてありますので見ていただけたらと思います。

裏に「子どもの生命観」と書いてあります。ゲームなど「命」が軽視されている状況があります。その状況の中で「命」を大切にする学習をしなければならぬとよく言われますが、私は「命」の大切さがわかっていないから、そのような状況になっているというよりも、もしかしたら満たされなさ、あるいは自分の将来が閉ざされてしまっていて夢も希望もない状態であるとか、あるいは愛情が十分向けられていないとか、自尊感情が持てないとか、そのようなことが子どもたちの中にあるマイナスの方向性での結果として人の命を奪うという行動に走るのではないかと思っています。

奈良での事件もありました。それ以外にもたくさんありますが、多くがさまざまな課題を抱えていますので、そこを考えていく授業として、私は「夢・希望・目標」を持つ必要があるのではないかと思います。

### ■イチロー選手に学ぶ

愛知県に来ましたので、これだけは知っていないといけないかなと思って、愛知の宣伝ではないのですが、イチロー選手が小学校5、6年生のときです。「夢に届くまでのステップがある」ということで、これは『心のノート』の中に掲載されています。このときに、イチロー選手はプロ野球の選手を目指し、将来は大リーガーを目指すと述べています。このイチロー選手の資料で授業をすると、どうしても200本安打を7年連続した、素晴らしいと結果だけを道徳の時間で追い求めるかたちになります。

一生懸命にやったイチロー選手は素晴らしい。だから成果が出たのだとなりがちですが、イチロー選手は、それに向けて大変な努力をしています。あるとき大リーグに行く前に、鳥取県の「ワールド・ウイング」(スポーツジム)というところに、「初動負荷理論」(小山裕史:こやまやすし)という理論をもった方がおられます。小さい体のイチロー選手が大リーガーとして活躍するために、いかに自分の体を生かしていくかという理論を学びに行き、いろいろアドバイスを受けます。そして練習を積み重ねて、途中で何度かつらい時期があったそうですが、電話で指導・アドバイスを受けながらそれを乗り越えていって、今の成果があるということをうかがっています。

道徳の授業は、何かこの素晴らしい人、生き方の例や素晴らしい人が出たら、その人を目指すぞ、みたい

に見られがちですが、その人が何かを成果を出したのは結果でしかなく、答えではないのです。その夢に届く過程の中で、その人は何を獲得したのか。そこを学ぶことにおいて自分の生き方に役立てることができません。

みんながイチロー選手になれるわけがないです。しかし、野球選手であろうとなかろうと、何を目指そうと、イチロー選手は自分の目標を遂げるために、どのようにステップアップさせていったのか、困難にぶつかってどのように乗り越えたのか。そこを学ぶことで、「よし、自分も頑張ってみよう」ということを学ぶことができれば、それは自分の生き方に反映させることができます。

「イチロー選手は素晴らしいね。すごいね。あんなふうに頑張らないといけないね」ではなくて、何を乗り越えてあそこまで目標達成できるか。そのことを子どもたちが学んでいくことが大事ということです。

### ■子どもたちの輝く笑顔求めて

私の好きな『五体不満足』の著者、乙武洋匡さんは、杉並区の小学校の先生になっています。あの方が小学校の先生になりますという前向きな生き方をしておられますが、『五体不満足』の「はじめに」の終わりの1行が大変心に残っています。

乙武さんが生まれたときに、お母さんと最初1カ月は会うことがなかったのです。それは周りが配慮してショックを受けたらいけないと、お母さんと会わせないようにしたのです。おそらくお母さんは何かあったに違いないと不安にも思ったでしょう。さまざまな配慮のもとで1カ月後、乙武さんと出会いました。はじめて出会ったときにお母さんは、「まあ、かわいい」という一言を。「はじめに」の最後の1行は、「生後1カ月、ようやく僕は誕生した」という言葉で終わっています。

既に1カ月前に生まれているのですが、お母さんに存在を認知してもらって初めて社会的に誕生したということです。人間にとって本当に価値ある存在とみられるのは、やはり社会的存在として認知されることではないでしょうか。

クラスにさまざまな課題を持っている子ども、あるいは表に出ていない子どももいるかもしれませんが、その子どもたちを価値ある存在として見ていくことができる。そのことが大事なかなと思いました。

おそらく先生方は、日々の教育の中で大変な苦勞をされていることもあるかと思いますが、ぜひ子どもたちの輝く笑顔があちこちに見られることをお祈りし



ています。

先ほど入ってきたときに、高校生の3人の女子学生がにこりと笑って「こんにちは」と言ってくれました。私は大変うれしく思いました。

先ほどはじめに拍手をしていただいたことも大変ありがたいことでした。実は、私はここには高校の先生、大学の先生もおられて、本当に最初にお引き受けしたときには、研究発表会か何かで、中学校や現場の先生が多いのかなと思って、「はい」と気安く返事をしたのですが、大学の先生もおられて緊張した中でお話しさせていただきました。先生方のお役に立てたかどうか分かりませんが、これで終わりにさせていただきたいと思います。

フルスイングの三球三振になったかどうかは、あとで評価いただいて、どうか笑顔で送っていただけたらと思います。ありがとうございました。



# 事業概要

(平成20年度)



## I. 運営

## 研 究 所

研究所員 所長 柴山 正 顧問 河村瑞江 主任 渋谷 寿 講師 越原もゆる  
職員 浅井貴子

## 運営委員会

委員会構成員 委員長 遠山佳治  
委 員 木原貴子・駒田格知・白井靖敏・谷口富士夫

## ①第1回運営委員会

日 時：平成20年4月25日（金）13：30～14：40

出席者：委員長 遠山佳治

委 員 木原貴子・駒田格知・白井靖敏・谷口富士夫

研究所 柴山 正・河村瑞江・渋谷 寿・浅沼絵里子

議 題：1. 運営委員長選出

2. 事業計画（案）

3. 予算（案）

資 料：・事業計画（案）

・予算（案）

・年間行事表

## ②第2回運営委員会

日 時：平成20年6月26日（木）16：50～17：50

出席者：委員長 遠山佳治

委 員 木原貴子・白井靖敏・谷口富士夫

研究所 柴山 正・河村瑞江・渋谷 寿・桑山ともみ

議 題：1. 「総合科学研究所だより」7号発行

2. 『総合科学研究』第3号発行

3. 「開かれた地域貢献事業」提案

4. 「講演会」開催

5. 中学校教育研究活動報告

資 料：・「総合科学研究所だより」7号掲載・スケジュール（案）

・『総合科学研究』第3号目次案

・中学校教育研究会記録

・東北学院大学教育研究所報告集

・「開かれた地域貢献事業」（案）

## ③第3回運営委員会

日 時：平成20年10月10日（金）13：30～14：30

出席者：委員長 遠山佳治

委 員 木原貴子・駒田格知・白井靖敏・谷口富士夫

研究所 柴山 正・河村瑞江・小塚美枝子

議 題：1. 『総合科学研究』第3号発行

2. 平成21年度プロジェクト研究募集

3. 平成20年度「開かれた地域貢献事業」

4. 平成21年度開始「大学における効果的な授業法の研究5」について

5. 予算内訳変更報告

6. 講演会報告

- 資料：・『総合科学研究』第3号について  
・『総合科学研究』執筆要項、原稿フォーム  
・「開かれた地域貢献事業」活動計画  
・プロジェクト研究募集・申請書類  
・平成20年度予算計画（内訳流用変更後）  
・講演会（9月19日）報告

④第4回運営委員会

日時：平成20年12月12日（金）13:30～14:45

出席者：委員長 遠山佳治

委員 木原貴子・駒田格知・白井靖敏

研究所 柴山 正・渋谷 寿・浅井貴子

- 議題：1. 平成21年度プロジェクト研究採択  
2. 平成21年度予算計画  
3. 『総合科学研究』第3号発行  
4. 「総合科学研究所だより」8号発行  
5. 平成20年度「開かれた地域貢献事業」について  
6. 平成21年度「大学における効果的な授業法の研究5」について  
7. 平成21年度「創立者および女子教育に関する研究」について  
8. 幼児保育研究会、中学校教育研究会報告、教育研究会講演会予定

- 資料：・「プロジェクト研究」申請書類  
・平成21年度予算計画（案）  
・『総合科学研究』第3号について  
・「総合科学研究所だより」8号発行について  
・平成20年度「開かれた地域貢献事業」案  
・平成21年度「大学における効果的な授業法の研究5」要項  
・平成21年度「本学創立者および女子教育に関する研究」応募要領

⑤第5回運営委員会

日時：平成21年2月13日（金）13:00～14:00

出席者：委員長 遠山佳治

委員 木原貴子・白井靖敏

研究所 柴山 正・河村瑞江・渋谷 寿・浅井貴子

- 議題：1. 平成21年度プロジェクト研究採択  
2. 『総合科学研究』第3号について  
3. 「総合科学研究所だより」8号について  
4. 幼稚園、中学校、高等学校教育研究会報告  
5. 「開かれた地域貢献事業」経過報告  
6. 平成21年度機関研究 研究者応募状況

- 資料：・平成21年度「プロジェクト研究」応募書類（2件）  
・『総合科学研究』第2号送付先リスト（参考資料）  
・開かれた地域貢献事業「みんなで遊ぼう！」チラシ案

## II. 研究助成

### 1. 機関研究

#### (1) 幼児の才能開発に関する研究

研究テーマ 「幼児の育ち合いを促す保育実践」

研究要旨 別記 (P.75)

## 幼児保育研究会グループ

＜幼稚園＞	伊藤 規子	井上 智賀	川口 真希	白木 律子	関戸紀久子
	皆川奈津美	森岡とき子	森部 洋子	湯淺 智子	吉村智恵子
	渡邊 和代				
＜大 学＞	荒井 康夫	荒川志津代	伊藤 充子	宇野 民幸	大橋 保明
	川上 輝昭	河村 瑞江	木原 貴子	越原もゆる	駒田 格知
	澤田 稔	柴山 正	渋谷 寿	清水 一巳	白井 靖敏
	鈴木 方子	谷口富士夫	遠山 佳治	平井孔仁子	間瀬 清美
	幸 順子				

## 活動内容

## 1. 園内研究保育

- 11月13日(木) 3歳児・5歳児「遊べるおもちゃでの交流」
- 11月17日(月) 3歳児「クリスマスの袋の飾りつけ」
- 11月18日(火) 4歳児「運動遊び」
- 11月21日(金) 5歳児「クリスマス飾り(クリスマスツリー)」
- 12月15日(月) 5歳児「朝の会・帰りの会(誕生会)」
- 4歳児「給食」
- 3歳児「朝の室内遊び」
- 3歳児「給食」

## 2. 研究会

- 第15回 5月15日(木) 「平成20年度附属幼稚園研究計画について」  
参加者：幼稚園教諭11名、荒川志津代、遠山佳治、間瀬清美、渋谷寿、浅沼絵里子
- 第16回 3月3日(火) 「平成20年度研究の概要報告」  
「平成21年度 研究主題について」  
「幼児の育ちを支えるための保護者との連携」  
(瀬井まりや臨床心理士、附属幼稚園子育て相談講師)  
参加者：幼稚園教諭10名、渋谷寿

## (2) 中学生の学力向上に関する研究

研究テーマ 「新学習指導要領の本校教育への展開」

研究要旨 別記(P. 78)

## 中学生学力向上研究グループ

＜中学校＞	鈴木 文悟 (校長)	堀出 稔 (教頭)				
	荒井あゆみ	鵜飼 良治	大西 裕人	岡田有希子	奥村 彰敏	
	神谷 弘子	鬼頭 和代	近藤 裕次	サルバゾン有紀	澤村信次郎	
	高山 嬉加	中野 容子	野中 知里	福田 誠	細井 孝徳	
	村瀬 慎一	山本 暁太				
＜大 学＞	石倉 瑞恵	伊藤 太郎	伊藤 勉	宇野 民幸	大橋 保明	
	川田 博美	河村 瑞江	木原 貴子	越原もゆる	小島 浩司	
	小林田鶴子	駒田 格知	澤田 稔	柴山 正	渋谷 寿	
	下木戸隆司	白井 靖敏	杉村 藍	竹内 若子	竹尾 利夫	
	谷口富士夫	辻 和良	遠山 佳治	羽澄 直子	八田 耕吉	
	服部 幹雄	林 和利	平松 道夫	宮原 悟	村上 哲生	
	山口 厚子	吉村智恵子	和井田節子			



## 活動内容

### 1. 研究会

第137回4月30日(水)「平成20年度研究計画について」

参加者：中学校高等学校教諭 17名

大学 小林田鶴子・柴山 正・渋谷 寿・遠山佳治・山口厚子

第138回6月24日(火)

1) 公開授業 数学「 $y=ax^2$ 」

3年生数学トラッキングMクラス担当 村瀬 慎一 教諭

2) 研究会

第139回10月28日(火)

参加者：中学校高等学校教諭 17名

大学 石田典子・河村瑞江・駒田格知・柴山 正・渋谷 寿・和井田節子・  
小塚美枝子・浅井貴子

1) 公開授業 理科「生命の進化」

中学校2年C組 中野 容子 教諭

2) 研究会

テーマ「新学習指導要領の本校教育への展開」

～「生物の変遷と進化」を中学2年生でどう扱うか～

第140回11月25日(火)

参加者：中学校高等学校教諭 16名

大学 河村瑞江・柴山 正・渋谷 寿・林 和利・丸山竜平・浅井貴子

1) 公開授業 社会科「鎌倉・室町時代の文化」

中学校1年B組 山本 暁太 教諭

2) 研究会

テーマ「新学習指導要領の論旨の展開をはかるために」

～学習者が文化と時代を関連づけて理解できる授業の工夫～

2. 夏期研究合宿 日程：8月5日(火)～7日(木)

場 所：三重県桑名市

参加者：中学校教員 16名

3. 第26回研究発表会 2月19日(木)

1) 研究授業 国語科「新学習指導要領の本校教育への展開

～古典に親しみながら文章構成を学ぶ授業～」

中学校2年A組 奥村 彰敏 教諭

2) 今年度の研究について

中学校 福田 誠 教諭

(3) 高校生の学力向上に関する研究 研究要旨 別記(P.81)

研究テーマ 「高校生の学力向上に関する研究」

高校生学力向上研究グループ

<高等学校> 鈴木 文悟(校長) 水谷 禎憲(教頭)

	安藤 友一	江本 幸司	片岡 彌生	加太 良枝	小室 祐生
	坂井 健悟	手島 恭子	長谷川 優	平川 理基	
<大 学>	石倉 瑞恵	伊藤 太郎	伊藤 勉	宇野 民幸	大橋 保明
	川田 博美	河村 瑞江	木原 貴子	越原もゆる	小島 浩司
	小林田鶴子	駒田 格知	澤田 稔	柴山 正	渋谷 寿
	下木戸隆司	白井 靖敏	杉村 藍	竹内 若子	竹尾 利夫
	谷口富士夫	辻 和良	遠山 佳治	羽澄 直子	八田 耕吉
	服部 幹雄	林 和利	平松 道夫	宮原 悟	村上 哲生
	山口 厚子	吉村智恵子	和井田節子		

## 活動内容

### 1. 他校研究会参加

#### (1) 第10回京都市立堀川高等学校研究大会

日 時：11月14日（金）～11月15日（土）

派遣者：安藤友一・手島恭子・江本幸司

主な内容：全体会・公開授業・研究授業・分科会・探求科目説明会・探求科目発表会・特別講演（講師辰野裕一東京大学理事）

#### (2) 筑波大学付属駒場中高第35回教育研究会

日 時：11月21日（金）から11月22日（土）

派遣者：坂井健吾・長谷川聡・加太良枝

主な内容：公開授業2コマ各科目・研究協議会・講演会・体験講座

#### (3) 第58回筑波大学附属高等学校研究大会

日 時：12月6日（土）

派遣者：平川理基・片岡彌生

主な内容：講演会・公開授業・教科分科会

### 2. 公開授業

日 時：12月16日（火）9時50分から16時10分

研究協議：1月31日（土）

#### (1) 第2限 3年選択 公民科「現代社会演習」

テーマ「生徒自ら課題を追究する授業づくり」

授業者 長谷川 聡教諭

#### (2) 第3限 2年9組 英語科

テーマ「グループ発表を通して発信の力を養う授業づくり」

授業者 加太 良枝教諭

#### (3) 第5限 2年4組 英語科

テーマ「生徒の英文読解力を向上させる授業づくり」

授業者 手島 恭子教諭

#### (4) 第6限 3年4組 地理歴史科「日本史B」

テーマ「史料から歴史を読み解く力を育てる授業づくり」

授業者 江本 幸司教諭

#### (5) 第7限 2年4組 国語科「現代文」

テーマ「文章の構造的理解を深める授業づくり」

授業者 片岡 彌生教諭

### 3. 講演会

日 時 1月31日（土）午前10時30分～12時

演題テーマ 「学力向上を目指す授業改善の在り方」

講 師 工藤文三 氏 (国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長)

(4) 創立者越原春子および女子教育に関する研究 (詳細P.55)

(5) 大学における効果的な授業法の研究 4 (詳細P.1)

2. プロジェクト研究 (詳細P.63)

家政学とICTを活用した国際交流プログラムを実践するためのサポート体制のあり方を求めて  
～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み (その3)～

山口厚子・白井靖敏・木原貴子

Ⅲ. 公開事業

開かれた地域貢献事業 (平成 20 年度)

総合科学研究所では、平成 18 年度より『開かれた地域貢献事業』を企画し実施している。平成 20 年度は文学部児童教育学科、短期大学部保育学科および家政学部生活福祉学科の有志教員と学生、春光会が中心となって、3月26日(木)に開館する瑞穂児童館・瑞穂福祉会館新館の開館イベントを、名古屋市社会福祉協議会と共催で行うこととなった。

日 時：平成 21 年 3 月 26 日 (木)

詳細は本誌P.85

Ⅳ. 講演会

1. 講演会

講 師：齋藤 誠氏 (東北学院大学法学部教授・法学部長)

内 容：1. アンケート調査中間報告

大学における効果的な授業法の研究 4 - 初年次教育についての授業法の開発 -

2. 講演

「初年次教育としての『大学生生活入門』」

日 時：平成 20 年 9 月 19 日 (金) 13:00 ~ 15:30

場 所：汐路学舎 南 4 号館 204 教室

参加者：名古屋女子大学・短期大学部教職員 86 名

東北学院大学法学部では、平成 18 (2008) 年度から実施のカリキュラムに、新入生のための大学生生活全般にわたる入門教育をめざした、初年次教育のための授業科目「大学生生活入門」を新設した。講演会では、この授業科目の企画立案に関わり、実際に授業を担当している講師が、①構想・企画の経緯、②授業の実際、③学生の反応、④問題点と今後の課題について話した。

また、講演に先立ち、機関研究「大学における効果的な授業法の研究 4 ~ 初年次教育についての授業法の開発 ~」研究グループから研究報告が行われた。

2. 教育講演会

講 師：前田 隆芳 氏 (洗足学園中学校高等学校校長)

内 容：「改革に終わりはない」

日 時：平成 21 年 3 月 3 日 (火) 15 時 ~ 16 時 30 分

場 所：名古屋女子大学中学校高等学校 第二講堂

参加者：名古屋女子大学中学校、高等学校教諭、名古屋女子大学・短期大学部教職員 58 名



平成20年度 講演会

## 初年次教育としての「大学生生活入門」

### —本学法学部における実践報告—

東北学院大学法学部

齋藤 誠

#### 1. はじめに

きょうの講演は、本学法学部が平成17(2006)年度から実施している新カリキュラムにおいて導入した、初年次教育のための授業科目「大学生生活入門」についての実践報告である。

法学部の新カリキュラムにおいて導入された重要な改革のひとつが「ガイダンス教育」の充実であり、「大学生生活入門」の新設はその具体化である。当時、「ガイダンス教育」という概念は必ずしも一般化していなかったが、われわれは、新入生のための大学生生活全般にわたる入門教育のことを指すものとしてこの言葉を用いた。最近では、ほぼ同じ内容を表す概念として「初年次教育」という言葉が使われているため、以下ではこの用語を用いる。

用語はともかく、新入生のための大学生生活全般にわたる入門教育をめざす授業科目としては、本学ではこの「大学生生活入門」が最初のものである。この講演は、この授業科目の担当をしている教員である私が、この授業科目の内容および授業方法について紹介することを目的とする。これから貴学が初年次教育を考えるさいに多少なりとも参考になればとの思いからである。

#### 2. 「大学生生活入門」の構想から実現まで

##### (1) 問題提起

法学部は、かなり早い時期から「1年生をどう教育するか」という問題にまじめに取り組んできた。いわゆる大綱化をうけて平成6(1994)年度から実施されたカリキュラムでは、法についてほとんど何も知らない新入生をいかにして専門教育へと導入させるかという観点から、全国的にもほとんど例を見ないコンセプトによる3つの授業科目を置き、一定の効果をあげてきた。

しかし、今回のカリキュラム改訂を審議した委員会において、「専門教育への導入だけでは不十分であり、そもそも大学生として一人前になるための導入教育をする授業科目が必要なのではないか」という提案があった。具体的には、大学での勉強についての意識づけ、ノートの取り方、本の読み方、レポートの書き方、図書館の利用法、ゼミ発表の仕方などを教える授業の必要性が話題となった。それまで、こうした教育は、1年後期におかれた「基礎演習Ⅰ」において、各担当教員が、独自に、できる範囲で行ってきた。しかし、それを、1年前期に、1つの授業科目として統一的・組織的に行うべきだという提案である。

なぜそうした授業科目が必要なのかについては異なる意見があった。一方では、最近の学生の能力・資質の現実をふまえた「仕方ない対応として必要だ」という意見があり、他方では、現在の学生の能力・資質とは関係なく大学教育を効率よく進めるために「もともと必要なものだった」という意見もあった。しかし、いずれにせよ、すでにいくつかの大学における先行例があったことも幸いして、必要性についてはおおかたの理解をえることができた。

##### (2) 構想と設計

つぎに、①名称およびカリキュラム上の位置づけ、②授業形態、③担当者、④教育内容・方法の詳細が問題となった。①については、「大学生生活入門」という名称のもと2単位の教養教育科目(選択科目)の1つとして年前期に開講することとした。ただし、できるだけ多くの新入生が履修するよう履修指導することとした。②については、統一的・組織的教育との提案趣旨から、1人または2人といったできるだけ少ない教員が担当することとしながらも、1学年(約400名)1クラスといった大人数の授業はできるだけ避けることとした。③については、すでに専門導入科目の担当者として導入教育の経験をもっていること、初年次教育の必要性に理解を示していることなどを理由に、私が担当することとなった。④については、この授業科目

の趣旨を十分にふまえることを条件に、担当者に一任された。また、担当者の希望によって、③については、1学年を2クラス（1～3グループと4～6グループ）に分けて行うこととした。

### （3）履修登録・出席・単位修得の状況

次ページの表1は、導入初年度の2006年度から今年度までの、「大学生生活入門」の履修・出席・単位修得の状況をまとめたものである。

まず、履修登録状況についてみると、上記のように「大学生生活入門」は選択科目であるが、新入生のほとんどはこの授業科目を履修登録している。この履修率の高さは、新入生オリエンテーション期間中の履修指導によるところが大きい。また、履修登録をした学生のほとんどは履修を最後まで継続している。出席率の高さは、後述のように、毎回出席を取りそれを成績評価に加えているという事情もあるが、学生の授業に対する関心の高さの表れでもある。その結果、単位修得率も高い。

表1 「大学生生活入門」の履修・出席・単位修得状況

	新入生	履修登録者	平均出席率	試験受験者	単位修得者	単位修得率
2006年度	401名	385名	93%	373名	361名	94%
2007年度	417名	417名	92%	410名	385名	92%
2008年度	391名	390名	92%	385名	367名	94%

## 3. 授業内容・方法の構想

### （1）大学生生活に何を含めるか

授業内容の構想にあたっては、2つのポイントがあった。第一は、「大学生生活」ということで何を含めるか、という問題である。具体的には、勉学に関することが含まれることは当然としても、それに以外のこと（たとえば課外活動、日常生活、進路選択など）をどの程度に扱うかという問題である。けっきょく、「大学生生活入門」では、勉学に関することを中心にしつつも、学生生活のそれ以外の部分にもかなり言及することにした。科目名称のとおり、大学生生活全般に関わる内容としたのである。担当者としては、勉学に関すること6割、その他のこと4割と考えた。

その理由は大きく言って3つある。第一は、新入生が勉学以外のことも広く不安を感じているという現実である。法学部の新入生意識調査によると、大学生生活への不安としては、確かに「講義についていけるか」とか「順調に進級・卒業ができるか」といった勉学に関するものが多いが、そのほかにも「親しい友人ができるか」「希望する就職ができるか」「きちんとした生活が送れるか」「大学の雰囲気になじめるか」といったことにかかなりの学生が不安を感じている。「大学生生活入門」は、その現実に対応したものでなければならない。

第二の理由は、社会的要請である。さまざまな理由から、現在、大学には、勉学面以外での学生生活全般にわたる教育・指導が求められつつある。ボランティア教育やキャリア形成教育などは、その代表例である。従来は、こうした教育は、正課外・教室外で行われてきた。しかし、現在では、これを積極的にカリキュラムの中に取り入れ、正規の授業科目と結びつけていくことが課題となっている。「大学生生活入門」は、この課題に応えるものでなければならない。

第三の理由は、学生に「学び」の意義を説くためには、勉学以外の学生生活の送り方と関連づけざるをえないということである。生活全般や生き方への言及なしに学びの意義は説得的に語れない。学びへの強い意識をもたないで入学してくる現在の大学生を相手にするわれわれ教員にとって、この点はとりわけ重要である。学生に充実した生のイメージ、たとえば自立的あるいは自律的に生きる、良くあるいは善く生きる、成長あるいは発達しながら生きるといったイメージを喚起すること、しかもそれを日常生活の具体的な問題にそくしながら実感させること、そして、そうした生き方をするために学びがどんな意義をもつかを説くことは、今日の学生の教育には欠かせない要素となっているように思われる。もちろん、ひとつ間違えば主観的な人生訓、「お説教」でしかないこの仕事は、私を含めたほとんどの教員にとっては明らかに荷の重い、そして気が重いものである。しかし、にもかかわらず、学生に「何をどう学ぶか」を説くには「なぜ学ぶか」を

説くことは避けて通れない。「大学生生活入門」は、この課題に答えられないわけにはいかない。

## (2) 知識・技能・意欲

授業内容を構想するうえでの第二のポイントは、知識の伝達、技能の習得、意欲の喚起のどこに重点を置くかであった。結論からいえば、これら3つの要素をできるだけバランスよく取り込むことにした。たしかに、授業クラスが200名前後の受講者からなることを考えたとき、技能習得のための訓練にはおのずと限界があるだろうし、意欲の喚起は、上記のように、ひとつ間違えば教員のひとりよがりにも陥るおそれがある。

しかし、にもかかわらず、「新生を早く一人前の大学生にする」という、この「大学生生活入門」の設置趣旨からすれば、知識伝達だけでは不十分であり、大学で使う技能の習得、充実した大学生生活を送るための意識づけが不可欠である。ノートの取り方、情報の集め方、原稿用紙の使い方、レポートの書き方、試験答案の書き方などは実際にできるように練習させなければならぬし、失意のもとにある不本意入学者には希望と励ましを与え、学びの準備ができていない者には学びの意義と楽しさを説き、学びのイメージについて偏りがある者にはそれを直し、自分らしさや将来の夢がないと悩む者にはそんな心配は無用だと伝えなければならぬ。もちろん、すべてがうまくいくわけではない。しかし、できる限りのことはしなければならぬ。

さらに、知識・技能・意欲の3要素のバランスをとることは、授業に対する学生の関心を持続させるための方策としても有効であると考えられた。この授業科目を構想するにあたって、私は、当時担当していたゼミの学生(1・2年生)にこの授業科目の趣旨を話し、「大学生生活入門」にどんなことを期待するかについて意見を聞いた。学生が興味を示す内容はかなり異なっていたが、知識・技能・意欲の3要素のどれかに授業を集中することには反対意見が多かった。どれかに偏ったのでは飽きるというのである。確かに、「大学生生活入門」という1つの授業科目で、多様な新生の多様な期待に対応するには、いろいろな要素を入れておいた方がよい。

## (3) 教科書・参考書・プリント教材

教科書として高橋三郎・新田光子著『大学生入門 [改訂版]』(世界思想社、2006年)を使用した。(今年度は別のものを使用した)それは授業の構想と本書の内容が一致したからではない。多くの本を参考にしたが、授業構想と一致するものはなかった。したがって、授業は、自作のプリント教材を作ってすすめるしかない判断していた。しかし、かなりの程度で利用できるものであれば、それを教科書として指定するのが、教えるほうにとっても学生にとってもよいと考えた。本書を選んだのは、取り上げられている内容、書き方、ボリューム、価格などを総合的に判断しての結果である。実際、この教科書は学生にとっても興味深いあるいは便利な内容だったようである。しかし、この教科書が授業内容の全部あるいは大部分をカバーしているわけでもなく、授業がこの教科書に即して進められるわけでもないことはシラバスに明記し、授業の冒頭でも説明した。

ちなみに、授業を構成するうえで参考にした文献としては次のものがあり、学生には参考文献として紹介した。

- 飯田史彦『大学で何をどう学ぶか』(PHP文庫、2001年)
- 藤田哲也『大学基礎講座』(北大路書店、2002年)
- 森靖男『新版大学生の学習テクニク』(大月書店、2007年)
- 佐藤望(編著)他『アカデミック・スキルズ』(慶応義塾大学出版会、2006年)
- 戸田山和久『論文の教室』(日本放送出版協会、2002年)
- 学習技術研究会(編著)『知へのステップ [改訂版] -大学生からのスタディ・スキルズ』(くろしお出版、2006年)
- 北尾謙二ほか『広げる知の世界-大学でのまなびのレッスン-』(ひつじ書房、2005年)

これらは、大学生生活を広く捉えるというこの授業との関連では明らかに偏りがある。つまり、これらの内容のほとんどは、大学での勉学に関することだからである。しかし、勉学以外の大学生生活についての入門書は、全く知らないわけではなかったが、内容的に自信をもってすすめられるものはなかった。今後そうしたものが見つかれば追加していくつもりである。

また、これらの参考書はすべて、授業のなかでその内容の一部を利用したものである。授業を構想する段



階で参考にはしたが、授業で一回も取り上げなかったものは参考文献には挙げなかった。

ちなみに、新入生に大学における「教科書」や「参考書」の意味が高校までといかに違うのかを説明することは不可欠である。教科書を指定しておきながら、それをほとんど使わない先生がいるのはなぜか、教科書を一生懸命に勉強してきても試験でよい成績がとれないことがあるのはなぜか、授業と少ししか関係しない内容の本が参考書になるのはなぜか。学生がこうした疑問をもつまえに、説明をしておいたほうがよい。

授業では、担当者が作ったプリントを教材として利用することとした。ただし、毎回でいいいな授業用レジュメを作るわけではない。学生にノートをとる練習をさせるために、あえてレジュメを準備しないこともある。しかし、授業にとって重要な説明部分には必ずプリントを用いた。配付枚数は少ないときで2枚、多いときで4枚、授業全体では30枚程度である。授業の準備としては、このプリント教材の作成に最も時間を費やした。

学生には、「これから折にふれて読み直せるように、きちんとファイルしておく」ことを求めた。同時に、試験を「持ち込み一切可」とし、試験準備として配布プリントの整理が不可欠であることを伝えたため、少なくとも試験にはほとんどの学生がファイルされたプリントを持ち込んでいた。

#### (4) 授業計画

資料1は、今年度の授業計画である。これを見ればわかるように、1コマの授業は4単元と「きょうのコラム」に5分割され、その内容が決められている。授業をいくつかの単元に分割して計画することは、担当者が導入教育での経験にふまえて考えたもので、学生の集中力を維持するには有効である。また、授業では、授業の前半・後半の間に5分の休憩を入れている。

#### 【資料1】

#### 「大学生生活入門」(2008年度)授業計画

##### <第1講>

- (1) この授業科目の目的
- (2) この授業の進め方  
●きょうのコラム①：社会へのアンテナを張ろう
- (3) 教科書とプリントの使い方
- (4) この授業での成績評価の方法

##### <第2講>

- (1) 大学の教員
- (2) 大学の授業  
●きょうのコラム②：大学教員との接し方
- (3) 講義はどう聴けばよいのか
- (4) 大学の試験・成績評価・単位認定

##### <第3講>

- (1) 第1回レポートについて
- (2) 情報収集の方法  
●きょうのコラム③：不本意入学のきみに
- (3) 説明文の書き方
- (4) 原稿用紙の使い方：説明①

##### <第4講>

- (1) 書籍購入のしかた
- (2) 図書館の利用  
●きょうのコラム④：図書館は楽しい
- (3) インターネットの利用
- (4) 情報源としての友人・先輩・教員

##### <第5講>

- (1) 本の読み方：説明
- (2) 本の読み方：練習  
●きょうのコラム⑤：体と心の健康管理
- (3) ノートのとり方：説明①
- (4) ノートのとり方：説明②

##### <第6講>

- (1) 第2回レポートについて
- (2) ノートのとり方：練習①  
●きょうのコラム⑥：自分を高める3つの視点
- (3) ノートのとり方：練習②
- (4) ノートのとり方：練習③

##### <第7講>

- (1) ノートの取りかた：練習④
- (2) ノートの取りかた：練習⑤  
●きょうのコラム⑦：異文化交流のすすめ
- (3) ノートの取りかた：練習⑥
- (4) ノートの取りかた：練習⑦

##### <第8講>

- (1) 原稿用紙の使い方：説明②
- (2) 原稿用紙の使い方：練習  
●きょうのコラム⑧：アルバイトのすすめ
- (3) 文章の書き方：説明
- (4) 文章の書き方：練習

##### <第9講>

- (1) レポートの書き方：説明①
- (2) レポートの書き方：説明②  
●きょうのコラム⑨：世話役のすすめ
- (3) レポートの書き方：練習①
- (4) レポートの書き方：練習②

##### <第10講>

- (1) レポートの書き方：説明③
- (2) レポートの書き方：説明④  
●きょうのコラム⑩：ボランティアのすすめ
- (3) レポートの書き方：練習③
- (4) レポートの書き方：練習④

##### <第11講>

- (1) 第3回レポートについて
- (2) ゼミの意義とゼミ発表のしかた  
●きょうのコラム⑪：価値としての自律
- (3) レジュメの作り方：説明
- (4) レジュメの作り方：練習

##### <第12講>

- (1) 就職への準備①
- (2) 就職への準備②  
●きょうのコラム⑫：自律を妨げる現代社会
- (3) 試験答案の書き方：説明①
- (4) 試験答案の書き方：練習①

##### <第13講> 一省略

さらに、実際の授業では、本題に入る前に「前回授業での質問への解答」の紹介と解説（後述）があり、最後には「出席カード」への記入（後述）がある。したがって、実際の授業は、「解答解説」（約10分）→「単元（1）」「単元（2）」（それぞれ15分）→「休憩」（5分）→「きょうのコラム」（約10分）→「単元（3）」「単元（4）」（それぞれ15分）→「出席カード」（5分）という順序で進められる。この進行予定は、あらかじめ学生には伝えられており、その結果、担当者にはかなり厳密な時間管理が求められる。授業開始後40分が近づくと、学生たちの視線は教室前方の電波時計に集まる。

授業（1）～（4）の単元は勉学に関する知識伝達・技能習得が中心であるのに対して、「きょうのコラム」は勉学以外の面での意識づけが中心である。両者の区別を明確にし、「きょうのコラム」の内容は担当者からの個人的メッセージであること、したがって別の意見がありうることを強調したかったからである。また、ノートのとり方やレポートの書き方のなかでも、「練習」の題材とすることで、メッセージ性の強いテーマを扱うことができた。

「説明」よりも「練習」に多くの時間を割いているのもこの授業計画の特徴である。とはいっても、授業のなかで実際に練習できる時間は多くないし、大教室なので一人ひとりまでは目が届かない。初年度（2年目は応募者がいなかったため採用できなかった）は大学院学生1名をティーチングアシスタントとして採用し、教室内を巡回しながら学生からの質問等に対応させた。しかし、基本的アカデミック・スキルを身につけさせるために、いかに実のある練習をさせるかが、この授業にとって最も重要な課題となった。

#### 4. 授業の実際

##### （1）出席カードの利用

授業では毎回出席をとるが、「出席カード」はA5判のものを自前で作り、「1. 授業での質問への解答」と「2. 授業への感想、意見、質問」の欄を設けた。この2つの欄への記入のために、上記のように、授業時間の最後の5分が充てられた。

1の欄は、担当教員がその日の授業に関することを1つ質問し、学生は授業でとったノート（ときには教科書や配布プリント）をみて答えをその欄に書くためのものである。これによって、ノートのとり方、文章の書き方、試験答案の書き方の総合練習ができる。学生は、いいノートをとることがいかに重要かを知り、内容的には理解していてもそれを答案として文章化するのがいかに難しいかを知る。

2の欄は、学生の授業に対する関心の方向と程度を知るうえで重要である。とくに、授業のなかの「意識の喚起」に関する部分の反応については、この欄への回答が参考になる。もちろん、何も書かない、あるいはほとんど何も書かない学生もいるが、その割合は1割にも満たなかった。また、その割合は授業期間の初期から終期にかけて増えることはなく、むしろ記述量は増えていった。

##### （2）質問への解答についての解説

授業の冒頭には、前回授業で出席カードに書いた質問への解答について、プリントを用いて解説をする。プリントは、①質問とそれに対する答え方についての解説、②学生の解答例とその修正、③それぞれの解答の評価から構成されている。

まず、質問に対する解答には、適切な答え方があることを示す。この点は、とくに試験答案の書き方としてひじょうに重要であることを強調する。この指摘を繰り返すことの成果は大きく、最終試験で「……はなぜか。」との質問に、8割以上の学生は「……だからである。」のように質問に対応した形式で答えている。ちなみに、こうした注意をしないで解答を書かせた最初の授業では、質問に対応した答え方をしたのは5割弱にすぎない。

つぎに、学生の解答例の提示とその修正は、個別的な添削ができないことへの代替措置である。一つひとつの修正についての説明する時間はないが、学生に具体的修正を示すことで、正確な文章表現への注意を喚起できる。当然ながら、学生はどのような解答が取り上げられるか、それがどのように修正・評価されるのかにかなり強い関心を抱いている。解答に授業後すぐに目を通し、次週のプリントで取り上げるものを選び、修正・評価することは、確かに手間はかかるが、学生に授業への緊張感を持続させるためには有効であるように思われる。

最後に、解答への評価を点数で示している。これは、担当教員が解答にどの程度の期待水準をもっている

かを示すためのものである。新入生は、どの程度の解答を書けば合格点に達するのか、あるいは高い評価を受けられるのかについて分からない。たとえあくまで担当教員の基準でしかないにせよ、その基準を具体的に示されることは、学生にとって有益である。そして、多くの学生は現在の自分の解答の水準ではあまり高い評価を得られないことを自覚できる。

### (3) 課題レポート

この授業では3回のレポート提出を課している。今年度の場合、それぞれ第3回、第6回、第11回の授業で課し、2～3週間後に提出させた。毎回、受講者の約9割が提出している。回収は授業中ではなく、学務係窓口の協力をえている。

課題の内容は、授業内容と関連させられており、達成目標はそれぞれ異なる。最初の課題は、「狸狽事件」「アグネス論争」「椎名裁定」のいずれか（どれになるかは学生番号によって決まる）について説明する文を300字以内で原稿用紙に書くというものである。ここでは、①調べる、②まとめる、③原稿用紙に書く、の3つが達成目標となる。学生番号ごとに課題を違えるのは、学生に自分で調べさせるための（あまり効果のない？）苦肉の策である。

2つ目の課題レポート（今年度）は、「死刑制度の廃止論」「成人年齢引き下げ反対論」「脳死を人の死とすることへの反対論」のいずれか（どれになるかは学生番号によって決まる）について、説明する文を700字以内で原稿用紙に書くというものである。基本的には説明文の発展練習であるが、今回は参考文献を示すことが義務づけられる。

ちなみに、引用・参考の文献表示義務の意識づけと文献表記法の習得は、この授業だけではかなり難しいことがわかった。最終試験問題の1つとして、ある本の奥付を見て参考文献として表記する問題を2年連続で出しているが、正答率は3割程度と低い。さまざまな授業で、レポートを課すたびに注意を喚起する必要がある。

今年度の3つ目の課題レポート（今年度）は、「配付資料を用い、景観規制問題に関するレポート（内容は自由で、「報告型」「論証型」「評論型」いずれでもよい）を書く。字数は1900字以内。」というものである。すでに授業では、レポートについて、3タイプ（報告型・評論型・論証型）とそれぞれを書くさいの型とポイントについて説明がなされている。この課題は、その説明をふまえ、与えられた資料を用いていずれかの型でレポートを実際に書いてみるというものである。提出されたうち、こちらの期待水準に達していると評価されたもの（20点満点の15点以上）が5割強であり、ほぼ達しているもの（14点）を含めると8割をこえる。

### (4) 試験

試験は定期試験期間中に行う。上記のように、授業は1学年を2つのクラスに分けて行われており、試験が実施される時間が異なるため、それぞれのクラス用に別の試験問題を作らなければならない。とはいっても、問題の出し方は同じであり、内容まで同じ問題もかなりある。

100点満点での評価の50点分（初年度は40点分）がこの試験による。試験は「持ち込み一切可」とした。授業でとったノートや配布されたプリントをいかに利用できるかをみるための試験をしたかったからである。

問題1は、授業内容を正確に記録しているかどうかをみる。今年は、「次の文はいずれも授業での説明と一致しない。どのような点において一致しないかを簡単に説明せよ」という問題にした。

問題2は授業で習った技能の応用問題であり、今年度は、事実と意見の区別、参考文献の表記法、原稿用紙の使用法、客観的な説明文の書き方に関する問題を出している。

問題3は課題レポート3をふまえての論述問題である。すでに課題レポートで出された景観規制の関するある意見について「論じなさい」という問題である。授業では、問題の趣旨説明→論点提示→自分の意見→その理由づけという順に書くように教えているが、1年生にとってはかなり難しい応用問題だったようである。満足すべき答えはきわめて少なかった。

## 5. 学生の反応

### (1) 9項目での授業評価

昨年度の授業の最終回に行った「授業改善のためのアンケート」の結果から、この授業に対する学生の反



応をみておく。回答者は363名で履修登録者417名の87%にあたる。なお、括弧内には、仮集計のものであるが今年度のデータについても付記しておく。

まず、表2は、9つの項目について、A（強くそう思う）～E（まったくそうは思わない）の5段階で評価してもらった回答分布である。また、表の右端欄には、A～Eをそれぞれ5～1点で点数化したときの平均点を出している。これをみると、授業に対する総合評価ともいえる「授業は全体的にみて良いものだった」の平均点は4.20（今年4.36）であった。とりたてて高い数字ではないが、それほど低い数字でもない。

つぎに各項目別にみると「授業内容は役に立つものだった」「授業を担当した教員は熱心だった」の2項目での平均点は4.58（今年4.64）、4.50（今年4.34）以上と高い。授業内容が役に立つとの評価は、この授業科目の設置趣旨からすれば、一応の目的を果たしているといえよう。「授業のねらいは明確だった」「授業はわかりやすいものだった」「授業の進め方は工夫されたものだった」「授業内容は濃いものであった」の4項目の平均点は4.0以上4.5未満（今年は順に4.41、4.37、4.40、4.24）である。担当者とすれば、かなり工夫をした授業を行ったつもりであるが、学生からは熱心さほどには高い評価を得ていないこともわかった。

平均点が4.0に達しなかった項目は2つあり、「授業内容は考えさせられるものだった」が3.97（今年4.01）で、「授業は自分にとっては楽しいものだった」が3.57（今年3.76）であった。「考えさせられる」という項目は、この授業における意識づけの要素に対する反応をみようとしたものであるが、結果としては、高い評価とはならなかった。授業の楽しさの対する評価の低さは、やや意外であると同時に納得できる面もある。というのも、学生からすれば、毎回授業の最後には授業内容についての質問があり、それに対する解答を書かなければならないし、課題も3回提出させられるわけで、決して気楽に聴講していればよいという授業ではないからである。加えて、後で見るように、授業の楽しさを減じた要因として、教室の狭さとそこからくる席の確保の大変さ、あるいは換気の悪さなどといった教室環境の悪さがあったのかもしれない。

表2 「大学生生活入門」授業評価の結果(2007年度)

項目	A(=5)	B(=4)	C(=3)	D(=2)	E(=1)	合計	平均
ねらいの明確さ	192	138	30	2	1	363	4.43
進め方の工夫	143	155	57	7	1	363	4.19
わかりやすさ	164	149	41	5	4	363	4.28
内容の濃さ	148	143	56	13	3	363	4.16
役に立つ内容	244	97	13	6	3	363	4.58
考えさせられる内容	120	140	80	17	6	363	3.97
教員の熱心さ	220	111	28	3	1	363	4.50
楽しさ	65	145	103	33	17	363	3.57
全体として	143	162	48	7	3	363	4.20

## (2) 授業で改善すべき点

「この授業で改善した方がよいと思われること」の自由記述欄には、昨年度、アンケートの回答者363名のうち133名が146件について回答している。最も多いのは「教室が狭い」という苦情で49件に達している。受講者が210名前後に定員220名とほとんど余裕のない教室を使用したことが原因である。これと関連して、「教室の換気が悪い」4件、「席をとるのが大変だった」3件、「次の授業との入れ替え時に混雑した」3件などの苦情もあった。

次に多いのは、配付するプリントに関するものであり、「配付するプリントの量が多すぎる」とするものが14件、「配付方法の改善を」求めるものが5件、その他が5件あった。プリントの量については、上記のように、12回の授業で30枚弱であり、それほど多いとは考えていなかったもので、やや意外であった。配付方法についても、それほど問題があるとは思えない。しかし、プリントをあらかじめ教材用小冊子としてまと

め、配付しておく必要性を検討するきっかけにはなる。

3番目に多いのは板書に関するものである。「板書をていねいに」が8件、「もっと板書を多く」が6件である。板書をあまりていねいにしないのは、一部は担当教員の個人的特徴であり、一部はこの授業科目のねらいのひとつであるノートを取るための訓練のためである。しかし、いまの学生に判読できない字を書かないような注意は必要である。

同趣旨で5件以上挙げられているのはこれだけであるが、「主観的意見が多い」という意見が4件あることは注目される。授業の中に個人的メッセージをどの程度含めるべきかについてはかなり考えたすえの授業内容ではあったが、この4名にとってはとても鼻についたということであろう。また、「学生をおどかさような発言が多い」「学生に対する皮肉や悪い部分の指摘が多い」「さまざまな事情の学生に配慮した発言を」といった指摘も1～2件ずつあった。こうした意見は、思っても書くこと自体に勇気を要することであるとすれば、同様に感じている学生が潜在的にはもっと多いのかもしれない。しかし、具体的になにに関するものなのか、自分で思い当たらない。いずれにせよ新入生を対象にする授業では、言葉の選び方に細心の注意が必要である。

### (3) 授業で印象に残っていること

「この授業を受けて印象に残っていること」の自由記述欄には、昨年度、223名（回答者の61%）が回答し、56名は2件以上をあげている。

最も多いのは「レポートの書き方が役立った」の41件である。このほか役立ったとして多くあげられているのは、「ノートの取り方」の16件と「レジュメの作り方」の12件であり、この3つに集中している。

次に多いのが「授業の最後の質問への解答」に関するもので22件あった。内容的には、たいへんさを指摘するものと効果・効用を指摘するものが半分ずつであった。それに対して、「課題レポート」についての回答は少なかった。授業全体についての感想に言及した回答としては、「役に立つ」「ためになる」「わかりやすい」「教師が熱心」がそれぞれ5～6件ずつあった。

「今日のコラム」が印象に残っているとする回答も20件と多かった。そのほかにも、今日のコラムで扱ったテーマをあげる回答は多かった。主なものとしては、「ほんとうの自分」「個性」「自分探し」に関するもの16件、「小宇宙のなかで、手厚い庇護をうけながら、サービスの消費者として育てられてきた」今日の若者論に関するもの12件、若者の「自律」に関するもの11件である。そのほかに「大学生活をどう送ればよいのか」を考えるのにためになった趣旨の回答も13件あった。こうしてみると、前述のように、担当教員からのメッセージを「主観の押し付け」と感じる学生がいる一方、それに強く印象づけられた学生も多いたといえる。

担当教員の「体験談」「昔話」「雑談」が印象に残っているという回答も21件あった。授業担当者としては単なる雑談をしたつもりはなく、説明をわかりやすくするために具体例に言及したつもりであるが、その具体例だけが説明の文脈から切り離されて学生の記憶に残るということなのであろう。

## 6. 今後の課題

### (1) 有効性の検証

担当教員の実感からしても、受講した学生の反応からしても、初年次教育としての「大学生活入門」は決して全く無駄な試みではない。学生は、授業を通じて、授業の目的である大学生活に必要な知識・技能・意識を多少なりとも獲得していることは確かだからである。しかし、どの程度有効な試みであるかについては、なお慎重に見定めなければならない。そのためには、この授業で獲得したことが、学生のその後の大学生活においてどの程度活用され続けるかが検証されなければならない。

その点についてはまだ何もなされていない。確かに、一部の教員から肯定的な情報は入っている。それによると、1年後期に開講されている「基礎演習Ⅰ」では、レジュメの作り方や報告の仕方において「大学生活入門」がなかったときとくらべると、明らかに改善がみられるという。また別の教員からは「授業でノートをとろうとしない学生が減ったように思われる」とか「レポート提出で、原稿用紙の変な使い方が減っているような気がする」という声も聞かれる。しかし、多くは感想の域を出ていない。確かなデータを得るためには、組織的な調査を行うことが必要であろうが、そのための具体的構想はまだない。

## (2) 有効活用の方策

有効性の検証とともに必要なのが、有効活用のためのフォローアップ、つまり、「大学生活入門」で習ったことを、他の授業の中で引き続き生かせるような仕組みづくりである。これができないと、「大学生活入門」で習ったことは、1つの授業科目で習ったことで終わってしまう。この点に関しては、2つのポイントがあると思われる。

第一は、「大学生活入門」の教材を、散逸しにくく、いつでも再利用可能なものとするという点である。その点からすると、毎回プリントを配付するという現在のやり方をなるべく早く改め、この授業のための教科書(的なるもの)を作ることが求められる。これについては、授業はつねに「ライブ」でありたいという思い、教科書は授業のライブ性を妨げるのではという懸念も沸くのであるが、やはり、一冊に綴じられていることの効用は大きいと考えるべきであろう。

第二は、他の教員が「大学生活入門」の授業内容を十分に理解し、その成果を生かすような授業を行うという点である。法学部では、1・2年生を対象にした演習科目「基礎演習Ⅰ」(1年後期)と「基礎演習Ⅱ」(2年前期)があるが、これら演習担当者が「大学生活入門」との連続性を意識することが特に重要となる。この点でも、現状は不十分である。なかには演習参加者に「大学生活入門」の教材を必携としている教員、「大学生活入門」の授業内容との連携をはかろうとしている教員もいるが、ほとんどの教員はそもそもそうしたことにあまり関心をもっていない。こうした現状を改善することは、学部内のFD活動の重要なテーマとなりうると考えられる。

## (3) 担当者と支援体制

どこの大学・学部においても、初年次教育の最大の悩みは、良質な授業担当者をどう確保するかである。大学教員には初年次教育の専門家はいない。そのため、しばしば、担当者を大学以外に求めようとする。たしかに、授業内容を限定すれば、それは可能であろうし、有効であろう。しかし、「大学生活入門」のように多岐にわたる内容を盛り込んだ授業は、学外者には無理なように思われる。けっきょく、それぞれの大学の教員の誰かが担当するしかない。

しかも、授業の改善という点からすれば、少なくとも数年間は継続して同じ担当者であることが望ましい。専門家でない教員がこの種の授業を改善していくには、時間がかかるからである。私についていえば、あと2～3年続ければ授業はもっと良くなると考えている。しかし、同時に、この授業の担当者はできることなら30歳代後半から40歳代の教員が望ましいのではないかという思いもある。というのも、この種の授業では、新入生が先輩の大学教員から話を聴くという関係が望ましいにもかかわらず、新入生にとって50歳代半ばの教員は別世界に生きる老人であり、何らかの精神的つながりを感じる先輩ではないからである。現に、私が授業で、新入生にとって何らかの参考になればとの思いから語る体験談は、かなりの部分で「昔話」として聞かれているにすぎない。

それはともかく、この種の授業科目の継続的担当は、教員にとって大きな負担となる。担当者の実感としては、専門教育の講義や演習担当に比べ数倍のエネルギーを必要とする。したがって、初年次教育を「持続可能な」ものとするためには、教員の負担を減らすための支援体制が必要である。授業運営やプリント配付・出席カード整理などの作業について、TAによる支援は不可欠である。さらに、学生からの疑問・質問への対応については、部分的にはTAによる支援が有効であろう。

教員が独自で作る教材については、資金的・人的援助があれば助かる。また、参考書として定評のある何冊かの書籍については、1学年分を大学がまとめて購入して各学生に貸与し、1年終了時に返却してもらい次の新入生に貸与するという仕組みができないかを検討してもらいたい。これが実現されれば、新入生全員が、とりあえず1年間は教師の薦める参考書をいつでも利用できるからである。もし、学生が必要を感じた場合には、あとは自分で買えばよい。

## (3) これからの課題としての初年次教育

私大連は、昨年3月、『初年次教育の組織的展開に向けて』と題するレポートをまとめている。そこでも強調されているように、これからの大学にとって、初年次教育をどのように構想・実施するかは大きな課題となる。

私の本務校においても、初年次教育のための授業科目としては法学部の「大学生活入門」が初めての試み



である。複数の学部からなる私の本務校においては、初年次教育をどうすべきかについて考えるとき、選択肢は大きく分けて3つある。第一は、すべてを各学部学科の判断にゆだねるやり方、第二は、全学共通の枠組みをつくり実施については各学部学科にゆだねるやり方、そして第三は、枠組みだけでなく実施についても全学的責任体制をとるやり方である。ちなみに、私の意見は、第一のやり方には反対であり、第二と第三を折衷した次の5つにまとめられる。

- ① すべての学科に教養教育科目の一つとして「大学生活入門」（2単位）をおく。
- ② 各学科はその担当者（人数は学科ごとに異なってよい）を決める。
- ③ 各学科の担当者は「初年次教育担当者会」を組織し、定期的に研究会を行う。
- ④ 具体的教育内容は③の「担当者会」での議論をふまえ、各学科が決める。
- ⑤ 大学は、③の「担当者会」及び研修会に対して財政的・事務的補助を行う。

いずれにせよ、各大学・学部では、初年次教育をどうするかについての本格的な検討を迫られているといえよう。

# 資 料

## 名古屋女子大学 総合科学研究所規程

平成13年4月1日制定

平成19年4月1日最終改正

## 第1条（趣旨）

名古屋女子大学学則第56条に基づき、名古屋女子大学総合科学研究所（以下、「研究所」という。）に関する規程を定める。

## 第2条（所在地）

研究所は、名古屋女子大学内に事務所を置く。

## 第3条（目的）

研究所は、名古屋女子大学の建学の精神に基づき、自然・家政及び文化・教育に関する理論並びに実際を研究すると共に、その専門分野の枠にとらわれず広く共同研究、調査を推進し、文化の創造と学術の進歩、併せて地域文化の進歩向上に貢献することを目的とする。

## 第4条（事業）

研究所は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 本学創立者及び女子教育に関する研究
- (2) 自然・家政及び文化・教育に関する研究並びに調査
- (3) 広く専門分野の枠を越えた総合的な共同研究
- (4) 研究成果、調査資料の普及発表及び研究報告書などの刊行
- (5) 研究会、報告会、講演会の開催
- (6) 研究資料の収集・整理及び保管
- (7) 国内、国外の研究機関との連絡並びに情報交換
- (8) その他、目的達成に必要な事業

## 第5条（所員）

1 研究所は、次の者をもって構成する。

- (1) 所長
- (2) 主任
- (3) 所員
- (4) 事務職員
- (5) 研究員

2 所長、主任及び専任の職員は理事長が任命し、その他の兼務者は所長が委嘱する。

3 第1項第3号に規定する所員は次の各号により構成する。

- (1) 名古屋女子大学、名古屋女子大学短期大学部及び付属幼稚園の専任教員
- (2) その他、第3条の目的に賛同する者で、研究所長が認めた者

## 第5条の2（顧問）

1 研究所は、必要に応じて顧問を置くことができる。

2 顧問は理事長が委嘱する。

## 第6条（任務）

1 所長は、研究所を代表し、庶務を掌理する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 顧問は、原則として運営委員会、機関研究会議等に出席することとし、所長に助言するなど研究所の運営に助力する。

3 主任は、所長の職務を補佐し、所長に事故あるときは、その職務を代行する。

4 事務職員は、所長の命を受け事務を担当する。

## 第7条（監事）

1 研究所に監事2名を置き、理事長が委嘱する。

2 監事は次の職務を行う。

- (1) 財産の状況並びに職員の業務執行の状況を監査する。



(2) 財産の状況または業務について不整の事実を発見した場合は、これを学長または運営委員会に報告する。

#### 第8条（運営委員会）

- 1 研究所の運営を円滑に行うため、研究所運営委員会（以下、「委員会」という。）を置く。
- 2 委員会は、所長の諮問に応じ研究所の運営に関する重要事項を審議する。
- 3 委員会は次の委員をもって組織する。委員は、所長が名古屋女子大学及び名古屋女子大学短期大学部専任教員の中から5名を推薦し、学長が指名する。
- 4 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。
- 5 委員会には、委員長を置き、委員の互選により選出する。
- 6 委員会は委員長が招集し、その議長となる。
- 7 委員会は委員の過半数の出席によって成立し、議事は過半数の賛成によって成立する。
- 8 所長は前項の規程にかかわらず、必要のある場合は構成員以外の者を出席させ発言させることができる。

#### 第9条（研究員）

- 1 研究所に研究員を置くことができる。研究員は次の資格を有する者の中から選考のうえ所長がこれを許可する。
  - (1) 大学（短期大学部も含む）を卒業した者またはこれに準ずる資格のある者。
  - (2) その他所長が特に認めた者
- 2 研究員を希望する者は、次の各号の所定の書類等を提出するものとする。
  - (1) 本研究所所定の申込書
  - (2) 履歴書
  - (3) 最終学校卒業証明書
- 3 研究員として許可された者は、所定の登録料を納めなくてはならない。
- 4 登録料については別表に定める。

#### 第10条（会計）

- 1 研究所の経費は、校費、助成金、寄付金その他をもってこれにあてる。
- 2 会計に関する事項は別に定める。

#### 第11条（顧問料）

第5条の2に規定する顧問に、別に定める顧問料を支給する。

#### 第12条（規程）

この規程の改廃は、常務理事会の議を経て理事長が定める。

#### 附 則

この規程は、平成13年4月1日から施行する。

#### 附 則

この規程は、平成13年7月13日から施行する。

#### 附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

#### 附 則

この規程は、平成17年10月1日から施行する。

#### 附 則

この規程は、平成19年3月5日から施行する。

#### 附 則

1. この規程は、平成19年4月1日から施行する。
2. 心理教育相談室内規は、この規程施行の日から、これを廃止する。

## 別表

(総合科学研究所研究員の登録料)

	金 額	納付期限
登録料 半期	60,000 円	指定する日

## 編集後記

「総合科学研究」第3号が完成し、発行することができました。関係各位の御協力の賜物であると思えます。機関研究では過去3年間に渡り、「大学における効果的な授業法の研究4」として「初年次教育についての授業法の開発」というテーマで学生によるアンケートを基礎とした調査が行われてきました。現在、大学教育は多面的に検討が求められています。この時期に、本学での成果がまとまり、一定の方向性を示すことが出来、さらに、これが大学教育の実践の場で利用される方向に進行していることは誠に喜ばしいことです。「新しい女子大学」の教育のあり方の追求は、見えないゴールを目指している感覚があるようにも思われます。しかし、将来をみつめた新しい教育理念、教育方針の確立を目指して本研究がさらに発展することを願っています。

駒田 格知

### 編集委員

委員長 駒田 格知

委員 柴山 正 河村 瑞江 渋谷 寿

遠山 佳治 木原 貴子 駒田 格知

白井 靖敏 谷口富士夫 浅井 貴子

平成 20 年度

名古屋女子大学総合科学研究所『総合科学研究』

第 3 号

平成 21 年 3 月 31 日発行

発行者 名古屋女子大学総合科学研究所

所 長 柴 山 正

〒 467 - 8610 名古屋市瑞穂区汐路町 3 - 40